

折葉坂の 幻燈館・下

折葉坂
三番地
総集編



概要

折葉坂三番地総集編・下巻。

2009年～2015年までに折本やBlog等で発表した短編・掌編作品の中から紅魔館、三魔女、永遠亭、鬼、1&2BOSS、博麗神社などを中心に19編26作品を収録。

折葉坂の 幻燈館下

目次

フランケンシュタイン・ネクロニカ	4
魔女と夜貴の同形三複	40
カマリリヤの最後の血族	58
MOON CHILD	70
レフェラル・エフェメラ・ブックワーム	94
朋に囲む紅桂の宴	114
月方浄土と彼の岸边	124
烏と兎が匆々しく	136
酔々流転の百鬼夜行	164
国津宮ニ神ハ無シ	188
地底恋愛倶楽部	200
蛍を呼ぶ甘露の罨	206
大山鳴動する鼠一匹	234
風吹けど道具屋の損	252
メレトリックス・ルソリア	260
東方掌編集	300
【東方掌編】伊吹の酒呑	300
【東方掌編】水底から見る山の頂	303
【東方掌編】無意識／無為式	306
【東方掌編】涙のように洒う雨	309
【東方掌編】双七の空に舞う	311
【東方掌編】雨宿り	313
【東方掌編】紫陽花の君を想う	315
【東方掌編】蛙の輪唱	317
いどのかいぶつ	296
博麗神社日々随録	320
ゆく年くる年幻想郷	354

フランケンシュタイン・ネクロニカ

残念。

死んでも終わりではございません。

——永い後日談のネクロニカ



「おーい、誰かいるかあー!?」

ドアを叩き割らんばかりの轟音が我が家を襲ったのは、丑三つも過ぎた真夜中の事だった。

ノックと呼ぶには憚られるほどの馬鹿力で蝶番をへし折らんばかりにドアが撓み、ひしゃげて揺れる。私

は揺れるガス燈の灯りを大きくし、顔をしかめて作業台の図面を閉じた。

「いーなーいーのーかー!? いないなら返事をしろおー!!」

……幻聴の類では無いようだった。

時刻を抜きにしても来客の予定はない。こちらの予定も考えずに突然やつてくる来訪者には一人心当たりがあるが、当の彼女は数時間前に籌ごと外に叩き出したところだ。

そもそも私が瘴気立ちこめる魔法の森に居を構えているのも、 unnecessary 交流を避けるためだ。私の魔法は私の願いを叶えるためにだけあるのであって、どこかの野良のように採め事解決やら作成依頼を受けるような看板を掲げた覚えはない。

何よりも、鼻先を掠める濃い血と鉄の匂い。……控えめに言って、友好的な相手とは思えない。

「いないんだなあー!? じゃあ勝手に入るぞー!?」
ドアノブがぎちぎちと軋み、分厚い樫の扉が悲鳴を

上げ始める。紅魔館の図書館ほどではないにしろ、この家は魔法使いの工房として十分な強度を持たせてある筈なのだが、ドア向こうの相手はそれを力づくでこじ開けようとしているようだった。

世にいう魔女狩りの時代はこんなものだったのだろうかと考えながら、人形達に魔力糸を接続。符名の宣言は省略し、糸を通じて人形達に命令を下す。

ばきん。蝶番がはじけ飛ぶのと同時に、クローゼットの扉を跳ね飛ばして展開した人形達が、一斉に手にした長槍をドアへと突き立てた。

無数の穴を穿たれて、木端微塵に壊れたドアの向こうにあったのは、串刺しにされた不埒者の姿——ではなく。

「おぉー!?!」

ぴんと伸ばした手を振り回すようにして叫ぶ、ひとりの少女。

身につけているのは大陸風の紺と赤の忌装束。ぞろりと生え揃った牙の間から冷素^{クリュオストレン}を吐き散らして、澱

んだ眼がぎろりとこちらを睨む。その身に纏う濃い死臭で、土気色の肌と額に貼られた大きな符を見るまでもなく、彼女が死体なのだと分かった。

「おぉー!! お前があゝ、森の人形遣いつて奴だなー!?!」

「……あなたは？」

「うむ！ 我こそは、偉大なる大祀廟を守るために生み出された不死の戦士^{キレンシ}だ！」

……宮古芳香。

身体の前に突き出した両手を誇らしげに振り上げ、少女はそう名乗る。

「お前は腕のいい修繕屋だと聞いたぞ！ だからいますぐ私を直してくれ!!」

「……はあ」

割と予想外の発言に、私は胡乱な表情を浮かべずにはいられなかった。



——三魂天に帰りて、七魄地に帰らざれば、以つて鬼となり僵尸と成る。

仙術によつて作られ使役される動く死体を僵尸と呼ぶ。死体の運搬の面倒を省くために歩かせたのが始まりともされ、特徴としては『僵』の字義どおり、死後硬直で曲がらない関節が挙げられる。西欧での吸血鬼としての性格も持ち、殺した相手を同族にしてしまうこともあるという。

霊視を試みれば、彼女の霊息は確かに代赭色。死に損ないであることは間違いないようだった。しかし生憎と私の知り合いに生粋の死霊術師はいない。

こちらを害する意図がある可能性は捨てきれず、訝る私を余所に、彼女——芳香はずだん、と飛び上がり、訴える。

「頼むぞ！ このままじゃご主人様のお役に立てないのだ!!」

見れば確かに、彼女の体のあちこちには損傷があつ

た。片方の腕は明らかに腱が切れているし、右の腿などは太い枝が突き刺さったまま皮膚が大きく裂け、傷痕が腐敗して骨まで露出している。腹にも大きな傷があり、そこからはどす黒い腸がはみ出しかけていた。かなりの長い期間、補修を受けないまま放置されているらしい。

警戒は緩めないままに観察していると、ばたばたと飛び跳ねていた彼女がいきなりがくと膝から崩れ落ちる。

「お？」

横倒しになった頭がテーブルの角を強打。べきりと嫌な音を響かせて首が180度ねじれ、頭蓋が地面を跳ねる。

「うわあー！ また折れたあー!？」

へし折れた左足と首を見下ろして、彼女はきょとんと瞬きを繰り返してから、まるで他人事のように叫ぶ。膝が反対側に曲がって、靱帯と骨の一部が露出していた。痛覚がないのは分かるが、正直、あまり注視し

たいものでもない。

折れた脚にも構わずに尚も立ち上がりうとしてまた転び、じたばたともがく。転がりまわる元氣な死体がぶつかるたびにテーブルが揺れ、棚の中身が床に散らばる。

私はたまらず叫んでいた。

「……ああもう、暴れるのやめなさい！ 直るものも直らなくなるわ!!」

次第に頭痛の強まりだした額を押さえて吐息する。これ以上工房を荒らされてはたまらなかつた

「解ったわ、直してあげるから、おとなしくして!!」

「本当かー!?!」

問い返す彼女だが、懷疑を抱いているというよりは確認をしているような語調だった。相手を疑うという機能まで排除してシンプルに出来ているらしい。

大きく裂けた胴体から、生命維持に必要な臓物をずるずるとこぼし、肩と膝を使ってずるずると地面を這い進もうとする彼女を、人形で抱き上げる。

「お?」

「直りたいなら無茶はやめなさい」

諦めと共に言い聞かせながら、床に散らばった臓物も回収させ、まとめて腹の中に押し込む。作業をこなした人形達がたちまち腐汁に塗れ、見るも無残に汚れていく。

後の面倒に頭を悩ませる私の内心を知ってか知らずか、彼女はけらけらと笑い声を上げた。

「おー。お前はいいやつだな!! この前あつた奴らはいきなり撃つて来たのに!!」

「……客として来るのなら歓迎するわよ」

皮肉のつもりだが、通じてはいないだろう。

礼儀のなっていない相手には相応の対応をしているだけだが、どうにも魔理沙あたりはそれが不満であるらしい。心外だ。

修復とは言え、人形作成用の工房に医者 of 真似事ができるような設備はない。とりあえず地下の作業室に彼女を運び、一番大きな作業台に除染用のシートを引

いて横たえる。

袖付きの作業エプロンに着替え、呪詛感染を含むための防護の魔法を施した手袋とゴーグルを嵌める。並大抵の毒や病気などで弱る身体ではないつもりだが、死者をキョンシーとして動かすほどの呪詛に素手で触れる気にはなれなかった。

折れた脚と散らばった内臓を並べ、私は彼女の顔を覗き込む。

「ねえ。できれば修復中は動作を止めて欲しいんだけど……」

「？」

首を傾げる彼女。ご丁寧なことに額の符にも【？】の一字が浮かび上がる。言うだけ無駄かと諦め、マスクをしながら言い聞かせた。

「もう一度繰り返し返すけど、あまり動かないで。あなたの身体の勝手が分からないんだから、ちゃんと直して欲しかったら私の指示に従いなさい。いい？」

「おー。わかったぞー」

額の符が制御系になっている可能性は十分に考えられたが、術式への干渉を考えて手を出すのは自制する。となると、多少強引で原始的な方法に頼らざるを得ない。私と同じように作業着を着せた人形たちを一ダース配置して、修復を開始する。

まずは彼女の首にノコギリを押し当て、折れた首関節の接続を切り落とした。頸椎を外し、古い縫い痕のある皮膚を切除。神経を切り、首を脊髄ごと引き抜いて隣の架台へ移す。

「おお……」

黒く汚れた血を垂らしながら、ずるりと伸びる自分の背骨を見下ろしてキョンシーは感嘆の声をあげる。生身であればたとえ痛覚がなくなっても精神への影響は免れず、最悪発狂してもおかしくない筈だが、彼女は全く堪えた様子もない。死体にまともな精神など期待しても仕方のないことではあるが。

「そうだ！ ついでに腕も曲がるよーになるとなおいいな!!」

彼女がキョンシーであるなら、関節の固定は死後硬直によるものだろう。しかし彼女の死はおそらく昨日今日のものではなく、数十年……ことによると数百年単位で過去のものかと思われた。それだけの年月を過ぎたのであれば、とつくに四肢の硬直は解けているはずなのだが……

何らかの方法で腐敗の進行自体を停止させている可能性があると考え、まずはその保存式の解析から始める。

「ちゃんと柔軟体操もしてるんだぞー!?」

「はいはい、分かったからじっとして」

子供をあやす気分だったがたと作業台を揺らす彼女をなだめ、損傷部分を覆う皮膚と肉を切開。固定の後に動作と欠損部を確認してゆく。彼女が死体でなければどんな名医でも手に負えない大手術だったろうが、幸いにして彼女が動いている理由は生命があるからではない。雑菌の感染や組織露出に伴う変質を気にしなくて良いのはありがたかった。

予想通り、彼女を動かしている術式そのものは実に単純だった。半時間にもかかわらずに大まかの構造を把握することができた私は、把握針と糸を縫製用の籠手ミシンに繋いで、直接折れ千切れた手足と内臓を縫い合わせてゆく。

その過程で、彼女の素材になった死体は一人分ではないことも判明した。基になった死体こそあるものの、複数の『素材』を集めて繋ぎ合わせた死体の合成品とも言え、敢えて分類するならば死に損ないではなくアンプレッショゴレ^{アンプレッショゴレ}屍人形^{屍人形}と言うべきなのかもしれない。

その観点から見れば、彼女は実によく仕上がっていた。陰気の溜まる場所では、普通の死体がキョンシーになることも無いわけではないが、彼女のような精巧な屍体人形が、自然に生まれることはあり得ない。

「ねえ。あなたってどこに住んでるのかしら？」

「うむ、墓場だ!!　そこで大切なものを守っているのだ!!」

墓場に死体があることそのものは（動いている点

多大にイレギュラーだが、別段おかしくもあるまい。

問題は、それを命令した相手の存在だ。

「あなたはそこにいろ、と命令されたのよね？」

「そうだぞー！ 我等はたとえ最後の一兵となろうとも、あの大祀廟を死守しなければならないのだー!!」

「もう死んでいると思うけど。……誰から？」

「む。それは話せないぞー!! なぜなら秘密だと言われているからだ!!」

「……そう」

彼女の主人と言うのが誰だかは知らないが、死体を材料に人形を作るというのはけして間違った方法ではない。そも、人の形を模したものが人形であるならば、人間そのものを材料にするのが一番相応しいことになる。

「……参ったわね」

思わず苦笑が漏れる。彼女には自我も意志もあるが、魂がない。動き考え喋るだけの、ヒトガタだ。

生前の自我は喪われ、自分が死体であることは理解しており、その上でなお現在のキョンシーとしての自我を確立している。主人の上位命令権こそ残されているのだから、私を訪ねて修理を要求するほどの自由意志を持つ。

つまり、彼女は私の理想とする完全自律人形にきわめて近い存在なのだ。

「おぉー？ なんだお前らー？」

それを証明するように、ぶらぶらと架台の上で身を揺する彼女が、器具を運んできた人形達に話しかける。どういうわけか、彼女は人形のいくつかと意思疎通を可能にしているかのように振る舞っていた。

「私の人形達よ。あなたを直すのを手伝ってもらおうの」

「ほぉー？ 偉いなー？」

興味深げに人形達を覗きこみ、彼女は作業台の上の身体を動かして、器用に人形の頭を撫でる。どんな術式なのか、物理的な接続を断つても、彼女の脳と身体は繋がっているようだった。

(……………)

一瞬、このまま彼女を解体して、その仕組みを徹底的に解析したいという好奇心が頭をかすめる。それは魔法使いとしては実に正しい行いと思えたが――

「そうかー、お前もご主人様のために働けてうれしいのかー」

人形たちから何かを聞き取ったのか、脊髄を尻尾のように振り、生首だけで笑う彼女。……いや、もう『生』首ではないか。

人形たちと話している(?)彼女を前に小さく首を振り、私は胸中に沸き起こる暗い疑念を押し込めた。

修復は予想以上の大作業となった。補修作業自体はさほど複雑なものではないが、もともと屍として意味を持つている彼女の身体に、セルロイドやワイヤーと言った人工物を用いた場合、彼女を維持している術そのものにも影響を与えかねない。必然、修復に使える材料は限られ、そのために私はストックしていた生体材料――腱や骨、筋肉など――の多くを放出しなければならなかった。

骨を継いで腱を張り替え、肉を詰めて皮膚を当て縫い、神経を縫り合せて紡ぎ――精密作業用の人形五体とその補佐の七体を総動員して、約四時間。そろそろ空が白み始める時刻となって、ようやく彼女の補修は終了した。

「はい、おしまい」

「おおー、動くぞー」

十全な状態の彼女がどんなものかは知る由もないが、人形遣いの矜持にかけて、ほぼ完璧な修復だったと自負して良いだろう。すっかり自慢のお肌を取り戻した動く死体は、上機嫌に腕を振り、軽くなった身体を堪能している。

「ボランティアもほどほどにして欲しいわ。次からは修繕費用を請求するわよ」

「そうかー」

わかっていのかそうでないのか、頷くキョンシー。人形にして十数体分の素材を惜しみなくつぎ込んだの

タダ働きとは。あまりに割に合わない取引だった。

またぞろこれら『材料』の供給を紫に申し出なければならぬことを考えると、気が滅入る。

「これでまたご主人様の役に立てるなあ!! 感謝するぞ!」

再び彼女の口から出たご主人様、という言葉に、私は少なからぬ興味を覚えていた。これほどの人形を作る技術に巡り合ったことは数えるほどしかなく、彼女の主に会える機会があるのならば看過できない。

件の大霊廟にまつわる一連の騒動は、魔理沙の自慢話で耳にしている。この国の古代の為政者が蘇り、物好きにも博麗神社の地下に洞府を開いたなどと言う話だったか。

恐らく、彼女の主とやらもその関係者であろうことは推察できた。

そして彼女が、その主からも用済みとされていることも。

彼女の主が本拠地を移したのならば、いまさら墓地

を守る理由もない。それにも関わらず彼女に与えられた命令は、変更されていないのだ。僵尸^{キリンジ}と呼べないほどにまで腐り崩れてしまった身体も、それを窺わせていた。

複雑な気分で見ている私の前で、彼女はすっかり血色(?)を取り戻した青白い肌を誇るように腕を突き出し、額の符をはためかせて、口元に牙を覗かせる。

「色々世話になったなー、アリス!」

「……あまり無茶はしないようにね。いつでも直せるわけじゃないんだから」

「おおー、承知したぞー」

無駄かもしれないが、一応釘をさしておく。修復に力を尽くした以上、できれば長く無事でいて欲しいというのは本音でもあった。

「じゃあなー」

夜が明ける前に戻らねばならないという彼女を玄関で見送る。森の奥へと消えてゆく屍人形の背中と、凄惨なまでに汚れ、死臭の染み付いた工房と人形たちを

見回して——大きく吐息。

私はシャワーを浴びてから、眠気覚ましの紅茶を用意することにした。



「——そういやアリス、知ってるか？ 里で大勢人死にが出るそうなんだが」

そんな騒ぎから、十日ほどが過ぎた日の事だった。

いつものように人妖が集った博麗神社の一室。炬燵の上には湯気を立てて煮立つ土鍋が揺れ、爛酒と杯が並ぶ。

先日借りた資料を返しに顔を出した図書館で魔理沙に捕まって、神社まで連れられ——気付けば時刻は夕方過ぎ、なし崩し的に宴会が始まっていた。

神社に妖怪が屯^{たむろ}することに常々不満を持っている霊夢も、食物と酒が出てくるとあればそう悪い顔はしない。何かと物入りな歳末の時期に紅魔館の主従がと

もども、食糧持参でやってきたのだから、これは彼女の作戦勝ちというところだろうか。

そうして設えられた鍋も佳境に入り、腹を膨らませた参加者一同が、酒精に酔いを回らせている中、魔理沙が話を切り出したのだった。

ここ数日、人里で人死にが続いていると。

「——なんでもな、腕が見つかってないらしい」

「食事時にする話じゃないわね」

犠牲者は皆、見るも無残に全身を引き千切られた姿で見つかり、その惨たらしさは直視できないほどだと言う。

殊更に恐ろしげな顔と声で囁くように言う魔理沙に、霊夢は呆れて箸先を口へと運ぶ。折角披露した怪談がウケないのが不満なのか、白黒の魔法使いはふんと鼻を鳴らした。

「一昨日で四人。ああ、今朝もう一人襲われたって話だから五人か。若い娘ばかり狙うってんで、嫁入り前の娘を抱えた家は大騒ぎって聞いたぜ」

酒精に濁った後ろ暗い笑みで、いやあ我ながら親孝行もんだぜ、と魔理沙は囁く。おそらくジョークのつもりなのだろう。彼女が人里にある実家と疎遠であるという話は折々で耳にすることだが、愚痴に混ぜて吹聴される言葉の端々から、さして深い事情があるわけでないというのはなんとなく想像ができた。

本当に話したくない出来事というものは、言葉にするのも忌々しいもののなのだが。

「まあ、掻い摘んで言えばだ」

鍋の底に残った白菜と白滝をすくい上げて自分の器に移し、遠慮なく咀嚼しながら、魔理沙は箸先を鰯の干物が乗った皿へと向ける。綺麗に身のすくわれた干物の、骨と皮だけになった身体を器用に半分にしぎり、「喰われちゃまってららしい。……ああ、別にいやらしい意味じゃないぜ？」

犠牲者が若い娘で、夜の出来事となればそんな連想もあるだろう。だがこれまでの話を聞いている限りでそんな詰まらないオチでないことは明白な会話の流れ

の中で、敢えてそんな表現をするあたり、魔理沙も相当酔っているのだろう。

少しだけ身の付いた干物の皮をばりばりと齧り、温くなった手元の杯を開ける。

「物盗りだ辻斬りだって話じゃないらしいんだ。つまり、態々殺そうとしたんじゃない、ついでに殺しちゃったんでもなく、結果的に犠牲者が死んじまったってな。こいつは、単に襲ったやつを喰おうとしただけらしい」

「普通、食べられて生きてる奴はあんまりいないと思うけど」

「そうでもないぜ。世間は広いからな」

なぜだか訳知り顔の魔理沙の向かいで、レミリアが至極もつとまどとばかりに頷いていた。どうでも良いが、片手の赤ワインが鍋に合わないこと甚だしい。

「まあなんだ。仮に私達がこの白菜だとするだろ」

「せめて動物にならないの？」

「それはもう少しここに動物性蛋白を並べてから言う

いいと思うぜ？ とにかくだ。私やお前が白菜だとする。こいつらは今朝まで畑に植わって、充実した人生を送ってたわけだが、そこをいきなりぎっくりばったり、鎌に根こそぎ刈り取られて、全身縮みあがるようなような冷たい水ぶっかけられたかと思ったら、氣付いたら重ねて四つ八つに切り分けられて、しまいにや釜茹でだ。だが、私らは別に、白菜を殺そうなんてしてない。単に美味そうだったから料理して、喰っただけだ」

「料理したのは殆ど私だけだね」

口を挟むと、魔理沙は流石に不快そうに眉をしかめる。何度も腰を折られて機嫌を損ねたのだろう。子供っぽい拗ねかただと思いはしたが、実際、魔理沙が音頭を取らなければこの鍋ができ上がっていなかったのも確かではある。

「今回の事件もそうらしいんだな。どうも襲った奴は、襲われた奴が喰われたら死んじまうってことも考え付かないくらいの手合いらしい。ただ腹が減ったから、

齧りついただけなんだ」

「その結果、相手が死ぬことにも気付かないまま？」

随分と、乱暴な話だった。

しかし確かに犠牲者の有様を聞く限りでは、魔理沙の話は頷けるところが多い。事件現場の凄惨な光景と言ひ、事切れた娘の傷口——魔理沙の言葉を借りれば、齧り痕か——は、少々常軌を逸していた。狩りの経験のない若い獣でも、もう少しまともに仕留めるだろう。骸のなっていない悪餓鬼が、腹を空かせて上等なケーキを貪るように、犠牲者の身体は手当たり次第に咬み千切られていた。

「そんなので良く解ったわね」

「なにがだ？」

「手よ、手」

ぷらぷらと右手を振って見せる霊夢に、魔理沙はあと手を打った。もともとこの話を始めたのは彼女の筈なのだが、それも忘れていたらしい。大分酒精を回らせた様子で、これは明日は昼過ぎまで二日酔いで呻

いているだろう。

そう。手。手が見つかっていないというのが、そもそもの主題だった筈だ。

「そこで今日の犠牲者の話になるんだがな」

重々しく話し始める魔理沙だが、内容にはさしたる違いはなかった。夜遅く、出歩いていた娘が正体不明の何かに襲われ、凄まじい力で押さえつけられて右手を齧られた、ということになる。幸か不幸か、連日の猟奇事件に里の警備が嚴重さを増していた事もあり、彼女は三途の河へ渡るほどにまでは齧り続けられなかったということになる。

それでも———どうにか人の形は保っていたとはいえ、その重症で命を繋ぎ止めたのが奇跡と見るべきだろう。たまたま朝早くから現場に永遠亭の葉師見習いがいたというのは、まさしく天の巡り合わせだった。人里へ葉売りに来る二匹の兎のうちの片方は、四十枚葉のクローバーを見つくるくらいには人間を幸運にする程度の能力を持っていると常々喧伝している。

「つてわけだぜ」

「ふうむ」

珍しく考え込む霊夢。

四人の死者——いや、今朝の犠牲者も勘定に入れば五人。立て続けに喰われた彼女達は、等しく右腕を失っている。そこにどれだけの意味を見出すかという見立てだった。五人の被害者の連続性は、細い糸の可能性を見出すにも、ただの偶然と片付けるにも微妙な数で、それ故に明瞭な判断には物足りない。

たまたま、妖怪が食べ散らかした残りに右腕が含まれていなかったという可能性も十分に考えられた。

「ねえ、魔理沙」

ふと、霊夢が顔を上げる。自分の振った話だというのにすっかり忘れ、囲炉裏の傍でにとりの持ちこんだ機械を覗き込んでいた魔理沙は急に名を呼ばれ、呆けたように振り向いた。

「その襲われた子って、なんでそんな時間に外にいたの？」

「なんてって——」

そんなの決まってるだろ、と言わんばかりに唇の端を歪める魔理沙。何がどう決まっているのかは全く分からないが、この酔っぱらいの中では、とつくにそこについては話した積りになっているようだった。

「客だよ、客」

「？」

疑念を浮かべる霊夢の横で、レミリアが何故だか満足そうに口元から牙を覗かせて笑う。巫女の隣に寄り添った彼女は、傍らのメイド長に視線で促した。いつでも完璧な彼女は、デザートの蜜柑を剥く手を止めてさりと口にする。

「商売の最中だったのでしょ？」

「……ああ」

霊夢が眉をしかめ、嫌そうに呻く。博麗の巫女の見せる潔癖な一面に、私は少々驚いていた。あまりそんなものに頓着する性格とも思えなかったのだが。……否、穢れを払う巫女であるならば当然の事なのだろう

か。

人里には古くから遊郭があったが、最近では歓楽街の一角としてそれなりの賑わいをみせているという。一昔前までは、里でも夜這いやお手付きなど良く見られたようなのだが、里の教育者ともいうべき半人半獣の教師が数十年にわたって根気よく道徳と性風俗の乱れを説いて回った結果、より健全な娯楽として確立され、隔離され、現在のような歓楽街が出来上がっていったらしい。

今回犠牲者となった若い娘達は、こうした廓にも属していない、夜辻で客を引くような、上等とは言いがたい部類の者たちだったのだと言う。

「……だから、あんまり騒がれてないんだな」

むしろそれを歓迎している者の方が多いのかもしれない。犠牲者の多くが表沙汰にし辛い身の上であるということを含めて、広く公にされるよりも、後ろ暗い興味と共に、尾ひれを付けた噂として持て囃される類のものだ。

それゆえ、人里と交流の遠い博麗神社には、少しばかり伝わるのが遅れたのだろう。

「思わぬ切り裂き魔の出没ってことね」

「うちのメイドはそんな偏った食材を出すような不出来な真似はしないよ」

レミリアが自慢げに言う。これで従者の質を褒めているのなら彼女にもいっぱしの大妖怪としてのカリスマが備わっているのだろうが、実際は単にそんな従者を持つている自分を誇っているだけなのだから、隣に腰を下ろす咲夜の苦勞たるや相当のものであろう。

いずれにせよ、吸血鬼の館に運び込まれる食料は、多く丁寧に選別された上等なもので、食卓に並ぶ時も贅を尽くして調理されている。見境なしに齧りついた死体の、余りの腕だけを持ち去って主の前に転がして尻尾を振るような駄犬では、それこそ縊り殺されるほどに不興を買うことは考えてみるまでもない。

ちらいとうかがった視線の先で、咲夜は顔色一つ変えずに鍋のべとなる雑炊の用意を始めていた。



その後、天狗を伴ってやって来た早苗達が騒ぎ出したため、話の主題は血生臭い人里の不幸から、年明けの宴会へと移り、その話はどこへともなく追いやられてしまった。

もともと珍しいような話でもない。里の人間に犠牲者が出るのは、日常ではないにしろ特異なことでもないのだから。

大方、今回の被害もどこかの妖怪が行儀悪く食べ残したのだろうということになった。

しかし、そこまで凶悪な妖怪が、好んで人里に出没するということなら、それは確かに異変とも呼べる。早苗はさっそく明日からでもその解決を始めるのだと息巻いていたし、魔理沙も霊夢を引っ張り出す腹積もりのようだった。

「とくに早苗なんかは喰われないように注意しろよ？」

「失敬な。私は平気ですよ!」

魔理沙も早苗も、霊夢でさえも、みなこの妖怪を人喰いと評していた。実際に襲われた死体の咬み跡から唾液まで検出されたとなればまず間違いない話かもしれないが、私には些かそこが腑に落ちない。

要するに。妖怪にとって人間のうちどこが一番美味しいのか、という理屈だ。

至極単純な話だが、妖怪は習性として、あるいは食料として人を喰らう。多くの妖怪は決して人を喰う事なくとも生きていけるものだが、敢えて人食を止めている妖怪というのは少ないものだ。妖怪が人の畏れに根ざした生き物である以上、人間達に恐怖を忘れられる訳にはいかない。

対照的に、恐怖心そのものを食べる妖怪ならば、人間……人肉それ自体には見向きもしないこともある。人間を怖がらせることで腹が膨れるのだから、これほど効率のいい話はない。最も驚かされる人間にしてみれば溜まったものではないだろうし、そのショックで

寿命が縮まったり、ぼっくりと逝ってしまう可能性があるのだから、彼らもまた間接的に、人間の命を喰らっているのである。

さて、人食が義務や習性であるにせよ、人は妖怪にとって決して不味いものではない。腹が膨れるのだから当たり前ではあるが、なんとも効率よくできているもので、妖怪にとって美味を覚えるのは、人間の『命』の要素が濃い場所になる。

頭なら脳髄、臓腑はらわたならば肝や心臓。腕や脚は筋張っていて骨も多く、あまり好まれない。多少趣味が混じるが、舌や眼、髪など、人間が人間である特性を持つ場所が珍重される場合もある。また、生贄に幼い子供や赤子が好まれるのは、一人の人間としての命がそれだけ小さな身体に凝縮されているからだ。吸血鬼などはその最たるものだろう。血を媒介に命の蓄積とも言う霊髄チツセンスを吸るのだ。

ついでに言えば、女怪が男の精を好むのもこの理屈に近い。たまに妙な憧れと幻想を抱く若者が出るもの

だが、彼等にしてみれば興味であつても、相手にしてみれば食欲である。迂闊に關係を持つと、赤玉が出るまで嘔り絞り取られるのが関の山なので、興味本位で軽々しく近づく事はお勧めしない。以前、私の所にも同じようなことを考えて訪れた男が辿つた哀れな末路についても申し添えておく。

……話が脱線した。いずれにせよ、食べる場所に意味があることは、獣でも変わらない。

獣が仕留めた獲物の腹から食い破るのは、そこに一番栄養が蓄えられているからだ。欲望を素直に表現する彼等は、わざわざ一番美味しいものを後回しにする様なことはしない。野生の中では食欲も性欲も一番乗りからこそ意味があり、謙譲の美德などどこにも存在しないのだ。

無論、奪い合う相手にいい所を横取りされたり、餓えているならば手も足も食べるだろうが、臓腑だけを存分に喰つて腹を満たすことができるなら、手足になど見向きもしない筈だ。

人里での犠牲者の数と頻度を考えるに、数日に一人を食らわねば飢えてしまうような妖怪がこれまでにいたら、とうに人里は滅びているだろう。ここ最近幻想郷にやってきた妖怪であるというなら解らなくはないが。

つまり。人喰いの妖怪が、頭や体を残してゆくというのは、少々理屈がつかないようにも思う。彼——彼女かもしれないが——にとつて、手が一番美味なところだと考えれば疑問は十分薄れるが、それでも違和感が残る。

むしろ、手を好んで食らう事に意味を見出す妖怪というなら、それは人喰いとは少し意味が違うのではないだろうか。

「……………あら」

食事中的に閻妖に出くわしたのはそんな事を思いながら飛んで、行き過ぎた道を戻る途中のことだった。

「アリスなのかー？」

最初は弾幕になるかと覚悟したが、彼女はあっさり

と周囲の闇の濃度を緩め、姿を現す。まだ幼い少女の姿をした彼女の口元は、どろりと凝った赤黒い血でべたべたと汚れていた。

今日の得物は野犬らしい。飼犬はともかく野生に戻った犬は里の人間にとっても厄介なものなので、黙認——というよりは積極的に食べて欲しいという里の意向なのだとのこと。

しかし、彼女にしてみれば一抱え程度の痩せこけた獣など、腹を満たすにはとても足りないもののようにだ。「んー？ 人間？ 最近はあるまり食べてないなあ」

口の周りを真っ赤に染め、ばりばりと得物の骨をかみ砕いて飲み込んだルーミアは、首を傾げて答える。言動はともあれ、彼女は決して記憶力に劣る妖怪ではない。覚えていないというのなら、事実そうなのか、嘘をついているかだ。

が、どうもルーミアの様子を見るに後者はあり得なさそうに思えた。もともと黒一色の着た切り雀、あまり身綺麗な妖怪ではないが、今夜はやけに薄汚れて見

える。ここしばらく、まともな食事をしていない証拠だ。

「最近、里に近づくと思音に怒られるから行っていないだよねえ。迷ってる人間もみつからないし」

夜中、人里の外を警戒もなくうろうろしているようなら、それは妖怪の犠牲になっても良い——彼女流に言うならば、食べても良い人間だ。ただの不注意か、やむにやまれぬ事情があったのか、いずれにせよ、人里に生まれ育った人間ならば、夜中無闇に出歩くような、妖怪に喰われるのは何回かに1回は必然的に起こる事故なのである。

ルーミアが犯人になるのは少なくともこれからだ。これまでの犠牲者は彼女によるものではない。

「そう、ありがとう。……これ、食べる？」

「わー」

すっかり野犬を平らげ、手指と口元の血を舐め取ってもなお、おなかに手を当ててひもじそうな表情をしていたのを見かねて、バスケットの底から食べかけの

アップルパイを取り出す。なし崩しにお茶会から宴会に移行したため、食べそびれた分だ。

ルーミアはばあつと顔を輝かせると、アップルパイを台紙ごとばりばりと噛みついてゆく。せめて切つてからにしろと言いたかったが、下手に手を出すと一緒に噛み千切られてしまいそうな気配を覚え、つい言葉がちぢこまつてしまう。

直径15センチはあるパイは、わずか三口で彼女の胃袋に飲み込まれていった。

「ふー……」

シロップの付いた指先をぺろと舐め、満足そうに眼を細めるルーミア。単純な量で言えばあきらかに先程の犬の方が多はずだが、彼女が満腹感を覚える基準は、単に胃袋が物理的に満たされるかどうかとは異なっているらしい。恐怖以外に嗜好品でも腹を膨らませる妖怪というのものなかなか珍しいところではあるのだけど。

「ねえ、満腹ついでにもう一つ聞きたいんだけど」

「なに？」

「あなたのほかに、飢えている人食いの妖怪はいるかしら」

「えーと」

些か望み薄な質問ではあった。

彼女の知り合いと言えば蛭と氷精、夜雀といったあたりか。蛭は基本的に水しか飲まず、妖精も人を喰うことはない。夜雀はと言えば最近八つ目鰻の商売にすっかり執心で、これまた人を襲うことは考えにくい。

ルーミアが同類を庇うことはないだろうが、もし知っているならそいつは、毎夜人里の娘を襲っている犯人である。先程のやり取りでルーミアが人里に近づいていないことが分かっている以上、無意味なものだ。

けれど、ルーミアは名残惜しげにパイの入っていた紙箱を齧りながら。

「そう言えば、墓場に新しく住み着いたやつがいたような気がするな」

などと、思いのほか有力な手掛かりを示してくれた。



墓地は酷く冷え込んでいた。

立ち並ぶ石の墓標は、風雨に削られてなお、四角四面の堅固な輪郭を保って並んでいる。墓石達は秩序立って整列しているのかと思えば前触れなく蛇行し、配列を乱す。

夜闇と肌寒い霧の奥に、無数の墓石の黒い影がぼやけて消えてゆく。静寂の奥には、いつしか生死の境界すら曖昧に霞ませているようだった。

命蓮寺の裏手に広がる、広大な石碑の群れ——墓場と聞いてまず最初に思い浮かぶのはここだ。しかしこの墓標群がいつからここにあったのかを知る者は少なかった。

妖怪寺の化主である聖白蓮がしれっと自分の領地のように扱い、公式に否定する事もないため誤解が蔓延しているが、ここは命蓮寺の檀家の墓ではない。

元は、里の西で野辺焼きにされ、跡は朽ちるままにされていた遺骨を、そのままでは忍びないと思った誰かが建てた墓だったらしい。それに他の誰かが倅い、あとはそれが繰り返されたのだ。

人妖平等を唱える仏門一派が地底の底から蘇るまでは、仏の教えは知識、形式程度でしか知られていなかったという。誰が教え広めるでもなく、数えるのも嫌になるほどの墓標の群れが出来上がったというのだから、これも立派な異変なのではないかとも思う。真面目に考えてこれだけの数の死者が里から出ているというのは少々——いや、明らかに計算が合わない気がするが、きつと深く考えてはならないのだろう。

いずれにせよ、この墓地が死者の領土として一つの勢力となり、冥界にも決して引けを取らない死体達之都となつてゐることは事実で、それをしゃあしゃあと自分の支配地域に組み込んでゐる白蓮のしたたかさは大したものだと言える。現世欲望の一切を捨て、滅私救済に尽くしているような済ました顔をして、彼女は

誰よりも魔法使いとしての欲望を捨てていない。

「お誂え向き過ぎるわね」

背中をひやりと撫でる冷たい気配を覚え、呟いた。魔法使いであれば現世以外のものにも敏感であるのは当然のことで、私は墓地のそここに満ちるこの世ならざる者たちの存在を明瞭に感じ取ることができた。星^{アストラル}幽体の手足が生者を羨むように私の手足を掴み、地面の中へと引きずり落そうとしてくる。

しかし生憎とこの身体は既に食を捨て虫を捨てた、生命の残渣のような肉体である。人の形こそ保っているが、人形と変わることのない、いわば魔法の入れ物だ。彼等が奪い取ったところで、生前の欲求を叶える事は一つも適わないだろう。

種族魔法使いが輪廻に留まっているのかというのは、かねてからの疑問の一つなのだが——今ここで試してやる気にはなれない。

浅ましく生への執着に蠢く幽霊たちが絡みつくの任せ、墓地を進んでゆくと——やがて行く手に小さな

炎が灯る。鼻をくすぐる匂いは、人の燐が焼けるものだとすぐに分かった。

地底の火車猫がよく使っていた燐だが、今回のこれは何かに使役されている様子がなかった。無尽蔵に灯る青白い炎は、ただざわめき暴れ、蠢いている。

「……………」

近くに住まいを構えるものにしてみれば（勝手にそのあたりを漂っている事を嘯^{ねぐら}と読んでいいのかは議論の余地があるが）この墓地に昨日まで見慣れない顔がいる事は日常茶飯事であり、また彼等がふとした拍子にいなくなっている事もこれまた朝が来て夜が来るのと同じくらい当然のことであるらしい。

彼等の中には明らかに生前の想いを募らせ過ぎて自縛したり怨念を溢れさせる凶悪なものがいたが、人間救済と同じくらいに妖怪救済も掲げる白蓮は、それを積極的に祓うようなことはしていないという。

「……近い、かしら」

墓地には死臭が満ちていた。もともと死体が眠る場

所だ。死の匂いなどあつて当然だが、それを差し引いてもここは少しそれが濃すぎる。まるでたつたいま、ここで誰かが死んで朽ちてゆく最中だとも言うような、霊廟には程遠い、生々しい死の存在感。

それは比喻でもなんでもなく、事実としてそうなのだろう。

この環境で、脛に傷を持つ妖怪達がここに逃げ込まない筈がないのだ。成程、そこから群れている雑魚妖精よりも少しましな程度に頭のまわる妖怪ならばここは体の良い隠れ蓐となるだろう。この胡乱極まりない墓所は、妖怪救済を掲げる白蓮ですら、表から尋ねる事も躊躇うような後ろ暗い妖生を送る妖怪達の、格好の居場所なのだ。

警戒のために展開していた感知人形が警告を発する。それとほぼ同時、右へ飛んだ私の横で、巨大な墓石が冗談のように粉碎された。

「おおー？」

焔火が大きく燃え上がり、火花を散らして弾け散る。

反撃に投擲した人形達の斧が、がきんと受け止められて宙を踊った。

「誰だあー、お前はあー!？」

大人しく事を納めようとする気などまるでないとにかくに、大音声で誰何してくる動く死体。あるいはそこまで回る脳もないのか、腐っているのか。濁った眼を大きく見開き、ざろりと牙の生え揃った口を大きく開けて笑う様は、少しばかり可愛らしくもあった。

宮古芳香。

忠実な死体は、その二つ名の通り、そこに居た。

「――ボランティアの魔法使いよ。ここに住んでる妖怪に用があつて来たの」

彼女の登場で九分九厘、目的は達成できたようなものだったが――まだ詰めを急ぐには早い。おおよそ隠し事や腹芸には無縁そうな相手なのはどう見ても明らかだが、わずかな誤謬、些細な思い違いが残っている可能性だけは否定しないでおく。

「ここの妖怪？」

身体を前に向けたまま、器用に首だけを——手足が動かないのにそこは自由なのか、右回りにぐるりと180度回し、さらに左回りにも同じことをして、彼女は額の符の【?】の文字と共に首を傾ける。

「あなたのことよ」

あまり複雑な事ができないだろう彼女の頭にあわせて、こちら腹芸は止め、素直に切り出した。単純馬鹿相手に思考を巡らせ過ぎると墓穴を掘る羽目になることは、痛々しい記憶と共に経験済みだ。

「私はー、お前を知らないぞおー?」

完璧に忘れられているようだった。以前の面識があったとして、きちんと識別できるのかは果てしなく怪しいものだが。

「ここに立ち入る者は何人も許さん!! そうだ、私はここを守るのだ!! お前は誰だー!? 近寄るなー!!」

ぶんぶんと、腕を交互に振り回して威嚇してくる屍人形。

まっとうに会話も繋がらない。三步前どころか直前のことも覚えていない様子だった。鳥頭よりも性質が悪い、いや、ある意味では都合が良いのだろうか。色々と諦めながら、再度問いかける。

「ええ。でもあなたには聞きたいことがあるの」

「私があ、何かをしたのかー?」

「あなた、里の人間を食べてないかしら」

我ながら台詞の芸のなさに辟易としつつ、単刀直入に訊ねた。

「おお……?」

彼女は表情を強張らせ、視線をピタリと宙空へと定めた。残りわずかな脳を探り当てるように、じつと言葉を切って、ふらふらと定まらずに漂っていた身体も静止させて、一心不乱に記憶を手繰っているのだろう。

「ああ……そんな事もしたような、気がするなあー」

「……そう」

九分九厘の予想は、実につまらない正鵠を射ていたらしい。

「大した理由にはならないけど、それは残念ね」

符を示し、戦操「ドールズウォー」を宣言した。

手元に人形を繰り出し、戦列を作る。

右に三、左に三、正面に二、背後に二。剣に楯に、

槍に斧に。銘々の得物を構えた人形達が、私の魔力糸

による命令伝達を受け取って宙を走った。直撃の寸前

に構えた騎士槍の表面に鈍い黒の液体が塗布され、武器

器が銀の輝きを帯びる。

屍被いの速成の銀鍍金だ。魔力付与の施された模造

銀の騎士槍が束ねられ、屍人形を串刺しにする。

「お、あ」

まず両の腿を槍が貫き、次に腹を剣が薙ぐ。わずか

の間において胸に深々と斧の刃が埋まり、肩と肘を戦

鎚が砕く。

半開きの頬を真横から槍の穂先に貫かれ、投擲斧で

頭蓋骨を半分割られて、死体人形はだらしなく唾液と

腐汁を撒き散らす。

が、銀の靈力にじゅうじゅうと不死の身体を焼かれ

ながらも、彼女は動きを停めなかった。串刺しにされた腕が引き千切れるにも構わずに身体をよじり、深々と食い込んだ両手剣が胴体を寸断する事にも躊躇せずに背中を反らして、喉を震わせ、獣のような咆哮を上げる。

「がお、あ、」

ばきりと鈍い音が響いた。鍍金の銀に喉を焼かれながら、屍は銀槍を噛み千切り始めたのだ。ばり、ばり、

ぞぶり。尖った金属片が口を引き裂くのをもつとせ

ずに、口に突つ込まれた槍を喰らって咀嚼し、ごく

と飲み込む。

「不味い……」

「不味い……」

ぷはあ、と死臭と鋼鉄の臭いの混じったげつぷを吐

いて、彼女は喉奥で唸った。ぞわぞわと墓標の周囲に

漂う鬼火が揺れる。不満げに唇を歪めた彼女は胃の腑

が見えるのじゃないかと思うくらいの大口を開けて、

「ううーおおーおおーおおおおおッ!!」

一声吐き出すと、凄まじい勢いで辺りの靈を吸いこ

み始めた。その風圧といったらちよつとした嵐のよう。私は人形にそれぞれの武器を地面や墓石に食い込ませ、引きずり込まれるのを塞がなければならなかった。

平たい胸が風船のようにばんばんになるまで、辺りに漂っていた浮遊霊をこっそりと飲み込んで、ばりばり、むしゃむしゃ、ぐちゃぐちゃ。槍傷で切り裂かれ、倍ほどに大きくなってしまった口で思うさまそれを噛み砕き、噛み砕き、噛み砕き——ごくん。

「ううー……」

半死くらいまで目減りしていた彼女の肉体が、重傷あたりまで回復する。完全回復とはとても言えないが、あれだけの短時間での再生能力としては破格の能力だ。それでも彼女は肘から下がぷらぷらと揺れる腿で繋がっただけの右腕と、太腿の根元から千切れた右脚に不満げだった。

悪食なんて表現で済まされるレベルではない。外部から栄養を取り込んで己を強化する妖怪は多々いるが、ここまで即効性と高効率の存在は見たことがない。

妖精は死んだところでただの『一回休み』であり、吸血鬼は賽の目に刻まれても数秒ですぐ復活するが、あれは彼女達の本質が肉体ではないためだ。その本質である自然や血の流れを害されれば無事では済まないし、何百回何千回と蘇生していれば再生間隔も延び、最後には力も尽きるだろう。

なんという生命力——いや、死んでいるのだからこの表現は不適當か。ともかく彼女はぐるぐると喉奥で唸りながら、距離を取って取り囲む人形達に向けてが、ちんがちんと牙を剥き、威嚇を繰り返す。

「うおー!! 卑怯だぞー!! 食わせろー!!」

先程の強引な再生で、周囲の霊体が殆ど喰われたのが幸いだった。これだけ陰気が満ちていればほどなく浮遊霊も集まってくるだろうが、少なくともいまの食べ残し程度では、全快とはいかないはずだった。

キョンシーは人形達の挑発に乗って、後ろにねじ折れた脚が千切れるのにも構わず、強引に踏み込んで両手を振るう。さして強靱とも見えなかった細い腕が、

背後の墓石を粉々に打ち砕く。大した馬鹿力だ。

「逃ーげーるーなあー!!」

無茶な事を叫びながら、彼女はスペルカードを宣言した。

——毒爪『ボイズンレイズ』。

青黒い爪から瘴気が滲む。滴り落ちた紫と紺の濃い毒素が地面を焼いて腐らせる。

濃紺の毒素を撒き散らす爪が、私の喉元へ食い込まずと振るわれる。屍人形の怪力で振るわれた爪先を、割り込ませた人形の盾が受け止める。曲面加工で刃筋を滑らせる丸盾の表面を、爪は容易くがりがり削り取った。

銀鍍金をあつさりと剥離させた左右の毒爪が、盾の地金に深く食い込んだ。傷痕からはすぐに錆びが広がり、丸盾が焦げるように侵食されてゆく。

「邪魔だぞおーー!!」

阻む楯が無くなった事を勝機と見たか、屍人形は振り仰ぐようにもう一撃を繰り出した。孔の空いて使い

ものにならなくなった盾を放棄し、人形を身体ごと割り込ませる。身体で毒爪を受け止めた人形は、見る間にじゅうじゅうと腐り錆びて、元型を失っていった。

腐食は魔力糸を焼いて溶かし、私の腕にまで伝わってくる。慌てて接続を切る頃には、左翼の人形は3体とも動かなくなっていた。

戦力を喪って一気に左翼が瓦解し、戦線が維持できなくなる。やむを得ず右翼と後方の3体を展開して、突撃重視に戦列を組み替えた。

屍体の類が毒を持つているのはままあることだが、彼女のそれは単純に身体的に害を与えるものというよりも、命数——生命そのものを害する毒だ。生命の熱量を奪い去る冷素^{クリオステス}を元にしたそれは、あらゆるものの腐食をもたらす死毒だった。

「おお……」

毒爪の貫いた人形の欠片をばりばりと噛み砕く彼女の周囲で、さらに気温が低下し、還元された質量がわずかながらにキョンシーの四肢を再生させる。

「避——け——る——な——!!」

叫び、力任せに振り回された腕が、墓石を打ち砕き、なぎ倒す。人の身体などあっさりちぎり取ってしまう馬鹿げた勢力だ。見た目以上の脅威だった。

長期戦は損耗を強いられると判断する。人形の修復に必要な資材がすっかり乏しくなっている状況で、それは避けたかった。

（——仕方ないわね）

墓石の陰を縫って回避行動をとりながら、人形の制御に使う魔力糸を切り離す。遠隔操作に切り替わった人形達が宙を奔り、それぞれが虹色の光線を彼女に撃ち込んでゆく。

「そんなの、効かないぞお——!!」

四方からの光線を浴びてなお、尋常ではない耐久力を見せる屍人形。だが、虹色の光線は直接射撃による攻撃力というよりも、目標との距離を測る索敵線のようなものだ。地面を跳ねて避けようとする彼女を的確にとらえ、包围を敷いて追い詰め迫った人形達が銀槍

を振りかぶる。

「うおお——!!」

キョンシーは吼えるように叫んで、それを迎撃した。両手の爪でそれぞれ1体。さらに大きく開いた口で直接もう1体、3体の人形をがきんと咬み止めて、ぎろりとこちらを見上げる。

長い牙を覗かせ、にいと口元を緩ませる死体を見て、私は符名を宣言する。

これで、詰みだ。

「——魔符『アーティフルサクリファイス』」

「うお？」

間の抜けた声が、立て続けに爆ぜる轟音と閃光に飲み込まれてゆく。人形達の自爆がもたらした霊撃の連鎖爆発が、周囲に漂う雑多な浮遊霊もまとめて吹き散らした。

爆炎の後には、墓石を薙ぎ倒す大きなクレーターと、爆心地は地面が融解し、じゅうじゅうとい黒い煙を棚引かせていた。

このスペルは人形内部に仕込んだ火薬を用いた、破壊力重視の特殊霊撃だ。わざわざ魔法のために火薬を仕込む理由は二つあり、一つは爆発の威力を類感させて霊撃の威力を上げるため。もう一つは、魔法の効きにくい相手を直接吹き飛ばすためだ。

魔法と物理、両方の爆発の中、四肢をもぎ取られて宙を舞った屍人形が、どさりと地面に落ちる。火傷というよりは腐肉の焦げた消し炭のような有様。顔の半分ほども焼け、額を覆う符も半ばから千切れ落ちている。

が。

「びっくりしたなあ……」

下半身を失ってなお、屍人形は動作を停止していなかった。

「他に言うことはないのかしら。正直そのリアクションは少し傷付くんだけど」

切り札の一つのつもりが、彼女には決め手には至っていないかったらしい。無事な方の半分の顔を見るに、

咄嗟に人形を吐き捨てて、脳や背骨と言った中枢部への損害を避けたのだろう。

肉体の損傷は彼女にとって文字通り痛痒を与えない。と言って、屍人形の単純な精神構造は、心へのダメージも受け付けないだろう。その上放置していれば勝手に再生する。身体が粉々にでもならなければ大半の攻撃手段が意味を成さないのだから、私の戦種とは相性が悪いと言えた。

私が舌打ちと共に手詰まりを感じ、次の手を模索している時。

「——お待ちくださいな」

不意に、あたりに甘い香りが満ちる。

「この子は大事な大事な私のキョンシーなのですから。壊してもらっては困ります」

澱んで濁った気配と共に、耳奥で反響する囁きが紡がれる。精神を直接侵すような不快な声に、私は眉を跳ねさせた。

慌てて口元を覆う。この甘ったるい匂いは、精神を

蝕む丹葉香だ。

立ち並ぶ墓石のぼんやりとした霞の奥、袋小路のはずの壁の奥から、するりと進み出る姿があった。

途端に濃くなる、強い死臭と澱む濁業。

「うおー!! セーが様ー!!」

現れた乱入者の元へ、キョンシーはすりずりと地面を這いずって近寄ってゆく。

「ヘンな奴が来たけど、私は負けなかったぞー!!」

「よしよし。いい子いい子。すぐに直してあげるからね」

結い上げた髪を傾け、上半身だけになった死体を抱え上げる彼女。額を撫でられてキョンシーは嬉しそうに喉を鳴らした。

「……あなたが彼女の主人で良いのかしら」

「ええ。……霍青娥と申します」

名乗りから見ても大陸の——それもかなり古い妖怪であると知れた。全身の気脈も澱み、従者同様、生きているのか死んでいるのかも判然としない。

そも、墓場に動く死体がいることは決して可笑しくはないのだが、彼女の纏う気配は並の死体のそれではない。階梯^{ステイジ}で言うならば第五階梯^{フィフス・ステップ}以上。

尸解仙^{リブチ}。それも、大道たる定めを無視し、戒律を破ることで生命を長らえ力を得る、邪仙だ。屍体を動かすとなると、八大洞なら召鬼の系統だろうか。

「あなたが森の人形遣いさんね? ——観たところ、あなたも決して仙道と無関係ではなさそうだけれど?」

「魔法も仙道も、極めつく先は同じものよ」

私の使う人形を媒介した魔法は、類感と感染の呪術原理に基づく。いつだったか藁人形について新聞屋に話したように、形の似ているもの同士は関連性を持つという原理と、一つのものから分かれたものは、離れていても繋がっているという原理だ。

藁人形の呪詛で言うなら、藁束で呪う相手の姿を模して人形を作るのが類感で、藁の中に呪う相手の髪の毛や持ち物を混ぜるのが感染にあたる。比喩にするのもどうかと思うが、女性の下着や靴下に執着する偏執

的性癖もある意味で感染魔術と言えないこともない。

捨食捨虫の魔法も、食を断ち霞を食べるといふ仙人の生活や、三戸の虫を祓うことと同義で、彼女からしてみれば人間から転化した種族魔法使いもまた仙人と似たようなものなのだろう。

「……お名前を窺ってもよろしいですか？」

「アリスよ」

私が名を告げると、彼女はまた小さく微笑む。

「そう、アリスさん。……このたびは芳香が大変お世話になりました」

胸に抱きかかえた屍人形に愛おしげに頬ずりをして、青娥はくすくすと目を細める。その胸の中で童子のように笑うキョンシーが、嬉しそうに牙を覗かせる。

ずるりと――背後で、不快な音が、響く。

「この子が、どうしてもあなたにお礼をしてあげたいというものですから」

ああ。迂闊にも――私にはこの時既に、そこにあるものの正体も、事件の真相も、予想は付いていたのに。

振り返って、しまった。

墓場のそこから、這い寄るように姿を現す、死体が5つ。食い千切られた身体を引きずるようにしてなおも動く、土気色の死体達。

「受け取って、頂けますか？ 物納、という形になってしまいましたけれど、ね」

極上の笑顔と共に。青娥は、人里で犠牲になった娘達の死体を示してみせる。

私が、周囲に残る人形たちを残らずそこへ放ち、自爆を命じたのはその直後だった。

――魔操『リターンイナニメイトス』。

轟音が、真昼のように墓地を照らす。揺れ動く影は崩れ落ちた墓石を舐め、燃え上がる炎と立ち昇る黒煙をたなびかせる。燃え焦げてゆく墓地の一角に視線を向け、唇を嚙む。

「あらあら……お気に召しませんでしたか？」

「……ええ。最悪の気分」

唾を吐き捨てたいのを堪えつつ、青娥に背中を向け

たまま答える。私はようやく自分の詰まらない勘違いと、事件の概要を掴んでいた。

人里の犠牲者たちは、食べ残しではない。私に恩義を感じた屍人形が、その恩に報いようと、人形の材料を集めて回った余りなのだ。

「……ボランティアもほどほどにして欲しいわ。

次からは修繕費用を請求するわよ」

私は、そんなもののために義憤に駆られていたことになる。何とも馬鹿馬鹿しい結末に苦笑が漏れる。

「ひとつ、聞いてもいいかしら」

「ええ、なんなりと」

「どうして、態々遊郭の娘ばかりを襲わせたの？」

確かに夜の夜中に歩いている娘を狙うのならば領ける標的だが、片手では足りない数の犠牲者を彼女達だけに限定してやる必要はなかったはずだ。

死体人形を繕う仕組みや理論までは知らないが、生

娘の身体では都合が悪いということもないだろうし。

「だって」

可笑しそうに彼女は微笑む。胸に抱いた屍人形を、手際よく繕いながら、愛おしげに、自分の娘を慈しむようにその頭を撫でる。

「それなら怒るのはお門違いじゃありませんか。彼女たちには商売をしてもらっただけです」

「商売？」

意味が分からず、瞬きをした私に。青娥は楽しくて仕方がないというように、先を続けた。

「娼婦というのは、身体を売ってお金を稼ぐものでしょう？」

——ああ。

間違いない。私が言うのもなんだが、こいつは飛び切りだ。善悪どころか、目的と手段にも頓着がない。

「皆さんには十分なお代を支払っておいたつもりなのですけれどね？」

何が悪いのか分からないと言うように、邪仙は首を

傾げた。

彼女が重視するのは何よりも自身の欲だ。欲望のままに惨劇を起こし、濁業を積む事を至上とする。

そも、ただ単に使役するだけならば、材料に死体を用いる意義は薄い。もともと人間であつたことが有利に働く面はあれど、兵衛として見れば人体は実に脆弱だ。人間を模して動き戦うなら、容易に作成できる木や紙でいいし、頑健さを求めるなら石や鉄を、採算を度外視してでも強力な護衛を求めるなら精霊銀や樹鉄鋼を選べばいい。人としての情や業を持つ死体など、扱いにくいことこの上ないものだ。

なにより、無生物から作る兵衛は、欲を持たず、人を喰うこともない。

だが、彼女にとつては——作製にも維持にも、できるだけ多くの犠牲者を強いる屍人形こそが、もつとも最良の従者なのだ。

その破綻した合理性は、成程、邪仙として称賛されるほどに立派なものなのだろう。

彼女は袖で覆った口元をゆるめながら、地面に散らばる人形達の残骸を見下ろす。ふわりと辺りには甘ったるい丹香の匂いが満ち、私の神経をささくれ立たせた。

「あなたも、折角作つた人形でしように。もう少し、大切にしていあげたら良いのじゃないかしら？」

「仙人が、人形一つに執着していることの方が滑稽よ。物欲なんて一番最初に捨てるものでしょう」

「生憎と、大道に背く左道使いですので——芳香」

「任せろ、ご主人様!!」

見事な手際で死体人形の応急修復を終えた邪仙が、その背中をポンと叩く。キョンシーは背中で跳ね跳ぶように立ちあがり、声を張り上げた。

「我々は、最後の一兵となろうとも、ご主人様を守る崇高な使命のために戦うのだー!! さあ死ぬがい! 異教の邪悪な魔法使いめー!!」

接ぎ合わされたばかりの足が軋むのにも構わず、屍が頭から突っ込んでくる。キョンシーは肘から先の無

い手の代わりに、がばりと開けた大口で人形に噛み付いた。

爪だけでなく牙や唾液からも毒素は分泌できるのか、腐臭を吐き散らしながら武器ごとばりばりと人形を噛み砕きながら、ぎろりと瞳孔を濁らせた眼で私を睨む。

「っ」

食欲を隠すこともなく牙の並んだ大口を開けるキョンシーへ、オルレアンの騎士人形を展開。魔力糸に絶対死守の命令を流し、戦線を構築させる。

「うおー!! またお前らかあー!!」

腕の無い身体をものともせず、剣を噛み止め盾を砕くキョンシーは、先程までよりも遙かに力を増していた。最も近接戦に優れるはずの騎士人形はたちまち打ち合った剣を砕かれ、鎧にいくつもの傷を負う。キョンシーは主の危急にこそその真価を発揮するのだ。

聖別した武器をも溶かし腐らせる死毒を撒き散らし、屍人形がじりじりと迫ってくる。自律稼働では凌ぎ切れないキョンシーの猛攻に、私は防衛の命令を打ちこ

むので手一杯となり、否応なしに邪仙との距離を引き離されてゆく。

「うふふ。何もかも一人でというのは大変ですね」

そう囁いた邪仙が、袖を手繰った。

——邪符『ヤンシャオグイ』。

「——瘧」

鼓膜を震わせる不快な口訣と共に、彼女の袖から青白い輝きの光球が飛び出した。

おぞましい符名が術の体を表していた。養小鬼ヤンシャオグイ……つまり墮胎した胎児の帰巢本能を用いた術だ。産まれ落ちることが出来なかった怨念を増幅された屍鬼は、再び産まれ直すため、暖かい胎を求めて追い縋り、潜り込もうとする性質を持つ。

おおよそ、少女達の遊戯である弾幕ごっこにおいて、最低劣悪のスペルカードだ。

「……最悪の趣味ね」

「お褒めに預かり光栄ですわ」

ぼんやりと輝きを放つ光弾の中央に陣取る青白い小

鬼達が、膜の掛かった眼で一齐にこちらを見る。

不快感に歯を軋らせ、私は足元に這い寄ろうと近づくと、彼等に、人形弓隊を繰り出して斉射を浴びせた。

「あらあら……乱暴しないであげてくださいな。その子たちは寂しがってるだけですよ？」

「五月蠅いッ」

が、銀合金の鏃に射抜かれてなお、小鬼達は不規則な軌道を取りながら蠢き、動きを止めない。それどころか——彼等は、近くの人形に手当たりしだいに取っついてスカートを食べ破り、胎に潜り込もうとさえしていた。

……断言してもいい。今この瞬間以上に、人形たちを少女の姿で作ったことを悔いる日は、来ないだろう。

「つぎ、けッ」

感情が自制を外れ、叫びとなって迸る。

戦列に加わっていた人形達のうち、二体が符の指名を受けて動作を止める。同時に他の人形と同サイズにまで折り畳まれていた質量が展開。わずか一秒半で身

長4mの巨人へと変じた人形達が、私の前へと踊り出した。

凌辱を続ける小鬼達、騎士人形と交戦していたキョンシーと、邪仙を直線状の射線へ捉え、極大の閃光が撃ち放たれる。

——試験中「レベルティターニア」

魔理沙のマスターズパーク級とまではいかないが、それに準じた出力の自負がある。ただ徒に破壊を撒き散らすだけの、威力の大きすぎる未完成なスペルだが——今は、それがありがたく思えた。

轟音をとどろかせ、大気を弾く光熱波が墓地を穿ち貫いてゆく。感情と共に魔力を絞り出した私が大きく息をつきながら、額に汗を感じていた。深く抉れた地面は熱量に溶け、高熱を放ちながら陶器のように表面をガラス化させている。

もうもうと立ち込める土煙の中、見えたのは。身を

挺して主を庇ったキョンシーの姿。

全身を焼け焦げさせてなお、主の前に立ちほだかり、ありったけの冷素を放射して閃光の熱量から主を守ったのだろう。

「お……せーが、さま」

「あらあら……酷い怪我ね、芳香」

騎士人形の剣を胸に受けたまま、濁った瞳で主を見上げ、ごぼりと濁った血を吐くキョンシー。

「いいいいいこ。偉いわ」

そつと頭を撫でられ、キョンシーは笑ったように見えた。しかしそんな健気な従者をあつさりとは投げ捨て、邪仙はずぷりと地面の中に身体を滑り込ませる。

逃げられると気づくのに、数瞬を要した。

その頃にはもう、青娥の姿は胸辺りまで地面へと沈み――

「うふふ。アリスさん。どうも御気分がすぐれないご様子ですので、本日はお暇させて頂きますね」

「待——ッ」

繰り出した人形の槍が貫くよりも速く、邪仙の姿は地の底に消えていた。

「またお会いいたしましょう。芳香とあなたは仙縁があるようですし。大道の定めは覆せないものですから」
わんわんと、地の底を揺らし、あたりに反響する耳障りな声。

あとには残された死体の燻ぶる腐臭と、丹葉の甘い残り香だけが漂っていた。



「んう……？」

目を覚ますなり、びんと上体をバネ仕掛けのように跳ねあがらせて、芳香は起き上がる。

「お？」

「……起きた？」

寝惚けているのだろうか、左右に首を捻り、キョンシーはあたりを見回して、最後に私を見上げる。そし

て彼女は梟のように首をかしげ、おもむろに額の符に【！】の文字を浮かばせた。

「思い出したぞー!! お前、森の人形遣いかー!!」
先程思い切り頭を戦鎚でぶち抜いた時、記憶の配線がうまい具合に繋がったのだろうか。代わりに、さっきまでの交戦の記憶はすべて吹き飛んでしまっているようだったが。

「おお。この間アリスには世話になったからな! お礼をしないとイケないなあー!!」

「結構よ。もう十分」

うんざりと呟く。彼女は振り回している自分の腕が、どうして繋がっているのかも疑問を持たないようだった。さっきまで自分のものではなかった手足を振り回し、口元に牙を覗かせて、無邪気に屍人形が笑う。

「……ねえ、あなた、幸せ?」

「おお、しあわせだぞー!! ゾンビは永久に不滅だからな!!」

問いかけた私に、満面の笑顔で、彼女は答えた。

魔女と夜貴の同形三複

霧の湖の畔に建つ悪魔の館——紅魔館。その名の由来のひとつでもある鮮やかな紅の屋根は、昨日からの雪に覆われていた。

半地下の館内から外に繋がる天窓も、張り付いた雪と霜が溶けて生じた水滴に覆われて曇り、夜半にも関わらず司書の使い魔が、バケツと雑巾片手に本棚の上を飛び回っては本の大敵である湿気取りに勤しんでいた。

ゆらりゆらりと揺れるランプの灯りの下。眼鏡のレンズ越しにちらとそれを見上げ、パチュリー・ノーレッジはとりとめもない思考に頭をゆだねる。

「……………」

わずかに埃の焦げる匂いにこほ、と小さな咳を一つ。深々と降り積もる雪に一切の雑音を飲み込まれ、図

書館はいつも以上の静寂に満ちている。

一度、朝早くに晴れ間は見ええたものの、再び昼から降り始め、夜半を過ぎてなおやむ気配のない雪は、このまま明日まで続くのだろうと思われた。悪魔の館が紅白斑に染まるなんて皮肉にも程があるが、さて。この主はそれを楽しんでも居るのだろうか。

気分ひとつで窓を潰したり増やしたり、使いもしない廊下を改築させたりと、館の見栄えに拘る自称ツェペシエの末裔の思考と言うものは良くわからない。

知識と日陰の少女が頁を繰り、

揺らめく灯りの下に、幾日月と積もった歳月が燦る。見上げる事も叶わないほど巨大な本棚の傍らで、パチュリーの向かうテーブルには、何十何百という未読の書籍と、それと同じくらい既読の本が積み上げられている。

他にも羽根ペンやインク瓶、付箋、埃の積もった文鎮、走り書きを集めたノート。さらには飲みかけの珈琲と日持ちのする砂糖菓子が詰められた瓶と、雑多な

ものが所狭しとひしめいていた。

「……………」

目元に激む疲れにパチュリーは吐息をこぼし、顔を上げる。眼鏡越しにも重い視線は、眼の下にうつすらと隈を浮かべ、斜視に近いほど歪んでいた。

これで何日目の徹夜になるだろう。手にしたカップに口を付け、中身がすっかり冷えているのを見て、パチュリーは眉を潜めた。使い魔を呼んでお代りを用意させようかとも思うが、声を上げるのが煩わしい。

「……………んっ、……」

しばしの躊躇の後に、パチュリーはカップの底に残る焦げた泥水を喉に流し込んだ。

ぞっとするほどの悪魔のような冷たさと苦さだけを無理矢理飲み込んで、慢性の頭痛に痛むこめかみをそっと押し揉むと、再度開いた頁に顔をうずめる。

静謐な館内のあちこちには本棚の他にも未整理の書籍が無造作に積み上げられ、広大なはずの敷地を先も見逃せぬほど複雑に入り組んだ、迷宮めいた姿に変え

ている。その姿はまさに、書籍の溪谷という形容が相応しい。

図書館の主であるパチュリーも知らないうちに、この蔵書はどこからともなく出現しては勝手に増えてゆく。

転がる雪玉と同じように、知識というものは蓄えられた場所に自ずから集まろうとするものらしい。幻想郷随一の蔵書を誇る知識の蔵は、人の手など借りずとも周囲から同属を掻き集め、その密度を上げてゆく。もはやそれはアカシャの年代記を指すひとつの意思と呼んでもいいのだろう。

知らぬものを知ろうとする意志。道半ばの理解を後世に伝えんとする遺志。文字とはつまるところ著者の生き写しだ。まして、蔵書の多くが魔術書グリモワールともなれば尚更のことで、幻想郷のそれに自我が宿らぬほうがかしい。

中でも稀代の貴書、奇書、稀覯本が多く身を寄せていることは、彼等にとっても居心地のいい場所である

のかもしれない。

そんな無数の本の森に埋もれ、独りひっそりと、至福の時間を過ごしていた少女のもとに、

「パチュエ、いるかい」

言葉とともに、静謐な気配を乱すものがやってくる。

正面の大扉を手づから押し開けてやってきたのは、まだ十ほどにも満たない姿恰好の少女。傲慢にして強大なる吸血鬼、この館の主である永遠に幼き紅き月レミリア・スカーレット。

500年を生きた紅魔の館の主は、自分の背丈の数倍をゆうに超える本の溪谷を羽ばたき通り抜けて、悠然とパチュリーの座るテーブルのすぐ傍らへと舞い降りた。背中の羽根を畳む動作で、ふわりと舞い上がる埃に小さく顔をしかめ、

「まったく、一年中変わらないなこは。もうすぐ雪割りだというのに、相変わらず儼^{カビ}だらけ埃だらけで辛気臭い。何をサボってるんだ、咲夜は？」

本の保全のためパチュリーがメイドたちの立ち入り

を禁じていることを知らないわけではないだろうに、レミリアは鬱陶しげに牙を覗かせ、そんなことを口にする。

パチュリーは不快感も露わに、目の前に押し付けていた書籍からわずかに顔を上げ、眼鏡の奥からちらりとだけ読書の時間を邪魔しにきた友人の姿を見た。

「……館の主人自ら客人の気分を害しにきたのかしら」
「心外だね、親友の退屈を紛わせに身づから心を砕いて回る真摯な主に向かつて」

レミリアはそう言うと、魔女の座る椅子の背もたれにひよいと飛び乗り、上下さかさまにパチュリーの顔を覗き込んできた。

小さなドレスの背中ではたばたと揺れる蝙蝠めいた羽根は、丁度よい暇潰しを見つけたと言わんばかり。

まるで犬の尻尾ね、と胸中で呟いて、パチュリーは書籍の上に視線を戻す。

明らかに無視を決め込む様子の魔女に対し、しかしレミリアは気分を害した様子もなく、額に手をかざし

て館内を一瞥する。

「夜中くらい読書は自重したらどうだい。こんな暖炉ひとつない場所。蛍雪の功は足りてるだろう？」

「火は本が傷むわ」

吹雪いている表に比べれば確かに幾分か暖かくはあるが、黴と埃の籠った図書館内の空調は快適というには程遠い。

卓上の小さなランプは、燃える陽炎のようなゆらめきをつくり、炎とは異なる白色の光で館内を照らしている。

知識の姓を持つ稀代の愛書狂^{ビブリオフィリア}が、この図書館に求めるのは書籍にとって快適な環境であり、住環境などは二の次だ。暖かさに包まれて転寝を決め込むような快適空間は、叡智を求めるのにささやかな助力すら与えてくれないと、パチュリーは常々考えていた。

「先に身体を痛めておいて大した言い草だ。まあ、その格好じゃ寒いってこともないだろうが」
いつもの寝巻きにも似た服の上から、ふかふかのべ

ージュのガウンを羽織り、毛皮のスリッパに足を突っ込んで万全の防寒体勢を取っているパチュリーを見て、レミリアは笑う。

「……冷え性とリウマチは魔女の職業病なのよ」

「いっそ毛糸のパンツでも穿いたらどうだい。大して歳を食ってもいなくせにやたら老成ぶりがるのは、餓鬼が背伸びしてるのと変わらんよ、パチュエ」

くく、と口元に尖った牙を覗かせて、五百歳の吸血鬼はテーブルの反対側に腰を下ろした。積み上げられた書籍と卓上の品物を一緒にたがちゃん、がちゃんと乱暴に薙ぎ払い、空いた本の隙間に肘をつく。

自分の居場所を乱暴に荒らされることに對し、本の縁から覗くパチュリーの視線はますます陰しいものとなつてゆくばかりだ。

「百年来の友人の頼みだ、夜更かしのついでにお喋りにくらしい付き合ってくれても良いだろうに。それとも、お気に入りの魔女仲間同士でなきや夜のお喋り会には入れてもらえないのかね」

「……………」

無言のまま、棘々しい拒絶の気配を撒き散らす頑固な友人に、レミリアはもう一度苦笑する。

長らく彼女ひとりの席しかなかったこのテーブルにも、別の椅子が用意され、見慣れない私物が散見されるようになって久しい。病的なほど人付き合いを厭っていた過日の日陰の魔女にしてみれば、それが歓迎でなくてなんだというのだろう、とレミリアは思う。

「……………」

「まったく、頑固にもほどがあるね。——咲夜」

それでも沈黙を決め込んだままのパチュリーを見、レミリアは指を鳴らしてメイド長の名を呼ぶ。すると、すでにそこには、ずっと前からそこに控えておりましたと言わんばかりの顔をして、燭台を手にした十六夜咲夜の姿があった。

「紅茶を。ついになにか食べるものも欲しいわ」

「承知いたしましたわ」

咲夜が一礼してそう答えた一瞬後には、秒針が文字

盤を刻む音を響かせ、すでに従者の隣に銀の配膳台が用意されている。

夜色の蝙蝠を描いたデザインの陶のティーポットに、濃紅の薔薇を象ったクッキート、ごく普通の狐色に焼けたクッキートの二皿がテーブルに並んだ。レミリアは従者の完璧かつ瀟洒な手際にふふんと鼻を鳴らす。

湯気の立つ琥珀色の水面に、ブラッディフレーザーを数滴垂らして整えられた紅い紅茶を口元へ運び、眼を細めて満足げな吸血鬼。

「パチュリー様もいかがですか？」

「そうね」

咲夜に勧められて、本の魔女はそう答えはしたものの、顔の間近に押し付けた本から視線を上げようとはしなかった。

どうせこの完璧で瀟洒な従者の仕事はいつだって完全で、いつ口にしたところで紅茶は適温に保たれていることは自明なのだ。だから、これまでレミリアに対しても貫いてきたように、パチュリーは紅茶を楽しむ

ことをあえて読書よりも優先させることはない。

「……咲夜、下がっていいわ」

「はい」

やれやれと呟いて、レミリアは従者を下がらせる。

静かに答え、再礼と共に今度はきちんと扉から退室してゆくメイド長。

じっと本を睨み続ける日陰の魔女を傍らに、レミリアはしばしクッキーと紅茶を楽しんだ。あどけない指先が紅色の焼き菓子をつまみ、二、三枚をまとめて紅い唇の奥へと嚙り飲み込んでゆく。

あまり上品とはいえない乱暴な咀嚼音に、静寂と沈黙を愛する魔女が遂に音を上げたのは、それから程なくしてのことだった。

「ねえ、そこに居られると気が散るんだけど」

「居なくても同じだったろう。いつまで同じ頁を眺めてるんだ？ パチエは」

「つくづく性格の悪い蝙蝠ね」

ぼそり、と呟くパチュリーに、レミリアはしてやっ

たりと唇を歪める。

「酷い言われようだな。魔女を殺す退屈に付き合つてやろうと言うのさ。私がね」

「チェスの相手なら間に合ってるわ」

「千日手しか選ばない泥試合はこちらからも御免だよ。やはり魔女どのの対戦相手は、無謀で蛮勇な人間が相応しい」

運命を読み操る吸血鬼と、それすらも手に数えようとする魔女が指し手となる盤上では、結局、初手で勝敗が決まる。問題はその一手を指すのに双方ひと月ばかり必要ということだった。

「それに、生憎だけれど蝙蝠相手に独り言を言うほど退屈もしていないわよ」

「その割にはやけに饒舌じゃないか」

くっく、と楽しそうに最後のクッキーの欠片を口に放り込み、レミリアは言う。

本当に邪魔ならば、パチュリーがわざわざ言葉など使わないことを知っているのだ。もつと直接的な手段

はいくらでもあるし、使い魔に締め出させたつていいはずだ。

……もつとも、それすら捻じ曲げるのがレミリアの能力ではあるのだが。

レミリアは笑いながら、焼き菓子をつまんだ指を舐めると、卓上にあつた瓶詰めに目をつけた。

赤、青、緑、黄、ミルクにそれらの色を溶かしたような星型の砂糖菓子が詰まったそれを掴み引き寄せると、蓋を封蝋ごと剥がし、中の金平糖を無造作に口に運ぶ。

「……成長期かしら、レミィ。小食は卒業したの？」

「やせ我慢してるのさ。パチエの機嫌を取る為にね」
今度は先刻よりもはつきりと、パチュリーが反応を示すのを見て、レミリアはがりがりとした砂糖菓子を噛んで飲み込み、

「咲夜の紅茶もクッキーも嫌いじゃないが、こう毎日だと飽きもする。門番もこのところ雪続きで表に出るのが一苦労だと言っていたからね。この分じゃ、この

ところ随分喘息の調子がよろしいパチエのお喋りな舌も、さぞ時間を持て余しているだろうと思つたのさ」

「……何が言いたいのかしら」

「皮肉の解説するほど野暮じゃないよ」

牙を覗かせて笑う吸血鬼。

魔法陣、触媒、呪物、法具、聖遺物。補助の

種々様々な手段はあれど、魔法の実践の根幹に関わるのは口頭による呪文の詠唱である。

チェスの早指しに近い概念の魔法戦においては思考の早さと同等以上に、正確な発音、卑語俗語慣用表現を含む文法、詠唱速度が魔力の多寡などよりもよほど重要な要素となるため、魔法使いは何よりも滑舌や発音を繰り返し返し学び、総じて饒舌で早口になる。命名決闘法においてもそれは変わらない。

なかでも、三精四季五行に併せた五声と陰陽六律の口訣をもつて、森羅万象の相生相剋、比和、相乗相侮の秘儀を操る七曜の魔法使いはとりわけ饒舌だ。……肺に懺さえ生えていなければ。

「……はあ。前置きはそれくらいでいいでしょう。それでレミイ、いったいなにを強請りにきたの？」

「物分りがよくて助かるね。それなりに真剣な相談だよパチエ？ 是非とも知識人の助けを借りなきゃいけないような、ね」

「そう。当てにしてくれるのは嬉しいけれど、早々と終わらせて一人にしてくれるともっと嬉しいわ。当てにしてくれないのが一番だけど」

「つれないね。百年来の友人に対して」

「その百年来、困り事を押し付けるか、窮して泣き付くかでもなければ貴方がここに来ることはないもの」

「これがその最初かもしれないだろう？」

「吸血鬼は平気で嘘を吐くから嫌ね。悪魔相手の方がよっぽど楽よ」

いい加減に辛抱の限界となり、パチュリーはとうとう本から顔を上げ、ぱたりと頁を閉じて脇にどける。

眼鏡を外し、我儘な吸血鬼の相手をしているうちに額に寄った皺を揉みほぐして、

「貴方が持つてくる話は愚にも付かない与太話か、勝手放題の我儘か、実現不能な無理難題か、夢見語りの荒唐無稽か、あるいはその全部だもの」

「良く解ってるじゃないか。それを知恵と工夫でどうにかするのが知識人のつとめだろう？」

「客人を扱き使う理由にはならないわよ」

「パチエのものは私のもの。私のものは私のもの、さ。

偉大な格言じゃないか」

「いつから沙シェイクスピア翁にかぶれたのかしら。吸血鬼のくせになまいきね、レミイ」

ふう、と吐息を挟むパチュリーがそれ以上言い返す様子がないのを見て、レミリアは本題を切り出す。

「地底の連中の話さ。パチエも白黒を付き合わせたんだから分かつてるだろう？」

「……………」

その一言で大体の内容を察したパチュリーが、露骨に渋い顔をするのを見て、レミリアはくくつ、と喉奥を震わせてた。

「この間、例の地獄鴉とやらを見たよ。地面の底に這いずってる連中が自前の太陽を持ったなんて、実に出来の悪いジョークじゃないか。なあパチエ？」

「なあに、私に核条約でも結んで来いというの？ 締め上げるのなら咲夜にやらせたらどう？」

「話を急くなよパチエ。まあ、太陽が一つ増えたのはすこぶる気に入らないが、人工太陽が大人しく地下に引き籠っているなら、紅魔館への宣戦布告は見逃してやるさ。なにしろ私は寛大だからね」

「大丈夫よ鴉は鳥目だもの。夜は表に出てきたりしないわ。……それで、まさか貴方まであの太陽が欲しいとでも言いだすつもりじゃないでしょうね、レミイ」

「そんな訳ないだろう、パチュリー・ノーレッジ。見損なうな」

吸血鬼は不遜に、口元に牙を覗かせて言った。

「欲しいのは月だ。月が欲しい。できれば満月がいいな」

「……………」

何が違うのよ、と頭を抱えたくなるのを辛うじて堪え、パチュリーは溜め息を飲み込む。

「……もうあるじゃないの」

「私だけの月さ。一年三百六十五日、二十四時間絶え間なく、私のためだけに輝き続ける月だ」

『My beloved shining Mistress Moon
「私だけのお月さま」？ 聞いていて恥ずかしくなるくらい乙女な台詞ね。……そんなものを、私につくれと言うのかしら」

「他の誰が出来るんだい？」

まるで子供のように、笑顔を浮かべてレミリアは言う。

500年を生きる吸血鬼とは言いが、要するにそれは500歳の子供と同じことだ。不老不死の吸血鬼だろうがなんだろうが、身体が育たなければ中身だって伴うことはない。レミリアの尊大さは、言い換えてしまえば子供の我儘と変わらないのだ。

……それこそ、文字通り比類なき力を兼ね備えた、幼い化け物の子供の兇戯。

「今日の分の月阿片ムーンオペリウムが足りていなかったのかしら、レミイ」

「十分に酔っているさ、パチエ」

「……無理だ、と言っても聞かないわよね、貴方は」

「無駄なことをわざわざ聞くくらい調子がいいなら僥倖だ、パチュリー・ノーレッジ」

だからそれゆえに、レミリアは畏れられる。まず常識ならば考えもしないこと、求めもしないことを普通に実行しようとするからだ。太陽が邪魔だからと霧を出し、領土が欲しいからと月にロケットを打ち上げる。幻想郷においての常識などあつて無きに等しいものではあるが、それでも周囲の迷惑を省みない彼女の行いは、往々にして騒動の種となる。

力を持つ妖怪は、その力に、生きた年月に比して意欲を、己というものを失い停滞する。幻想郷で最強に近い妖怪、吸血鬼を名乗るくらいだからレミリアもその例外ではないはずなのだが、彼女が停滞させているのは困ったことに外見に相応しい精神年齢だった。

「で、いつまでに出来上がる？」

話を始めただけですっかり成し遂げた気で居るレミリアに、パチュリーはどうとう堪えきれずに盛大に嘆息した。

「つくづく、長生きはしない方が得ね。……腐れ縁なんて鬱陶しいだけ」

「つくづく、長生きはするものだね。持つべきものは友人だ」

「……ねえレミイ。攻め落とせなかったから贗物で我慢するなんて、傍から見れば滑稽よ？」

「本物が有り難がるほどのものでもなかったから、もつといいものを作つてやれと言つてるのさ。なんなら別荘でも建てればいい」

多少の皮肉では応えないことを確認して、パチュリーはレミリアが本気で言っているのだということを改めて理解する。彼女が本気でないことなどほぼ有り得ないのだが、万一の可能性を確かめたくなる気分だった。

期待に目を輝かせている紅く幼き永遠を見やり、興味がなくなるまで付き合っておくのが一番賢いやり方だと、パチュリーは腹を括ることにする。

「月、ね」

卓上の本から一冊を抜き出し、パチュリーは手短に呪文を呟いた。

即座に展開された小さな魔方陣の上に、丸い球体が出現する。滅多に机を離れることをしない彼女にとって、持ち物を手元に引き寄せる転送アポの魔法は手足のように使用頻度の多い魔法のひとつだ。

半弧のアームに支えられ、ぼんやりと薄い輝きを放つ球体は、白と薄い灰色で複雑に塗り分けられており、表面には小さな隆起といくつもの小さな穴クレイターが穿たれていた。

「……なんだい、これは」

「地上から見える月の表側を再現した形だね。月球儀ムーングロブと言うそうだけど」

「ふん。貧相な岩の塊だね。海も都もない」

「そうね、ついでにウサギも住んでいないわ。これはあくまで月の象形かたちをなぞっただけの模型。貴方や私達の知る月とは違うわ。幻想郷こへから見える月はこれではないもの」

「……私たちにとつての『現実げんそう』の月か。で?」

アームの中に納まる月の模型を、吸血鬼の紅い爪が引っ搔く。重力を無視してぐるぐると回転を始めた月球儀を一瞥し、レミリアはパチュリーに先を促す。

「……自分専用の月なんて代物、持てればそれこそ絵本に載るような大魔女の仲間入りでしょうね。月齢も潮汐も気にせず、秘儀参入も大儀式イニシエーションも、不老不死も黄泉還りも、いつでもどこでもなんだって思いのままよ」

「だろう? 実に私に相応しい所有物じゃないか」

「ねえ、レミイ。私思うのだけど」

ふう、と湯気を立てる紅茶に口をつけ、パチュリーは言う。

「吸血鬼って、もしかして月から来た化物じゃないのフリークス」

かしらね？」

「なんだパチエ、ついに私までエイリアン扱いか？」

「だって、そうでも思わなきゃやってられないわ。貴方の拘りかたって異常だもの。この前の月ロケットでチーズの塊でも見つけてきたのかしら？」

「パチエの宇宙船は着陸前に壊れたからね。着地の地震波を測れなかったから、地面一面がCHEDDARチーズだったことに気付かなかったのさ」

レミリアはあの惨憺たる結果に終わったプロジェクトスミヨシの月面侵略計画を、まるで手柄のように語る。吸血鬼と言うのはよほど楽天的かあたまのわるい生き物なのだな、とパチュリーは再度思い知った。

「馬鹿げたことを言わないで、レミィ。いつからうちの館の主はネズミになったのよ」

「さてね。なんなら次の週末にまたロケットで食べに行くかい。今度はパチエも一緒にね」

「祝日はまだ先よ、自称発明家さん」
「くっく、それじゃあ咲夜はビーグル犬か」

自分のジョークに吹き出して、レミリアは愉快そうに手を叩く。

「……つまり、パチエはこう言いたいわけだ。あんなものを欲しがるなんてとんでもない、と」

「ええ、貴方の月がどこに行つたのなんて、私の知つたことじゃないわ」

「出来ないとは言わせないさ、パチュリー・ノーレッジ。月阿片くらい田舎の人狼でも作る。スベルに月を封じてみせる七耀を識る魔女に、月を創れないはずがない」

「……ご評価いただけるのはまことに結構だけれど。私も天井に逆さまに張り付いて眠れば、少しはその気持ちかわかるのかしら」

「くだらない冗談は2度までだよ、パチエ」

「さすが悪魔。残機が一つ少ないのね。当主としては右の頬を打たれたら左の頬を差し出すくらいの度量が欲しいものだけど。……まあいいわ。このままじゃ本当に同形三複だものね」

頃合いか、と判断したパチュリーは静かに瞑目し、頭上の窓を拭いていた司書の使い魔を呼び寄せた。

「お呼びですか、パチュリー様」

「そこはもういいわ。葦ワイゼットのエリクシルはまだ残っていたかしら」

「はい。まだ在庫がいくつか」

「じゃあ持つてきて頂戴。あと他に……」

パチュリーの指示に従って、小悪魔は小さな羽根をばたばたと動かし、書架の奥へと走り去ってゆく。

この図書館は同時に、魔法使いパチュリー・ノーレッジの広大な工房でもある。パチュリー自身は薬草も茸キノコもあまり使うことはないが、あちこちから取り寄せた呪物フレイズニ、触媒ゴースト、魔法薬などは多く貯蔵されていた。実験場の他にも本格的なマジカル・ロッジも築かれ、大規模な集団儀式まで行える設備が供えられている。

およそ、魔法の理論、実践において不自由はなく、パチュリーの二つ名である『動かない大図書館』の所でもあった。

そうして待つことしばし、やがて小悪魔がいくつかの瓶を抱えて戻ってくる。

指示のあった葦のエリクシル、丸フラスコにコルクと蜜蝋で封じられた無色透明の酒精アルコール、枸橼シトロネのエキスをひと瓶、そして冷却機アイスベイルいっぱい細かく砕かれた氷。卓上に置かれた瓶のラベルを順に確認し、最後のひと瓶でパチュリーは手を止めて眉をしかめる。

「……小悪魔。これは枸橼シトロネじゃなくて佛手柑フシユカンよ」

「あ」

「まだ残っていたはずだから袋ごと持つてきなさい」誤りの指摘を受け、小悪魔はすみませんと頭を下げ、慌てて倉庫に戻ってゆくその背中に、動かない魔女は吐息をひとつ。

「本当に、本の管理以外の覚えは悪くて困るわ」

「主に似たんだな」

「当然よ。そのために躑ヒメけているんだから」

レミリアは透明なフラスコに溜まった無色透明の液体にこつん、と爪を当て、

「それにしても、うちの魔女どのは病弱なくせに酒豪だったかね。宴会では酔い潰れている所しか見た覚えがないけれど？」

「愚問ね。これら全ては大エリクシルへと至る錬金術の大願。生命の水は言うに及ばず、妖霊も精霊も、魔法の初歩で学ぶ必須科目よ」

魔法使いが捕え使役する幾千幾億の悪魔のうち、地水火風の四大元素を集めて連続蒸留した、精度の高い上位のものを精霊と呼び、さらにそれを蒸留器で単式蒸留したものが妖霊となる。

妖霊は火と風から作られた超存在で、人よりも優れた知力、体力、魔力を持ち、真名を知る主人に忠実に従う、目に見えず触れえない超常の存在だ。

中でもリウマチを防ぐ杜松の実を加えて蒸留した精霊は、水の元素を一切含まないため、特に乾いた妖霊と呼ばれる。

パチュリーはその乾いた乾いた妖霊を封じたフラスコを手に取り、ランプの炎に透かして中身を確かめる。

「過去、多くの錬金術師がこぞって王侯貴族の氣を引くために液体の宝石を創り上げたけれど。ついに錬金術の真髄に辿りついて大エリクシルの醸造に成功したという話は聞かないわね」

「生命の精髓。……それで賢者の石か」

「ええ」

大エリクシルを原型とする賢者の石は、一説では血のように紅く、液体とも宝石ともつかぬ輝きをしていたとされる。長き研鑽の末、まさにそれを手にした知識の魔女はくすりと微笑み、枸橼ひと袋を加えてテールの上に揃った材料で、手際よく調合を進めてゆく。

まずは洋銀筒に砕いた氷を八分目。そこに忠実な乾いた妖霊10gと、薫り高き董のエリクシル33g、新鮮な搾りたての枸橼のエキス33gを加えて封じ込め、蓋を閉じて十五回の攪拌。

ひと振りと共に洋銀筒の表面に霜が降る。銀の上に冷えた雪の色合いが広がると共に、元来は別の要素が、溶け合い均一となって妖霊を基本に結びついてゆく。

19世紀に主流となった、氷を用いる冷製混合。百年を生きる知識の魔女には最も親しみのある調合だ。

「……これで完成」

小悪魔に用意させたグラスに中身を注ぎ、これで全ての工程が完了。出来上がったのは、馥郁たる董スミシの香りを乗せた薄紫色の鶏尾酒シロトリ・カクテルだった。

黎明の空を封じこめたような、かぎりなく薄い雪の灰空に、わずかな赤と鮮やかな青を垂らした色合いが、グラスの中に閉じ込められる。

「青い月。月齢と日齢の差が生む魔法ね。レミイは紅い月を好むけれど、これは蒼色の月。中でも年に二度の青い月が観測できるのは、百年に一度起こるかどうかの天文的事象なのよ。今年の一月末に、ちょうどその月が昇るわ」

日と月の要素を絶妙に配合し、小さなガラスの器の中にそれを再現してみせたパチュリーの手元から、レミリアはカクテル・グラスを摘み、掲げるようにして中を透かす。

ゆっくりと動く蒼紫の液体の中で、氷の細片が薄い輝きを放っていた。それに魅入る吸血鬼に、七耀の魔女は唇の端をもたげて続ける。

「百年に一度の滅多コトバ・コトバにない出来事。これがレミイには相応しい月じゃないかしら」

「……へえ。それで、パチェはこれを飲ませて私の口も一緒に封じるつもりかい？」

董グイオレフトは神経毒だ。人の手の入った山野に群生する青と紫の花が煮詰められた精髓エリクセルは、その甘く豊かな香りとは裏腹に、わずか1滴ドロップで人を死に至らしめる。

まして動かない大図書館の手で合成され、グラスに封じられた『夜明けの空』の複合精霊……甘美ながらも鋭く強靱な頹廢レイズルの酒精は、不死身の吸血鬼にすら害を及ぼしうるだろう。

「ええ。吸血鬼も魔女も、殺しうるのは毒ではなくて退屈、でしょう？ レミイ」

「——違いはない」
観念したように笑みを覗かせ、レミリアは掴んだグ

ラスをくい、と傾けた。白い喉が、こくりこくりと動いてグラスの中の黎明の空を飲み込んでゆく。

空になったグラスを放り、レミリアは軽く肩をすくめてみせた。

「やれやれだ。魔女どのはお疲れのようだし、私も夜寝でもするとしようかね」

「ええ、お休みなさい、レミイ」

「……ああ、おやすみだ、魔女どの」

すっかり青い月の毒にやられたな、などとわざとらしく欠伸まで挟み、永遠に幼き紅き吸血鬼は無数の蝙蝠になって姿を消す。

我儘な館の主からようやく解放され、ふうと大きくため息をついて、パチュリーは倒れ込むように椅子に背中を預けた。

「お疲れ様です、パチュリー様」

「……弁えない友人を持つと苦勞するわ」

ほんの1時間ばかりのやり取りでやけに憔悴した様子のパチュリーを案ずるように、小悪魔は淹れたての

珈琲のお代りを差し出した。

「でも、レミリア様、あんなに粘ってたのに、最後はやけにあっさりお帰りでしたね？」

銀の盆を胸に抱えて首を捻る小悪魔に、パチュリーはああ、と頷いて、

「青い月は薔薇の品名でもあるし、瑠璃茉莉の別名でもあるけれど、他にもう一つ意味があるわ。知っているかしら？」

問われ、首を左右に振る小悪魔。

「そう。なら覚えておきなさい。」

——『出来ない相談』と言うのよ」

そう言つて、動かない大図書館はどこかつまらなそうに火傷するように熱い珈琲をひと口啜ると、戻ってきた静寂の中で読書を再開した。

フランケンシュタイン・ネクロニカ

初出:コミックマーケット 81(2011/12/30)

かなりダークでグロテスクな要素を含む一作。登場メンバーの倫理観が普段よりも下に振り切れている印象です。ちょっと驚いたという感想もいただき、もう少し注意文などをしっかり作ればよかったかなと思ったりしました。

作中の青娥さんの言動は岡田芽武先生の「O・BO・RO」が元ネタです。芳香は数百年を過ぎたと思しきキョンシーでありながらもまだに手足が強張ったままで、加えて一人称が我々だったり、修復のために多くのパーツが交換され、元の死体とは別物になってしまっているのではないかと、という疑問があり、いずれもっと掘り下げてみたい部分でもあります。

魔女と夜貴の同形三複

初出:紅のひろば 3(2010/1/17)

「月は紅いチーズで出来ている」収録

パチュリーさんがレミリアにカクテルを作るだけのお話ですが、とりあえずひたすらに言葉遊びに終始した一作。個人的お気に入りのベスト3。酒豪を「左利き」からシニストラとルビを振ったところは自分の中では至高に近い表現だと思うんですが捻りすぎて誰にも共感していただけず。スピリットからジンの流れも気に入っています。

ちょうどこの年は一年に2回のブルームーンが起ころという年であり、そこから同名のカクテルに話を派生させました。作中でパチュリーは「できない相談」の意味であると語っておりますが、もう一つ意味があり、そちらは「完全なる愛」です。

カマリリヤの最後の血族

群青と橙を混ぜ合わせた空を、ごう、と硬く鋭い風が吹き抜けてゆく。

眼下一面に広がる草原には、白銀の新雪が深く積もり、あらゆる生命の気配の耐えた冬寂の装いを見せていた。

遠く見える山の端はまだ薄明るく、なお残る陽光の残滓を漂わせている。夜と言うにはまだ早い時刻。吸血鬼が日傘もなく空を行くには、少々危険な時間帯だ。「ねえ、どこまで行くの、お姉さま？」

「……そうね、この辺りでいいわ」

頬にちりちりとむず痒い陽の名残りを感じながら、レミリアは妹のフランドールと共に、雪の上で翼を緩める。

「……ふあ。まだ眠いわ」

細く閉じた目元を擦りながら、処女雪の上にとすと脚を下ろすフランドール。とくに最近是比较的規則正しい睡眠をとっているフランには、まだこの時間は早起きと言ってよい時刻だろう。

雪深き^{ガメリオン}一月末のこの日、二人の吸血鬼姉妹は、まだ日の沈まない時刻に早々とベッドを出た。

パチュリーの予言に拠れば、今日の日没とともに百年に一度の蒼い月が見られるはずだという。その青き月の月光浴という名目で、レミリアはフランを屋敷から連れ出していた。

紺色の真新しい夜空のなか、姉妹の吐息は美しく白い。さく、さく、とほんのわずかに音を立てる真白い雪は、まるで一面の粉砂糖のよう。

猫を模した帽子にマフラー、手袋、分厚いコート、さらには膝下までの雪割りブーツ。万全の冬支度の装いで、吸血鬼姉妹はそろってぬいぐるみのような有様だ。これらの衣装は誰であろうメイド長自らの手によるもので、揃えるためにあちこちを奔走したらしい。

仕度を終えたときに咲夜がやけに満足げな表情だったのを思い出し、レミリアは白い息とともに独白する。

「……あれで咲夜も凝り性だからね」

「なにか言ったかしら、お姉さま？」

「いいえ、なんでもないわよフラン」

振り返るフランドールに答えて、レミリアは背中の中の羽根を折り畳む。

澄んだ空気の夕空には、けれど細かな霧の結晶が散っていて、羽先もすっかり冷たくなっていた。二重になっているコートの合わせ目に羽根をしまい込み、レミリアは雪の上に歩みを進める。

分厚い防寒着は同時に、まだ残る陽光の残滓から姉妹を守る意味もあった。

日傘一つで防げるような弱点ではあるものの、従者を伴わない外出にメイド長はあまり良い顔をしない。まして姉妹二人だけの散歩とあっては、咲夜の気の揉みようはひとしおだった。

「……まさか、ついて来てたりしないだろうね」

嫌な想像を自嘲と共に振り払い、レミリアは先を行くフランドールに声を掛ける。

「素敵な夜ね」

「でもこんな厚着じゃ、月光浴なんて気分じゃないわ、お姉さま。なんだか暑っ苦しいし、それに邪魔よ」

言うなりフランは邪魔そうに首元を埋めるマフラーを引っぺがし、そこいらに放り捨てると、続けて躊躇なく伸ばした爪で手袋も千切り取ってしまう。

「はあ……」

清々したとばかりに冬の寒さの中に大きく伸びをするフランドール。苦笑しつつレミリアはそんな妹の無作法をたしなめる。

「はしたないわ。風邪を引くわよ、フラン」

「あら。地下牢はもつともつと寒かったもの。こんなものぜんぜん平気よ」

「そんなものに閉じ込めた覚えはないわ」

「ひどいわ、自分のしたことまで忘れちゃったの？ お姉様」

くすくすと笑い、フランドールは猫模様の帽子まで取り払うと、片結わえの金髪を夜闇の中に躍らせた。

薄暮の空にきらきらと輝く美しい髪も、小さな背中でしたらりしやらりと打ち鳴らされる骨組みだけの畸形の翼と、それを彩る七色の宝石も。

その心の容を^{かたち}体現したように歪な姿形は、悪魔の妹に相応しく、姉のものとはまるで違っている。

——気のふれた妹。

それが、世の悪魔^{フランドール・スカレーア}の妹への評価だ。

その感情に好悪は定まらず、是非の境も曖昧だ。大好きと微笑んだ唇で妖精メイドの眼窩をえぐり、つまらないと引き裂いた血塗れの指先で、いとおしげに怯える獲物を撫で、幼い愛を示す。

多くのものが扱いかね、畏れ、恐れ、怖れて遠ざける、それがレミリアのたった一人の妹だった。

ゆるりと風が吹き、空に闇が満ちてゆく。

わずかにほの白い西の端とは反対側、東の深い雲間から、静かに美しい深淵の月が顔を覗かせる。

「見てみなさいフラン。百年に一度、たかの青い月よ」
年長者の貫録を見せつつもそちらを振り向き、厳かに告げるレミリア。

だが、

「……でもお姉さま、全然青くないわ」

「本当ね」

フランの指摘通り、そこに姿を現した月は確かに真円こそ描いていたが、パチュリーの語ったような蒼い月とはまるで違う、いつも通りの普通の満月だ。

期待外れの月に、フランドールが口を尖らせる。

「ねえお姉さま、これじゃつまらないわ。ぜんぜんいつも通りよ？」

「——パチェめ、適当なことを言ったな」

舌打ちをして不快な気分を顕わにするレミリアだが、それで月が色を変える様子もない。

フランドールはすでに百年に一度の青い月には興味を失っているようだった。

「……蒼い月だっていうから楽しみにしてたのに。あ

「あ。やっぱり駄目よお姉さま。こんなのお屋敷にいるのと同じ。とっても退屈だわ」

そう言うと、フランはコートの胸元を止めるボタンを引きちぎり、粉々にして雪の上に放り捨てた。藍の空の下に、透けるような金髪がふわりと夜気を囁んで膨らみ、縦に開いた紅い魔眼が輝きを増す。

そのまま、フランドールは夜空に浮かぶ銀盤へと白く細い指先をすうと伸ばしてゆく。小さな手のひらは何かをつかむように拡がり、紅い爪が何かを握りしめるように折り重なって――

「ぱちん、と小さな音が響いた。

「フラン」

耳元で名を呼ばれた妹がきょとんと眼を瞬かせる。小さく握りしめられた妹の手のひらから、レミリアの右腕だったものが紅い霧になって散ってゆく。

肘から先を『破壊』された自身の腕にわずかだけ眉を歪め――レミリアはフランドールの鼻先を翼の先でくすぐった。

「ふあ？」

「いけない子ねフラン。そんなはしたないことは、してはいけないと教えたでしょう？」

「……ずるいわ、お姉さま」

口を尖らせて、再度手のひらを握ろうとする妹の腕を、レミリアはそつと翼で押さえ込む。

「駄目よ。フラン。あの月は私のモノだから、お前には壊させないわ」

煌々と輝く、天頂の月にたどり着いた吸血鬼は、この世でレミリア・スカーレットただ一人。

だから、こうして夜を照らすあの月は、そこに足跡を刻んだ、たった一人の吸血鬼の所有物なのだ――と。傲岸に尊大にレミリアは微笑み、妹の狂気を諭す。

「どうしても欲しいなら、フランも月まで行つて来ればいいのよ」

「……もう！ 本当にお姉さまって欲張りね。なんでも独り占めしてばかり。咲夜も、おやつも、玩具も、お屋敷も、お友達も！ 昔っから、私にはなんにも分

けてくれないんだから！」

「そうね。フランが一人前のレディになったら、考えてあげるわ」

「……むー。私、とってもお行儀のいい子よ？」

ぷくう、と頬を膨らませ、心外だと抗議するフラン。

肘から下を消失したレミリアの右腕は、なおもその断面からじわじわと白い灰に変わり、夜の風に静かに溶け崩れてゆく。

月下にあつてすら再生も効かないまでに、存在根源から徹底的に姉の腕を吹き飛ばしておきながら。フランはそんなことに微塵も構う様子をみせない。

なぜ咎められたのか、その理由もわからないまま、悪魔の妹は頑固な姉に無邪気な反抗を続けていた。

「ねえ、聞いているのお姉さまったら！ 私はどう立派なレディなのよ？」

「……そうね」

永遠に幼き紅き月——そう呼ばれるレミリアだが、妹のフランドールはそれより5歳幼い永遠だ。

幼いまま不死となったフランの狂気は、おそらく癒えることはない。ツエベシユの末裔の妹は、壊れた心から産声を上げている。いかな不死の吸血鬼の再生力と言えど、その「はじまり」から壊れていたものを治すことはないのだ。

そして、レミリアよりも幼いままの吸血鬼フランドールが、自身の歪みを理解することは生涯無いだろう。だが、と。レミリアは思う。

確かに妹を扱いかねているものは多い。レミリア自身、なかば幽閉のように扱っていた時期もある。けれど、月下にあつて、理性的な振る舞いをする吸血鬼は、果たして化物と呼べるモノなのだろうか、と。

幻想郷において、吸血鬼はレミリアとフランドール、たった二人の紅の姉妹だけ。他に比べるものではなく、ならば本当に狂っているのはどちらだろう。

ふたりきりの血族で、どちらが正しい吸血鬼の在り方なのか、それを区別する方法は、どこにもない。

だからレミリアは月を好んだ。

人妖揃って狂気を許される、月狂条例のもとで

ルナシイ・アクト1845

ならば、正気と狂気の境目すら曖昧に霞む。月下にあつてこそ、悪魔の妹と呼ばれるフランドールは、十三の夜の血族が開く夜会への参入を許されるのだ。

……もつとも、そんな催しはここ数百年、一度も開かれては居ない。招くべき相手も、集うべき場所も、もはや東の果てのこの地にはない。

レミリア・スカーレットは、誰一人として学ぶ相手を持たない吸血鬼絶対の強者として幻想郷にやってきた。永遠に永き夜の中で、たった二人だけの姉妹、たった二人だけの血族フランの、悪魔の妹のたった一人の姉として。

だから。たとえその答えなど分からなくとも、運命の末など見えなくとも。姉として、幻想郷の吸血鬼のただ一人の先達として。不出来な妹を導き、共に有り、この血を繋いでゆかねばならない。

それが紅魔館の主、スカーレット 紅の長姉の務めなのだ。

「……辛いところね」

胸に残る小さな棘とともに、レミリアはひとり独白

した。苦い呟きは、白い結晶へと変わってすぐに姿を消す。

「——お姉さま。ねえお姉さま、あれは何？」

いつの間か、フランは空を仰いでいた。裸の指先が示す先、山の端がわずかに途切れる地平線。そこから、幾本もの青白い光の柱が天に向けて立ち上がっている。まるで銀河を貫く地上の輝きが、夜闇を裂いて空へと昇っていくかのよう。

「天気輪の柱ね」

光柱ライトピラー。夜空に舞う氷の結晶に、月や太陽、あるいは街の明かりが反射して生まれる現象だ。

「……すてきね」

天を衝く光柱のきらめく空の下。

笑顔を覗かせたフランドールは弾かれたようにレミリアの傍を離れ、雪原を走り出す。

「ねえ、お姉さま！ 蒼い月は見れなかったけど、でも、冬って素敵ね。こんなのはじめてよ、お姉さま！」
溶けていれば吸血鬼の身体を碎き押し流す流水も、

白く凍っていれば害を成さない。静かに舞い散る雪の下、真白い雪原をくるくると舞う妹を見、レミリアは静かに目を細めた。

が、そんな風に達観した風を装っていられたのも束の間。ぱしん、と飛来した雪の塊がレミリアの顔にぶつかって散る。

「……フラン？」

「ほら、とつても冷たいわ！ お姉さま！」

怒気とともに目を見開いたレミリアの顔に、さらに誘導弾の追撃が命中。ひりひりと冷たさに痛む顔を、レミリアは怒りを堪えて拭う。

「あははっ、お姉さまったら弱いよね！」

「……フラン、待ちなさいっ」

「嫌よっ」

べー、と舌を出して逃げる妹に、レミリアはとうとう500歳の年長者の貫録もかなぐり捨てて、足元の雪を掴んだ。白い塊を渾身の力で握り込み、走る妹めがけて全力の一投を投げつける。

ぎゅうん、と夜を割いて加速する白の弾幕が、放たれた神の槍のごとく、ずがんと近くの枯れ木を穿つ。

「どこ狙ってるのかしら、お姉さま？」

的外れの一撃を見てけけらと笑うフランだが、その直後。揺れた梢からずるりと滑った雪の塊が、どこかと悪魔の妹を押し潰していた。

雪に埋もれた下から羽根を突き上げ、フランは白くなった金髪をぶるぶると左右に振る。

「ぶあっ!？」

「ふふ。運命どおりね」

「もおっ、ただの偶然のくせにつ。いいわ、今度こそちゃんと当ててあげるんだから！」

「出来るかしら？ いいことフラン、姉より優れた妹なんかいらないのよ」

足元の雪を蹴散らし、飛び交う雪玉の応酬は、そのまましばし続いた。やがて弾幕には接近戦も混じり、二人は転がり、絡み合い、もつれるように雪原を駆け回る。

互いの繰り出す弾幕の中、いつしか姉妹の顔は、見紛う程に同じ笑顔へと変わってゆく。

……そして、何度目かに撃ち合った雪玉が、見事にお互いの残機を、ほとんど同時にゼロにして。

レミリアとフランは、そのまま仰向けに、ぼすんと乱れた雪の上に寝転がる。吐き出す白い息は、まるで蒸気機関の吐き出す汽笛のよう。

「……っ、私の、勝ち、ねっ」

「ちがうわ。コンティニュー、するのは、お姉さまの、ほうよっ」

二人とも、すっかり息も荒く、頬も赤い。見上げれば月はいつしか天頂近くにあり、その円らな輝きで白い雪原をきらきらと照らしていた。

焼けた鉄のように火照った身体を、寝そべる雪の冷たさがゆっくりと醒ましてゆく。

「くしゅっ」

可愛らしいくしゃみの音に、レミリアは身を起こした。元気にはしゃいでいたフランドールだが、手袋も

帽子もマフラーも放り出し、コート一枚で走りまわって、さすがに寒さを覚えはじめていたらしい。

ぶる、と小さな身体を震わせ、手のひらに白い息を吐きかける妹の元に、レミリアは歩み寄り、手を取ってその小さな身体を起した。

「フラン、いらっしやい」

「？」

首をかしげる妹のコートについた雪を払い、多少強引に背中中の羽根を押し込んで、拾っておいた帽子をかぶせ、残っていた自分の手袋の片方を付けさせる。

「ふわ？」

目深にかぶされた帽子のせいで目の前が見えなくなっているフランの首元に、レミリアは自分のマフラーの端を巻き、身体を寄せた。

「ほら、手が凍えてしまいうわ」

左手に繋いだフランの右手を、そのまま自分のポケットの中へと招く。

「あったかい……」

背中の羽根を上機嫌に揺らし、手袋の手を頬に押し付けて、ふにゃあ、と表情を蕩けさせる妹に、レミリアは己の胸奥で高鳴る鼓動を感じる。

吸血鬼にとつてなによりも優先すべき己の血脈、それが脈打つ鼓動は、何をおいても信じるべきものだ。

蒼い月がなくとも、月がチーズで出来ていても。今はこうすべきだと、レミリアは己の『血』で確信する。

「さあ、そろそろ帰りましょうフラン。咲夜がおやつを用意して待ってくれているはずよ」

「本当!? 私、チーズケーキがいいな。真つ赤な^{ブラズケーキ}緋^{フラン}母のジャムが乗ってて、きらきらの月阿片^{ムーンシェイプドワム}もたくさん振って、まるごと全部食べるの!」

手に入らないのだからと、簡単に月を壊そうとした狂気も、まるで嘘か幻のよう。あどけない少女のように笑うフランに、レミリアは少々呆れてしまう。

「……やれやれ。欲張りね、フランは」

同じマフラーを巻きながらでは、二人が並んで羽根を動かすには少々窮屈だった。

だから、レミリアは右の羽根だけを広げ、フランの羽ばたく呼吸を見計らって翼を動かす。連なる一対の羽根で、寄り添うようにして空を飛べるように。

しんと冷えた夜の空は心地よく、雪原を眼下に、ひらひらと舞う風花は月明かりを点して淡く輝く。

「あ、でも……お姉さま?」

白い雪片を追いかけて摘もうとしてはしゃいでいたフランだったが、ふと声を落とし、姉に着けてもらった手袋の指をぐつぱと握りしめて、不安げな表情を覗かせる。

「手袋、破っちゃったけど——咲夜、怒るかな?」

「大丈夫よ。一緒に謝ってあげるわ」

きつとそれが、姉のつとめでもあるのだろう。

そう思い、500年の生涯の中、たった5年分だけの年長者の背伸びをして、レミリアはフランにそう告げた。

「……すると。」

「お姉さま、だいすきっ」

ばあ、と顔を輝かせ、フランはぎゅつ、とレミリアの身体に抱きついてきた。寄せられた妹の顔が、驚く暇もないくらいに近づいてくる。

「……………!?」

咄嗟の叫び声は、小さく寄せられた唇で途切れ。

寄り添う身体のコートのポケットの中で、重なり合う指先が絡み合った。

「……………っ、」

壊された腕が引きつり、翼の動きもぎこちなく乱れて、ふらりと姿勢が傾く。ぎゅう、と、まるで大事なものを押し包むように力を込めて抱きついてくる妹の体がレミリアの自由を奪い、崩れた体勢のままに、二人は宙を墜ちていた。

ざん、と雲を割り、風を裂き、白い霧を線のように後に引いて、はるか上空から地面の上まではわずか数秒のこと。どさ、と雪の上にぶつかった衝撃よりも、さらに大きな驚愕で、レミリアは目を見開いていた。

「……フラン」

「えへへ」

ちろ、と唇に残る唾液の湿り気に言葉を飲み込む。声を上げる余裕もなく。仰向けになった姉の上に、馬乗りに押し掛かったフランドールが、再度小さな唇を重ねてくる。

「……ん、っ」

唇に触れる、とろけるような熱と柔らかさに、くらり、とレミリアの頭が揺れた瞬間。突き立てられた妹の牙が、鋭い痛みと共にぶつりと皮膚を噛み切っていた。

熱を持って甘く疼く唇を濡らす血を、熱くぬめる妹の小さな舌先が、やけに巧みに蠢いて舐めとってゆく。恋する乙女のように頬を染めて、吸血鬼の接吻に陶然となっている妹を。

レミリアは、忘我のままに受け入れていた。

「うふふ。上手になったでしょう？ いっぱい練習したのよ、お姉さま？」

レミリアの血で紅に染めた唇を三日月のようにして、

悪戯っぽく笑うフランドール。

「練習って、相手は誰？」

「秘密よ、お姉さま」

微笑む妹に、レミリアは頭を抱えたくなる。片腕がなく、右手も塞がっているの、できる腕は余っていないかったが。

「……ああ」

だから代わりに、レミリアは呻く。

吸血鬼の血を吸いたがる吸血鬼なんて――

「やっぱ、お前は気が触れてるのね」

「ええ。もちろんよ。お姉さま」

とびぎりの笑顔で身を寄せてくるフランドールに、

もはやレミリアは返す言葉もない。

空には相変わらず、いつもと同じ月が輝き、雪の上に重なる紅の姉妹を照らしていた。

カマリリヤの最後の血族

初出:紅のひろば 3(2010/1/17)

「月は紅いチーズで出来ている」収録

フランちゃんの狂気ってなんだろうなという模索と、吸血鬼異変を経て、幻想郷には他の吸血鬼が激減した中で、レミリアは狂気の妹の姉としてどうあるべきかと考えているのかな……みたいなこと思案してできたお話です。

タイトルの「カマリリヤ」は名作TRPG、ヴァンパイア：ザ・マスカレードに登場する吸血鬼の血族の「派閥」を意味する単語から。

MOON CHILD

雲に覆われ星ひとつない空に、欠けた三日月がぼんやりと霞む。

霧の湖畔に佇む紅い悪魔の館には、今宵も怪異が群れていた。花壇を照らしカボチャ悪霊の青白い火が舞い、尖塔の下で蝙蝠たちが鳴き喚く。廊下にはお化けシートが身を翻し、広間で執事服に身を整えたゾンビたち片目を垂らしながら優雅に一礼。

食堂では屋敷しもべ妖精と妖精メイドたちが給仕を務め、メイド長十六夜咲夜が腕を振るったディナーが食卓を彩る。今宵の宴は館の主の故郷を思わせるワラキア料理だ。

「……ふん」

というのに、永遠に紅き幼き月、レミリア・スカレットの表情は晴れない。食べこぼしのブラッディソ

ースに汚れたエプロンを外し、くしゃりと握りしめる。塵も残さず灰滅するエプロンを尻目に、レミリアは視線でメイド長に食後のお茶を要求した。わずかの間も置かず、卓上にはブラッディフレーザーのミルクティが並ぶ。

紅の雫が広がる紅茶を優雅に傾けながら、幼き吸血鬼は小さく口を尖らせた。

「フランもパチェも、いったい何をしてるのかしらね」不機嫌なレミリアの視線の先、バロックの装飾も美しき食堂の卓には席が三つ。館の主であるレミリアと、その妹フランドル、そして顧問錬金術師たるパチュリー・ノーレッジのためのものだ。

が、テーブルの席は、主のひとつを除いてどちらも空席だった。

「妹様はまだお休みのようです」

「……また昼過ぎまで起きてたのね」

四百数十年ぶりに外出許可を出したというのに、悪魔の妹の生活はむしろ不規則になるばかり。不機嫌に

ゆがめた口元に牙を覗かせて、レミリアはテーブルに肘をつく。

「パチエもこのところずっと顔を見せないし。最後に顔を合わせたのって、万魔節マンマノツキの時くらいじゃないかしら」

「そう言えばそうですね？」

応じたのはテーブルの反対側に控える門番の紅美鈴だった。

「こしばらく、図書館への侵入者もなくて、だいぶ仕事に暇なんですよ」

「……ま、門番が暇なのはいいことね」

言外に釘を刺しながら、レミリアは隣に控えるメイド長のほうを見た。

「咲夜、何か聞いていないの？」

「いえ。……すみません。解りかねます。お食事はお運びしているのですが」

館のことならばなんだって把握している完璧で瀟洒な従者までがそう答えたもので、皆の視線は自然とそ

の傍に控えていた司書の小悪魔へと向けられた。が、彼女も慌てて手を振り、

「その、私も工房アトリエの中までは入らせては頂いてないんです。パチュリー様は新しい錬金術の儀式の用意をされていて、それで随分根を詰めてらっしゃるようでしたけど……」

「……真理の探究は結構なことだけど、それでもう何ヶ月になるのよ？」

折り数える指が片手で足りなくなったところで、レミリアは呆れと共に頬杖をついた。

紅茶をティースプーンでくるくるとかき回し、もう一度吐息。悪魔の館の当主にとって、思うままにならない住人達は常より悩みの種である。

「またぞろ、本に埋まったまま一緒に黴でも生えて動けなくなってるんじゃないでしょうね」

「あれは大変でしたねえ、掘り出すの……」

しみじみと美鈴が頷く。

『動かない大図書館』パチュリー・ノーレッジ。紅

魔館の地下大図書館を根城とする七耀の魔法使いは、幻想郷きつての愛書狂である。彼女がいったん読書に夢中になると寝食を忘れて没頭するのは今に始まったことでもないのだが、半年近く図書館の奥に篋りっぱなしというのはさすがに何度も前例のあることではない。

先頃、大図書館は河童の協力により長年の懸案だった鑑と埃の環境改善に成功していた。万年喘息の苦痛からも解放され、本の虫たる彼女にはまさに夢のような環境であろうが――

「咲夜。あとで様子を見に行きなさい。手遅れになってからじゃ面倒よ」

「判りました」

表情を崩さず応える咲夜に、ひとまず満足してレミリアが紅茶を口に含んだ時――

「ぎい、と正面のドアが押しあけられ、噂の魔法使いが姿を見せる。」

足元までの長いローブにガウンを羽織り、月の衣装

をあしらったモブキャップ。

パチュリーのいつもの姿は、けれど一つだけいつもと違っていた。

「久しぶりね、レミイ」

ゆったりとしたローブの上からものはつきりとわかるほど、大きく膨らんだおなかを抱えて。いつになく穏やかな表情のパチュリーに、レミリアが啞然として口を開け、こぼれた紅茶が紅き吸血鬼の胸元を汚す。

「……………」

「……………え？」

「……はい？」

「ば、ぱちゅりーさま……!?」

呆然と瞬きをする皆の前で、動かない大図書館。知識と日陰の少女。パチュリー・ノーレッジは、いとおしげに大きなおなかを撫でてみせた。



豚^{ブタ}の香辛^{カラ}料^{リョウ}グリル、ロー^{ロー}ル^ルキャベツのサワークリー
ム煮、根菜^{コンサイ}の辛煮^{シンシ}込みスー^{スー}プ。レミリアと大差ない小
食^{コク}のはずのパチュリーは、旺盛な食欲でテーブルの上
の料理^{リョウリ}を片付けてゆく。付け合わせの胡瓜^{キュウリ}の
酢漬^{スサヅ}けサラダ^{サラダ}を口に運び、その味にふんわりと表情を
緩める様子は、普段の陰気で無愛想な彼女からは想像
もつかないもので。

「美味しい。……咲夜、また腕を上げたわね」

「あ、はい、いえ。その」

一人、遅いディナーに舌鼓を打つパチュリーを遠巻
きにして、レミリア達は自然とテーブルの端に集まっ
ていた。

無論、皆の視線はまあるく膨らんだパチュリーのお
腹に釘付けである。

「え、……あれ？ え？ パチェ？」

「お、お嬢様、冷静にっ」

混乱の極みにあるレミリアにすかさず咲夜がフォロ

ーを入れようとするが、パーフェクトメイドも今回ば
かりは動揺を隠せない。

「ねえ咲夜。もう少しお代わりしてもいいかしら？」

「あ、は、はいっ、ただいま!!」

時を停めるのも忘れて、メイド長は新人のように厨
房へと走り、料理を載せた台車を押して駆け戻ってく
る。そんな彼女にパチュリーはねぎらいの声をかけた。

「ごめんなさい、遅れてきたくせに我儘ばかりで」

「い、いえ……」

まるで聖母のごとく、後光を背負って微笑むパチュ
リー慈愛の笑顔。その隣で咲夜はなんとか平静を取り
繕おうとするが、配膳中に3回も手を滑らせかける有
様だった。

「ありがとう。いつも大変ね、貴方も」

「ず、随分お召し上がりになるのですね？」

劳いに応えつつ、咲夜がトウモロコシ粉粥^{コシコ}を取り分
けながら訊ねる。暗に、そのおなかへ食べすぎが原因
ですかそうですよね良くあるオチですもんね!? と

聞いているのだ。

(ナイスよ咲夜!!)

(そ、そうですか? ずいぶん露骨な気が……)

ガッツポーズのお嬢様の横で、本音を漏らした美鈴のおでこに、帽子の上からすこんとナイフが突き刺さる。と苦悶の呻きとともに額を押さえてしゃがみこむ美鈴をよそに、パチュリーは穏やかに微笑みを浮かべ、愛おしげにそつと大きなおなかを撫でた。

「ふふ、そうね。この子の分までちゃんと栄養を取らないと、ね」

びき。

痛いほどの、痛すぎるほどの沈黙が食堂を満たす。

せめて聞き間違いであればと願う皆の胸中を知ってか知らずか、パチュリーがナイフとフォークを動かす音だけが聞こえる。

「……ど」

はじめに声を発したのは、やはり当主のレミリアだった。

「ど、どうしよう、どうしよう咲夜っ!?!」

「お、落ち着いてくださいお嬢様っ」

百年來の友人の思わぬ姿に、紅いカリスマも雲散霧消。やってきた咲夜に縋り付き、レミリアは取り乱した様子で声を震わせる。

「だって、だってパチュエが……!」

「そ、その。お気持ちはお察しますが……そうすわお嬢様。パチュリー様のご友人として一言、身を案じるのは決して不自然ではないかと思えますが!」

名案だとばかりに頷く一同。咲夜のその発言は、いっそう清々しいほどに責任丸投げだったのだが――紅魔館の主としてこの場を収められるのは自分しかないと思ったか、レミリアは蒼白な顔に決意の表情を浮かべ、パチュリーのほうへと歩きだす。

テーブルまで近づいたレミリアは、錆びついたミシンのように、ぎぎぎ、とこわばった動きでパチュリー

の隣へと腰をおろした。

「こ、こんばんわパチエ」

「……あら。なあと、今更？」

「今日も、い、いい天気ね」

「……そうかしら？」

ちらりと魔女が視線を窓に向ければ、空を覆う雲は分厚さを増し、月のひとつどころか星明かりすら見えない。

「きゅ、吸血鬼的にはよ」

強引に誤魔化しつつ、レミリアは自分のティーカップを手を取った。かちやかちやと明らかに動揺が現れた指先が、冷めた紅茶の雫をテーブルに飛ばす。

（お嬢様、頑張ってくださいっ）

従者一同の無言の視線を背中に受け、レミリアは一度大きく息を吸って、視線を魔女の大きなおなかに向け――

「それで、その……誰にやられたの？」

……しばし、間があった。

緊張のあまり最悪の地雷を踏み抜いた最悪の一言を放ってしまったレミリアに、やっちゃったー、という空気で一同が頭を抱える。永き夜を支配する悪魔の王デーモンロードといえども、永遠に幼き吸血鬼には難題であったというのだろうか。そんな中。

「厭ね、そんなこと今更言わせる気なの？ レミイ」

ほんのわずか頬を赤くし、くす、と口元を緩めて。パチュリーは慈母のいつくしみを見せながらローブに包まれたおなかを撫でる。

もはや食堂に満ちた空気に耐えきれず、レミリアは涙目で皆のほうを振り返る。

（さ、咲夜あゝっ!?）

（お、お嬢様、ファイトです!! ここにくじけちゃ駄目ですよ!! ほら美鈴、あなたも応援しなさいっ）
（ふあ、ファイトですお嬢様っ）

無責任に応援する従者達の期待を一身に背負いなが

ら、レミリアは再度、パチュリーに話しかける。

「で、でも、大事なことでしょう?」

「そうね……大事よね」

ふう、と憂いを帯びた魔女の視線が、まるく膨らんだおなかへと落ちる。神秘のゆりかごに抱かれた小さな生命に語りかけるように、魔女の手がゆつくりと優しくそこに触れた。

(さ、さくやあゝゝッ!?)

(お嬢様っ!! 負けないでください!! 咲夜は信じています!)

背中越しのメイド長の応援に退路を断たれ、もはや涙をにじませながら、レミリアはそれでも必死に夜闇を統べる吸血鬼の貫録を保ちつつ、椅子に腰掛けなおし――

「し、式はいつかしら?」

「……式?」

料理を口に運びながら瞬きをするパチュリーに、レミリアは頬を赤くしながらそっぽを向きつつ、

「え、ええ。必要でしょうか? その、パチェだってそのほうが」

「……そうね。式か。ふふ。きちんと出来ればいいわね。……この子のためにも」

「そ、そう……」

遠い目でそつとお腹をさすり、微笑むパチュリーに、とうとう五百年を生きる吸血鬼も音を上げた。転げ落ちるようにして椅子から降り、はいずるように従者達のもとへ戻ってゆく。

「ううう……さくや、さくやあゝ……がんばったもん、私ががんばったもんっ……」

「ああ、お嬢様っ……!! ご立派でした……!」

泣き崩れるレミリアを必死と抱きしめるメイド長に、美鈴と小悪魔もそつと涙をぬぐう。

敗れはしたが、紅魔館の主たる務めを立派に果たした幼く紅い吸血鬼に、忠誠を新たにする従者3人。

「と、ともかく、パツチェさんのおなかに赤ちゃんがいるのは……」

「間違いないみたいだね……」

咲夜と美鈴は小声でそう囁き交わす。気のせいや勘違いで済ませることはできそうもなかった。そうであればどれほど良かったか。

と、なれば。皆の視線は満場一致で一人へと向けられる。

「……………」

「ち、ちがいますよ!? 何で私のほう見るんですか皆さんっ!?」

いきなり容疑者筆頭候補にさせられた小悪魔が叫ぶが、その程度で追及の手が緩もうはずもない。

「だって」

「ねえ?」

「淫魔ですし」

「ひ、酷い濡れ衣っ!? 違いますよ! そもそもなんかいつのまにか定説っぽくなっちゃってますけど、わたし夜魔^{サキマス}なんかじゃありませんし!! 仮にもしそうだったとしても、女の子にそういうことするのは

インキユバス

雄のほうですし! 第一、そういって食事なん

ですからね! 妊娠なんかさせませんよ!? 知らないでしょうけど悪魔の胤^{コノ}ってすつごく着床しにくいんですから!? 魔界の少子化問題とかもう千年前から喫緊の課題なんですからね!!」

あらん限りの声を張り上げて力説する小悪魔に、まだ疑念は残しながらも、レミリアは紅くなった目元を擦りながら口をとがらせる。

「…………じゃあ、誰なのよ、相手は」

「それは…………」

小悪魔は、順に一同の顔を見回してゆく。そもそもパチュリの交友関係は、人妖ひしめく幻想郷にあってもさほど広いものではない。二つ名の通り、一年の大半は図書館にこもって読書か、魔法の研究に勤しんでいるのが常だ。生来の喘息の気もあり、皆の知らないところで活発に歩出ていることはまずないと考えていい。

と、なれば。

「普通に考えれば……このお屋敷に出入りしているとなたか、ということに」

「……………」

小悪魔の言葉に、その場の全員が思い描いた人物像はびたりと一致していた。

時に奔放で、時に乙女な白黒の魔法使い。……ああ。持ってかないでーされてしまったのはあなたの心だけじゃなく他にも色々あったのか。

「いや、待て。あれも一応は女だろう?」

「どうでしょうか。仮にも魔法使いなんですから、生やすとかなんとかそれくらい簡単にできそうな気がしますけれど?」

キノコ魔法とか使ってますし、と相槌を打つ咲夜の言葉に、小悪魔は偏見ですよう、と涙目で抗議する。

「簡単に言いますが、そんなに単純なものじゃないですよ!」 見てくれならともかく、生殖能力まで含めた性転換なんて、ランプ級の魔神だつて叶えられるかどうかの高難度ですよ。生殖器以外にも脳梁とか骨

盤とか変えるところは山ほどありますし、元に戻るようになるなんてもつと大変です。人間の魔法使いに、そう簡単にできるようなことじゃ……」

「つてことは、パツチェさん自身がお願いした、とか?」

「……………」

美鈴の言葉に一同が黙る。

パチュリーが、『彼女』に並々ならぬ関心を抱いていることはすでに周知の事実である。傍から見れば素っ気ない対応ではあるうが、そもそもこの百年、館の者を除けば他者にまともに興味すら持っていなかった日陰の魔女が、積極的に会話をする相手が増えたというのは驚くべき事実だ。

「……けど、それでも……」

と、レミリアが苦虫を噛み潰したような顔をしたその時。

「おはよー、おねーさま」

どかん、とドアを吹っ飛ばして、食堂の反対側から色鮮やかな翼を揺らし、金髪の少女が現れる。最後まで

でこの場に姿を見せていなかった、レミリアの妹フランドールだ。

サイドテールに結んだ金髪を揺らし、悪魔の妹は牙を覗かせながらふわああ、と大欠伸をひとつ。いつもならレミリアもはしたないと叱るところだが、今日のお姉様にはそんな余裕も威厳もない。

緊張感漂う食堂の気配もどこ吹く風と、妹様は自分の席へととてと歩いてゆき――

「あれ、パチュリー。珍しいのね」

「ええ、こんばんわ」

久しぶりに顔を合わせた知識と日陰の少女と挨拶を交わしたフランドールは、すぐにパチュリーのまんまのお腹に気づいて、あれ？ と首を傾げた。

「……？ どうしたの、そのおなか？ 食べ過ぎたの？」

流石は筋金入りの箱入り娘、満495歳の妹様。無垢な笑顔での問いかけに、場の空気がさらに張り詰める。固唾を飲んで見守る一同の中、パチュリーは穏や

かに微笑んで、とうとう決定的な一言を口にした。

「違うわ。お腹にね、赤ちゃんがいるのよ」

((言っちゃったー!?))

これまであれこれ言いながらも、やっぱり聞き間違いじゃなからうかと心のどこかで願っていたレミリア達の最後の希望を根こそぎ吹き飛ばし、パチュリーはそっと新しい生命の芽吹いたおなかをさする。

「あか、ちゃん？」

こくん、とさらに首を横に倒すフランに、パチュリーは静かに頷いてみせた。

「えー!? 本当？ 本当なの？」

知りがりの妹様は目を丸くし、ふわりと宙を舞ってパチュリーの隣の席に飛び移る。

「パチュリーのおなかに？ 赤ちゃん？ ほんとに!? ねえつ、ねえねえ！ ……じゃあ、パチュリー

つて、お母さんのの？」

「ええ。触ってみる？」

「いいの!? ……あ、でも……」

思わぬ申し出にいったんは顔を輝かせたものの、自分の能力を思い出したか、不安そうな顔でパチュリーを見上げるフランドール。しかし母は強し。パチュリーはそんなフランドールの頭をそつと撫で、柔らかに言い聞かせる。

「大丈夫よ。優しくしてあげてね？」

「う、うん……」

およそ5世紀の人生においても、こんなことは初体験なのだろう。悪魔の妹様も流石に緊張しながら、ゆっくりとパチュリーの腹部へと手を伸ばしてゆく。

（ちょ、ちよつと、止めなくていいんですか!? お嬢様!?）

（そ、そうだけどつ……）

パチュリーの、そしておなかの小さな命の事を考えるならば、止めに入るべきだ。それはレミリアも理解していた。フランドールの能力は不安定で、いつどんな不測の事態が起きてもおかしくない。まして緊張や精神への負担は、情緒不安定な妹の心にさらに悪影響

を及ぼしかねなかった。

だが——レミリアは動けない。あんなにも優しく顔をしているパチュリーの邪魔をすることは、どうしてもできなかった。沈黙を守ったままの紅魔館の主と、パチュリーの間で、従者たちただ成り行きを見守ることしかできない。

緊張に強張り、わずかに震えるフランの手がそつと——これ以上ないくらい慎重さで、ゆっくりと、七耀の魔女のおおきなおなかへと触れる。

「……っ」

「怖がらなくてもいいわ。……ね？」

思わずギョツと閉じかけたフランドールの小さな手のひらを、パチュリーの手がそつと包み込んだ。そして。

「あ、動いたっ!?」

「わかる？」

「うん……あ、また!!」

ばあ、と顔を輝かせ、フランは子供のようにはしゃ

いで背中の羽根を開閉させる。いびつな羽根を飾る七色の寶石が、しゃらりと涼やかな音を響かせた。

たった二人だけになった吸血鬼の血族の、末の妹として。彼女が初めて触れる、芽生えたばかりの小さな命。確かな息遣いを感じさせる胎動に触れて、妹様の頬にも薄く朱がさす。

「わあ……ホントだ。ホントに赤ちゃんだっ」

興奮を隠せないフランドールの額にかかる前髪をやさしく払いのけ、パチュリーはいとおしげに眼を細める。

そんな光景に、なぜだか心がざわついて仕方がないレミリアは、思わず隣にいた咲夜のスカートの裾をつかんでいた。

「良かったらお話してあげて。赤ちゃんにも」

「……聞こえてるの？ パチュリー、分かるんだ？ すごいねっ」

「ええ。ちゃんとお返事してくれてるわ」

パチュリーに促され、フランドールはそっとそのお

なかに耳をつけ、小さな生命と言葉を交わす。とくん、とくん。小さな鼓動に目を細め、フランドールは穏やかな顔で目を閉じる。

いつになく、妹様の表情が笑顔に溢れているのを見て、成り行きを見守っていた従者一同はようやく胸を撫で下ろしていた。

「うん。……とっても元気な赤ちゃんね」

「ええ。フラン。あなたもこうして生まれてきたのよ？」

「わたしも？」

「ええ。あなたが生まれる前の事、レミィに聞かせてもらったことがあるの。あなただけじゃないわ。咲夜も、霊夢たちもそうね」

「へえ……」

驚きに目を丸くして、けれど素直に頷くフランドール。生まれて495年目にして受けた情操教育は、妹様にとっても良い刺激をあたえているようだった。

……が、それはさておき。

「あ、あの、お嬢様、どちらへ？」

「……ごめん、もう色々限界……」

レミリアにとつてはこのあたりがとどめになった。胸の奥でいろんなものが許容量を超えて溢れ出すのを感じ取って、レミリアはふらふらと食堂を後にするのだった。



場所を移し、紅魔の館の二階。普段はあまり使われない客間の一室で、レミリアを囲むように館内の責任者が集っていた。

……とは言え先程までと顔ぶれが違う訳でもない。メイド長の咲夜、門番の美鈴、使用人代表としての小悪魔だ。なお、フランドールは話がややこしくなりそうだからというレミリアの一存で同席はしていない。議題は無論、パチュリーの妊娠について。

「とりあえずこの問題については、パチェ本人についてはできるだけ触れない方向で調査を進めるわ。異存

はないわね」

議長席のレミリアにこくこくとうなづく一同。

「早急に原因の調査と、真相の究明を進めること。この際手段の是非は問わないわ」

「で、でもお嬢様、真相って言っても……」

「わかってるわよ!？」

もはや、七耀の魔法使いの懐胎は疑うべくもない。今更冗談でしたー、というようなオチでないことだけは明瞭である。

「ほっとけないでしょう。……その、親友のことなんだから」

ぶつきらばうに口を尖らせるレミリア。どんな経緯であれ、パチュリーの様子は明らかに訳ありとしか思えない。

百年来の友人は、もしかしたら恐ろしく不幸な目に（オークとか触手とか苗床とか）遭っており、それでも健気に耐えているのかもしれない。それを黙って見過ごせるほど、この永遠に紅き吸血鬼は冷酷ではない

らしかった。

「でも、あれは流石に心臓に悪いわね……」

「ですねえ。余計な気ばっかり使っちゃって……なんかものがすぐく疲れました」

美鈴の台詞は、皆の気持ちを代弁していた。フランとのやりとりはまさに薄氷の上を踏むかの如し。咲夜ですら疲労の色は隠せない。この場の全員、それなりに長く生きているのだが、こうした経験にはとにかく乏しいのである。

ぐつたりとテーブルに頬杖をついて、レミリアは据わった目を咲夜に向ける。

「ねえ咲夜、パチエの時間だけ1年くらいすつとばすとかできないの？」

「申し訳ありません。他人の時間にまで干渉するのは不可能なようです。お嬢様」

それが可能なら、どんな相手だろうと咲夜には叶わないだろう。完全に瀟洒なメイドが可能とする時間操作は、あくまで自分を起点にするものだ。時間という

ものが主観である以上、咲夜の力は他人のみを対象にすることはできない。

落胆と共にテーブルに突っ伏したレミリアはか細い声で呻く。

「……あんなの、いつまで続くわけ？」

「ええと、場合によりますが……普通なら生まれるまで10か月くらいでしょうか？　ですから、最低でもあとひと月かふた月か……」

「そんなにやられてたら、気疲れして死ぬわよ、私」

不老不死の吸血鬼にあっさりと死を口にさせてしまふほど、今回の事態は差し迫っているらしかった。それを見て、咲夜はよろしいでしょうかと挙手をして発言を求める。

「あのう、決してお嬢様を疑うわけではないのですが、パチュリー様の……あの状況について、無意識のうちにもそうした運命を操ったというようなことは……」

「ないわよ。っていうかもう戻そうとしてみたけど。無理」

テーブルに右のたほつたを押しつけ、レミリアはぼやく。

「そもそもパチェ一人の運命じゃないものね、今更だけど。百年も一緒にいて、あんなパチェ初めて見たわよ……」

「お嬢様……」

くしゃくしゃと髪をかき乱すレミリアをいたわるように、咲夜が隣に歩み寄る。

犬猫の子供などとは訳が違う。あんなに幸せそうな魔女の笑顔を目の当たりにして、その運命を弄くるといふのは、この紅い暴君とて気が咎めるものらしい。

「とにかく。パチェ本人をどうこうするのはやめましょう。それよりも今はもっと大事なことがあるわ」

「……はい」

紅魔館の主の意を汲んで、一同が頷く。レミリアが気力を奮い立たせて、身体を起こしたとき。

侵入者を知らせる甲高いベルの音が、屋敷全体に響き渡った。

「――来たッ!!」

「咲夜っ!!」

「承知しました!!」

椅子を蹴とばして立ち上がったレミリアの指示に、完璧なメイドが姿を消す。

「私達も行くわよ!!」

「はいっ」

「は、はい!!」

美鈴と小悪魔を引き連れて、レミリアも迷うことなくその後を追った。



「よー。邪魔するぜー」

明り取りの窓を器用に破って地下の図書館に侵入した白黒の魔法使いは、箒の上から鼻歌混じりに警備の様子を確認する。

巨大な空間を埋めるのは、まさに書の峡谷とばかり

に積み上げられた本棚。魔道書、稀覯本、禁書の類が所狭し詰め込まれた書架の隙間に視線を巡らせ、魔理沙は三角帽子のつばを軽く持ち上げた。

「ありゃ、今日は誰もいないのか？ 都合がいいな」
迎撃に飛び出してくる使い魔や図書館の主がいないのを確認し、設置されたトラップもお座成りのものしかないことを一目で看破した魔理沙は、申し訳程度の挨拶もそこそこに本棚へと飛び移り、中身を物色しようとする。その時。

「そこまでよ」

「うおっ!？」

わずかな前触れも予兆すらもなく。白黒魔法使いの周囲を、蟻の這い出る隙間もないほどに、無数のナイフが取り囲む。

箒上の魔法使いの首筋に、背後から尖った銀刃を押し付けて、完璧で瀟洒なメイドが忠実に職務を執行していた。

「よし、良くやったわ咲夜!! ——美鈴、小悪魔っ」

「「はい!!」」

敏感に危機を察し、煙幕を張って逃げ出そうとした魔理沙を、さらに小悪魔の弾幕が包みこみ、対抗呪文を繰り出して魔法を相殺。同時に地を蹴って間合いを詰めた美鈴が、箒の上から白黒を蹴り落とし、床上に押し倒して取り押さえる。

「っ、な、なんだなんだなんだっ!？」

いつもと同じように侵入した図書館に、紅魔館の全戦力のほとんどが集中していたことに、魔理沙は驚愕を禁じえないようだった。

「チェックメイドよ人間。無駄な抵抗は時間の無駄だと知ちなさい」

「は……っ、なんか知らんがやなこったぜ」

しかし、魔理沙もこの程度で屈するほど往生際のいい魔法使いではない。こっそりスカートの裏側のポケットに手をしのばせ、星状弾幕精製の金平糖を掴み出そうとする。

「無駄だと言っているのよ」

その運命を捻じ曲げて。レミリアは金平糖の瓶を床の向こうへ蹴り飛ばし、魔理沙の眼前に出力を絞らないままの紅い魔槍の切っ先を突き付けた。

「ねえ咲夜。人間って手足がなくても喋るのに支障はないと思うから、遠慮はしなくてもいいのよね？」

「……一本くらいなら命に別状はないかと」

「そうね」

「いや待て!? あるぜ!? 思いつきり別状あるぜ?!」

「なら大人しく捕まりなさい。いいわね？」

有無を言わせぬ迫力に、魔理沙は冷や汗をこぼしながら、こくこくと頷くばかりだった。



「と言うわけで、最有力の容疑者を尋問するわ。あんたが父親ね? つーかそれしか考えられない。もう違っていいから認知しなさい」

「何の話だっ!？」

図書館の椅子にがんじがらめに縛られて、身動きを封じられた魔理沙を、従者たちが取り囲む。

レミリアは喚く白黒の前に歩み寄り、紅い爪を軋ませながら魔理沙の顔をねめつめた。

「どうもこうもないわよ、とぼけないで」

「だから何の話かさっぱりわからないぜ!？」

身体の自由を奪われても、魔理沙はなおも屈してはいなかった。激しい抵抗を試みる魔法使いに、レミリアはいらだちと共に髪を掻き巻く。

「白々しい。……あなたしか考えられないのよ。いったい何のつもりでパチュにこんなことをしたの。答えなさい。内容によつては殺すわ。言うかどうかどうせロクなことじゃないんだろうからすぐ殺すわ」

「だから説明くらいしろ!？」 パチュリーにつて何の話だ? なあレミリア、なんのことだかさっぱり分からないんだが」

「……ああもう、咲夜!!」

わずかに顔を赤くしてレミリアがメイド長の名を呼ぶと、咲夜は軽く一礼をして魔理沙の傍に歩み寄る。

「お、な、なんだ？」

動揺する魔理沙をよそに、咲夜はしごく事務的な動作で少女に耳打ちした。

「————が——して、それが————」

「……………っ?!」

話の途中で魔理沙の頭がぼん、と湯気を吹いた。おそろおそろ、レミリア達の顔を見比べ、なんとも言えない渋面を作る。

「……マジでか？」

「そうよ」

眼を剥いて絶句する魔理沙の前に、吸血鬼は重々しくうなずいた。

「で、どう考えても犯人は貴方でしょう。はやく白状しなさい」

「いや待て!?」

一言でもそれっぽいことを口にした瞬間、即刻処刑

タイムの始まりそうな状況に、魔理沙は涙まで浮かべて首を振った。

「違う、違うぜ!? 誓ってそんなことしてないぜ!?!」

「嘘ね。あんたが茸の触媒なんて破廉恥な魔法使ってるのは先刻承知なのよ。怪しい魔法で汚らわしいものを生やして、パチエの牀を好き放題弄んだんでしょ。

せめて往生際良く白状しなさい。苦しませずに済ませてあげるから」

「話を聞けーっ!? そんなでたらめだ! 濡れ衣もいいところだぜ!?!」

じたばたと暴れる魔理沙は、椅子の脚をがくぐくと揺すりながら喚く。

「そ、それにだな、その、まだ、私は、その……そういうのは……」

「なによ。よく聞こえないわ」

「とにかくっ!! 断じて私じゃないぜ!! 言い張るのは勝手だが、もし違ってたらどうするつもりだ

!？」

「開きなおるのがますます怪しいわ」

「……聞けよ人の話!!」

「五月蠅いわね、あんた以外に考えらんないのよ!」

「……………」

「……………」

固唾をのんで見守る一同の中、ぜいぜいと息を荒げる魔理沙と、レミリアの視線が、しばし交差する。

「……本当ね?」

「ああ。誓うぜ。断じて私じゃない」

なおもしばらく、両者はじつと睨みあつてから——やがてレミリアは諦めたように表情から陰を抜く。維持していた紅の槍を消し、がっくりと肩を落とした。

「もう……じゃあ一体誰だって言うの?」

「……お嬢様」

「な、なあ」

縛られたまま、魔理沙はいまだに信じられないという顔だ。

「本当なのか? その、パチュリーに……子供が、つて」

「本当よ。ここにいる全員がしっかり見てるわ。パチエも自分で認めてるしね」

「マジか……」

さしもの魔理沙も、これにはショックを隠せない様子だった。

その表情に演技が含まれているとは思えず、レミリアは吐息と共に魔理沙の解放を命じる。手首についた縄の痕を痛そうにさすりながら、床に座り込んでしまう魔理沙。

「ねえ魔理沙。なにか心当たりはないの?」

「……いや、そんな事言われても困るぜ」

ごによごによ言葉を濁し、魔理沙はしばし考え込んだ。やがて、帽子のつばを下げて表情を隠しながら、「その、合ってるかどうかかわからんが、ひとつそれっぽい話がない……でもない」

「本当!？」

「いや、落ち着けて!? あくまで可能性の話だからな!？」

一斉に食いついてくる紅魔間の面々に詰め寄られ、魔理沙はたじろぎながらも続ける。

「私も文献で読んだだけなんだ。真偽までは確かじゃないぜ。……ひょっとしたらお前なら知ってるかもしれないが、もう何百年も昔、外の世界で魔女裁判が全盛期のときだ。確かその頃の記録に、卵を産んだ雄鶏が魔女として裁かれた記録がある」

「雄鶏が?」

「ニワトリって、あのニワトリですよね?」

神妙な顔をしているレミリアと咲夜の主従に対して、いまいち飲み込めていない様子の美鈴と小悪魔を見て、魔理沙はああ、と頷いた。

「当時は魔女裁判もいろいろ煮詰まっていた時期だな。

さんざん妙なものが魔女に認定されてるんだ。修道女を襲った野犬とか、神父の指を挟んだクローゼットまでな。……まあそれは置いとくぜ。本題じゃないしな。

いいか、ここで重要なのは、その雄鶏が卵を産んだって事だ。もちろん真偽は定かじゃない。雄鶏が産んだ卵からはバジリスクが孵るなんて言われているが、実際、卵から何が生まれたのかは記録に残ってないんだ。それでもこの雄鶏は魔女だとされた。罪状は、本来卵を産めるはずがない雄鶏が、生命のありかたを歪めたってことだったそうだけ」

次第に魔理沙の言わんとする意味が呑み込めてきたのか、レミリアは表情を硬くする。

「……つまり、これはパチエの魔法だったこと? よ

りパチエの理想とする、魔法使いに近づくための?」

「あくまで推測だけだな。……だいたい、パチエにそんな相手がいないってのは私よりお前のが分かてるんじゃないか、レミリア」

「……………」

レミリアは不機嫌に牙を軋らせた。魔理沙の言葉はいちいちもつともで、パチュリーが積極的に触れ合える異性など、幻想郷のどこにもいない。オークだの触

手だのはそれこそ笑い話であろう。となれば、魔女の宿した生命は、処女懐胎によるものということになる。「……まあ、パチュリーが、実際にそうだったのかは置いておくとして……。長い間図書館の工房に籠っていたのは間違いないんだろ。私が忍び込めたかどうかは、お前らのほうがよく分かってるんじゃないのか」

相手のいない懐胎。それを成せるのは神によるものか、さもなければ悪魔によるものでしかない。およそ、奇跡と悪魔の所業は表裏一体。そして、パチュリーは誰もが認める幻想郷屈指の魔女だ。

「……………」

その場の皆が口をつぐむ中、そんな深刻な雰囲気を見事にぶち壊すように。

「まーりーさーっ!!」

わざわざドアの隣の壁を吹き飛ばして、現れたのは七色の羽根をはばたかせる妹様。悪魔の妹フランドルは、弾丸のように魔理沙の胸へと飛び込んでゆく。

「ふ、フラン……………」

小さいとはいえその膂力は人間の比ではない。下敷きになって呻く魔理沙に馬乗りになって、フランドルは顔を輝かせる。

「ねえ魔理沙!! わたしも赤ちゃんほしい!!」

「ぶっ!？」

きらきらとした無垢な笑顔で言われ、魔理沙は思いつき吹き出した。

「パチュリーに聞いたのよ。赤ちゃんは好きな人といつしよにつくるんだって!! だから魔理沙、わたしに赤ちゃんちょうだい!! ねえ? ねえってば!」

「……い、妹様……………」

さっきまでのシリアス成分はどこへやら。あどけない表情を見せながら、掴んだ細い指先を物欲しそうにぺろっと舐め、フランは魔理沙の上に覆いかぶさる。

「ねえ、魔理沙? いいでしょ?」

薄紅の唇から、尖った牙がちろりと覗く。帽子の下で片結わえされた金髪が、さらりと魔法使いの頬にかかる。

「ふ、フラン？ 待て、落ち着け!!」

「……あんだ、まさかとは思うけどフランにまで手を出してっ」

「いや、まて、誤解だーっ!?」

レミリアの視線が陰しくなるなか、魔理沙は謂れない物言いに必死になって叫ぶ。

「パチュリーばかりずるいわ。私もオトナにして?」

「ツ……咲夜!!」

命令一過、亜音速のナイフが銀光となって飛ぶ。とつさに首をひねった魔理沙の顔を薄く撫でるように、鋭い刃が床に突き立った。刃は柄元まで床の中に埋まり、その威力の凄まじさを物語っている。両の指に銀刃を束ね、忠実な猟犬が前に進み出た。

「排除はお任せください」

「やめてーっ!?」

暴れる魔理沙を押さえつけながら、フランドールはレミリアのほうを振り向いた。

「もう、お姉様までなんで邪魔するの!?」

「なんでって、放っておけないわよ!?」

「……じゃあお姉様でもいいわ! ねえ、わたしも赤ちゃん欲しいの!!」

「ふ、ふふふフラン、淑女がなんてはしたないっ!?」

悪戯っぽく口元の牙を舐め、迫る妹様。姉の威厳も形無しでうろたえるレミリアに抱き付いて、頬をすり寄せるフランドール。

……あれ、たぶん妹様はわかっててやってるだろうな。と。

なんとなく、美鈴はそんな事を思った。



やがて。

なんだかんだと有耶無耶になっているうち、レミリアらの心配もよそに、ひと月もするとパチュリーのおなかには元に戻った。

紅い悪魔の館が託児所になることはなく、日陰の魔

女の生活はすっかり元通り。読書と魔法で睡眠時間を削る不健康な毎日を送っている。

「……なによ、また来たの？」

あの慈母の微笑みは一時の幻だったとでもいうのか。薄暗いランプの明かりの下、泥水のような珈琲を啜り、魔道書の頁に埋めた顔をわずかに持ち上げ、来訪者を不機嫌な視線で睨むパチュリーの姿は、以前と何も変わりがない。

けれど。客間の床は深々と咲夜のナイフの痕が残り、あれが夢だったのではないかという都合のいい想像を否定していた。

……その頃からだろうか。紅魔館地下の大図書館、書架の峡谷の狭間にある卓上に、小さなフラスコが配置された。

動かない大図書館が黙々と魔道書をめくるその傍らに、近づいて目を凝らせば。

封をされたフラスコの中には、ほんのりと燐光を放つ、白く小さなヒトガタが閉じ込められているのを見

ることができた。

人間の幼児の姿をデフォルメしたかのようなそれこそは、曰く「フラスコの中の小人」〈月の仔〉。生まれながらに万物の知識に通じるといふ神秘の生命体。かの大錬金術師ホーエンハイムによって為された、賢者の石に並ぶ錬金術の秘儀中の秘儀である。

それが何処からもたらされたものか。魔女に答えを訊けるものはいなかった。

フラスコの底に腰を下ろし、薄く張られた薄桃色のスーパから、不機嫌そうに小さな本状の物質を生成しては、黙々と頁をめくる、どこかの誰かにそっくりなその姿に。

レミリアは内心、友人への評価を改めざるを得なかったという。

MOON CHILD

初出:紅のひろば 12(2015/3/14)

収録作の中では一番新しいお話……なんですが初稿を書いたのはとても昔で、細かいところをリライトして本にしました。いわゆる「突然〇〇に赤ちゃんが出来ちゃって大騒ぎ!？」系ネタは勘違いで終わるのが多くて(当然と言えば当然ですが)、なんかそれじゃつまらないなと捻くれてこんな結末にしたという経緯があります。

パチュリーさんは知識のためなら自分のおなかでホムンクルスくらい育てちゃうだろうという偏見に基づいております。

レフェラル・エフェメラ・ブックワーム

霧の湖の畔に聳える「紅」亜の殿舎、悪魔の住む居城、紅魔館。名の通り紅の外観をもつ洋館は、吸血鬼^{ヴァンパイア}のスカレット姉妹を主に頂く幻想郷の一勢力だ。

鎧戸の隙間から漏れる陽は今日も高い。当主のレミリア・スカレットは、欠伸混じりにベッドへと向かうとしていた。束の間の梅雨の晴れ間、夕食後に夜半の月を眺めてグラスを重ねていたところ、気付けば空はすっかりと白んでいたのである。重い足を引きずって執務室に赴き、積まれた書類を片付けた頃には時刻は正午に近かった。

高貴なる夜の種族の威厳もどこへやら、睡魔に負け

「夜魔の王。十七の支族に代表される不死者。流水、白木の杭、日光などにより弱点を持ち大きなペナルティを受けるが、魔力を始めとした能力にボーナスを持ち、月齢十三以上の夜においては通常の手段で死亡しない。」

て落ちてくる臉を擦りながら、足取りも定まらずふらふらと左右に揺れる。鏡でも見せたくなるような有様だが、生憎と吸血鬼は鏡には映らない。

口元に尖った牙を覗かせて、レミリアがふわあと大欠伸をしたところで――廊下の向こうより静かな声があった。

「まだお休みになられていなかったんですか、お嬢様」
「……咲夜か」

古典的な従者服に身を包んだ紅い屋敷のメイド、十六夜咲夜。人間でありながらこの広大な屋敷を切り盛りする優秀な侍従^{ウーメイド}である。今は買い出しの帰りなのか、調味料や茶葉などをぎっしり詰めた紙袋を抱えていた。

普段、この完璧なメイドは主が執心してから雑事を片付けるのだが、今日は他に用事でもあったろうか。

「職業／専門クラス。侍従、家令を表す。考証、儀礼作法にボーナスを得るほか、文化レベル4以上の都市内においては限定的なスカウトとしても扱われる。」

疑問に思ったレミリアは眠気が残る目元を擦り、咲夜が肩に担いでいる大荷物に目をやった。

「……で、咲夜。なんだそれは」

「むー!! むーっ!!」

メイドの肩で『大荷物』が脚をばたつかせ、抗議の声を上げる。

涙を滲ませ、叫ぶ声はしかし猿轡に阻まれ、声にはならなかった。全身をこれでもかとロープで雁字搦めに縛られているため、身動きも覚束ない。緑の髪から伸びる触角も、くteriと力を失っていた。

蛭妖怪リグル・ナイトバグ。レミリアも見覚えのある虫の妖怪である。無論、レミリアも誰かを問うた訳ではない。

「パチュリー様がご希望でしたので、お連れいたしました」

「パチェが?」

呆れた顔のレミリアに、咲夜は静かにこくりと頷いて見せる。

成程、見ればリグルを縛り上げているのはただの縄ではなく、丁寧な呪文の編み込まれた呪縛縄だ。妖力も封じられ、無力な少女のように暴れるくらいしか抵抗が出来ないのだろう。

ご招待したとはお世辞にも言えない有様だが、それを気にする者はこの場にはいない。

「あの本の虫が、自分から客人を招くなんて珍しいこともあるものね」

「はい、早急にというご希望でしたので。……すぐにお休みの支度をいたします」

会釈して主の前を辞し、去ってゆく咲夜。哀れなリグルの呻きがそれに重なる。薄暗い館の奥へと引きずり込まれる蛭妖怪の末路を思い、レミリアはふむりと小さく息を漏らした。



3 レベルメイジ呪文。魔法の縄で対象を拘束し無力化する。対象のサイズ修正・アーマークラスを無視するためレベル帯に関わらず有用。

「ぷはっ!? つ、なによ、何なの一体っ!!」

猿轡を外されたリグルは、噛みつかんばかりの形相で精一杯の抗議を叫ぶ。弱小妖怪であることは否定しないが、それでも一寸の虫にだって五分の魂。やられたまま泣き寝入りなんてできやしない。

「貴女に用事があるだけよ」

というのに、この地下図書館の主である魔法使いは動じた様子もない。揺り椅子を軋ませながら、リグルの憎しみを込めた視線を分厚い面の皮で受け流す。

知識と日陰の魔女、パチュリー・ノーレッジ。第六階梯の魔道師^{メイガス}にしてその姓に知識を頂く紅魔館の顧問魔術師である。彼女は同時にこの紅魔地下大図書館を任された書監^{ブックウォッチ}でもあった。

「そんなのどうでもいいから、これ解いてよ!!」

▲
上級クラス。大法典（コデックス）に所属する魔道書の管理者。あらゆる系統・形式の魔法を書籍という手段で保管、共有し、詠唱に時間を要するようになる代わりに自在に行使できる。

床の上にじたばたともがくりグルの叫び声が、高い天井の下に反響する。

紅魔館の内部は咲夜の手によって空間を調整され、迷宮じみた広さをもつことが知られているが、その地下にあるこの図書館はそれに輪をかけて広大であった。天上までの高さは優に数百メートルを超え、左右に聳える断崖は全て、ぎっしりと書籍を納めた本棚が積み重ねられたものだ。

前を見ても後ろを見ても、書架の峡谷。山脈と化した叡智の集積には果てが見えない。禁断の叡智を無尽蔵に蓄える書の魔界《ヴワル魔法図書館》に接続するこの地下大図書館こそが、パチュリー・ノーレッジの封土^{ドメイン}である。

リグルが転がされているのはそんな本の大峡谷の狭間にある書卓であった。積み上げられた魔道書には付

。秘義アイテム、アーケイン・ティック・トリックと同種の効果を持つ。
強度と同じだけの背景魔力放射をもち、特定の形式の魔法を強化し、それ以外の形式の魔法を弱める。魔法使いの工房は多く封土化した土地に築かれる

箋が挟まれ、書台には何枚もの羊皮紙が留められている。少し離れた場所では、赤髪の司書がおろしなから事態を見守っていた。

「だいたい、頼みごとがあるんだったら、こんな事しないでしょ普通!？」

「咲夜には貴女を連れてきてとしか言っていないからね。そんなことよりも」

リグルの抗弁を一方的に打ち切って、パチュリーは揺り椅子から腰を上げた。ネグリジェめいたふんわりした衣装を引きずって、縛られたまま床に転がる虫妖に歩み寄る。

知識の魔女の、限の浮いた目元から、険しい視線がリグルをねめつける。

「あなたが虫妖の長であるというのは知っているの。何を企んだのかは知らないけれど、釈明の機会は与えてあげるから、納得のいく説明をして頂戴」

「パチュリーの契約する使魔。元は異教の魔神に連なる外典（アポクリファ）である。」

「ふえ……?」

「それとも、あなたが見た目通り、王の器に足りてないからこうなっているのかしら。どちらにしても分かりやすく貴女に八つ当たりでもしないと腹の虫が収まらないのだけど」

剣呑なセリフと共に細い指がリグルの顎をなぞる。ぞくぞくと身を震わせて、リグルは震え声で叫んだ。

「な、何の話?!」

「惚けるのね。いいわ、目の前の鬱陶しい虫を積極的に叩き潰す方法は……」

開いた本の頁に顔を埋めながら恐ろしいことを喋り出すパチュリーに、リグルは悲鳴を上げた。

「だ、だから! 何の事か分からないわよ!」

「……そう」

仏頂面になって、パチュリーは短く呪文をつぶやく

。虫怪の中に生まれる女王存在。従属する種族との関係は基本的に「友好的」となり、その支配領域内で彼らの行動に恩恵を与える。

と、書卓にあった本を手元に引き寄せた。魔女の片手に余るほどの分厚い妖革^{（イカガミ）}の一冊。禍々しい雰囲気から一目で封印指定の類だと分かる魔道書だ。付箋^{（フジタン）}の挟まれた頁を開き、パチュリーはリグルの眼前に押し付ける。

「わ……」

ページを開いた瞬間、ぱらぱらと小さな紙屑が毀れおちる。

本は無惨に喰い荒らされていた。重なる頁を繰り抜いたように無数の穴が開き、文章はそこら中で虫食いになつてすっかり判読不明だ。リグルには魔道書は読めないが、これが既に本としての用を成さない状態なのは理解できた。

。 Oレベルメイジ呪文、アポルト。術者の所有している片手で持てる道具ひとつを手元に呼び寄せる。

書籍を保護する魔界の獣や虫の表紙を用いた装丁。強度が飛躍的に向上するが憑依の浸食深度が増加する。

ニ ブックマーク・オブ・ステイシス。呪文や疑似呪文能力に割り込み、発動を一時的に中断する。

「……ご覧の有様よ。これも、これも、これも。どう見ても虫の仕業よね」

虫に喰い荒らされた魔道書を次々と開いてはリグルに押し付け、パチュリーは静かな怒りをあらわにする。浮遊盤^{（フロイティングディスク）}の力場^{（リキョウ）}に魔道書が積み上がり、みるみるうちに小山となつた。しばらく前にも里でも字喰い虫の被害があつたと言うが、それとは桁が違っている。

「被害は蔵書の二割近いの。ここまで大規模な字喰い虫の食害は今まで無かつたわ^{（ワ）}。惚けても無駄よ。仮にも虫の王である貴女が知らないはずがない」

「し、知らないよ！ そんな——」

「そう。じゃあもういいわ。八つ当たりで済ませるか」

「ひええ!？」

問答無用で精霊の力が喚起される。床を這うように

。 1レベルメイジ呪文。500kgまでの荷物を運搬できる円盤状の力場を作成する。

。 煙々羅の怪異は大図書館に被害を与えなかつた。東方鈴奈庵第三話 妖怪退治の師走（後編）

して逃げ出そうとしたリグルに、パチュリーが構わず魔法をぶつけようとしたところで――

「――ずいぶんと短慮じゃないか。それが魔法使いのやることかい、パチエ」

割り込む声とともに、パチュリーの魔法が消失する。リグルが驚いて頭上を見上げれば、重なる書架の上に腰かけてくつくつと喉を鳴らすレミリアの姿があった。

パチュリーは夜の主を視線だけで振り返り、

「覚えておきなさいレミイ、魔法使いは自分の領分を荒らされることを一番嫌うのよ」

「そんなだから百年生きてても碌に知り合いもできないのさ」

「そうね。嫌味な蝙蝠くらいしか見つからないわね」
パチュリーの皮肉を笑って受け流し、レミリアは書棚を蹴ってふわりと地面に降りる。

エ スペルインターセフトと同様の吸血鬼の疑似呪文能力。常駐・割込で呪文の発動に対して負のレベルを与え、無効化する。

と、同時に吸血鬼は顔をしかめ、こほ、と小さく喉を震わせた。

「何だ、この匂いは」

「ニコチノイドとアルカロイドの虫除けよ。これ以上余計な虫に増えられたらたまったものじゃないから。吸血鬼にも効く^㉔なんて知らなかったけど」

新たな発見とばかり、手元の書を開いては何事か書き加えてゆく^㉕パチュリー。レミリアは呆れ混じりの吐息と共に図書館の卓上で煙を燻らせる香炉を一瞥し、リグルの傍に近付いた。

「パチエの八つ当たりはどうでもいいとして、客人にこの扱いは頂けないね」

レミリアが紅い爪^㉖を振るうと、リグルを拘束していた呪力の縄はあっさりと千切れる。生きた魔法とも

㉔ 香油、精油などの強い匂いは吸血鬼の五感を阻害する。

㉕ クリーチャーの種別、弱点を知るには該当する知識技能の判定が必要。詳細な記録は判定にボーナスを得る。

㉖ これも吸血鬼のスペルインターセフト能力。こちらは能動的に使用している。

言うべき吸血鬼の爪が、魔法を構成する精髓を吸いきったのだ。

「あ、ありがとう……」

驚いた様子のリグル。パチュリーも似たような表情を浮かべていた。まさか傲慢を体現するような吸血鬼が虫妖などに情を見せるとは思わなかったらしい。

「そんな虫虻姑に肩入れするの？」

「立場はどうあれ、彼女は一族の長、妖の王だろう。無碍にするのは夜を統べる者としての沽券に関わるんだよ」

「……そうね。その子は永夜異変で唯一、貴女に土をつけた相手ですものね」

「うるさいな」

レミリアは不機嫌に牙を見せて唸る。永い夜の異変の折、犯人探しに乗り出した紅魔館の主は、リグルとの遭遇で彼女の蹴りをまともに食らって戦線離脱するという苦い経験をしていた。

狙ったものではなく、たまたま振り上げた踵がレミ

リアの顎を打ち抜いただけのことであつたが——偶然とはいえあまりにも見事に決まった一撃にしばらく身動きも取れず、レミリアは同行していた咲夜がリグルを退治するまで弾幕勝負に復帰できなかったのである。この一件はしばらくの間、1面BOSSのジャイアントキリングとして天狗の新聞の一面を賑わした。

幼き紅き月は、昔の醜聞を振り払うように咳払いをする。

「それにしても、だ。うちの魔女どのは普段からこの防備についてご自慢だったじゃないか。その割には、虫程度に食い荒らされてるなんてのは頂けないね」

「見くびらないで。本への防護魔法はきちんと稼働しているわ」

「ほう？　じゃあどうしてこんな有様になってるんだ。パチュエの魔法が役立たずだったってことかい」

忠実なメイドが持ち込んだティーカップ⁸⁸を傾けながらレミリア。背中の羽根が愉快そうにぱたぱたと揺

⁸⁸ 咲夜の時間停止操作による。

れていた。

「そうね。保護魔法は本を高熱や湿気、経年劣化から護るものだけれど、それでも本が本であるという本質は変わらないわ。つまり、書籍自体を直接害する概念なんかには効果が薄い可能性があるの。勿論、普通の虫なんか寄せ付けもしないけれど」

「妖怪になった虫なら有り得ない話じゃないということか」

紅魔館の地下大図書館は、その内部で叡智の外方次元^ミ、ヴワル魔法図書館という異界と接続している。かの地は剣呑な魔神や知識の封じられた禁書^{イン}の巢窟であり、その影響を受けた虫が妖怪化し、図書館に食害をもたらした可能性は捨てきれないとパチュリーは語った。

※メタプレーン。現実を重ねて存在する異世界。より概念を主体にしている。

※魔法災害を引き起こす危険な魔道書。大法典によって閲覧、所蔵を禁止される。邪悪な意志を持つものも少なくない。

「まあ、理屈は通ってるな」

「待ってよ！ 私が知らないってのは本当なんだから！ わざわざこんな危ない所に入りこむような真似知ってたら絶対に止めるもの。わざわざ退治されたがる子達なんかいないわよ！」

拳を握り、大きく手を振って力説するリグル。

「では、誰がこれをしたと言うのかしら」

「う……その、それは、……私が知らない虫だとしてら、外来種かもしれない、けど」

外来、つまり幻想郷の外から紛れこんできた虫だということだ。通常、幻想郷に流れ着くのは外の世界では失われ、幻想となった者達である。しかし、新天地を求めて意図的に結界を乗り越えんとする来寇者^ミも、少数ながら存在している。

わざわざ危険を犯してまで結界越えを試みることからも分かるように、彼等はバイタリテイに溢れ、少々の苦難などものともしないタフな連中である。先住す

※マリジナント。妖怪の山に信仰領域を拡大する守矢の神々が代表的。

る者達を駆逐し、自分たちが支配者とならんと企むことは常であった。大人しく共存など選ぶことはなく、基本的に彼等は幻想郷とは対立することになる。

「さっき話に出たけど、ここには虫は近付きたがらないの。嘘じゃないよ。食べるものもあまりないし、虫除けも強いから。」

……その、だから、外来種が紛れ込んでも、気付かないってことはありうるかも」

「結局、貴女の監督不行き届きじゃないの」

「ひええ……その、そうなんだけど」

リグルは蟲の王としての統制力を備えているが、全ての虫の上位に問答無用で君臨しているわけではない。どちらかと言えば信頼関係で成り立っている支配である。

「なあ、パチエ。ところで——」

「待って！」

リグルの鋭い声がレミリアの言葉を遮る。かすかな反響を残し、図書館が静寂を取り戻す中、真剣な面持

ちで、リグルは額から伸びる触覚を小刻みに動かしていた。

——かち、かち、かち。

虫の王の五感が、まるで時計の秒針のような硬質な音の気配を探り当てる。レミリアとパチュリーは顔を見合わせると同時、突如書の峡谷が軋むようにざわめいた。

書架のはざまに警報^{アラーム}が鳴り響く。本棚にぎつしりと詰め込まれた魔道書達が、捕食者を前に悲鳴を上げたかのようにだった。

「……どこ！」

「わからないよ！ 声が聞き取り辛くて……！」
張り詰めた緊張が増すなか、規則正しく響く針の音は、徐々に大きさを増してゆく。

かち、かち、かち、かち。

※ 効率化されたOレベルメイジ呪文。設定された暗号鍵（パスワード）なしに入ってきた小型以上のクリーチャーに対する警報を発する。
この段階までシバナムシのサイズは極小であり、呪文の対象外。
従属を拒む者とは感覚共有のパスが形成されない。

連続する硬質な音が、わずかの間をおいて停止する。積み上げられた書籍を蹴散らし、巨軀が飛び込んできたのはその瞬間だった。

即座に反応したのはパチュリーだった。地下大図書館の主たる権杖^{アロン}をもって手元に愛用の魔道書を引き寄せ、圧縮言語で呪文の詠唱を省略^ミ。

——土&金符「エメラルドメガリス」

地より立ち上がった翡翠の直方板が、パチュリーとリグルを取り巻くように立ち上がる。碧の防壁は出現した巨軀を押しとどめ、がりがりと激しい火花を散らした。

不意打ちを防ぎ先手を取る、魔法使いの権能。

魔道書からの呪文詠唱は全ラウンドアクションだが、高速詠唱、高速詠唱Ⅱ、呪文最適化、魔法学の達人の特技を重ねて初手番の標準アクションまで短縮している。パチュリーはさらにこの呪文を魔道師の権能によって呪文スロットへの常態化し、割込み行動としてアクションを使用せずに行使している。

翡翠の輝きに照らし出されるのは、虎縞の羽根をもつ不気味な甲虫だった。身の丈は少女たちよりも大きく、その全身は禍々しい魔素の鎧^ミに覆われている。かち、かち、かち。虫が巨軀に似合わぬ硬質な音を響かせるたび、あたりの書籍が独りでに侵され、自動的に朽ちてゆく。

「こいつら——!?」
「姿を見せたわね、紙魚^{ペーパーワーム}」

リグルが叫ぶ中、パチュリーは構わず反撃に転じていた。七曜を自在に操る魔女の舌先が猛烈な速度^ミで呪詛を編み上げ、獣と歌の魔素を引き寄せてゆく。

素早く懐のポーチ^ミに指を滑り込ませたパチュリーの爪先が床を叩くと同時に、瞬間練成された剣が十七本の

巨大化（エンラージ）の疑似呪文能力。

呪文抵抗・無効化能力及び魔法の鎧（メイジ・アーマー）の疑似呪文能力。

高速詠唱Ⅱ、呪文最適化による標準アクションでの行使。

構成要素ポーチ。メイジ呪文の行使には接触・五感・視認などの構成要素が必要なものがある。それらを一式収めた携行品。

虚空へと跳ね上がった。詠唱キヤストにより鑄造キヤストされた刃の群れが、魔法使いの頭上でくると回転しながらその切っ先を甲虫へと定める。風圧に舞い散る紙片を斬り裂き、音も無く打ち出される剣が、軌跡だけを残して虫の巨軀に突き刺さる。

が、魔を挟り殺す白銀の切っ先もまた、虫の分厚い表皮を貫くことはできず、その表面で弾かれるにとどまった。立て続けに射出される剣をものともせず、妖虫は素早く身を翻し、書架の断崖を食い破って峡谷の奥へと消えてゆく。

弱った書架が軋みを上げる。本棚の断崖が自重に耐えかねて崩壊し、書籍の雪崩が引き起こされたのだ。本棚といってもその標高は数百メートルを超える。地も砕けんばかりの轟音が図書館を揺るがし、書籍が一面床を覆う。

「成程、こいつは結構な化け物じゃないか」

頭上から響くレミリアの声。吸血鬼は倒れた書架の

⁸⁸ 瞬間練金は構成要素に鉛と錫への接触を必要とする。

下から蝙蝠になって脱出し、天井のシャンデリア付近に再生3していた。重力を嘲笑うように上下逆さまに天井に腰をおろし、持ち手だけになった紅茶のカップを見つめて吐息する。

「レベルを上げて物理で殴れか。魔法使いにしては少し優雅さに欠けるんじゃないか？」

「ガンダルフミズンディアーも、危難において最も頼りとしたのは愛用の剣よ」

答えて、パチュリーも宙空へと移動する。隣にはリグルを抱えた赤髪の司書。惨憺たる有様となった図書館に、朽ちた魔道書を一瞥して舌打ちし、パチュリーは吐息。

「――話を聞いてよ！ 大人しくして！」

焦りを滲ませてリグルが叫ぶ。彼女もまた自分の職分を果たすべく、思念を飛ばして説得を試みていたのだ。しかしその成果は渺々しくない。

⁸⁹ 吸血鬼は弱点による攻撃の他、銀あるいは魔力を帯びた武器でなければダメージを受けず、破壊されない。

かち、かち、かち。

埃の舞い上がる広大な図書館に、規則正しい硬質な音が響く。結末までのカウントダウンを刻むかのごとき、さながら死神の時計針の音だ。

その音は一つだけではなかった。書架を食い荒らす用に取り付いた虎縞は、見えているだけで百以上。彼等の奏でる針の音は、わずかのずれもなく同一のリズムを刻む。

虫が一匹で行動するはずなどなかったのだ。個にして群、群にして個。世界最多の生命体は、彼等蟲なのである。

「手を貸そうか、パチエ」

「結構よ。魔法使いになった時から、悪魔に魂は売らないと決めているの」

レミリアの返事と並行して、魔法使いの舌は同時に呪文を編み上げていた。古史の言語に精通し、呪文

⁸³多重詠唱。アークメイジの上位特技。標準アクションで2つの魔法を行使する。

を発動媒体とするパチュリーは、ひとつの口で同時に複数の呪文を詠唱するという神技を可能とする。

書架を掘り抜き、死角から飛び出してきた虎縞の虫に振り向きざま、伸ばした親指、人差し指、中指を突き付ける。

――木符「フラッシュオブスプリング」

四季と五行の相乗で喚起されるのは風霊の疾駆。視認すら不可能な速度で弾かれた圧縮空気が、蟲の表皮に炸裂した。弾け飛ぶ衝撃波が空間を軋ませ、書架をびりびりと震わせる。

膨大な魔法の組み合わせの中から木行を選んだのは、図書館への二次被害を防ぐ観点からだろう。もし防護魔法自体が無効化されているとするなら、炎や水は本を傷つけるからだ。

しかし衝撃波の中でまたも平然と姿を見せる虎縞の羽根に、パチュリーは呻くように咳を漏らす。埃の舞

い上る図書館、喘息持ちの魔女にはお世辞にも良い環境とは言えない。

「……頑丈な紙魚ね」

「違う、紙魚がこんなに頑丈なはずないよ！」

牽制に魔法の矢^{マジックミサイル}を放ちながら、吸引器を口にするパチュリー^{パチュリー}の横で、触角を立てたりグルが叫んだ。

「こいつらは、別の字食い虫なんだ！」

「別の、ね。……小悪魔」

主の命令に即応して、控えていた赤毛の司書が一冊の本を手^{エンサクトロペディア・マギステイカ}に宙を奔る。魔道大百科事典^{マギステイカ}の紙面に顔を埋めるようにして、パチュリーは目の前の妖虫の正体を探り当てた。虎縞の背中、特徴的な鳴き声、書籍にトンネルを掘るように食い荒らす食害痕跡、分厚い背中の羽根。——それらの全てが合一する虫はひとつ。「シバンムシ……^{Death Weevil Beetle}死番虫、ね。奮った名前じゃない

⁸³ 1レベルメイジ呪文。決して標的を外さない魔法の矢を放つ。矢の本数は術者のレベルに応じて増減する。
⁸² 秘義アイテム。知識判定に大きなボーナスを得る。

か」

レミリアが面白そうに声を上げた。規則正しい鳴き声は、死神が生者の寿命を測る時計の音になぞらえて恐れられた。書籍への食害としては紙魚が最も有名だが、実際の書籍への被害の八割以上はこのシバンムシによるものであるという。

「そうね、紙魚^{ブックワーム}なら、食害は書籍の表面をなぞるようになる筈。頁自体を大きく損なうことはない。それゆえの“字食い虫”。書籍に穴を空けて食い荒らすのは別物ということね」

「でも、どうしてこんな——」

蟲の王の呼びかけを一顧だにせず、甲虫はかちかちと鳴きながら背の羽根を広げる。

——日&月符「ロイヤルダイヤモンドリング」

宙を滑るように身をかまし⁸⁴、スペルを即座に詠唱⁸⁵。

⁸⁴ 魔法使いの権能。5フィート・シフト。次元またぎの効果を備え

直系二十メートルにも迫る巨大な日環が展開、蟲の突進を押しとどめた。光輪の鎧は激しい回転で甲虫のあざとを食い止め、威力を上げながらじりじりと虫たちの包囲を後方に押しやっていく。

ここに蟲の王がいると言うのに、まったくのお構いなしだ。元々外からやってきた外来の種、むしろ当代の王を弑して王位の篡奪くらいは考えているかもしれない。

「ひええ……」

ぎちぎちと目の前に迫る巨大な同族のあざとに怯えながらも、リグルは必死に抵抗する。触角を立て、あらゆるチャンネルから従属を呼び掛ける思念を飛ばしているが、まったく影響が見られない。

ここに巢食った虫達は、図書館の魔道書を食い荒らし、魔法的な防御まで身につけているらしかった。一

機会展撃を受けることなくエンゲージを離脱する。
敵対的なクリーチャーの影響下における防御的発動には成功している。

旦はロイヤルダイヤモンドリングの威力にたじろいだものの、虎縞の背中を軋ませながら、再びパチュリーとリグルににじり寄ってくる。

書籍を食い荒らす魔虫は、呪文を媒介に行使するパチュリーの魔法そのものすらも喰いはじめたのである。身の危険を感じてリグルは眷族の召喚を試みるが、この状況では応じる声はない。

そんな中、当の主であるパチュリーは落ち着いたものだ。赤髪の司書を呼び寄せて何十冊という本を積み上げさせ、腰をおろしてそれらを読み始める。

「……目の前の面倒な連中を根こそぎ駆除する方法は……」

この期に及んで退治法を探し始めるパチュリーに、リグルは気が気ではない。

「ちよつと、何を悠長なこと——」

種族の権能。サモン・スウォームと同等の疑似呪文能力。
小悪魔は特例を除いて書籍の管理・防衛に関する行動以外を行えない制約がかけられている。

言いかけた瞬間。パチュリーの周囲に無数の魔術書が浮かび上がり、自動詠唱^{ウチナイド}によってひとりでページを捲り始める。全方位に増^{アブソリュート・イン}大^{スカー・ス・タフ}された識者の手^ミにより魔道書を読み耽りながら、パチュリーは静かに立ち上がった。彼女の周囲に五つの石が浮かび上がる。寶石のように輝くそれらは、硫黄と水銀よりエリキシルを、エリキシルより黄金を錬成し、アルス・マグナに至るパチュリー・ノーレツジの叡智の証、賢者の石^ミ。莫大な効果をもつ魔法の増幅装置をその身に纏い、膨大な書の海に身を沈め、蓄積された知識から、もつとも相応しい魔法^ミを新たに組み上げる。

それこそが動かない大図書館、パチュリー・ノーレツジの魔法。

まさに絶技^ミ。芸術的なまでに美しい詠唱は、音節にして七万と六千八十五の呪文をわずか六秒半で終わら

⁸⁸ 1レベルメイジ呪文。本一冊の中身を3時間かけて熟読したのと同じ効果を得る。発動には全ラウンドアクションが必要。

^キ 魔法の効果範囲と効力を増幅・拡大する錬金カテゴリーのレアアイテム。パチュリーはこれを5つ重複使用している。

せた。

「この図書館は私のものよ。金輪際、お前たちなんかには触らせない」

——金士符「ジンジャガスト」

一方的な宣言と共にパチュリーの喚起した魔法は、スペルの形こそ取っているが、その本質はまったく別のものであった。豪風となつて吹き抜けるのは、臭化メチル^{メチルプロマイド}、リン化アルミニウム^{アルミニウムホスファイド}を主成分とし、濃密なアルカロイド化合物を含む、猛烈な毒の蒸気嵐だ。高熱と毒素で虫妖の霊的受容体に作用し選択的に殺戮する死の燻蒸である。

毒妖霊^{ザリチエ}の息吹は図書館を吹き荒れた。毒霧の嵐に飲み込まれ、書架に取り付いていたシバンムシの群れは次々に泡を吹き、仰向けになつて絶命。見る間に塵になつて朽ちてゆく。死の番人たる虫をも一方的に駆逐する、暴虐なまでのスペル。

「ひあ……ッ」

押し寄せる毒霧にリグルが顔を覆いかけた瞬間。彼女の姿は柔らかな水泡の中に取り込まれていた。

「あ、あれ？」

水符「プリンセスウンディネ」。優しい水の防壁の中に取り込まれ、驚くリグルの傍には、同じく水泡に囲まれたパチュリーの姿もある。

宙にふわふわと浮かぶ泡の中、毒が自分を襲うことは無いのだと気づいて安堵の息を漏らすリグル。

十五分の作用の後、ジンジャガストの毒霧は綺麗に分解し、構成要素である酸素と水に分解されて消滅する。

「これで、お終いね」

破片すら残さずに朽ちたシバンムシ達を一顧だにせぬまま、パチュリーはこほつ、と小さな咳をして静かに告げた。



「……大変だったのね」
「本当よ。台無しになった本の修復だけでどれだけか
かることか」

時を経て、再び地下大図書館。

しぶとく生き残ったシバンムシの残党はリグルの説得に応じて投降し、図書館は復旧作業のただ中にある。赤髪の司書の指示に妖精メイド^ニやホフゴプリン^ニが奔走し、今日も時ならぬ騒がしさだ。

槌の音響く書卓には主の魔法使いに向かい合うように、森の人形遣い^ニアリス・マーガトロイドの姿があった。同じ魔法使い同士、二人はこの図書館で交流をもつ事が度々あった。時には白黒の魔法使いや悪魔の妹が混ざることもあるが、今日は二人とも姿が見えない。

^ニ 紅魔館に仕える妖精。役に立たない。

^ニ 紅魔館に仕える妖精。有能。

^ニ ヘルメス学派の魔法使い。ゴーレムの作成、使役に長け、従属数に上限を持たないほか、残り助力数を無視して従属体に命令を与え、使役できる。

い。

代わりに地下から響いてくる小さな地響きが、その
 答えだ。

「なあ、ところでパチエ」

「何よ」

書卓にはもう一人、別の姿もある。テーブルの端を
 占領し、咲夜のプリンを口に運びながら満悦のレミ
 リアだ。夜の王の威厳などどこ吹く風と、甘味に満足
 げな彼女は、スプーン片手に面白そうに卓上に顔を乗
 せる。

「あの虫、やけにパチエにご執心のようにだったが、そ
 の理由はわかったのか？」

レミリアの問いに、パチュリーは途端に不機嫌にな
 って本に顔を伏せた。

「? どうした、パチエ」

「うるさい」

首を捻るレミリアに、アリスが仕方ないわよね、と
 口を挟んだ。

「シバンムシの食害は、魔界でも問題にされているわ。
 最近の研究も進んでいてね」

「……アリス」

本の向こうから不機嫌な視線を飛ばすパチュリー。
 それ以上余計なことを言うなと咎めるような彼女の視
 線に、しかしアリスはくすくすと微笑んで、

「文字ではなくて、本そのものを侵す性質は魔法使い
 の悩みなの。対策はいろいろ進められているわ。防除
 剤として植物性の香油なんか有効なんだけど——」
 紫蘇^{ペリラ}、花薄荷^{マシヨラム}、支那肉桂^{ガブシア}など、多くの植物由来の香
 油は忌避剤としてシバンムシを遠ざける事が知られて
 いると、アリスは語る。

ただね、と指を一本立て、
 「植物由来の成分の中で、到手香^{パチュリ}の香油だけは、選択
 的にシバンムシを誘引するって研究^ミがあるのよ」
 「……成程ね、本の虫同士、気が合うってことか」

※ シバンムシ忌避剤 発行国…日本国特許庁(JP) 公報種別…公
 開特許公報(A) 公開番号…特開2001-163716 (P2001-163716A)

傑作だとばかり、腹を抱えてけらけらと笑うレミリアに、パチュリーは無然としたまま開いた本の頁に顔を押しつけた。

(了)

レフェラル・エフェメラ・ブックワーム

初出:七曜魔女の舞踏会 4(2014/6/29)

鈴奈庵の「字食い虫」の話に着想を得たお話。ブックワーム、本の虫と言えば一般的には紙魚を指すのですが、実際に書籍の被害を起こすのは全く別の虫であり、死番虫（英名デスリィ・ウォッチ・ビートル）などというカッコいい名前を持っていることを知って作りました。まあ乱暴に言えばパチュリーさんがすごいバルサンを焚いて虫退治するお話です。リグルはあんな感じですが蟲の王であり、レミリアとしては（たとえ小国家であっても、国王に対するには礼節が必要なように）一目置くべき相手なのではないかというのがちょっとこだわった部分。

当初はごく普通のお話だったんですが、直前になってこのままじゃ面白くないなとD&Dみたいな洋風ゲームの解説を付けることを思いついて盛り込んだという経緯があります。割と好評で嬉しい限り。

朋に囲む紅桂の宴

よく晴れた夜だった。竹林の四方には無数の篝火が小さく爆ぜ、夜半の月を照らしている。

足元にさあさあと流れる水音は、心地よく耳をくすぐり、涼となつて秋を運ぶ夜風を引き立てていた。

川面の上に設けられた宴席に、洋装をふわりとなびかせて舞い降りた吸血鬼レミリア・スカーレットは、口元から小さな牙をのぞかせる。

「ふうん。涼しげでいいじゃない」

「お気に召していただけたかしら？」

こたえて悠然と微笑むのは蓬萊山輝夜。

今宵は月下に集う姫君の会食——紅桂の宴だ。

永遠亭の姫君と紅魔館の主の間で、このような場が設けられるのはこれが初めてのことではない。月都万象展で顔をあわせて以来、妙なところで意気投合した

二人は、暇を見ては会うようになっていた。

今回は永遠亭がホスト側となり、竹林に紅魔館の面々を招待してのひと時である。

会食の場所は、竹の花畑の傍らに、川床を組んでの趣向を凝らしたものだ。

「今日はどんな素敵なものを見せてくれるのかしら」

「退屈にならないといいのだけだね」

この宴席、形の上では両者が親交を温めるための会食の場ということになっている。

しかし神社で開かれる宴会の出席率に比べ、席を囲む数はやけに少ない。永遠亭側に座るのは輝夜と永琳だけ。レミリアも連れているのはメイド長のみで、門番はさておき、妹君や友人の知識人の姿もない。

その理由は単純なものだ。

それぞれ月に縁の深い者同士とは言え、かたや月に住まう民、かたや月を仰ぐ夜魔、その在り方は大きく異なる。が、互いに不死を名乗り、部下を従え格調を誇りたい両者にしてみればどちらがより風靡を理解し

粹を知るか——それは、譲れない一線であつた。

『一番美味しい料理を用意しなさい！ それよりもはるかに美味しいものを味あわせてあげる！』

……などというやうなやり取りがあつたかは定かではないが、言わば永遠亭VS紅魔館、月のメニューVS運命のメニュー対決、というわけなのだった。

この場に集まる者が少ないのも、要は、どちらがより風靡で高貴であるかという子供っぽい意地の張り合いに、快く付き合ってくれる友人がどちらにもそう居ないということでもあつた。

「刻限ね。始めましょうか？」

「ええ、そうね」

とは言え、それぞれの主はそんな些細なことを気にもしていない。今日こそは相手を唸らせてやると意気込みもひとしお、自信たつぷりに笑っているのだった。今回のテーマは秋。夏を過ぎ、最初に月を頂いて開

かれる酒宴とあつて、お互いにそれに相応しいものを用意してきたようだ。

厳かに会食の始まりが宣言され、まず先手を指すのはゲスト側のレミリアとなる。

「……さて。ホストには敬意を尽くすべきね。咲夜」

「はい」

答えるか否か、傍らのメイドは小さく目礼して主に答えた。瞬き一つの間もおかず、卓の上には精緻な細工を施された切り硝子のグラスと、氷で冷えて汗をかいた背の高いボトルが一つ出現する。

瀟洒なメイドは澱むことない手つきで主の酒宴の席を整えた。

「どうぞ」

みつつのグラスに注がれるのは、すこしとろりとした琥珀色の液体。それがグラスに移され、ロックアイスの隙間を満たすと、グラスの縁からは馥郁と甘い香りが立ち込める。

「……お砂糖？」

グラスを手にした輝夜が、目を閉じて香を楽しむ。レミリアはそれに満足そうに笑みを見せ、紅い爪でつい、とグラスをつついた。

「ええ。うちの知識人に調べさせたのだけど、秋の酒宴で紅葉狩りだの紅葉酒だなんて言いながら、実際には紅葉を使うわけではないらしいじゃない？ だから用意させたわ。真正正銘、これが紅葉のワインよ」

「紅葉ではなくて、楓^{カエデ}ね」

隣に用意された従者の席で、同じようにグラスを手にした永琳が言う。なお彼女の分まで用意があるのは、単に輝夜の使用人ではないのを考慮してのことだ。

「この国では主に観賞用とされるサトウカエデの樹液を集めて、煮詰めたシロップを発酵させたものかしら。確かに糖分は十分だから単発酵で済むわね。……ウィスキーの香り付けにカエデの炭を使うというのは、聞いたことがあるけれど」

「勿論、今年のカエデを使わせたわよ」

傍らの咲夜をちらと見上げ、ぱたぱたと羽根を揺ら

して軽く胸を張ってみせるレミリア。メイプルワインにカエデの葉を使う訳ではないので、厳密には吸血鬼の言葉は的を外れているが、それをあえて指摘する無粋なものはこの場にはいない。

「ふうん……」

白い纖手で静かにグラスを傾け、月の姫はこくりと喉を震わせた。しばし瞑目し、やがて穏やかな笑みと共に唇を開く。

「少し甘すぎないかしら。子供になら好まれるかもしれないけれど。あまりこういうのは風情がないわ」

「それは残念ね。貴腐ワインに並ぶ高貴な甘さなのだけど」

レミリアがグラスを掲げると、咲夜が一步進みでてナイフを手にした。ぴ、とフレーバーに落とした朱の雫が、琥珀の液体を濃い褐色へと変える。

「紅葉まで独り占めして飲み干すなんて、なんとも吸血鬼らしく欲の深いことね」

「支配者が誰であるかを教えるのは、大切なことよ」

紅のすべては私のもの、と呟いて、レミリアは静かにグラスを干す。

ほのかな香りを残す空のグラスを卓上に戻し、吸血鬼は小さく唇を舐めた。ほんのわずか、その端から牙が覗くように。

「さて、今度はそちらの番。どんな秋を御馳走してくれるのか、楽しみね」

既に勝ったつもりで腕を組み、傲然と微笑む吸血鬼に、輝夜は袖元で口元を覆い、あらはしたない、と言つぶやいてみせた。

「催促なんてしなくてもあげるわよ。ねえ永琳」

「ええ」

月の頭脳の指示に従って、正装したウサギたちが列を作り盆を運んでくる。紅魔館の妖精メイドとは違って、命令があればそれなりに仕事をこなすのだ、と見せ付ける意図もあるのだろう。

卓上に並ぶのは、徳利と杯、そして鮮やかな紅を白の衣で取り囲む皿が一枚と、和の装いだ。

軽く一礼し、永琳が解説をかつて出る。

「趣向は似通ってしまっただけで、退屈はさせないよに、こちらではふた品用意させて貰ったわ」

杯は、薄く黄色に色付く酒精が八分。

そして、皿には紅葉の天麩羅が盛られていた。

「……ナイフとフォークのほうが好みかしら？」

「結構よ。和食は嫌いじゃないの」

吸血鬼が神社に通い詰めていることを知った上で、あえてこんな事を言うあたり、月の頭脳も相当に性格が悪い。

まずは小さな杯の中身を示し、永琳が言う。

「重陽はもう過ぎてしまったけれど、月と言えば菊杯。先程のメイプルワインに比べると、少し甘さに欠けるかもしれないわね」

「ふん……」

薄黄色の酒精に軽く口をつけ、レミリアは、続いて朱塗りの箸を取った。形よく揚げられた衣をつまみ、かるく苦笑。

「まさか、靈夢のところ以外で草木を食べる羽目になるなんて思わなかったわ」

「塩漬けにしてえぐみは抜いてあるわ。桜の花も食べるものでしょう?」

「……風流つてのも大変なのね。巫女はもっと大変なのかしら」

永遠に幼き紅い月の口元で、ぱりっ、と心地よく乾いた衣の音が響く。

レミリアは小さな口で、少しづつそれを噛み、飲み込んでゆく。彼女がひと通りの品に手をつけたのを見計らい、永琳は話を締めくくった。

「如何かしら。どちらも秋の品としては十分。そして特に眼精疲労に効果のある品ね。月の光に眩む眼も、時には休めることが大切よ」

「そうね」

箸をからんと放り、レミリアは自分のグラスを手にとった。もう一杯、ブラッディフレーザーの垂らされたメイプルワインを、口直しとばかり口に運び、

「こういうのはそこで扱き使われてる兎にでも食べさせてやるべきなんじゃないのかしら。まったく、月の民つてのは実に陰湿だね」

「あら、どういふこと?」

「どうもこうもない」

かたん、菊酒を満たしていた杯が、紅い爪にはじかれて倒れ、中身をこぼす。が、輝夜はそんなレミリアの不作法をとがめる様子もなく、笑みを浮かべた。

「お口に合わなかったかしら? 折角たっぷり甘くしてあげたのに」

「失礼ながら」

これまで沈黙を保ってきた咲夜が、一礼して前に出る。

「――仮にも月の姫ともあろう方が、自らの邸宅に招いた賓客を殊更に子供扱いするのは、些か無礼が過ぎるかと思えますわ」

次の瞬間、その纖手には銀のナイフが出現していた。「まして、レミリアお嬢様に月に酔うことを自重せよ、

などというのは愚の骨頂。論外かと存じます」

「あら。氣遣いのつもりだったのに」

無言で凶器を握るメイドを前に、なお余裕の表情でころころと笑う輝夜。

吸血鬼とそのメイドは、永遠亭側の出した品が、紅魔館側を明らかに侮辱したものと見抜いたのだ。

梅酒の要領で、菊の花を氷砂糖と一緒に漬け込んだ酒。そして同じく、砂糖漬けの紅葉の天麩羅。どちらも甘さたつぷりの『子供向け』のものだ。

薬膳として十分な効能を持つとは言うが、吸血鬼の眼をいたわるということは、つまりお前たちは月下に相応しくないという意味。レミリアがそれに気づけなければ間抜けと馬鹿にでき、氣付けば皮肉である。

「そもそも、この河上の宴席からしてどうかと思うのですけれど？」

「それは失礼を。心地よく過ごしてもらおうと思って用意したのだけど、お気に召さなかったかしら？ お日様だけでなく流れる水まで恐れるような主を敬愛す

る従者も大変よね」

「―――、」

「咲夜」

鋭く名を呼ばれ、わずかな逡巡を見せながらも、完璧で瀟灑な従者はレミリアの制止に従う。

ざわり、不穏な空気を漂わせ始めた会食の席で、夜の王は静かに口を開いた。

「戲言に付き合うことは無い。……千年も逃げ隠れているとそれはそれは陰口が得意になるようね」

「あはは、あんな珍妙なロケットの披露宴を盛大に開く吸血鬼の度量はさすがね。挙句、手が足りず巫女に縋ってまで打ち上げた結果があれじゃあ、笑い話にもならないわよ」

「……はっ。どれだけ多くの者を動かし、慕われ、敬われているかが主としての器よ。長いことモラトリアムで帝王学の基礎も忘れているのか？」

「そうよね、見栄張って役に立たない妖精ばかり集めて、頭数揃えているだけじゃあねえ」

「ふん。この小間使^{地上}が従っているのは、表にいた兎なんだろう？ 禽獸風情でも誰が偉いかよく分かつてるってことじゃないか」

おとなげないやり取りの応酬で、もはや決定的に場の雰囲気は破壊されていた。

だいたいレミリアと輝夜、双方ともが相手に勝ちを譲る気はさらさらなく、審判者のいない宴で高尚に勝敗が決する事は稀である。5回に4回はこうして弾幕勝負になだれ込むのだ。初めは渋々付き合っていたパチュリーが呆れて同席を避けるようになった理由もそれであった。

牙を覗かせる吸血鬼に、月の従者は弓を手に腰を浮かせる。今度はレミリアも咲夜を止めない。

じりじりと高まる一触即発の気配のなか、兎達はそそくさと避難を始めていた。気付けば、竹林の宴席には睨み合う彼女達しか残されていない。

そんななか、均衡を破ったのは従者の弓でもメイド長のナイフでも、姫君の神宝でも吸血鬼の槍でもなく、

「――どっちもそこまでにしときなさい」

ふわふわと宙を漂う真上から投げかけられた、半分呆れたような仲裁の声。

一同が思わず空を振り仰げば、そこには月を霞める様に空を飛ぶ影が二つ。

「霊夢？」

「おいおい、私は無視か？」

紅白の巫女の隣では、箒に風呂敷包みをぶら下げた魔理沙が軽く手をあげていた。

「なんか面白いことやってるみたいだから、顔出しに来てやったぜ？」

悪びれもせず歯を見せて笑う魔理沙に、輝夜は呆れた表情で肩をすくめる。

「呼んだ覚えはないけれどね。イナバたちは何してたのかしら」

「ええ、努力はしていたようだけど」

輝夜に答えたのはまた別の声。虚空にぬうと開いたスキマから、八雲紫まで姿を見せる。あまりに胡散臭

いタイミングでの登場に、永琳とレミリアが露骨に眉をひそめた。

「ひょっとして貴女の差し金？」

「ん？ 宴会は多勢のほうが好きいぜ。なあ霊夢？」

「いい迷惑よ」

興が覚めたばかり、レミリアはその場に腰を下ろした。しかし背中では楽しげに羽根がパタパタと揺れていて、主の心情を明確に伝えている。

隣で咲夜が実に寂しそうな、微妙な表情を一瞬だけ見せた。従者の心主知らずとはこのことだろう。

「月の独り占めは良くないぜ。ぜひ混ぜてくれ」

「あら、お子様には早いと思うけれど」

「そんなことはないな」

紫にまで自信たつぷりに胸を張ってみせる魔理沙。

毒気を抜かれた一同は、半ば諦めと共に席に戻る。

「折角食器まで持参したんだ、ご相伴に預かるぜ」

「なら中身も持ってきたさいよ」

「真心はありったけこもってるぜ？」

そう言う霊夢も思い切り手ぶらではあるのだが、敢えてそれを指摘する者はいなかった。どこか白けた空気の中、ぼむ、と小さく手を叩く音が響く。

「じゃあ、たまには私がご馳走させて貰おうかしら」
声の主は八雲紫。皆の視線の中、彼女はおもむろに隙間に手をつつまみ、ごそこそ中を探って小さな巾着を取り出した。

鼻歌まで交えながらその口紐を解いてゆくと、中には薄く金色をした細かい砂が詰まっている。

「なに、これ？」

「月の宴に、さても貴重な一品。月の砂よ」

「……ちよつと。この間の？」

第二次月面戦争の顛末を思い出しか、微妙な顔をする霊夢。しかし紫は扇子を広げ、

「いえいえ。こんな席で無粋な真似はしないわ。誓つてあの時、月から持ち帰ったものはひとつもないもの。……これはね、表の月の月の砂。月に辿り着いて思いあがった人間が、旗を立てるのと一緒に持ち帰ったも

のよ」

紫は宴席の朱杯のひとつを手に取り、そこにまたもどこからか取り出した酒を注ぐ。

さらにそこへひとつまみ、黄金の月砂を振り入れて、紫はレミリアと輝夜の前にそれを示して見せた。

「幻想が科学を呑む、これも一つの意趣返しではありますわ。月の民と吸血鬼、揃って呑むなら月の影なんかよりも、此方のほうが景気が良いのではなくて？」

そう言っていくすくすと笑う紫。

月影ではなく月を呑む……なるほど、境界を操るスキマ妖怪らしい実に胡散臭い論調だった。

紫の笑顔の前に、月の姫と紅魔の主は、顔を見合わせて小さく吐息し、互いに月砂を振り入れた杯を手に取り。

「――貴女の顔に免じておくわ」

「いつぞやの迷惑料、ということね」

二つの杯を交わし、勝負の結末を有耶無耶に。

ここはひとまず手打ちという雰囲気になった中。霊

夢たちも思い思いに朱杯を手取る。酒精を干し、さかづきの底に残るひとつまみの砂をさりつと噛み、

「月の風味ね」

「月味だな」

「あら、月のお酒はもっと洗練されているわ。これで月の味だと思われるのは心外よ」

いつしか、すでにいつもの宴席となりつつあった。

「いい月だねえ」

どこから来たのか河床の端にはごろりと寝転がる酔いどれ鬼の姿まで。頬をほんのりと紅く染め、瓢箪を傾け、月砂を注いだ大きな杯をくいと煽る。

「あ」

「いつの間に」

「固いこと言いっこなし。宴会のにおいがあればどこにだって、つてね。独り占めはよくない。みんなも萃めてあげたから」

「はあ……ったくもう」

呆れる霊夢も、すぐに気を取り直して食事に手をつ

け始めた。食べるものが紅葉の天麩羅くらいしかないことにあれこれ不平を言いながらも、レミリアが咲夜に命じて用意させた料理に箸をつける。

「あら、あなたは付き合わないの？」

空の杯に口を付けたまま、しかつめらしい顔をして、いる魔理沙に、輝夜が声をかけた。

「いや、ちつとな。よく考えたらこんなの呑んで平気なのかと思ってな……」

蒐集家としての好奇心と、禁忌なる月に対する魔法使いとしての直感からか。じつと杯を見つめる魔理沙に、輝夜は小さく微笑む。

「そうね。あまり良くはないんじゃないかしら。特に人間にはね」

「おいちよつと待て輝夜、おどかすな。気味が悪いぜ」

「ふふ。まあ夢じゃなくって良かったんじゃない？」

「夢……？」

魔理沙はしばし首を捻り、はたと気付いたように頬を赤くして顔を上げる。

「つておい、紫!!」

「ふふ、だから言ったじゃないの。お子様にはまだ早いつて。……朋に月見る月は多けれど、よ」

微笑む紫は隙間に引っ込んで魔理沙から逃れると、空に掲げた月杯を傾け、朱に染めた頬をふと緩ませた。

(了)

月方浄土と彼の岸边

「ん……？」

ぎし、ぎし、と耳障りな音と共に、不安定に揺れる身体。背中の感触はお世辞にも柔らかいとは言えず、腰まで痛い。寢覚めは最悪の部類だった。

「永琳、……ねえ、永琳、いないの？」

寝起きにぐらぐら揺れる頭を振って、輝夜は従者の名を呼ぶ。

が、そこで聞きなれた八意永琳の声が答えることはなく――

「ああ、やつとお目覚めかい」

代わりに、やけに馴れ馴れしい赤毛の死神が、ぼんやりとした視界のなかに映る。

ちやぶ、と揺れる水音を聞きながら、輝夜は細めた目を眠そうに開き、頭を擦って身体を起こした。

永遠と須臾の姫君、蓬萊山輝夜が目覚めたのは、柔らかな布団の中でも、退屈のままに転寝をしてしまった炬燵の中でもなく。小野塚小町が櫂を握る小舟の上。いわゆる三途の河の上であった。

「ええと」

いまいち事態が飲み込めず、輝夜は眉をよじらせてあたりを見回し、目を閉じて、深呼吸をひとつ。困ったことがあればまずは素数を数えて冷静に事態を把握しろ、というのは永琳に言い聞かされていることだ。

結局それでも何故こんなところに居るのかは分からなかったが、すべきことはすぐに理解できた。

「とりあえず吹っ飛ばしておけばいいかしら」

「いやちよいと待てお姫様」

ごそごそと懷から蓬萊の珠の枝を取り出した輝夜を、小町が慌てて制する。

「なんだいその乱暴な結論は？」

「決まってるでしょ？ 帰るのよ」

「どこにだい？ 悪いがあんたにやもう帰る家はない

よ」

呆れた表情の小町を見上げ、輝夜はかるく船の上を後ずさり、胸元を不安げに押さえて眉をひそめる。

「……誘拐？」

「あのねえ。……もちつと普通に考えなつて。ここは三途の河で、あたいは死神だ。そうなりや自分がどうなったかくらいはわかるだろう？」

「生憎だけどさっぱり分からないわ」

心底不思議そうな顔で首をかしげる輝夜に、小町は一目瞭然だろうとばかりに肩をすくめてみせる。

「死神が用事したらひとつだけさ。いいかい、死んだんだよ、お前さんは」

「……………どうして？」

悲しいかな、絶望的なまでに話が噛み合っていないかった。

だめだこりゃと呟くと、小町は櫂を放し、舳先にひよいと腰を下ろした。漕ぎ手が居なくなつても小舟はそのまま、ゆっくりと波の無い河面を進んでゆく。

だったら始めから漕がなくてもいいだろうにな、と輝夜は思つたりした。

「つまりだお姫様、人間、生きてりゃいつかは死ぬもんなのさ。まあ確かに急のことだ、分からんでもないけどね。普通は棧橋から始まるもんだし。幸いここはそういうための場所でもある。あんたもじっくり考えて、死を受け止める時間をつてね——つてだからなにをやつてんだ!？」

舟から飛び降りようとしていた輝夜を見つけ、小町は慌ててその襟をぐいとひつつかむ。引き戻された身体は舟の上に倒れこみ、小舟はぐらぐらと揺れ動く。

「……けほ。ちよつと、離してよ誘拐魔」

「あーもう、だから違うつて言つてんだらうに!!
落ちたら浮かんでこれないんだ、この河はっ」

「あなたこそ何を勘違いしてるのか知らないけれど、私はこんな所の世話になる気はないのよ」

その通り。何故なら、蓬萊山輝夜は不老不死であるからだ。永遠と須臾を操る程度の能力と、月の頭脳の

叡智の結晶にて精製された蓬萊の葉。

一度手を出せば大人になれず、二度手を出せば病苦も忘れ、三度手を出せば永遠の苦輪に悩み続ける。

その、筈なのだ。事実これまで何度も死ぬような目に遭い、そのたびに死なずに生きてきた。蓬萊の葉とは、そういうものであるはずだ。

「……おいおい、ここまで来といてそりゃあないだろう。現にあんたはあたいの舟に乗ってる。こいつはね、死後の魂以外は乗れないようになってんのさ」

死神は呆れたように後ろ頭を搔く。

「最近冥界の管理も緩くてアレだがね、いまさらやゝめた、で帰られちゃそれこそ三途の意味がない。これは例外なく決まってることだね。無視されちゃあたいの立つ瀬もないってんだ」

「でもねえ、私、死なないはずなんだけど」

「そりゃあたいに言われたって困る」

なんかあったんだろ、と実に適当な事を言つて、小町は權を握りなおした。

再び、小さく音を軋ませて、死神の操る小舟が河面の上を滑ってゆく。

しばらくその舳先を見つめ、ふうと吐息をひとつ挟み、輝夜はとりあえず舟の上に腰を下ろす。

試してはみたがなぜか不思議と飛ぶこともできなくなっていた。死神に気付かれないようにこっそりと動かしてみた神宝も、その力を發揮しない。おとなしくをせざるを得ないというものだろう。

「……納得できたかい？」

「まあ、私が死んでるかどうかは置いておくとして。……なんでここに居るのが全然思ひ出せないんだけど」

それで納得なんて言われても困るわ、と輝夜は口を尖らせる。

「そんなの変じゃない。死んだ人間って、その時の事を覚えてないものなの？」

「そいつは場合によるね。死因に関わらず、自分が死んだことを理解できない魂ってのは居る。はつきりと

死を自覚できてるやつは、生前の姿をしてないことが多いね。たまに見るだろ、あの白くてふわふわした魂。あれがそうさ。自分が死ぬ前と違うことを受け止めて、そうやって現世との未練やら迷いを断ち切るんだ。逆にお姫さんみたいに、身体の重さも感じられて、モノに触れることができたりすると、死んだのを自覚するまでにえらく時間がかかる」

「へえ」

「……人がせっつかくやる気出して解説してやってんだからちつとは真面目に聞きなつてのに」

「興味ないんだもの」

実際、どうでもいい話と言えば本当にどうでもいい話だ。輝夜は手のひらを頭上にかざし、開いては握る。仮に自分が魂だとして、そこにはもう何も無いのだと言われても、確かに感じる手指の感触は、とても気の迷いとは思えない。

「で、死んだ人間の罪を図るのがこの河さ。魂はみんなここを渡っていく」

「知ってるわ、あなたの上司のところでしょう」

「言っとくけど、仕事に私情は挟まないひとだから顔見知りだからって気安く話しかけたりしないようにしなよ。……裁判の法廷で反省してないのはよろしくないからねえ」

「裁判ねえ。悪いことしたのかしらね、私」

「……とりあえず、何回人殺しをしたのか考えてみちやどうだい」

「死んでないじゃない」

小町が言いたいのはわからなくもない。……けれど、死なない相手を何百回殺して、それがいったいなんの罪になるというのだろう。

輝夜が首をひねっている間にも、ぎ、ぎい、と櫂を軋ませ、小舟は広い河面を進む。

ゆらりと見えた黒い影は、この河に棲む旧い旧い魚の幽霊だという。イナバの一匹がそんなことを言っていたな、というのをなんとなく思い出し、輝夜は目を閉じた。

しばし、死神が舟を漕ぐ音だけが沈黙を埋める。

が、すぐに退屈になって輝夜は小町を振り返った。

「ねえ、まだ着かないの？」

「さてね。少なくともお姫さんの場合はまだ掛かるんじゃないかね。……ほれ、いつだったかスキマ妖怪の式が解明したろ。三途の河幅は、渡る魂の罪によって決まるのさ」

「だから、私悪いことなんかしてないわよ？」

「……人殺しだけじゃないさ。自殺もそうだが、天命を捻じ曲げちゃうのは大体にして良くない事だ。あんたは永遠を生きる不死の姫だろう？ 死なないってことは、それだけでも罪なのさ」

「そんなもの、穢き地上の罪でしょう」

関係ないわ、と輝夜は言う。

「初耳だね。月人じゃ、別の地獄があるのかい？」

「そんなものないわ。月に還るのよ」

それを、本当に信じていたわけではないけれど。

でも、長い長い日々の中で、輝夜は確かにそう思っ

ていた。

「月には地上で使われなかった才能や、叶わなかった夢が沢山仕舞われているの。地上にあつて穢れることを嫌ったものは全部月に集まったわ。だから豊かなところなのよ」

だから、空に在って浄土となった。月とはそういう場所なのだ。

「んじゃあ、どうしてお前さんはそんな立派な月を捨てたんだい？」

「……………」

「つと。ちいと揺れるよ」

輝夜が答える前に、小町がそう言つて深く權を動かす。

ぐん、と流れを曲がつて、小舟は波の大きな場所へと出る。河面には小さな島があり、そこには一面に紅い花が群れ咲いていた。静かに風が吹き、紺色の空に伸びる紅い花が揺れる。

「聞いている限りじゃ、月つてのは素晴らしいところだ

そうじゃないか。あの八雲紫が攻め込もうって思うくらいだ。お前さんの言うとおりで、豊かで綺麗な場所なんだろうねえ。それこそ、迎えに来た連中まで返り討ちにして、千年も隠れ潜んで、逃げ回ってたんじゃ理屈に合うまい？」

「……説教臭いのは閻魔のほうで、死神は怠け者だって聞いてたのに。ずいぶん熱心なのね」

「今日のところは真面目に仕事してるって言っただろう？ お前さんみたいなのはいろいろ大変だよ。いつまで経っても彼岸が見えないからね。……まったく、死ねないってのは罪深いことだね」

「きや。ちよつと、もう少し静かに動かしなさいよ」

ぐら、と舟が揺れる。危うく倒れそうになって輝夜は縁を掴み、声を上げた。

しかし小町は、一向に介せず權を握ったまま。振り向こうともしない。

「お前さんの言うとおりで、一人で死ねなきゃそれは罰だ。あたいの出る幕でもないし、沙汰もなにもあった

もんじゃなさい。けどねえ。死なない生命がひよこひよこ仲間を増やされちゃ、いろいろ拙いんだってことさ。……ま、丁度いい機会だ。予行演習も兼ねて、少しは考えておくといい」

また大きく舟が揺れる。なにか大きな渦にでも巻き込まれたのか、輝夜はどうとう舟の上に投げ出され、悲鳴を上げる暇も無く上下左右に揺さぶられる。

いつしか小舟の先の小町の背中が遠ざかり、周りが緩やかにぼやけて――



「――い、おい、輝夜、おいっ!!」

がくがくと揺さぶられる視界が、ぼんやりと焦点を結んでゆく。さっきまでの光景が嘘のように、はつきりと実感を伴った身体の重さを感じられた。

肩を掴む、熱くて力強い手。燃えるように猛る心。そうして、すんと抜け落ちていた記憶が喉元から

腹の底に落ちてくる。

「あれ、もこたん？」

「……………」

目を開けた輝夜に、がつくりと脱力するように、妹紅は大きく息を吐いた。肩を掴んでいた手を離し、気が抜けたようにどさり、とその場に腰を下ろす。

そんな妹紅のやけに必死な形相が可笑しくて、輝夜はくすりと笑った。

そう。何のことはない、いつもの夜毎の殺し合いの最中だった。どうした具合だかいつものようにスペルカードを宣言したところでふと気が遠くなつて――

「つたく、もこたんじゃないっての。……人騒がせな」

「なあに、ひよつとして心配してくれたの？」

「違うっ!!」

即答で叫ぶ妹紅。幾分紅いようにも見える顔を、反らしながら早口で、

「なんなんだ、急に動かなくなるし……罠かと思つてたらなんも反応しないし、適当に四、五回焼いてみた

のに逃げる様子もないし」

「そうね。変な夢だったわ」

つぶやいて、輝夜は身体を起こそうとし――そのままかくん、と地面に突つ伏した。手足にまるで力が入らず、まるで骨のない肉を継いでいるようだ。

「おい、輝夜？ なにやってんだ？」

「……………」

しばしもがいてから、輝夜はふう、と吐息をひとつ。

「よく分からないけど、起き上がれないみたい」

「おいおい」

「大丈夫よ、たまにあるんだから」

顔色を変える妹紅に適当に答えて、輝夜は重い身体を引きずつてごろんと寝返りを打った。仰向けになりながら、ほほをくすぐる下生えの感触に目を細める。

「途中だった気がするけど、まだやるの？」

「そりゃこっちの台詞だ。……だいたい待ってやつてたのこっちだろ」

「そうね、なんか気が抜けちゃったわ」

さらに、と波打つススキの海原を見、輝夜はしばし、妹紅の言葉を待った。

が、妹紅もなにを遠慮しているのか一向に何も聞いてこないで、結局自分から話す事にする。

「なんだか分からないけど、三途の河を見てきたわ」

「あの、ぐーたら死神のか？」

「ええ。結構、珍しいものを見れたのかもね」

たぶん、一生縁のない場所だろう。そう思ってみれば、貴重な体験かもしれない。

「……死なないんじゃないのか、おまえ」

「だから、こうやって戻ってきてるじゃない」

おかしいわ、殺そうとしてたくせに、と輝夜は笑う。

——けれど、それは少しもおかしくはない。生きていなければ、殺そうとなんてしやしないから。

「だいぶ涼しくなったわね」

さらさらと、風に波打つススキの穂。月の海とはまた違う、黄金色の波間。あと数日もすればやってくる中秋の名月にもさぞ映えることだろう。

「暑さ寒さも彼岸までって言うしな」

「それじゃあ、私はいつまで経っても涼しくならないじゃない」

口を尖らせる輝夜に、妹紅はあのなあ、と頭を掻き、

「わがまま言うな」

「それがお姫様の仕事なのよ」

よく知らないけどね、と呟いて、輝夜はもういちど寝返りをうった。

と、そこで視界の端に見覚えのある紅い花を見つけ、輝夜は妹紅の袖を引っ張る。

「ねえ」

「どうした？」

「あれ、取ってきて」

「は？」

「いいから。動けないのよ？ 私」

「……なんんだお前は」

妹紅はぶつぶつと文句を言いながらも、意外と素直に輝夜の言葉に従った。月下に群れ咲く緋色の曼珠沙

華から一輪を摘み、戻ってくる。

緑の細い茎から放射状に広がる花弁は、まるで赤く咲いた血の仇花のよう。手渡された緋花を見、妹紅によく似合うわ、と輝夜は思った。

「……で、彼岸花がどうした？」

「それがいっぱい生えてたの。三途の河岸に」

「……生と死の境界に咲く花だからな。」

そういや前に聞いたことがあるな。彼岸花は株でしか増えないんだそうだ。種ができないんだとかで」

「へえ……」

境界を隔てる花を覗き込み、輝夜はふと思い浮かんだ疑問を口にする。

「ねえ妹紅」

「あん？」

「あなた、子供欲しいって思ったことある？」

「……きゆうになにいつてんだおまえ」

至極普通のことを聞いたつもりだったが、妹紅にはどうもあまりに想定外な質問だったらしい。返事が平

仮名なところを見るに、相当に動揺しているようだった。予想外の反応に、にいと笑顔を見せながら輝夜は妹紅の顔を覗きこむ。

「なによ、今更そんなの恥ずかしがる歳じゃあないでしょうに、お互い。もう何百回も、軀の内側の奥の奥まで、ぜんぶ見せ合った仲じゃない」

「だからおまえはな」

頬を突つついてからかっていたところを、ごちんと頭をひっぱたかれ、輝夜は思わず声を上げる。

「いったーい!? なによ、もこたんの乱暴者ー!!」

「ああもうだからってお前はなあ!!」

変なところで純情だな、と呆れかける輝夜だが、よく思い出してみれば、出生の怪しさはともかくいつだって藤原不比等（ふひの皇子）の娘なのだ。本来はそんな態度のほうが普通なのかもしれない。

「……ったく、なんなんだ唐突に」

「不死人の子供は、死なずに生きてくれるのかしら、って思ったのよ」

良くはわからないが、三途の河で死神に説教される
というのは、まあたぶん、生きていることを理解しろ、
という意味だろう。違いかもしれないが輝夜はそう思
うことにする。

「知らんが、多分無理なんじゃないのか」

「そうよね」

薄く笑う妹紅に、輝夜も頷いた。

「本当に、難儀なもんねえ。死なない、死ねない、死
のない。生まれ生まれ生まれ生まれて生の始めに暗く
死に死に死に、死んで死の終わりに冥し、か」

閻魔も困るわけね、と輝夜は大きく伸びをひとつ。

「ねえ、妹紅」

「あん？」

「そろそろ帰りたいんだけど」

「……なんだその手」

「気が利かないのね。動けないから、送って頂戴」

「おまえな」

つくづく図太い奴だな、などとぼやきながらも、律

儀に抱きかかえようとしてくれる妹紅の胸に、そっと
額を寄せて。輝夜はそっと目を閉じる。

「本当に、野暮で困るわね。妹紅は」

「何言ってんだひきこもりめ」

空に在る月は、悠然とその銀光を地上へと投げかけ、
真円の縁に輝きを満たしていた。

(了)

朋に囲む紅桂の宴

初出：月の宴 2(2009/9/22)

「月の砂漠にはるばると -Antiquity mechanism-」収録

究極VS至高のメニュー in 幻想郷。月をテーマにした短編集でしたので、紅き月と月の姫君の対戦となりました。タイトルにひたすらに「月」が入っているのも、この月対月のイメージです。やりやいいってもんじゃない気もしますが。お互いに本当に美味しいと思っているというよりは、どれだけ酔狂や風流を解するかという遊びみたいなものであるのかも。

月方浄土と彼の岸辺

初出：月の宴 2(2009/9/22)

「月の砂漠にはるばると -Antiquity mechanism-」収録

蓬莱人が一時的に死んだとき、どうなるのだろうという単純な思い付きによるものです。実際は小町のところに行く前に通行止めになってる印象もあります。

輝夜のお姫様成分をきちんと表現したかったのと、おなじ不死者としての妹紅との、サツバツし合いながら分かちがたい絆みたいなものを描けていれば幸い。

鳥と兎が匆々しく

天文密葬の秘儀が解かれてなお、竹林の季節は緩やかに巡る。

秋も深まるこの季節、永遠亭の中庭にも時折冷たい風が吹き込んで、冬の先触れを知らせていた。

縁側に取り込んだ布団の上、ふかふかの耳を広げて寝転がり。忙しなく洗濯物を取り込んでいる小間使いの兎達を見ながら、因幡てゐはふわあと大あくびを一つ。

「みんなー、サボらないようにねー」

空を見上げれば、さらさらと揺れる真新しい竹の葉の群。竹は春に紅葉して葉を散らせ、秋に若々しい新葉を茂らせる。時間も空間も流れの異なる迷いの隠れ里を覆い隠すには、なるほど相応しいものなのだろう。「今年の夏はお天道様が二つ出たのかと思うくらいだ

ったけど、随分冷えるねー。……自前の毛皮のある身としては、今ぐらいがやっと落ち着けて結構だけど」
おひさまの匂いする布団にぐりぐりと頬を擦り付け、てゐが心地よさにうとうととまどろんでいると――

「こら、てゐっ」

ぬくぬくと包まっていた上掛けを引き剥がされ、てゐは、ごろんと廊下に放り出される。

ブレザー姿の鈴仙が、腰に手を当てて見下ろしていた。

「んもー、なにをするのよ鈴仙」

「またアンタはひとりだけサボって!」

「ちえー。やることやってんだからいいじゃない。ちゃんと皆サボらないように見張ってるんだからさー」
口を尖らせ、反省の色もないてゐに、鈴仙は疲れたように深いため息。

「ほら、鈴仙もお疲れみたいだし一緒にどう? シェスタのひとつも赦されないなんてブラックな労働環境すぎるんだってば」

「なに言ってるのよ」

そう言いつつも、鈴仙も温かそうな布団に心ひかれて
いるのは確かだった。穏やかな午後の陽射し、静かに
揺れる竹の葉の音、揺れる心情を表現するように、
スカートから飛び出した尻尾も小さく揺れている。

それを目ざとく見つけたてゐるは、ひょいと鈴仙の脚
を引っ掛けた。

「うぶっ!？」

「よーし、みんななかかれー!!」

「二三わー」

ぼふ、と重ねた布団に倒れ込んだ鈴仙に、いつの間
にか集まつてきた兎達が次々と飛びかかってゆく。

「っ、きゃあ!？」 ちょ、やめっ、わああああ!？」

たちまち兎達がぎゅうぎゅうと押しくらまんじゅう
を始める中、鈴仙は餡子にされて悲鳴を上げる。

「ちょ、ど、どこ触ってっ、ふああ!？」 やっ、だめ、
そこくすぐった……っ!？」

「おお、えろいえろい。やらしー声で哭くねえ鈴仙?

えろすネタにはすかさず飛びついて、あざといね鈴仙
ちゃん実にあざとい」

「違——って、ちよつとどいてっ!？」

兎団子の具にされていた鈴仙が、ふいに表情を陰し
くして身を起こした。上に乗っかっていた兎達をごろ
ごろと転げ落とし、長い耳をぴんと震わせて立ち上
る。

「れーせん?」

兎達の下敷きになって、ぱちくりと目を瞬かせるて
ゐをよそに、ひとり真剣な表情の鈴仙は鋭く地面を蹴
って庭へと飛び出す。

「そこかっ」

赤い目を見開いて光の波長を操作し、彼女は見定め
た竹林の一角へと、風を切り裂く高速の弾幕を撃ち込
んだ。

「痛——っ!？」

弾幕の斉射は狙い過たず揺れる竹の葉を穿ち、ぱき
ゅーん、と軽快に撃墜音を響かせた。着弾地点の若竹

を揺らしながら、そこに潜んでいた何者かが落つちてくる。

中庭に転がり出てきたのは、長い黒髪少女だった。

「……ふ、ふいうちとか、なしでしょ……？」

それだけ呟いて倒れ込む彼女に、鈴仙は警戒を解かずじつと伸ばした指先を構えるが――

「……誰？」

べしゃんとうつ伏せに倒れ込む少女は、白のブラウスにチェックのスカート。足元にはニーソックスに高い一本歯の下駄という服装で、髪を左右に括って紫のリボンでまとめていた。

この付近では見かけない格好で、それなりにあちこちに顔の利くてゐにも見覚えがない。

「えっと……」

同じく心当たりはなかったのだろう。鈴仙が縋るように視線を向けてくる。

てゐが黙って首を横に振ると、月の兎の頬を冷たい汗がつうと滴り落ちていった。

「ねえ鈴仙、撃つ前にだれか確認してからでも遅くなかったと思うんだけど」

「わ、わかってるわよ!?　　っていうかそんなに威力強くしたつもりは……あれ……?」

指先をのぞき込んで首をひねる鈴仙をよそに、てゐは倒れ込んだまま身動き一つとらない彼女のそばへ近寄ってゆく。

「……おい?　　ねえ、生きてる?」

「……………」

爪先を伸ばしてつんつんとその頬を突っついてみるが、彼女はぐったりとしたままで目を覚ます様子もない。

「あーあ。鈴仙、こりゃーやつちやつたかなあ?　　い

つかやると思ってたけど」

「や、やってないわよ!?　　ちゃんと加減したもん

!!　　その……多分っ」

「意地張らずに素直に白状するウサ。情状酌量の余地はまだあるよ?　　これ以上新キャラが出てくると、ま

すます存在感危うくなるだけもんね」

「なんの話よっ!？」

と、二人が馬鹿なやり取りをしている間に、少女がわずかに身じろぎをする。どうやらまだ息はありそうなことに、鈴仙は静かに安堵し――

「……ふーむ」

目を回している少女の姿を一瞥し、てめは面倒そうに眉をひそめる。

「どうする? 埋めちゃう? 鈴仙が」

「なんで私なのよ!?! 対応おかしいでしょ!?!」

「……ねえ鈴仙? 綺麗事だけじゃ人気商売はやってけないんだよ?」

「さっきのアンタの本音なわけっ!?!」

「う……」

「あ、起きた」

物騒なやり取りに刺激されたか、ようやくもぞもぞと少女が動き出す。

土に汚れた顔、したたかにぶつけたであろう鼻先は

赤く擦り剥けていた。上半身をゆっくりと持ち上げて唇を開き――

「み……」

「み?」

聞き返した鈴仙の前。ぷるぷると、最後の力を振り絞って、

「水……」

ばかり。

既に丸三日、竹林で迷い続けていた姫海棠はたては、それだけ呻いて気を失った。



「はあ……」

寝台の上、鼻の上に大きな絆創膏も痛々しく、姫海棠はたては大麦と野菜のスープを啜りながら、ようやく血の気の巡りの戻ってきた顔で息を吐く。

その脇では看護帽を頭に載せた鈴仙が申し訳なげに

肩を落としていた。

「ごめんなさい。その……ちよつと早とちりしちゃつてて……」

「本当よー。いきなり撃つてくるとかどうなのかしらー」

「まーまー、落ち着くウサ。一発だけなら誤射かもしれないから」

「直撃してるんですけどー!？」

鼻を示して毛布を叩き、ひとしきり抗議していたはたてだが、ふと急に表情を変え、不敵な笑みを覗かせた。

「でも、あの迷いの竹林にこの嚴重な警備、ますますもって間違いないわね。もうこれぞ月の姫の隠れ家って感じじゃないっ♪」

「姫様？」

「そうそう。ここに千年も引き籠ってるって有名な、かの月のかぐや姫様が住んでるのはもう調査済みなんだからねー？ 私はその取材に来たってわけよ」

まるつきり自分のことを柵に上げつつ、はたては残る野菜スープを具ごとかき込むようにして飲み干す。
「むぐ。文のやつにトラウマ植え付けたって言う五つの宝物とか、難題ってやつとかについて色々聞きたいことがあるんですけどー？」

取材。難題。聞き覚えのある単語に、てゐと鈴仙は貼り付けた笑顔の下で、さりげなく視線を交わす。

「つてことは、やつぱりあんたも天狗なんだ？」

「当たり前じゃない。えつと……」

はたてはいそいそと傍に置かれていた頭襟とぎんを被り、ポケットを探つて印刷したてのインクの香りの名刺を取り出して胸を張つてみせる。

「花果子念報の姫海棠はたてって言いますけどー。責任者の人ってどちらですかー？」

「あー……」

「やつぱり……」

真新しい名刺を前に、鈴仙とてゐは微妙な表情。しかしはたてはそんな二人をよそに自信ありげ腕を組ん

で、

「それにあなた達のこともちよつとは知ってるんだからねー。ふたりとも人間の里で葉売りしてるんですよ？ 八意印の置き葉つての」

「へえ。おシショーの葉も有名になったもんねえ」

「そうそう。で、確かあなたが幸せ兎って評判なのよね。みつけると幸運が訪れるとかー」

「クローバー四十枚分くらいはね」

たとえ相手が天狗でも、褒められて悪い気はしないのか、てゐは得意そうに胸を張ってみせた。

さらにはたては鈴仙のほうに視線を向け、

「で、こっちの兎さんがエロ担当のほう」

「こらあ!？」

「おー。良くわかつてるねえ。新参ホイホイなんて言われたのも過去のこと、いまじゃすっかり没個性の有象無象に埋もれて、格闘戦の性能の悪さとか、座葉ネタの他にはもう十八禁要員の穴埋めくらいにしかお声のかからない哀れな月兎だよ」

「待てー！おッ!？」

鈴仙が声を張り上げるが、てゐははたての傍に近づいて、わざわざ聞こえるように耳打ちを始める。

「気をつけた方がいいよー？ こんな可愛い顔して、これ以上人気無くならないように、新キャラと見れば実力行使もためらわないよーな武闘派だから」

「ま、マジでー!？」

「またアンタは息するみたいに嘘をー!!」

ばんつ、と激しくテーブルを叩いて抗議の声を上げる鈴仙だが、急に何かに気づいたようにぱつとベッドの傍を離れて距離をとる。

不審な顔を見せるはたての前で、ずりずりと後ずさりしながら、しきりにスカートの裾を押さえこんで、

「じゃ、じゃあ、……その、やっぱりあなたも撮るの?」

「なにを?」

「ば……ばんつ、とか」

「撮らないわよー!？」

顔を赤らめ告白みたいに言ってきた月のウサギに、

はたては悲鳴を上げていた。しかし鈴仙は目に涙をためながら、ふるふると首を振るばかり。

「で、でも、前のときはさんざん……嫌だって言ったのに、無理矢理……っ」

「鈴仙、忘れるウサ。犬にでも噛まれたと思って」

「あーもー、文のやつ!? どんだけ天狗を貶めてるんだーっ!!」

毛布の上に突っ伏してうなだれるはたて。

「うー。……そりゃね、天狗の新聞で派手さとか醜聞を好まれるのはそのとおりだけどさー。程度ってモノがあるじゃない? 見出しとインパクトだけの写真で売ろうって魂胆とか、私は好きじゃないんだけどー」

ちなみに、はたてが念写能力で山の外の写真を撮ろうとしたところ、その八割が桃色淫乱なものを想像させるものであったりして、激しく脱力する羽目になった。

「だから、天狗の新聞がいかかわしいものだななんて思われるのは我慢ならないのよねー」

「ふーん。天狗にしちゃ殊勝な心がけだねえ」

「あいつとおんなじやり方で勝てると思えな……ごほん。あ、あいつの真似なんかして勝っても当然ていうか、つまらないしー?」

はみ出した本音はしまい直して、はたては握り拳も力強く兎達に訴える。

「だからこそ、誰も注目してないようなところの記事を書いて、そこに新しくファン層を開拓すればー、文の新聞だって簡単に追い抜けるって感じじゃない?」

「あー、それでわざわざ、公式にも稀有な美少女設定もどこへやら、自宅警備どころか盆栽の手入れすらも仕事と言いつける人気絶不調な竹藪のニート姫の取材に来たわけね」

「てあ! またあんたはそんな悪口言って……」

「事実ですが何か?」

真顔で言われ、鈴仙も思わず返答に詰まる。

「う。……えっと、その、確かにそうかもしれないけど、そこはその、色々とね? 大人の事情が……」

「にしても間抜けな話だねえ。天狗が迷って干からびてるだなんて。取材にきいて患者になるなんて、自分で三面記事にでもなるつもり？」

「あー、酷いなその言い方ー。そりゃさ、ちよつと迷ったけどー？ ああ竹林、罌とかもたくさんあったし、あれちよつと普通じゃないって言うかー？ でもでも、あれくらい私が本気出せば簡単になんとかなったと思うけどねー？」

「そう？ 前に来た天狗なんか迷いもせずに邸まで一直線だったけどね？」

「そそそそそんなの、当然じゃないー。っていうか私も同じことくらいフツーにできるんですけどー？」

正確には真似のできそうな知り合いが文くらいしかないということなのだが、無論そんなことが裂けても言えるわけではない。

「とにかく！ こんな所で病人やつてる場合じゃないのよねー。早くそのお姫様に独占インタビューを……」
カメラを取り出そうとしてスカートのポケットを探

り、はたてはびたりと動きを止めた。

「……………」

ごそごそと服の中を探る手のひらが強張り、少女の顔からさあーっと血の気が引いてゆく。

「……？」

「か」

「か？」

（かかかかかかかかカメラなくしたーっ!?）

すかさずとポケットの中で空を掻く指先に、少女天狗の背中からどつと汗が吹き出す。

毛布の下で何度改めても、どこにも慣れ親しんだカメラの感触が見当たらない。

（ええええーっ!? 何これえーなにこれー!? こ、ここにしまったはず……よねー？ ……ちよ、ちよい待ち落ち着け、落ち着けわたしー、落ち着けー？）
しかし、いくら落ち着いて服の下をまさぐっても、なくなったカメラが出現する気配はない。

さんねん！ わたしの しゅざいは
ここで おわってしまった！

(じゃなくてー!?)

脳裏をよぎる不吉な文字列に首を振り、花果子念報の記者は、だらだらと汗を流しながら顔を上げ、実に卑屈な表情で鈴仙達を呼ぶ。

「……ね、ねえ、そこな兎さん達ー」

「なにか？」

「あの、えーと、大したことじゃないんだけどね？ うん、全然大したことじゃないんだけどー、ちょっとだけ気になることがあってねー？ あの、私、どこかに何か落としてたりしなかったかなーって……」

「落し物？ てゐ、どう？」

「……あつたら気付いてると思うけどねえ」

「マジでー？……嘘……ないわー、ありえないってー……」

顔を見合わせて答えるふたりに、はたてはがつくり

と肩を落とした。

(あー、やっぱり迷ってる時とかに落としたりしてたのかなー……あー。あー。……どうしよー、どーするのよー。マジでー。どつかで拾われてたりー？ ……でもあんなとこ誰も来ないわよねー。一応は河童特注の防水加工だからちよつとやそつとじゃ壊れたりしないだろーけど、だからって安心ってわけじゃなくてー、いまここに持っていないのが問題なわけでー……うあー……)

毛布を被ってぶつぶつと呟きはじめる彼女の様子に、鈴仙が心配そうに訊ねる。

「なにか、大事なもののなの？」

「えっと……そのね」

答えるべきかどうか迷い、けれど黙っていても伝わるわけもないと気付いたはたては、上目遣いに毛布の下から顔を覗かせ、ぎこちなく微笑んで告白する。

「……か、カメラ……」

「……………」

「……………そっか……………」

返って来たのは、嘲笑よりも辛い沈黙だった。

（ヴぁー!? 言うんじゃなかったー!?）

後悔するがもう遅い。両手を振って否定を始めるはたてに、ますます憐みをこめた視線が集まる。

「ち、違うのよー? その、今日はべつにちよつと様子見してくらいで、本格的な取材はまた今度にとか、そういう感じでねー? そ、それに別に、写真なら後から念写し直してもいいんだしー」

「念写?」

目をぐるぐるとさせながら、はたては食い付きのあった話題へ逃げようとする。

「そ、そうそう! それくらい、カメラさえあれば私にかかればあとでちよつと調べて簡単に――」

「ええと、じゃあ……………なおさら早くカメラ、見つけないといけないんじゃない?」

「……………」

「……………」

「ううううう……………」

「あああ!? な、泣かないでー!?」

「鈴仙エ……………」

崩れ落ちるはたてに駆け寄る鈴仙。

文とは異なり、はたての念写能力はカメラとセットで効果を発揮するものだ。

それを抜きにすればはたての立場はあくまで記者であって、風を操り最速を誇る素早さも、千里先を見通す哨戒に長けた偵察能力も持ち合わせていないわけ。つまりその愛機を失った今、姫街道はたては――

「た、ただのツインテール美少女天狗じゃないのー!?」

「……………そこで伸びた鼻が折れないあたりは立派に天狗なんだね」

「あからさまな同情とかいらなからー!?」

ぽんぽんと肩と叩いてくるてゐに、はたての涙がらの叫びが響き渡った。

「はい、口開けてー」

「うえー……」

診察室の椅子の上、えー、と舌を出すはたての喉を診ながら、白衣姿の永琳が手元のカルテにあれこれと書き込んでゆく。

「あーあ。カメラ失くした間抜けな天狗が見れるって言うから急いできたのに、期待外れね」

「知らないわよー」

てゐの報告を聞き付けて、診察室にやってきてた輝夜が、つまらなそうに口を尖らせる。

「またぞろ盗撮にでも来たんだろうと思っただけど天狗って一匹じゃなかったのね。やっぱりアレ？ 芥虫みたいなもの？」

「油虫ごきぶりなんかと一緒にしないでくれるー？ 私はねー、もつと高尚な新聞を心がけてるのー!!」

「あらあら。……高尚ねえ。いとわろす」



永琳の診察を受けるはたてを眺めながら、袖で口元を隠して微笑むその様子は、まあ確かにお姫様らしいと言えbraらしいのだが、

「なんか想像と違うなあー。本当にかぐや姫なの？ 全然なよ竹つぼくはないわよこのひとー。せいぜい竹藪レベルじゃないー？」

「本人捕まえてよくまあ言えるわね」

話通りであるならば、彼女こそ都の貴公子達の心を独り占めにし、さらには時の帝すら虜にしたという、絶世の美貌と触れ得ぬ高貴さを備えた月人、かぐや姫であるはずだった。

「むー……」

なのだが——当の本人がそうだと認めても、はたてにはいまいち納得がいかない。

しかし、輝夜はそんなはたての様子に気分を害した様子もなくころころと笑い、

「でも、あの天狗がトラウマだなんてちよつと面白い話も聞けたから、無礼については咎めないでにおいてあ

げるわ。探し物は兎達にさせておくから。ねえ永琳？」

「それはいいけど」

聴診器を脇に置き、永琳ははたてに向き直る。

「貴女、最近睡眠足りてないでしょう。それに食事も。

だいぶ栄養偏ってるわね」

「そ、そーかなー。……そーいえばすこし鼻風邪気味かもー」

実は、はたては新装する紙面の構成を考え続けて数日徹夜しており、さらに言えばその時の寝不足の頭でこの永遠亭訪問を思い付き、そのまま突発的に突撃取材を思い立ったわけなのだが——そんな事は口にしていない。

曖昧に笑いつつすん、と鼻を擦るはたてに、永琳はさらにいくつか、カルテに追記をして席を立つ。

「そんな体調で3日も迷えば身体壊すのも仕方ないわよね。いま処方するから待ってなさい。……てゐ、手伝ってくれる？」

「了解ウサ」

てゐを伴って奥へと入ってゆく永琳に、はたては口を開けて感服する。

「大したもんねー。見ただけでわかつちゃうの？」

「もちろんですよ。師匠の腕は折り紙つきです。その人の体調や状態にあわせて、万全の処方をしてくれるんですよ」

「永琳は天才だもの。……そうだ永琳、アレ見せてあげれば？ こないだ作ってた、間違えて珈琲に入れた時だけ甘くなる塩とかあったでしょ」

「駄目よ、あれ食用に適さないんだから」

「適そうよそこはー!? 調味料でしょー!?」

凄そうな全然凄くないような話にはたてが律儀に突っ込んでみると、永琳はてゐを伴って戻ってきた。はたてに三つばかり白い薬包を手渡して、

「はい、これ」

「もう出来たの？ 早いなー……」

「ええ、食間だから先に一包は飲んでおくといいわ、ウドンゲ、お水持ってきて頂戴な」

「う、これって苦かったり？」

ひと包をつまみ上げ、照明に透かしてためつすがめつするはたてに、永琳はどこか意地の悪い笑顔。

「うふふ。ウチの薬は普通のものよりも苦いわよ」

「うええー……」

「しようがありませんよ、良薬は口に苦しうて言うじやないですか。その分効き目はとびきりですから」

顔をしかめるはたてに、はい、と水を渡す鈴仙。はたても顔いて渋々薬を口に含む。

「それでもないわよ？ てきとうにその辺の苦い成分足しただけだから」

「むしろ里で売ってるやつの方が効くよね」

「ぶーっ！？」

見事なタイミングでぶふおつと口の中身を吹き出したはたての真正面で、鈴仙は見事に薬と水を顔面で受け止めていた。

「……………」

「フォローしたのに大損ですね私」

「うっわ鈴仙眼え怖ッ!!」

びしょ濡れ薬塗れで赤眼の邪視丸出しにして凶悪に睨む鈴仙を、しかし永琳とてみはさらりと無視して、「はい、というわけでこつちが本物よ。食後に2錠、忘れずにね」

「……………」

ますます視線を陰しくする鈴仙に、なんとなくこのノリが分かってきたような気がしつつ、はたてはそつと涙を拭う。

(苦労してんのねー)

永遠亭内の力関係をおおむね把握し、一人納得していたはたてをよそに、鈴仙が顔をぬぐおうと席を立ち、ふらふらと棚の方へと歩み寄る。

「……あ、鈴仙っ」

「え？」

てゐの警告は一瞬遅かった。タオルを求めて伸ばした鈴仙の指が、こつんと棚にあった瓶を倒していた。

「へ？」

その真下には、丁度いい具合に錠剤を受け取っていたはたてがおり、ばしゃん、と溢れた薬瓶の中身は、ものの見事にはたての身体に降り注ぐ。

「うあー……いったーい……あーもう、なにこれ……? マジで今日は厄日かも……」

「ご、ごめんなさいっ!」

バランスを崩し、おまけに椅子からもずり落ちて、床の上の水たまりの上、濡れ鼠になったはたては悲鳴を上げる。何か揮発性の成分が含まれているらしく、すう、と肌が冷え、強いにおいが鼻をついた。

「うぷっ……」

慌てて顔をぬぐうが、かえって肌に感じる刺激は強くなってゆく。痛み始めた目元を擦り、はたては不快感に顔を振った。耳や髪の手からぼたぼたと足元に落ちる水滴が、じょじょに服の下にまで染み込んでくる。

「うあー……ちよっと、なんかあちこちひりひりするんですけどー!」

「大丈夫よ、これくらいならすぐに中和して……」

言いかけた永琳は手元の瓶に貼られたラベルを見て、言葉を止め、

「……あつ」

「ちよっと!? それマジで怖いんですけどー!」

冗談でもやめてくださいねー!? おい目え反らすなー!」

「……そんな訳ないわ。冗談なんて、まさかそんな」

「ちよっとおー!」

「それよりも早く服、脱ぎなさい」

「きやあああああああー!」

いきなり真顔ではたての胸元をはだけさせにかかる永琳に、はたては悲鳴を上げて抵抗した。

「ちよ、ま、なに、なにー!」

「いえ、貴女の発育具合にも勿論興味はあるんだけど」

「変態だー!」

「あらあら、わるすわるす」

次は何が始まるのかと、まるきり他人事でわくわくした視線を向けている月の姫がやたらと腹立たしいが、

はたてはそれどころではない。

それなりに長く生きてはいるはたてだが、それでも乙女の心を失っているわけではない。スカートを押さえ必死抵抗を試みるが、永琳はまったく苦にもせず、見事な手際ではたての衣服をはぎ取ってゆく。

「ぎゃああー!?」

ついにあっさり下着だけにされ、まるっきり色気のない悲鳴を上げるはたて。

「ウドンゲ、お風呂まで案内してあげて。できるだけ早くね」

「し、師匠!?」

「あなたも落ちついて聞いてちょうだい。悪い知らせと、もっと悪い知らせがあるんだけど」

「どっちも聞きたくないんですけどー!?」

「じゃあ悪い知らせと、それを誤魔化す嘘があるんだけど、どっちから聞きたい?」

「うわあメンタルに厳しい診療ー!? 選択の余地なし!? あ、でもなんか段々医者コントみたいになっ

てきたけどこれはこれでー!? あ、これが本誌記者を襲う生命の危機!? つてやつなのかなー!?」

「……結構余裕あるのねえ」

浴場へと運ばれてゆくはたてを見送りながら、輝夜は感慨深げにつぶやいた。



広々とした湯船にぼたりと雫が落ちる。

なみなみと注がれる、わずかに白く濁った湯の中に手足を伸ばし、桤の浴槽の縁に顎を乗せ、はたてはゆつくりと吐息をひとつ。

「ふいー……。こんな所で温泉入れるなんてねー」

極楽極楽、と頭の上に乗せた手拭いで額の汗をぬぐう。

薬品を洗い落とすために案内されたのは邸内の湯殿だった。普段は小間使いの兎達も使っているらしい大浴場は、しかし今は誰もおらず、はたて一人の占有状

態。

天狗の管轄である妖怪の山にも河童たちが作った共同浴場があるが、ここまで広々としたスペースを自由に出来るようにはできていない。独り占めするには大天狗並みの権力が必要だろう。

「もー、酷い話よね。取材拒否に強硬手段とかあるって聞いてたけどさー。でも、報道の自由はこんなことで挫けてちゃダメよね!」

数度お湯をかぶっていると、肌や目に感じていた痛み痒みはすぐにおさまっていた。対処の早さは確かなもので、大事には至らなかったことは僥倖だったのだろう。

もちろんまだ多少の憤りも残ってはいたが、お湯の心地よさに強張った心もほぐされてゆく。

「山の外なんて何があるか知れたもんじゃないと思ってたけどー、やってみると案外楽しいもんねー。突撃取材ってのも」

ひょっとしたらこれも月の都の風流なのだろうか、

湯殿に面した内庭の外には白砂が敷かれ、竹と笹で組まれた飾り樋の上をさらさらと水が流れている。

ほんのりと硫黄の匂いを含ませる湯の中に脚を持ち上げて爪先を広げ、こうなったらもう気持ちいいからいっそ羽根まで洗っておこうか、と考えていたその時。

「ちよ、ちよと待って、てゐ、なにしてんの!」

「いいからいいから。早く脱いだ脱いだっ」

脱衣所の方がにわかに騒がしくなる。

はたてが顔を上げると、湯気で曇ったガラス戸の向こう、ごちゃごちゃと絡まり合う人影が二つ。

「待ちなさいってのにっ、私は単に着替えを用意しに来ただけで——」

「なに言ってるの鈴仙。そんなに機嫌直してもらおうなんて甘い甘い。自分のミスはちゃんと身体張って取り戻さないとダメよ?」

「ひあああ!? ど、どこ触ってるのっ!」

「これからお触りされまくるんだからどーでもいいでしよー。ほら、はやくサービスしてこーい!!」

「やめなさいーっ!! もうくだらないことで邪魔ばつか……ひゃうっ!? ……こ、こらあ!! てゐっ!?」

「……そうねえ、一理あるわね」

「ひ、姫様までー!?」

ガラス戸を挟んで聞こえてくる姦しい騒ぎは、やがて一方にもう一方がふたりがかりで襲いかかり、片っ端から服を剥き始める展開となった。

ブレザー、スカート、ネクタイ、ブラウス、そして靴下と、なにやらこだわりのありそうな順序で衣装が宙を舞い、さらに間をおかず下着まで景気良くぼいぼいと引き剥がされてゆく。

縞模様の最後の一枚をめぐる激しい攻防が繰り広げられる中、

「ちよっと、やめてよ!? ひを思いつきりヨゴレ役みたいに!? 黙って聞いてればどうい言う草よっ!? てゐ、だいたいあんたいたい、私のことなんだと思ってるわけ!?」

「何って……」

んー、とてゐは首を捻り、

「夜のウサギ?」

「夜の座薬売り?」

「夜の優曇華院?」

「ちよっと待て特に最後のっ!! ってか師匠、見てるんなら助けてくださいよお!?」

しかし彼女の叫びもむなしく、さらに相手が増えて三対一となり、玉兎はあつという間に丸裸。

「さあ、行つてきなさいなレイセイナバ」

「きゃああああ!? ひ、姫様押さないで!?」

「お背中流しまーすっ。れーせんちゃんがー!!」

がららと勢い良く開いた湯殿のガラス戸から、丸裸の鈴仙が洗い場に放り出される。

「ふぎゅっ……」

床の上につんのめり、べしんと転んだ鈴仙は薄い水しぶきを跳ねさせた。

濡れた洗い場の上、可愛い尻尾を見せながらスライディングした彼女の頭が洗い桶にぶつかってすこおん

と良く響くいい音を立てる。

「よし、どんどん行くよー」

さらにその後ろから次々と放りこまれるいかかわしい品物の数々。とりりとした液体の詰まった瓶、ぴかぴか銀色のエアーマットに、U字型をしたやたら不自然な格好の洗い椅子。

急展開に付いていけず、はたてが目を丸くしている
と、脱衣所の入り口にはいつの間にか大勢の兎達が詰めかけていた。何を期待しているのか、彼女達の顔は赤く、息を飲みながら展開を見守っている。

「ご休憩入りまーす!!」

『はいりまーす!!』

「一名様ごあんない!!」

『ごあんない!!』

「違ああああうー!」

並んだウサギ達が唱和する中、鈴仙は叫ぶがてらは聞く耳持たず、満面の笑顔。

「じゃあお客さん、入浴料もサービス料も出血大サー

ビスにしとくウサ!! たっぷり楽しんでいつてねー!!」

「だ・れ・がっ……」

がばと身を起こした鈴仙は、足元に転がっていたいかかわしげな品々をひとまとめにして抱えあげると、脱衣所に向けて放り投げた。

「そんなことするかーっ!!」

どがらがしやんと騒々しい音を響かせる中、兎達が蜘蛛の子を散らすように逃げてゆく。

鈴仙はぜいぜいと息を荒げながら、ずかずかと大股で脱衣所の入り口に歩み寄り、力いっぱい叩き付けるようにガラス戸を閉める。

「あーもうっ、本っ当に余計なことばっかりするんだからっ!!」

肩をいからせながら振り向いて——そこでようやく鈴仙は、湯船で一部始終を見ていたはたてに気付く。

「あ」

「……………」

「ぼたーん、と湯船を天井からの湯気の雫がたたく。

鈴仙はぎぎぎ、と油の切れたブリキ人形みたいな動作で、ぺしゃんと尻もちを付くと、足元に落っこちていた濡れタオルを引っ張り上げて前を隠す。

「え、あ、そのっ……えい、……あはは……」

ぎこちない笑顔を、赤く染めながら、ちらりとはたてを見上げて耳を擦る。

「ご、ご迷惑をおかけしました……」

「……………わ……………」

タオルから白い肌を透けさせる月兎に、思わず息を飲んでしまうはたて。

「あ、あの？」

「うっわー、えろーい……」

「な、なに見てるんですかー!?」

しみじみこぼれた新聞記者としての正当な感想に、弾かれたように鈴仙が背中を向ける。しかし今度は肩甲骨から腰へのラインや、やや大きめのおしり、そしてその上に生えたふわふわのしっぽが丸見えになり、

ますます逆効果だった。

（……………うわー。うっわー……なにあれ。えろーいっ!? わー。うわー。あの丸いしっぽってどーなってるのかなー……あーもうっ、なんでカメラ持ってないのわたしってばー!!）

「あ、あのっ……」

「あ」

そこでようやく、泣きそうになっている鈴仙の様子に気付き、はたては我に返る。

「気まずい気分のまま、はたては視線を反らし、ちょいちよい、と湯船のへりを指差した。

「えっと……その、入る？」

「……………えっ」

「ああいやその、ヘンな意味じゃなくて!! ほら、風邪ひいちゃうかなーって。ねー？」

「ううう……」

気を使われているのが分かったのだろう。鈴仙はさめざめと泣きながら、小さくこくと首を縦に動かし

た。その様子は、やはりいつも彼女があんな風にいじられて、苦勞を偲ばせるものであった。

「苦勞してるのねー」

「……ううう……」

お邪魔します、と湯船の隣に並び、ちやぶ、と湯船を溢れさせんばかりの勢いで涙を流す鈴仙に、はたてはちよつとばかり同情を禁じ得なかった。



「ではっ♪」

「ドキドキ♪」

「千歳飴ゲームっ!!」

「いえ〜っ!!」

ばん、と手を合わせる輝夜とてゐに合わせ、うさぎ達がどんどんばふばふと囀子を打ち鳴らした。座敷中央に設えられた席に座らされたまま、置いてきぼりのはたての周りを、てゐはびよんぴよんと飛び

跳ねながら、どこから持ってきたらしいプラカードを高々と掲げる。それに合わせて、兎達から黄色い声の大歓声が巻き起こる。

(え、何この……なに?)

あまりの展開の速さについていけず、はたては周りを見回す。ついさっきまで、風呂上りの浴衣に着替えて縁側で熱燗を一杯と洒落こんでいたはずなのだが。

気付けば贅沢な酒宴の膳を整えられた大広間の真ん中に、鈴仙と向かい合せてに座らせられて、兎達の大観衆に取り囲まれている。

縋るように隣をみれば、同じように座らされた鈴仙も、あつけにとられるまま視線をさまよわせていた。困惑しているのが自分だけではないことに少し安堵を覚えるはたてだが、そうしている間にも輝夜とてゐによる仕切りは進んでゆく。

「まー、ぶっちゃけお風呂イベントで十分親交を深めてもらって、フラグとCG回収も完了したところで、二人にはもっと仲良くなってもらおうって趣向ウサ

!!」

輝夜はテーブルの上にあつた細長い包みを開け、そこから桃色の細長い棒を取り出した。

「ルールは簡単よ。この永琳特製の千歳飴をそれぞれ端っこからくわえて食べていって、先に口を離しちゃった方の負けー!」

「憧れのあの子と急接近!? 思わぬハプニング目白押しウサ!! 挑戦するのはご存知、はたてちゃんとれーせんちゃんのお二人さんだー!!」

まるで姉妹のように息もぴったりと、ポーズまで決める二人。いつの間にか出来上がった観客席から、テンション高く兎達の歓声が響く。その最前列では永琳が外人4コマよろしくガッツポーズを決めていた。

「ではれーせんちゃん、はたてちゃん、どうぞー!!」
「むぐっ!」

何か言う暇すら与えられないうちに、はたての口に千歳飴の端っこが押し込まれた。

「ちよ、ちよっと、てゐ!」

「ほらほら、お客さん待たせちゃいけないってば」

抗弁の声を上げようとした鈴仙も、背中からてゐに頬を押さえられ、はたての反対側の飴を口に含ませられる。

ちようど、膝と膝を交互に交わらせるほどに近くまで、飴を啜えて向かい合っている格好になる。

「んう……ッ」

太い飴を無理矢理口に含まされ、眼前で苦しげに眉をよじる兎の表情は、同性でも思わずどきりとするほど色っぽかった。無意識のうちにカメラを探るが、はたての浴衣の中に手に馴染む愛器の感触はない。

「準備完了っ!! ではっ、姫様お願いしますっ」

「ええ。……スタアトツ!!」

輝夜のコールにしたがつてウサギ達がそーれそーれと掛け声を上げながら、手拍子足拍子で曲を奏で始める。

(ちよ……ちよっとお……っ)

焦りながら身体をよじるはたてだが、異様な雰囲気

に飲まれて立ち上がることはできなかった。

向かい合う先で、鈴仙は困った様に、上目遣いではたてを見上げ、ゆっくりと口を動かし始めた。

(うわぁ……!?)

くち、くち、と小さな唇に差し込まれた飴を舐り、薄い桜色の下が時折、ちろりと先端を覗かせる。長い耳はくterと力を失って垂れ、羞恥を示すようにほんのりと色づいている。

舐め溶けた飴をこぼさぬよう、頬にかかる髪をかきあげ、はしたない音を立てて唾液をすすする仕草は同性ですら直視を躊躇うほど。

「おおつ、さすがれーせんちゃん。ノリノリだー!!」

「うーん。エロいわね無駄に」

「そうなのよ。無駄にエロいの。……だから困るのよねウドンゲは。色々。うふふ」

「んんーっ!？」

冷静に解説され、叫ぶ鈴仙だが、口の中に飴を突っ込まれたままではそうもいかない。もごもごと動かさ

れた飴を伝って、はたての口内に鈴仙の舌の動きが響き伝わってくる。

(うう……っ)

頬を赤くする鈴仙の舌使いを感じ取ってしまい、はたてもかあと頬が熱くなつてゆく。

煽るように兎達の囁し立てる声が高まり、急かされるように、はたても口の中の千歳飴を舐め始めた。

「んう……っ」

「おー、こっちもいいいいいいよー。ちょっと目線お願いしまーす」

指二本分はありそうな硬く太い飴に舌を絡め、唇をすぼめると、甘ったるい味が口じゅうに広がり、飲み込んだ喉にも絡みついてゆく。

「ひゅーひゅー!! そーれ、そーれっ」

周囲から立て続けに白い閃光が焚かれる中、ての音頭とともに、いよいよゲームは本格化し――

もごもご。

もごもごもご。

もごもごもごもご。

……もごもごもごもごもごもごもごもごもごもご。

「つて長いよー!!」

ようやくツツコミのタイミングを見出して、はたては鈴仙と自分の口からひっこ抜いた千歳飴を床に叩き付けていた。

ばんばん、と踏みつぶすように脚を踏みならし、両手を広げて力説する。

「もつと食べやすいものでやるトコでしょーこういうの!? よりによって飴とか!? 全部食べきるのにどんだけかかると思ってんのー!?」

「『ええー……』」

「ちよ、なにそれー? 全員揃って心外みたいな顔されてもー!? わたしだけ空気読めないみたいな扱いー!?」

扱いではなくそうだと言いたげな表情で、てゐは腕組みをしている輝夜を見上げ、

「むー。じゃあ姫様、次いこ、次っ」

「そうね、じゃあ永遠亭名物、姫様ゲーム!!」

「いえーっ!!」

わあ、とまたもはたてを置いてきぼりにして盛り上がる一同に、しかしはたてははいはいつと力強く手を挙げて割り込む。

「……ちよつと待って!! な、なんかそれ聞いたことないようなあるようなんだけど、どーいうやつー?」

「何って、王様ゲームみたいなものよ。ずっと私が王様だけど。あ、レイセンイナバはパン買ってきて。3分以内ね」

「王権神授説ー!? あの、それどう考えても全然楽しくないんですけどー!?」

「ひれ伏しなさい愚民どもゲームって言ってもいいわね。じゃああなたはジュース買ってきて。5分でいい

から」

「ぜんぜん良くないー!? ていうかそれただのパシリでしょーっ!?」

握りこぶし作って精一杯異論を差し挟むはたて。

「ちなみに王様ゲームの原型となった遊びの歴史は存外に古くて、19世半ばのイヴァン・セルゲーエヴィチ・トゥルゲーネフの著作の『初恋』には既に類似のゲームが登場しているわ。さらに遡って中世の欧州の社交界でも似たような遊びが行われていたという記録もあるくらい、由緒正しい合コンゲームなのよ」

「そこも丸映しの解説してないでーっ!!」

「それはそれとしてウドンゲ、ちょっと試したい新薬があるんだけど」

「むぐーっ!?」

「もはや王様すら関係ないーっ!? てかお願いもうやめてあげてー!?」

「うふふ。大丈夫よ、さっきの五割増しでいやらしくなるだけだから。ねえウドンゲ?」

「なにがー!?」

叫び続けて喉が枯れ、はたては咳き込みながら手近なグラスを呷る。

（もうツツコミ疲れたあー……ここ素でボケなんだかなんだかわかんない人ばかりでやりづらいよお……やつば取材とかやるんじゃないかなったかも……）

思わず目元が熱くなり、ぐるぐると世界が回り始める。

メリーゴーランドのように転じ巡る視界の中、はたてはおもむろに浴衣を着崩し、ばさあつと背中黒羽根を広げた。

「暑いから脱ぐー!!」

唐突の宣言にも、もはや誰も止める者はいない。わああと上がる歓声の中、空になったグラスがテーブルの上を転がっていった。



「ん……」

耳の奥に残る宴会の騒々しさに顔をしかめ、はたては温まった布団の上にもぞもぞと身体を起こす。

なぜか寝具の枕元に用意されていたティッシュで鼻をかみ、ぶるると背中を震わせる。

「お手洗い……」

隣で布団にくるまって寝がえりを打つ鈴仙を起こさぬよう、手探りで伸ばした障子を押しあけると、ひやりとした夜気が頬を撫でる。

「ん、起きたの？」

「あれ……？」

寝惚け眼を擦ってみれば、縁側ではてゐが首タオルにドロワーズ一枚の格好で、ほこほこと風呂上がり湯気を立てながら、フルーツ牛乳を一気飲みしていた。

「んっ……ふあっ。ふー。生き返るねー」

口元にできた白い牛乳ひげを拭いて、てゐはにまりと笑顔。

「派手に酔ってたみたいだけど、平気？」

「あああ当たり前じゃない？ 私、これでも天狗なんだからねー、あれっぼっちで酔うわけじゃないじゃん？」

「はいはい。そういうことにしといてあげる。で、れーせんちゃんの添い寝サービスはどーだったかな？」

「……寝てるわよー。大いびきで」

「はー。やれやれ。自覚の足りないエロ担当は困るねえ。いくらサービス満点でも寸止めばっかじゃ飽きられるってのに。自主規制もほどほどにしないと」

相変わらずの物言いに苦笑しつつ、はたては廊下へと出た。縁側の板は少し冷たく、胸元に寒さを感じて、はたては浴衣の前を直そうとする。

「あれ……よっと……」

「あーもー、見てらんないなあ」

びよいと椅子の上に飛びあがったてゐは、慣れた手つきではたての着付けを整える。

「みんないい歳してるんだから、もう少し手のかからないようになって欲しいもんね」

「……………」

赤面するはたてに、呆れたように耳をぱたふぱたと動かして、顔を仰いでみせるてゐ。そこには昼間のような子供っぽさは影を潜め、幼い外見に似合わない老成した気配があった。

「えっと……」

「ねえ、あんた。ぶっちゃけ取材とか全然経験ないんでしょ」

「し、新人ちゃうわー!? そそそそそ、そんなことないわよー!? 烏天狗なのよー? も、もうベテランもベテラン、これ以上ないくらいにねー……!?」

「嘘吐いたって分かるよ。ってか分かりやす過ぎ」

くすくすと、てゐは目を細め、

「ここに来る奴はみーんなね、嘘が下手なんだよ。誰も彼も人恋しくて寂しい癖にさ。強がってばっかで、馬鹿馬鹿しいったらありゃしない」

「ず、随分上から目線ねー?」

「当たり前よ。伊達に長生きしてないっての。そもそ

も私はこの兎のリーダーなんだから。元はこのお屋敷だつて竹林だつて、私達の持ち物よ? 姫様たちにはそれを貸してあげてるだけ」

牛乳瓶を傾け、またこくこくと喉を湿らせて。てゐは頭上を振り仰ぐ。

そこには、満天の星空と緩やかに美しい半円を描く月が上がっていた。半分だけの月には、餅を搗く兎の耳先だけが映っている。

「姫様はそうでもないけどねえ。お師匠も鈴仙も、あれこれ口実にして誰も傍に近づけようとしななんだから。永遠の命も、逃亡の罪も、月の追手もなにもかも、もうぜーんぶ昔のことなのに」

彼女の口にした言葉には、はたてが求めていた、月の姫たちの秘密が含まれていた。

恐らくはまだ文も知らないような彼女達の秘密、遠い遠い月での昔話。

「え、えーっと、そこんこももう少し詳しくっ」

スクープの匂いを嗅ぎつけ食いついたはたてに、て

ゐはにへりと笑つてみせた。

「月見て泣いて目え赤くして。せつかく拾つた自由なんだから、もっと大勢で騒いで気楽に生きてりやいのよ」

「自由？」

「そ。自由」

くいつ、と逆さまにしたフルーツ牛乳を最後の一滴まで飲みほして。てゐは空になった牛乳瓶を放り投げる。

狙い過たずガラスごみの中に飛び込んだ瓶を振り返りもせず、彼女は飛び降りた庭で肩をすくめてみせた。「まったく、こちら頑張つて健康にいい使つて生きて、月見て跳ねてきたのにさ、不幸な顔されてちゃたまんないよ。同じ跳ねるなら陽気でなきや。うじうじ悩んで、不健康たらありやしない」

ぴょん、と月めがけて高く跳ねたてゐは、くるりと身を回し、向かいの屋根上へと腰掛ける。

「……だから、たまにはこーいうのも面白いかなって

思うのよね。——伝統と実績の老舗旅館、永遠亭。名

物は月見うどん。ご休憩五千円、ご宿泊一万円。ほつきり。よ夜は揃つて大宴会。いまなら幸運のおまけつき」

くすくすと笑い、てゐはぴょんと屋根を飛び降りる。

「失せ物探しも効果アリ、ってね」

「わ……つとと」

彼女が身を捻りざまにひよいと放り投げたものを、はたては思わず顔の前で掴んでいた。

それは手の中に収まるほどの、軽くて薄い長方形。良く手に馴染む感触は、いつも手にしている——

「あーっ!？」

「ね? いいことあったでしょ?」

はたての携帯型カメラを放つたてゐは、にいつ、と。空に浮かぶ三日月のように、軽快に大きく齒を見せた。

「つて、ちよつとー!？」

「悪いけどE a s yモードの新人さんにや、まだ姫様達には会わせてあげらんないの。2時間前に出直してきな、ってやつかな」

「な、なにそれー!?」
「またのご来訪お待ちしてるよ。んじや、おやすみー」
はたての伸ばした手からもすり抜けるように、悪戯
うさぎは微笑んでぴょんと大きく飛び跳ねて、向かい
の離れの奥へと逃げだしていった。

(了?)

うーと【烏兔】

《『金烏玉兔』の略。太陽には烏、月には兔がいるとい
う古代中国の伝説から》

1 太陽と月。日月。

2 年月。歲月。「――匆匆」

酔々流転の百鬼夜行

難しはや

好か背に来りに
溜める酒

手逢い足逢い
我し来にけり

——詠人不知



歳の瀬迫る十二月。大結界の要たる博麗神社の縁側、冬の日差しが落ちる陽だまりの中に、暖を取る猫のようにに寝そべって。萃香は愛用の瓢箪に口をつけて中身をぐびりと呷る。細い喉を抜け胃の腑へと落ちる酒精の芳醇な香りを愉しみ、伊吹童子はぶは、と満足げに息を吐いた。

吐く息も酒気を交えて白く凝る師走の冷え込みの中、肩口で破れた袖からは剥き出しの二の腕が覗いているが、この酔鬼は寒がる素振りも見せていない。

「今年の酒はいい具合に仕上がったねえ」

普段より丁寧にに水と甕を吟味したのもそうだが、何よりも良い酒虫が手に入ったのが効いたのだろう。満足のいく出来栄えに頬を緩め、萃香は再び伊吹瓢に口を付けた。

ほんのりと色づく頬は酔気にとろんと柔らかく解け、

小さな唇が瓢の口からこぼれる雫をちろりと舐める。

「……ねえ」

「んう？」

一人手酌で酒を愉しむ酔いどれ鬼へ、頭の上からの不満げな声。萃香がぐいと背を反らせば、不機嫌そうに腰に手を当てた霊夢が仁王立ちになって見下ろしていた。

いつもの紅白の巫女装束ではなく、髪を後ろで束ね、三角巾に割烹着姿。これも新鮮で良いな、と萃香は思う。

「暇なら手伝いなさいよ、大掃除」

「何言ってるのさ。鬼の前で来年の話なんて滑稽だよ霊夢。それに私の分はもう済ませたよ」

仏頂面で雑巾を押しつけてくる霊夢に、境内の隅に山と積み上げられた落ち葉を指さし、萃香はけらけらと笑う。能力を使って萃められた落ち葉の山は、見上げるほど大きなものだ。そのうち魔理沙あたりが目をつけて焼き芋でも始めることだろう。

「……あんたがそんなだから妖怪が集まるばっかりで神社の評判も悪くなるの」

「あつはは。元々墮ちるほどの評判もないだろうに。忙しいこと言ってるのと老けるよ霊夢。ほれ、一杯どう？」

懷から朱塗りの杯を取り出し、並々と酒を注いでみせる萃香に、霊夢は大きく吐息を一つ。

「それ、ほとんど酒精だけじゃないの。そんなお酒ばかりか飲んでらんないわよ。鬼と一緒にはないで」

霊夢は呆れ顔で大掃除を再開する。鬼用の酒は人間のそれの比ではない。滅多なことでは酔わない巫女も、さすがに気安く飲めるものではないらしい。

一献を袖にされた萃香だが、嫌な顔一つ見せず、宙に浮いた盃を口に運び、ぷは、と馥郁たる香りに満足げに口を緩めた。

「……んむ」

杯の端を咥えて一息。このまま掃除の邪魔をして霊夢の機嫌を損ねるのは宜しくないだろうと考え、萃香は己を疎にして薄め、縁側を離れることにする。

疎密を自在にする力は萃香には息をするようなもので、そうと意識すれば彼女は幻想郷のどこにでも在ることができた。もともと生まれ持っていた力ではあるが、山を去って長い漂泊の間に、その傾向はより強くなったように思う。

神社の鳥居の上に、萃香は拡散した己を再び萃めて実体化する。

「大分冷えるね。あちらはそろそろ根雪かな」

冠を白く染めた妖怪の山を見上げ、納戸から少々、失敬しておいた粗塩を皿の上から小指の爪に乗せて舐める。丸みのある粗塩は素朴ながら、鬼の酒に良く合う酒肴だった。

酒精をゆつくりと口に含み、時間をかけて喉へと落としてゆく。大結界の端に位置するこの神社からは、梢よりも高く飛べばすぐに幻想郷を一望することができる。

俯瞰した冬の景色にいつかの日に見た幻想郷を重ね、萃香は満足げに胡坐をかいて伊吹瓢を傾けた。

「……変わらんようでも、変わるもんだね」

思えば、萃香は随分と長い時を漂泊の中で過ごしてきた。妖怪の山を離れ、地底を出、幻想郷のあちこちを巡り、果ては冥界や天界にも足を伸ばした。大結界をすり抜けて外の世界を放浪したこともある。外では妖怪の存在は酷く曖昧で、萃香はほとんどどこにも姿を現す事もできなかったが。

けれど、いまや伊吹萃香は強く意識してここに居ることを選ぶようになった。それもまた大きな変化であるのだろう。

赤い鳥居の上、ぶらりぶらりと足を揺すって、穏やかな酔いに己を任せる。ここは萃香のお気に入りの場所のひとつなのだが、神社の顔とも言える場所に鬼が陣取っていることに対して、霊夢はあまり良い顔をされないことが多い。

案の定今もそのようで、鳥居の上の鬼を見上げて、博霊の巫女は不満げに口を尖らせる。

「ちよっと。宴会の準備くらいしていきなさいよ。あ

んだ、いつも集めるだけ集めて放ったらかしじゃないの」

「あつはつは。鬼は酔うのが仕事ってね」

茶化すと同時、空を割いて符が飛んでくる。今日の巫女は大分ご機嫌斜めの模様だった。追尾効果付きの妖怪調伏の符から霧へと変じて身をかわしながら、萃香は鳥居を蹴って宙へと舞い上がる。

「悪いね、今日はちよいと先約があるのさ。少しばかり出かけてくるね、霊夢。……宴会までには戻るよ」

返事はなく、代わりに飛んできたのは封魔針。首を疎めてそれを避け、萃香は疎密を操って、神社からしばし離れた森の中に出現した。

「……さて」

周囲の気配を探り、誰もいないことを確認しつつ、萃香は懐から書を取り出した。最近流行の郵便封書とは違う、仰々しい豎文^{たてぶみ}。差出人の名は無く、書状の表には、かつて妖怪の山を支配していた鬼、伊吹萃香に宛てた名が記されている。

昨日、萃香のもとに届けられたこの書状は、至急の要件をもって彼女に逢いたい、という至極単純な内容だけが記されていた。

「鎬沢の七本杉ねえ。山の真つただ中じゃないか」

待ち合わせの場所は、天狗が妖怪たちの支配地域として主張する八つの峠のひとつだ。見知らぬものが入り込めば、ものの数分で鎮台の哨戒天狗大隊がすつ飛んで来ることだろう。そんな場所を指定してきたというのは、それだけでも恐ろしく胡散臭い。

「……どうにも面倒事のような気がするけど、どうなるかねえ」

いくら怪しいといえども、行かない理由にはならなかった。鬼を相手に、これは冗談では済まされない。書状を畳んで懐へと戻し、萃香は伊吹瓢に栓をして、ぐいと背をひと伸び。

とん、と地を蹴れば、鬼の姿は霞よりも軽い疎の霧へと変じ、風よりも早く地を駆ける。酔いに任せて拡散しすぎないように気を遣いながら、萃香は一路北西、

妖怪の山へと進路を取った。

一陣の疾風と化した鬼は、山から続く溪流を駆け抜け、冬後森の準備を始めた河童たちの集落を見降ろし、まだ紅葉の名残を残す九天の滝で梢を揺らして、妖怪の山の山麓へと身を躍らせる。

雪を頂く山は一足早く冬の気配を覗かせていた。山の中腹では積雪こそまだないが、霜柱が凍らせた地面は硬く軋み、かと思えば日差しの下でぬかるんでいる。溪流に張り付く白い霧は、手足を凍えさせるほどに冷たい。

冬にあっても莫大な水量をもって流れ落ちる瀑布の周辺には、今日も神妙な面持ちで白狼天狗達が哨戒任務にあたっていた。

(……うむ、お勤め御苦労)

悪戯っぽく口元を緩め、萃香は己の気配すらも極限にまで疎に薄め、十重二十重の嚴重な白狼天狗たちの警戒網を気付かれることなくすり抜けていく。

山を登ってゆくにつれ、標高とともに植生も変化し

てゆく。赤や黄色の色鮮やかな落葉樹は姿を消し、冬でも黒々と葉を茂らせる杉林が静謐に立ち並ぶ。やがてそれらも姿を消し、森はいよいよ人の手の入らぬ古代の姿へと変じていった。

萃香が十人手を繋いでも取り囲めないほど太い幹をした古木の間を潜りぬけ、鬼は待ち合わせの場所へと辿りついた。

時刻まではまだ半刻ばかりある。急ぎすぎた——という訳ではない。萃香は最初からここで相手を待っているつもりだった。

己の背丈の十倍もあるような大岩の上に陣取って腰を落ち着け、萃香は再び腰の伊吹瓢を手に取り、トンとその底を叩いた。溢れだした酒を口に含み、ぐびりと呷る。

「さて、退屈しないことを願いたいね」
 そう言う鬼の表情は、どこか楽しげなものだった。



徐々に深まる霧の中、刻限よりも少し前になって、待ち人は白霧の向こうから姿を現した。

数は三名、いずれもが天狗。それぞれが顔をすっぱりと覆う面を着けていた。

中央に立つのは濡れ羽色の翼をした鴉天狗。左右に従っているのは刀に盾を携えた白狼天狗だ。流石に抜刀はしていないが、胸当てに面頬、手甲脚絆の戦装束。鎮台はいつから戦時体制に入ったのだろうか。

「お待ちせ致しました。お早いお付きで」

「ふん、詰まらない嘘をつく」

萃香は頬杖をついて天狗たちの姿をにらみ付けた。名乗ることもなく、顔を隠しているのは、自分達の勢力と出自を悟られないためと、自分達がひとつの勢力であることを誇示するためだろう。

白狼天狗の元締めは犬走の長だったはずだが、その彼等が鴉天狗と同じ装飾の面をつけていることから、少々天狗の常識とは外れた集団と言えた。

「鬼を侮るなよ。私が気付かないでも思ったのか？」
「御氣分を害されたのであればお詫びいたします。ですがこれも、全ては大義のため。どうか平に、ご容赦を」

猜疑心と警戒の強さは天狗の十八番だ。どうせ刻限になるまでずっと遠くからこちらの様子を窺っていただろうに、彼らは今しがたやってきたとばかりの態度をとっていた。そんな建前も、いちいち鬼の気に障る。

先頭に立つ鴉天狗——声の調子からするに女だろう。萃香は既に妖気を薄めることをやめていたが、そんな鬼を前にしても物怖じする気配はなく、落着いたものだ。

……もつとも、人前で虚勢の一つも張れない天狗など、とてもあの妖怪の山では生きていけないだろうが。
「このような場でお迎えすること、お赦し下さい。事は内密に運ばねばなりませんので」

これも嘘だ。萃香は既に己の気配を隠していない。山の警備がよほどの節穴というのでもなければ、鎮台

の警備はとつくに萃香のことを察知している筈であつた。少なくともこの面会の間は哨戒大隊が現れないことは織り込み済みなのだろう。彼らはそうして、この峠を支配下に置いておくことを言外に示しているのだ。いざ決裂となれば、ここにいる使者たちの口を塞いで、鬼が偶然にも、再び妖怪の山へと現れたという体を取るつもりなのだろう。つまらない小細工だと不機嫌になりながら、萃香は岩倉上に胡坐をかく。

「不羈奔放の古豪、伊吹萃香様。まずはお越しいただいたことを感謝いたします。この度は——」

「ああ、止しな」

烏天狗の口上を遮るように、萃香は手を翳す。

「こんな寒々しい場所でお前さんの世辞と挨拶を聞いたところで、私はちいとも愉しくない。さつさと本題に入ろうじゃないか。……こんな事をして、お前さんたちは私に何がさせたい？」

「かつての妖怪の山の秩序を取り戻すのです。現在のような欺瞞に満ちた支配を糺し、堅固にして強靱なる

秩序を、再び御山に齎す時が来たのです」

強めた鬼の視線に動じることもなく、淡々と面の鴉天狗は目的を口にした。

博麗大結界ができるよりも以前、妖怪の山には鬼を頂点に抱いた、ピラミッド型の支配体制があつた。彼女達はその再現を望む一派であると自称する。

つまり——彼等は、萃香に再び山の頂点に立ち、統治を振るつて欲しいと申し出ているのだつた。

「へえ」

彼女達からは視線を切らずに、萃香は伊吹瓢を傾けて酒を呷る。

「意外だね。お前たちはもう、私達鬼の事など邪魔にしているのだろうと思つてた」

「遺憾ながら、今の御山ではそう考えている者は多いでしょう。……ことに、いまの上層部には」

「当然だろうね。大天狗どもも、天魔も、折角勞せずして手に入れた支配者の地位を、誰が好んで渡すのかってことだ。窮屈な上もいなくなつて、ようやく好き

放題できるのに」

「我々はその現状を憂いています。萃香様のお耳には届いていますでしょうか。昨今、多くの信仰を集める者たちが立て続けにこちらへとやってきました。彼等はいくくの者たちの信仰を競うように集め、その権勢を日に日に増しているのです」

努めて冷静を保とうとする彼女の口調が、感情のぶれを見せる。やはりどこか青い。さほど歳をとっていない若い天狗だろうと萃香は推測した。精々が百か二百歳。結界ができる頃のことを見知っているかどうかは怪しいだろう。

「そのために、妖怪の山も備えなきゃならないのでしょうか。確か、天狗達は守矢の二柱を信仰していたろう」「ご存じでしたか。表向きはそうなっていますが、相互に利があるから協力をしているに過ぎないことは、羽根の生え揃わない赤子でも知っています。そも、妖怪が神を信仰するなど笑止千万。どこからも距離を保って孤立してしまうならば、いずれかの勢力と繋がり

を持つことで、他の派閥の情報を得ることができるといふ程度の浅慮でありましょう。

そのような無様な姿、もはや看過できません。伊吹萃香様。どうか——再び、我らの長に」

彼女の言葉は、言外に今の山の支配体制を強く批判していた。かつてのように恐れ、畏怖され、遠ざけられた異郷としての『山』の在り方——畏敬と崇拜を持つて迎えられた山の主のような信仰を、彼らは求めているのだ。

その象徴として、かつて山の頂点にいた鬼が、今再び必要とされている。

「ふむ……」

山でも古参の妖怪、特に鬼の直接の配下だった年寄り連中の天狗達は、総じて鬼の支配を嫌っているものだが——若い天狗達だけが若さに逸って起こした行動にしては少々、手が込んでいると言えた。

（一人二人、冷や飯を食わされている大天狗あたりが後ろ盾をしている——のかね）

酒を傾けつつも頭の一部を冷まししながら、萃香はそう推論した。こんな酒の呑み方は窮屈で仕方がない。額に皺が寄るのを自覚しながら、萃香はさらに酒を口に含む。

幻想郷が、信仰を巡っていくつもの勢力が乱立する新たな局面を迎えたことは、萃香も知っていた。

守矢の風祝とは萃香も直接面識がある。いかな異変を前にしても物怖じせず、興味のままだに騒動の渦中へと踏み込む彼女は、曠目^{くぼめ}を抜きにしても萃香にとっては好ましい人間だった。蛮勇と果斷の差を弁え、確かな信仰を己の礎に育む娘——東風谷早苗を、彼女をそうやって育てた神達を、萃香は決して軽んじるつもりはない。

だから、当然の帰結だった。

「結論から言おう。——お断りだよ」

その回答を——恐らく彼等も予想はしていたのだろう。特段、気配を変えることもなく受け流していた。あるいはあの面を剥がせば驚きくらいは見せていただ

ろうか。

「何故です。かつての山で、あなたはそれを成した筈^{うづ}。現を追われた妖怪たちを受け入れ、率いて、絶対的な強者として幻想郷に強固な秩序を築いた。蒙昧なる人間達に、我ら妖怪の恐怖を刻む——それをもう一度、成すのはあなたの悲願だったのではないのですか。かつて人間達に卑劣な手段で大江山を追われた貴方こそが、我らの苦しみを何よりも深く理解していたはず！」

「やれやれ。言ってやらねば解らないのかね」

がりがりと頭を搔いて、萃香は傍らに伊吹瓢を叩き付けた。ずしん、と重々しい地響きが山を揺るがす。

「私も鬼をやって長いが、どういうわけかたまに、お前たちみたいな連中が出てくるんだ。いいかい、私は神輿にされるのは御免だし、お前たちは根本的に鬼つてものを履き違えている。悪いが私にはお山の大将なんてもう興味無いんだよ。どうしても鬼が必要だってんなら、他を当たってくれ」

引き受けるような連中はそうはいないだろうが——

と、胸中で付け足して、萃香は膝を立てる。

「私はね、別にあいっらの親分になりたかったわけじゃない。ただ、私が思うがまま、私が望むがまま、鬼であっただけさ」

確かに、人の世界を追われ、妖怪の山に引っ込んだ時分には、萃香も妖怪達の支配者としてあることが誇りだったのかもしれない。天狗も河童も、個々の問題はあれど種族としては従順であり、力の象徴である鬼達を必要なものとして受け入れていた。とりわけ大きな問題はなく従っていたように思う。

けれどそれらは、鬼の——萃香の求めるものとは根本的に違っていたのだ。

「私はね。私の評判だけを訊いて、私を量ろうともせず従おうとする連中のことが、とりわけ嫌いだ」

これで話は終わりだと、腰を上げた萃香に——

「そうはいかない」

明確な敵意を見せ、天狗が答えた。

「貴方でなければ困る。妖怪の山を総べるのは、かの

大江山の頂点であつた伊吹の酔鬼、酒天童子を置いて他にない」

言葉と共に——白狼達が剣を抜く。

萃香は少なからず驚いていた。

自分が鬼であることにそれなりの自負があつたのだ。木端天狗ごときが、いくら上の命令だからとて、本気で剣を向けられることはないだろうと思つていたからだ。鬼を前に気を萎えさせていないのは大したものかもしれないが、それにしても彼らの行動は短絡的に過ぎる。

（それとも、そんな事を忘れるくらい、天狗は臍拔けたのかね）

ここまで直接的な手段を講じるしかないほどに、天狗たちは昔を忘れたというのだろうか。かつての天狗達であれば、鬼との間に生じた修復できない亀裂を知つていただろうし、それを飲み込んで主に迎えようとするなら、もっと厭らしく避けようのない手段を選んだだろう。

だが、権力構造のために鬼を利用しようとするくらいだ。もはやかつての決裂はとうに忘れられているのかも知れない。

「ふん。詰まらんね。そんなものか、天狗」

「それはこちらの台詞だ。そこまで、人間の巫女ごときに懷柔されているとは……嘆かわしい」

「……は？」

苦々しげに鴉天狗が吐き捨てたその言葉が、あまりにも外的外れ過ぎて。萃香はしばし呆然としていた。

「どうした」

「——っ、は、は、はははははははははははは!!」

朗々と響く高らかな鬼の笑い声が、霜に覆われた梢を揺らし地を鳴動させる。

呵々大笑する鬼に、啞然とする天狗の前で、萃香は可笑しくてたまらないと目尻に浮かんだ涙をぬぐってみせた。

「いやあ、良いねえ。久々に笑ったよ。冗談も大概に——ああ、いや、お前達がそう思うのも無理がない、

のかな？」

「痴れ事を！」

擲^な擲^めされたとしても思ったか、天狗達は一斉に動いていた。左右の白狼天狗が獣の咆哮とともに地を蹴り、鋭く刃を打ち払う。巻き上がる土砂とともに、渦巻く弾幕が萃香を取り囲んだ。

弾幕を放ち、左右からわずかに間合いをずらす打ち込みは、練度の高さを窺わせる優れた連携だ。やはりかなりの腕前。誰が仕込んだかは知らないが、哨戒役にしておくには勿体ない腕だと、萃香は思う。

その後ろで烏天狗も、葉団扇を抜いて羽根に風を蓄える。十分に力を練り上げ、岩すら砕く鋭い風の渦を放つ構えだ。先行する二人の白狼は、いざとなればその身をもって萃香の動きを封じ、もろともに天狗礫をかぶる覚悟だろう。

もっとも、萃香はいずれの刃も弾幕も受けてやる気はなかった。押し寄せる弾幕の密度を疎にして、あっさりとその隙間をすり抜ける。

右から打ち込まれる刃を掴み取り、大根でも引き抜くように無造作にその身体を振り回した。

「——ッッ!?」

決して小柄とは言えない白狼天狗の身体が頭陀袋のように宙を舞った。左の白狼天狗は、盾の上から同僚の身体を叩き付けられ、溜まらず姿勢を崩す。

「およ、思ったより上手いかなかったな」

刀の刃筋を掴み取るのは勇儀の得意にしていた戦い方だが、見様見真似では無理があったらしい。僅かに剥けた指の皮を見て、萃香は吐息。

折り重なる白狼天狗二人に靈撃を叩きこんでまとめて吹き飛ばし、萃香は密から疎、疎から密へと己を変じさせ、鴉天狗の眼前へと迫る。仮面越しにもはつきりと彼女が驚愕を露わにするのが分かった。

その瞬間だった。

「——祈願 祈願 屍鬼が代わり（戦わんことを 急々に律令のごとく成せ） 鬼代戦、急々如律令！」

響くのは口訣。導引とともに力となる言葉とともに新たな姿が戦場に割り込む。姿を消し潜もうとも、不

意打ちくらい萃香には察知できるはずだった。しかしそれが叶わなかったのは、相手に呼吸も気配も存在しないから。

強張った跳躍で兎歩を踏み、鬼の察知できぬ死角に潜んでいた影が宙へと踊り出る。

——毒爪「死なない殺人鬼」

振るわれた一對の爪を、萃香は避け切れなかった。

腕と肩、深く食い込んだ爪を引き寄せるように、背後から現れた気配が萃香の肩に思い切り口が齧り付く。

あかがね 緋金、鉄の鬼の肌ががぎりと金属質の音を軋ませた。

乱入者はそのまま牙で萃香の首筋を噛み千切ろうとしているようだが、鬼の肌はそう容易く食い破れるようなものではない。

問題なのはむしろ爪のほうだ。緑と紫に滴る毒を纏わせた爪は、萃香の二の腕に深々と突きささり、じゅうじゅうと毒が身を焦がす煙を上げる。

「このっ」

顔も確かめぬまま、萃香は当て推量で力を籠めてそいつの腹をぶん殴る。どてっ腹をぶち抜くくらいの力加減をしたつもりだが、そいつは底知れぬ執念深さで萃香の肩肉を齧りとっていった。

地面を転がって吹き飛んだ影は、発条のように飛び起き、額の札を揺らして愉快そうに叫ぶ。

「おお……やったぞ、青娥さま！」

血の通わぬ色の悪い肌、身体に針金でも通されたようなきこちない動き、冷素を吐きだす冷たい身体。屍体だ。

「あらあら。大丈夫、芳香？」

「おー。勿論だ、ちゃんとないつけどおりにやったぞ青娥様、褒めてくれー」

いつの間にか、地面に大きな穴が穿たれていた。綺麗に縁取りをしたような乱れの無い深淵の穴——ぽかりと開いた虚ろから、甘ったるい香りが流れ込んでくる。

姿を現した青髪の女は、羽衣に腰かけて宙を舞いながら、屍体の頭をよしよしと撫でた。

その姿を萃香は知っていた。先年、聖徳王一派と共に復活した邪仙だ。隣の屍体は彼女の使役する僵尸^{キョンシー}。霊夢にやたら執心で、毎日のように壁をこじ開けては姿を見せていたが——

「最近顔を見せなくなったと思ったら、こんな事を企んでたのか」

「ええ。霍青娥と申します。その節はどうも。ご無沙汰いたしておりますわ」

鴉天狗たちの後ろに陣取り、邪仙は紅を引いた唇を撓ませくすりと微笑む。

「この子は芳香。私の可愛い死体ですわ」

「何でもよく食べ元気な死人だー」

にい、と長い牙を覗かせて、忠実な死体はぴょんぴょんとその場を跳ね、散らばる木々や岩を片端から吸い込んで噛み砕き、腹に空いた傷を癒してゆく。

じゅうじゅうと肌を焼く爪の毒に顔をしかめ、萃香

は邪仙に視線を向ける。

「そうかい。しかし、鬼を食い殺すにやご自慢の死体もちよつと力不足じゃないかね」

「いえ。これでいいですよ」

ふわり、あたりに漂う甘い香りが一段と濃くなる。

「この子に体の一部を食べられた人間は僵尸になります。そして先程の符は、それを人間以外にも適用できるように強化したものだ。つまり、」

青娥は袖から取り出した符を、無造作に放る。ひらひらと額へと張り付く符を、萃香は避けることができなかった。

「これで貴方は私のもの」

邪仙の紅い唇が弧を描く。

符にびつしりと書き込まれた仙術式が羽虫のような音を立てて起動し、萃香の身体の支配権を奪いとり上書きしはじめた。

「どうかしら？ 動けないでしょう？ ああ、暴れても無駄ですわよ。芳香の毒は特別性ですから」

「おおー！ 頑張ったぞー！」

「神変鬼毒か……」

舌打ちをする。かつて自分を討った人間達が使った毒だ。

実のところ、鬼の身体は毒にはさほど強くはない。効いていないように見えるのも無尽蔵な体力に任せているだけで、大抵は毒が回り切る前に成分が劣化してしまうにすぎないのだ。

視界を塞ぐ符の下で、おぞましい毒と呪詛が萃香の体を蝕んでゆく。

鬼も鬼も同じ文字を書く。永く生きた妖怪の常として、萃香は日本古来の隠仁であると同時に鬼としての性質を取り込んでいる。そして大陸では鬼は仙人の使い走りであった。

「……天晴れな悪女ぶりだね。こんな事を仕出かして、聖徳王に愛想を尽かされても良いのかい」

「あら。太子様はそんな器の小さな方ではありませんわよ。このくらい日常茶飯事ですもの。お咎めはあり

ませんわ」

本気かどうか定かではない事を言い、くすくすと笑つて青娥は萃香の頤に手を添えた。

「大した信頼だね。……しかし、よりによつてこんな奴に引き込まれるとは、天狗も腑抜けたもんだ。やっぱり一度顔を出さなきゃダメだなあ」

「あらあら。口だけは威勢の良いこと。いっそ本当に殺してしまおうかしら？ 動けなくても傀儡の変わりは務まりますわよね？」

肩越しに天狗たちを窺う青娥。面を付けた天狗達は否定も肯定もせず、無言のままだ。

「それにね、決して貴方にも悪い話ではないと思ひますのよ？ だって、ほら」

青娥は碧に塗った爪でつい、と萃香の唇を弄ぶ。

「妖怪の山が隆盛すれば、巫女とて動かないわけにはいなくなるでしょう。そうすれば貴方は再び、あの子と対峙できますわよ？ 異変解決などという、まやかしのごっこ遊びではなく——貴方が心の底での望む、

人と鬼の対峙という形でね」

すとなと、心の底を抉るような言葉だった。邪仙の漂わせる甘ったるい毒気が濃さを増し、萃香の意識を侵食してぐずぐずと腐らせていく。

この邪仙は本当に、上辺の言葉で他者を誑かすのに長けていた。

自身の認める人間との、正々堂々の戦い。

それは、大江山の首魁としてあつた伊吹萃香が、平安の昔より忘れる事もできずに心に抱き続けた悲願であつた。

「——は」

顔も上げずに、萃香は嘲笑つた。俯いた顔を隠す符が小さく揺れる。

「性悪め」

「お褒め頂き、光栄ですわ」

「じゃあ、ついでに知らないようだから教えてやろうか」

ずるり。

符に支配を奪われたはずの萃香の身体が、煙のように溶け崩れたのはその時だった。邪仙が顔色を変えるよりも早く飛び出した芳香を跳ね飛ばし、霧へと変じた萃香は、額の符と僵尸に噛まれた部分だけをその場に残し、すぐ近くの岩の上に実体化した。

「我が群体は百万鬼夜行——。そんなつまらないもので、鬼を従えられると思うな!!」

己を限りなく疎に分解することで、制御を奪われた身体の一部と、流し込まれた毒だけを身体から除いたのだ。

「——祈願 祈り願う 屍鬼を創造せんことを 急々に律令のごとく成せ 屍鬼創造、急々如律令!」

しかし青娥もただでは転ばない。素早く口訣を唱え導引を結ぶ。同時、青娥の傍にも同じように、もう一人の萃香が姿を見せた。壁抜けの邪仙は萃香が降り捨てた部位を寄り集め、僵尸へと創り直して支配下に置いたのである。

持つて行かれたのは力の総量からすればおおよそ四分の一。その分だけ己が『薄く』なったのを萃香は実

感していた。しかし酔鬼の口元は焦りどころか、笑みを覗かせる。

「久々に、全力でやっても良さそうだね!」

叫んだ鬼はぎりりと拳を握る。掴み込まれたわずかな塵が、密の力で一点へと収束。限界を超えて圧縮された塵は、大きさを限りなく零へと近付け、ついには自重で崩壊し始める。ブラックホールの発生だ。

萃香は躊躇いなくそれを邪仙へと投げ放った。とっさに竹杓を身代わりに遁じ、逃れる邪仙をよそに、超重力の塊が天狗達の翼を絡め取る。天狗の全速力ですら逃れられない空の「一か所を『下』にしてしまう密の極みに、彼等は為すすべなく動きを封じられる。

「せーが様——!!」

——走火入魔。
ゾウアオルウモウ

主の危機にいち早く反応したのは二体の僵尸だ。芳香が矢のように飛び出して、毒爪を振るって萃香の肌を引き裂き、額に符を貼られた萃香の分身も巨大化しながら拳を叩きつけてくる。

がおん、と山肌に大穴を穿つ分身の拳を真つ向受け止め、萃香は凄烈な笑みを覗かせた。力を入れた鬼の肌で、芳香の爪はあっさりと弾かれ、分身の腕はべきりと折れ曲がる。

「――まだまだ」

伊吹の酔鬼はじゃらりと、腕に下がる鎖を引き寄せ、ぐんと力を込めて振り回した。

宙を走った鎖は、瞬時に数倍の太さへと変じ、僵尸と化した己の分身を縛り付けた。普段の数倍に太くなる鎖は、事物の『相』を絡めて固定し、あるいは操作する力を備えている。

鎖に両手を封じられながらも、分身はその場に踏み留まり、引き寄せられることに抗おうとした。

「うーおおおー!!」

限界を越えた動作で忠実な死体が奔る。使えない腕は無視して、萃香の頭を丸ごと齧らんばかりに大顎を開いて襲いかかってくる。萃香が分身と綱引きをして動けない状態を狙ったのだ。

「悪いね、お前さんの相手は後だ」

萃香は片手で器用にぐびりと伊吹瓢を呷った。小さな身体の胸がぐんと膨らんだかと思うと、灼熱の炎が吐き出される。燃え盛る焰は煌々と空を焦がし、忠実な屍体を直撃した。鬼の業炎に全身を巻かれ、芳香は左右の足を燃やされ、人の形を失って地面を転げ回る。

一方、縛鎖から力づくでは逃げ出せないと悟った萃香の分身は己の能力を用い、身体を『疎』にして拘束を逃れようとした。が、萃香はそれ以上の力で相手を『密』に押し込め、離脱を防ぐ。

同じ能力を持つ同士では、その力の強い方が勝つのは道理だ。萃香は力任せに鎖をぐいと引きよせ――握りこんだ拳を分身の腹へと叩き込んだ。

栓を抜いたような甲高い音を響かせ、分身は破裂し塵一つ残さずに吹き飛ぶ。力を失った符がべらりと地面に落ちた。

「……なんだ、案外脆いもんだな、私も」

五割程度の力で殴ったつもりだが、それで消えてし

まうくらいではそもそもまともな鬼として成り立ったかどうか。

「く……!!」

青娥は大きく気を吸い、胎内で練り上げた丹と気を放った。青く輝く燐光が溢れだし、萃香へと迫る。

孤魂野鬼。呼び出した屍鬼を持って相手を喰う濁業術である。

萃香は慌てず掲げた両腕を地面へと叩き付けた。轟音と共に数十の巨大な火球が呼び起こされて次々に爆発。連鎖する炎に邪仙の放った光はあっさりと飲み込まれた。

陽の塊である鬼の酒気による焔だ。屍鬼などひとたまりもなく燃え尽き、跡形もなく灰へ変わる。たとえ仙丹で鋼と化した邪仙とても例外ではなかった。腕を炎に巻かれ黒焦げにされた邪仙は、苦し紛れに地を穿ち、仙術をもって巨大な岩を萃香へと投じた。

十丈にも及ぶ大きな巨岩は、しかし萃香の拳であっさりと爆ぜ割れる。砕け宙を舞う瓦礫の中、青娥は

驚愕に目を見開いた。

萃香は砕いた岩を再び一所に『密』し萃め、そのまゝ邪仙へと投げ返す。

仙人と言うのは基本不死で、倒すということが難しい。ゆえに術を比べ合い、相手に叶わないと認めさせることが肝要なのだ。

「……これは……!!」

顔色を変える邪仙を庇うように、黒焦げの僵尸がその前へと躍り出た。身を挺して肉の壁で主をかばった忠実な死体は巨岩の直撃を受け、粉々に砕けて吹き飛び、あたりに色の悪い臓物をぶちまける。

ほとんど形も残っていない芳香の手足は、それでも執念で萃香にしがみ付き、抵抗を試みてくる。

「うむ、ご主人。これは逃げるが勝ちだぞー」

半分焦げた顔で主に進言する芳香。言われるまでも無いのだろう。邪仙は素早く髪に刺していた鑿でトンと地面をえぐる。足元に転がった部下の首を抱えると、青娥はばかりと空いた深い穴の中へ身を投じた。

「……ふむ」

あつという間に二人の気配は消え失せ、地面に空いた穴も塞がつてゆく。仙術の腕に比べても見事な逃げ際と言えた。

見事なまでの窮地を察する嗅覚だ。性悪な本性を含め、実に厄介な相手だと言える。おそらくあの邪仙はああして長い時を生き抜き、興味の赴くまま事態を掻き回し、優れた英雄の傍らに侍つてその生涯を見届けて来たのだろう。

兎も角も邪仙たちは退場し、残るは天狗達だけとなる。

「さて、どうにもお前さん達は、鬼というものが何なのか忘れてゐるらしいね。……まあこれは私のせいでもあるな」

ひとりごちながら、萃香は天狗たちへと向き直る。

荒ぶる鬼の戦いを目の当たりにし、もはや彼等の士気は瓦解していると言つて良かった。いち早く背中を見せた鴉天狗に続き、白狼の片割れも尻尾を巻いて逃

げだす。高慢の権化とは思えない醜態を晒す天狗達の中――

一人だけ、しつかと剣を構えてこちらに向かう白狼天狗の姿があつた。確か、最初に萃香に斬りかかつて来た方だ。

「――ッ!!」

驚いたことに、彼女はまだ年若い娘だった。

割れた面の隙間からは、ぎらぎらと獣の眼光が覗いていた。強敵を前になお怯まない、この国からは失われて久しい狼の矜持をそこに垣間見て、萃香はわずかに口元を緩めた。

「……そう。それでいい」

その独白が彼女に届いていたか。

白狼天狗はもはや盾など意味がないと悟つたか放り出し、両手に剣を握つて、肩上に高々と掲げ構える。渾身の太刀を振り下ろすだけの、二の太刀を考えもしないまっすぐ馬鹿正直な構え。

鬼というのは厄介なものだなど心の中だけで苦笑し

て。咆哮と共に地を蹴る白狼に、萃香はしつかと拳を握り迎え撃った。



騒ぎに騒いだ年末の宴会も終わり、人妖はそれぞれに神社を辞していた。いまだ酒の匂いが立ち込める広間は、冷えた鍋に空の皿、倒れた杯にコップが積み重なって惨憺たる有様だ。

飲み比べに無茶をして酔い潰れた魔法使いを引きずって、付き添いの河童が離れへと歩いて行くのを尻目に、別れを惜しむ紅魔館の吸血鬼達を見送って、霊夢は静かに吐息した。

「どいつもこいつも好きなだけ暴れて帰ってくのよね」
宴会場となった広間の惨状を出来るだけ視界に入れないようにしながら、縁側へと向かう。火照った顔を袖で仰ぎながら、懐に確保していたとおきの一本を手を縁側へ腰を下ろした。

開け放った障子から吹き込む夜気が、広間に溜まった熱を冷ましてゆく。午後から断続的に降り続いた雪で、神社の境内はすっかり白く染まっていた。

「れーいーむー」

ととと、と小さな足音に、甘ったるい声が聞こえたと同時に、どんと背中を抱きついてくる小さな感触。服越しにもはつきりと分かるほど、火照った額がぐりぐりと背中擦りつけられる。

「なんだよー。もうちょっと構えー」

「ああもう……」

傍から見れば肩幅よりも立派な両の角が暈や襖を引き裂きそうだが、角は実体をもたぬかのようにそれらをすり抜ける。冬場に布団に潜り込んだ時、角が擦れて痛いと言句を言ってきた以来、萃香は角の扱いに気をつけるようになった。

ごろごろと顔を擦りつけてくる萃香に押し切られて、霊夢は根負けするように膝を貸す。酔いどれ小鬼には満足そうに巫女の膝に頭を乗せ、ほにやりと酔いに蕩

けた表情を緩ませた。

「うむ。いい具合だねえ。欲を言うとも少しこちら辺に肉付きがあれば――あ痛たたた。霊夢、冗談。冗談だって」

頬に呪符を貼り付けられもかく萃香は、火傷しそうな手付きでそれを引き剥がす。

十の半分を越したかどうかという小さく幼い体軀には、ただの娘にはあり得ない無視できない力強さと存在感が有った。

白い肌に良く目を凝らせば、古傷がたくさんその痕を刻んでいる。敢えて消さずにいるのだと、萃香は以前霊夢に酔いの中で語った事が有った。

「……ん、どうしたの、霊夢」

膝上に寝転がる萃香と視線が合い、霊夢は深く溜息をついた。

「別に」

短く答えるが、それでも萃香は膝の上から不思議そうに見上げてくる。とうとう根負けして、霊夢は口を

開く。

「……なんであんた、そんなに私に構うのよ」

「そりゃあね、妖怪だからさ。博麗の巫女のことには気になるよ」

その名は、良かれ悪しかれ妖怪達には決して無視のできないものだ。幻想郷の調停者として彼女の動向は気に掛けねばならず、敬意を評するのだ。

けれど萃香のそれは、他の妖怪たちのものとは少しばかり違うような気がした。

「簡単だよ。鬼が人を攫うのは、そいつが欲しいからさ。私たちはそういうふうにできている」

財を集め、人を集め、罪を集め、欲を集めて荒ぶる。それが鬼というものだ。

「霊夢。お前が欲しいと言うなら、あの月だって碎いてみせるよ」

「そんな事されても嬉しくないわ」

結局、萃香の言いたいことが良く分からず、霊夢は右手の盃に注いだ酒をついと口に運ぶ。化粧気の薄い、

小さな唇が酒精を含み、白い喉が小さく上下するのを、萃香はじつと見上げていた。

人と妖怪とは河の彼岸と此岸。届かぬ隔たりのあるもの。妖怪がよかれと思うことは多く、彼等には迷惑でしかない。分かり合おうとすることは悲劇を呼ぶのだ。

「……頼公達もさ」

ぽつりと、独白のように萃香は言う。遙か昔の平安の世、鬼を討った、源氏の武士たちのことだ。

「あいつらの事情も、分らないことはないんだよ。私と最初に出会ったときとは違って、あいつらの力はどう自分たちだけのものじゃなかった。武門の誉れ、鬼を退ける力——それは、人間たち皆に必要なものだったんだ。もはや人間たちは闇に脅えるのではなく、同じ人を相手取って生きてゆく時代。あいつらはそれを望んでいた。

だから、あいつらは鬼なんかを負けていられなかったんだ。どんな事をしたって、勝って、帰らなきゃい

けなかった。人間は、もうどんな闇にも負けないと示すために」

伊吹瓢を掲げ、萃香はそこからぐびりと酒を呷る。

「でもなあ。私はそれが悔しいんだよ。そんな事をしなくたって、あいつらは、私達に勝てたはずなんだ。当の本人の私が言うんだ、間違いない」

懐旧か、悔恨か、感傷か。いずれにしたって鬼には似合いもしない想いだろう。けれど萃香は、大江山の伊吹童子は、ずっとその事を抱え生きてきた。

これまでも、そして、きつとこれから。

「……私はね、霊夢。私が思うがまま、私が望むがまま、鬼であるだけさ」

済んだ夜空を見上げ、霊夢の緋袴にだらしなく頬を埋めて。萃香は口元にこぼれた酒をぬぐう。

「ああ、今日も月が綺麗だ」

霊夢の膝上で目を細め、ほんのりと染まった頬を擦りつけて。幻想郷の鬼は満足げに唇を緩める。

「こうして今日も、博麗の巫女を独り占めできるんだ。

こんなに贅沢な事はないさ」

「わざわざ攫わなくても、ここにいるわよ」

「……だからさ」

萃香はゆっくりと右手を掲げた。振り上げた拳に、
途方もない力を込めて撃ち放つ。

ばきん、と。

濟んだ音とともに空が砕け——ばらばらと。破片に
なった月は、きらきら輝きながら神社の境内へと降り
注いだ。

その破片の小さな一つを、すいと掴み取り。萃香は
霊夢の持つ盃へと浮かべる。

「——言ったら、鬼は嘘をつかない」

「……そうね」

吐息と共に盃を受け取って、霊夢はそれを静かに干
す。

喉が焼けるような強烈な酒精が、かあと身体の内を

燃やしてゆく。

ほんのりと赤く染まる頬と首筋——なぜだかそれを見られるのが気恥ずかしくて、つい視線を反らす霊夢に。

萃香はもう一度笑って、霊夢の手にした空の盃を傾け、そこから滴る雫を舐めた。

烏と兎が匆々しく

初出: 東方紅楼夢 6(2010/10/11)

タイトル付けてみてから、烏って天狗というよりも空のほうが強いなあと気づきましたが割と後の祭り。千歳飴ゲーム(はやかわトリノネ様)ほか、姫様ゲーム等いくつかのネタが露骨によそ様に影響受けたものであったりするのewithと申し訳なくもあり。

やけに思わせぶりなオチなのは、はたてと鈴仙に関するお話がまだほかに構想があるからだったりするんですが、形になるのはいつの日か。

酔々流転の百鬼夜行

初出: 東方晴天祭(2012/12/23)

萃香はなによりも霊夢を愛しているのがうちのサークルのお話の基本であります。これもプロット切る前と後でだいぶ萃香の心境が変わっており、当初は霊夢がどうあっても「博麗の巫女」としてしか自分に向き合ってくれないことを嘆き悲しむ鬼という構図だったんですが、待て、鬼ってそんなに度量狭いのか? もっともっと奔放で自由で強靱で孤高なんじゃないか? と囁く声に合わせて「うるさい、お前がどうだろうと私はお前が好きだぞ」のタイプとなっていました。

鬼の復権を願う天狗一派や青娥の暗躍はこれまた妖怪の山の確執にまつわるお話を考えているときに作った設定です。もう少し練り込んでおきたい部分でもあり。

なお、「私が望むがまま鬼であっただけさ」は、幻想水滸伝Ⅱのルカ=ブライトのセリフが元。

国津宮二神八無シ

遙か地の底、忘却の旧都。ドゥメキモン百目鬼門はかつての旧地獄の庁舎が残る区画だ。地獄機能の移転とともに放置され、今は傾き朽ちた廃屋が寂れるばかり。

宿や夜店が軒を連ねる旧都大街道の喧騒も遠く、薄黒い燐を焦がす鬼火の灯りだけがちらちらと燃えている。

門の前の広場、胴周りが十尺もある古木の根元にいくつもの大樽を抱え込み、星熊勇儀は一人手酌で酒を汲んでいた。自慢の星熊杯を掴むがっしりとした肩、額から伸びる赤い一角は、これ以上ないほどの力の象徴だ。穏やかに古木に背を預けているだけだというのに、全身に漲る力のはっきりと見て取れる。

ごう、と風が揺れた。

巨大な地下空洞は、地下の灼熱地獄の熱で緩やかな

大気の対流を起こす。旧都の活気が起こす水蒸気は、頭上の岩肌で冷え、白い雪の結晶となって舞い落ちる。一年三百六十五日、変わらず旧都には雪が降り、そして地に積もることはない。

朱塗りの大杯に満ちた酒精に、ぽつりと雪の結晶が落ちる。それが溶ける前にぐいと杯を干し、鬼は満足げに口元をゆるめた。

いまは旧地獄街道の顔役として知られる彼女は、たまにこうして喧騒を離れ、寂れた旧都の端で一人酒を愉しむことがあった。そんな時には大抵、彼女の傍には嫉妬深い橋姫の姿が寄り添っている。万が一にも逢瀬の邪魔をし機嫌を損ねてはならないと、他の妖怪達 は決して近付こうとはしない。

けれども今日、勇儀の傍には人影はなく、彼女は辺獄で一人黙々と持ち込んだ酒樽を干していた。古木の根元には既に三つばかり、空になった樽が転がっている。

「……ん」

幾度杯を重ねたか、勇儀はふいに口元をぬぐって視線を上げた。

それまで茫洋と漂っていた周囲の妖気がその色合いを変えていた。辺りに満ちる気配が急激に濃くなり、宙の一点に収束する。燐火を伴う爆発が起きれば、そこには彼女と良く似た装いの、小柄な少女の姿があった。

ねじくれた二角、手枷から伸びる三本の鎖。頬は赤く、ふらふらと千鳥足。とろんと人懐こい笑みを見せる彼女、見てくれこそ十にも届かぬ童女のようなが、その小さな体躯には滾るマグマを押し籠めたかのような強烈な陽気が満ちている。

彼女こそ、かつての妖怪の山の頂点——騒がしき百万鬼夜行、伊吹萃香。

「悪いね勇儀、遅れた」

「待ち草臥れた。もうみんな呑んじまったよ」

答えて勇儀は手元の樽をひっくり返して振る。酒豪の狸々でも酔い潰せるほどに強い酒精を五樽は空にし

ているが、勇儀の頬にはわずかに朱がさした程度だ。

「……そんなこったろうと思ったよ」

萃香がちらと振り返れば、そこにはまたも五樽ばかりの酒樽がやってきていた。樽を運んでいるのはミニサイズの萃香たち——疎密を操る鬼の分身である。大樽を勇儀の前にずらりと並べ、固めた拳でがんと蓋を叩いて鏡を割れば、透明な酒精がなみなみと露わになった。

「おお」

「天領の杯、越佐の外来の酒だそうだよ。最近、あちこちで羽振りのいい化け狸から挨拶につてね」

萃香の口上に勇儀が相好を崩す。おおよそ、地下の旧都では外来の酒は希少品である。鬼には伝来の銘酒を生む宝物が沢山伝えられているが、いくら美味くとも四六時中呑んでいれば唾と似たようなもので、流石に飽きも来る。

勇儀は背から朱塗りの大盃を二枚、取り出した。そのうち一枚を萃香へと放る。受けとった萃香はそれを

くるくると回し、

「あんたと呑むのも久しぶりだね」

「この前、地上で会ったばかりじゃないか」

「……ここで呑むのが、さ」

二人は樽の中から直接、ざぱりと酒精を汲み上げた。杯を触れ合わせるように重ね、ぐいと煽る。

「んんっ……」

ぐびぐびと喉を鳴らし、半升もあろうかという酒を一息に喉へと流し込み、勇儀は満足げに息を吐いた。

「ふむ。なかなかイケるね。酒虫もロクに使えないだろうに、人間も良くやるもんだ」

「まったくだね」

領き、萃香はすぐさま二杯目を口にし、勇儀も続けて杯を重ねてゆく。しばし二人は外来の銘酒を存分に味わった。

一樽半が空になった辺りで、勇儀はがりりと杯の端を齧り、口元を緩める。

「……で、こんなもんで差し入れて、本題はなんだ

い、萃香。あんたがここに來たがるなんてよっぽどのことだろう」

「ああ」

とろんとした表情で、萃香は頷いて見せた。そう。萃香はただ旧交を温めるだけが目的でここを訪れたわけではない。

本来、地底は地上を追放された妖怪達の住処であり、地上との交流は固く禁じられていた。最近ではだいぶそれも緩くなっているが――袂を分かった萃香が訪ねていくこと自体、そもそものが筋違いなのである。旧都の端、廢墟ばかりが並ぶ百鬼門を勇儀との面会場所に選んだのも、他の妖怪達に配慮してのことだった。

じゃら、と鎖を鳴らして杯を干し、萃香は答える。

「ひと探しさ」

「……？　なんでまた」

「なあ勇儀。最近地上であつた騒動、知ってるかい？」
少し前の事になる。長年使われてきた道具達が意志を持ち、勝手に動き出したことに始まる一連の騒動が

あった。愛用のお被い棒やミニ八卦炉が動き出したこととに疑念を持った巫女や魔法使いはこれを異変だと考え、いつものように黒幕を退治するために乗り出した。

普段おとなしい妖怪達がやけに好戦的になり暴れ出しているのを叩きのめし、彼女達にも何者かが力を持たない者たちに力を与えている事を知った巫女たちは、嵐の中に浮かぶ逆さ城の中で、打ち出の小槌を振るう小人と、彼女に強きものへの反抗を唆した天邪鬼に辿り着いたのだと言う。

「小槌か。……随分懐かしいもんが出てきたねえ」

昔話にも語られる打ち出の小槌は、伊吹瓢や星熊杯と同様、鬼によって作られた宝物のひとつであった。所持者の望みに応じて力を振り出し、いかなる望みも叶えることができるその小槌は、かつて鬼達から小人の英雄の手に渡り、長らく行方が知れなくなっていたものだ。

「つてえと、萃香、その小人つてのに逢ったのかい」
「ああ。……あいつに良く似た、まっすぐな奴だった

よ。人を疑う事のない馬鹿正直なやつさ」

わずかに苦いものを滲ませつつ、萃香。いかなる願いも叶える小槌は、容易く所有者を墮落させる。初代一寸法師の子孫である小人一族は皆その魔力に惑わされ、その代償に多くのものを失った。それから時を隔てた現在の所有者、少名針妙丸も例外ではなかった。彼女は弱者による強者の下剋上を題目に、力なき妖怪達に力を与えていたらしい。やがては彼等を賛同者に募り、レジスタンスとして幻想郷に革命を起こすつもりだったのだ。

その企みはひっそりと静かに侵攻し、思わぬ場所今まで食い込んでいた。事実、霊夢や魔理沙は小槌の力で意志を持つて動き出した道具達に操られ、目的を見失って散々な目に遭っていたのである。久々に屋敷を出た紅魔館のメイドが冷たいナイフと辣腕をふるい、異変の中核たる小人を押さえたことで、事件はようやく収束を見た。

「まあ、異変自体はもう収まってるのさ。小人は神社

に捕まってるし、そもそも騙されてただけだったらしい。元々が小槌から振り出された力によるもの、時間が過ぎれば勝手に力も回収されて元通りだ。付喪神達の方も落ち着いたようだし、霊夢はこれで一件落着と思ってるようなんだけど……どうもそうは言ってもらえないみたいだね」

「あん？」

「騒動の黒幕の、もう片方が見付からないんだ」

針妙丸を唆した張本人、鬼人正邪を名乗る天邪鬼の行方が分からないのである。

なにしろ元々が天邪鬼、雑魚とほとんど変わりのない妖怪だ。隠れようと思えば雑多な気配に紛れてしまう事は容易い。霊夢も魔理沙もあちこちを探しまわったようだが、いまだに行方は遥として知れず、すっかり諦め気味なのだという。

「天邪鬼、ねえ。別に放っておいても害はなさそうなものだけど。どうしてそんな奴をお前さんが気にするんだい」

「覚えがあるのさ」

苦い息とともに、萃香は杯を煽る。鬼の強い酒精で、ずっと喉の奥に引っかかっていた、棘を溶かして飲み込もうとするかのように。

「なあ、覚えてるかい勇儀。大江山で頼光とやりあった頃に、私らの山に居た。やたら弱っちい奴がさ」

「——んんん？」

眉を立て、大きく首を捻る勇儀。どうやら言われてすぐには思い出せないくらいには忘れているらしかった。正直、自分と脳筋度合いでは大差ないはずなんだが——と萃香はかつての同朋が難しい顔をしているのを眺める。

「ほら、やたら負けず嫌いで、意地っ張りで、そのくせ腕はからっきしの。角が生えてりゃ鹿でも甲虫でも鬼かって、苛められてた奴さ」

「……ああ！ 思い出した！ そうだね、居たな、そんな奴。」

ようやく思い至ったか、勇儀はばしんと膝を叩いた。

そう、確かに居たのだ。まだ天地にはつきりと明暗が引ききられていない黎明の時代。人と妖怪が対等に争っていたあの時代。大江山に陣を張り、都の武者源頼光たちと組み合った酒呑童子配下の鬼に、確かに彼女の姿はあった。

萃香も名前は覚えていない。鬼の社会において、強さと個の認識は等号で結ばれるものだ。弱い鬼など誰にも見向きもされなくて当然だ。そこいらの人間にも負けてしまう、危うくて弱い同朋など、居ないも同然と扱われていた。

——けれど、そいつは鬼だったのだ。まったくもって卑怯で臆病で、強さの欠片もなくとも、そいつは確かに鬼だったのだ。

それがいま、鬼人正邪を名乗る妖怪の正体だと、萃香は語る。

「良く覚えてるもんだねえ、そんな奴の事まで」
「ん、……まあ、気になったのさ」

萃香は言葉を濁し、ゆっくり盃を煽った。人魂を追

いかけてふわふわと漂う亡霊魚の骨を掴み、指先から放つ陽気の炎で焙つて口に放り込んだ。香ばしい幽骨をバリバリと噛み砕きながら、眉をよじって吐息。

「柄じゃないとは思うけどね、昔のよしみってやつだよ。顔見知りが零落してるのを見過ぐすのは忍びない。根城も失くし、打ち出の小槌も使い手ごと捕まって、魔力の回収期に入った。元の通りの天邪鬼が一匹じゃ大したこともできないだろうけれど、どうにもやり口が気に入らないのさ。……地上に居辛くなった連中は、大概ここに流れてくるだろう?」

「ふむん。……旧都に流れてくる連中の事ならまず私の耳に入ってくるもんだが、今のところそういう話は聞かないね。パルスイも素直に通すとも思えない」

「どうかね、あいつは天邪鬼だ。本心を偽るなんて朝飯前だろう。覚なら一発でお見通しだろうが、あれは地霊殿を滅多に出てこないじゃないか。……鬼には一番面倒な相手だよ。言っちゃあなんだが、ここじゃ勇儀が一番謀(たばか)られやすい」

「っは、まったくだねえ」

つまり、勇儀も知らず正邪に唆されているのではないかと言外に言っているのだが、旧都を根城にするかつての山の四天王は、萃香の指摘に気を悪くした様子もなく豪快に笑った。

「そんなわけだから、しばらくここで探させてもらいたいのだ。……この連中と下手に喧嘩にでもなったら面倒だ。一応はあんたに話を通しておこうと思つてね」

閉鎖的な環境に暮らしてきた地底の妖怪達は余所者に敏感だ。その筋を通すための来訪だが——疎密を自在にできる萃香がその気になりさえすれば、姿も気配も消す事など容易い。それでもあえて勇儀の元を訪れたのは、彼女の顔を立てるためでもあった。

「律儀なもんだね。喧嘩にやられた腹いせに——なんて陰湿な奴が多いのは確かだろうけど」

からからと笑う勇儀。そんなことは起きはすまいと、心から信じて疑っていないのだろう。

「まあ、気のせいで済むならいいんだけどな」

「……あたしは大体、街道の宿にいる。暇なら声をかけてくれ」

最後の一樽を抱えて飲み干し、勇儀はずしりと地響きを立てて腰を上げた。

自分のぬぐらにしている宿の名を告げ、去つてゆく勇儀を見送り、萃香は一人吐息する。

「柄じゃないか。……まあ、そうなんだろうな」

今はバラバラになつてしまつた山の四天王——かつての妖怪の山にあつた自分達の同朋たち。彼らの元を離れたのは萃香の方なのだ。今更未練がましいと言われればその通りだろう。橋姫なら、まったく仲間思ひなことね、お優しくて妬ましいわ、と皮肉でも言っていくところだ。

おおよそ。

鬼らしくないと言われれば、一番自分がそうなのだと、萃香は思う。過ぎた昔、終わつた過去を一番引きずっているのは自分なのだと。

ぐいと伊吹瓢をあおり、頭をよぎるのはかつての友人達の顔だ。珍しく深く酔いが回っていることを自覚して、萃香は天を仰いだ。深い地の底の旧地獄、光の届かない空から、鬼火に照らされた雪がちらと舞う。

「参ったねえ。どうにも余計な事ばかり思い出す」

もう一度伊吹瓢に口を付け、一人ごちた酔鬼の背中は、ゆっくりと地底の闇の中へと溶けていった。



「これはこれは。大将御自らのお出ましとは、光栄の限りだな」

へたり。立ち枯れた古木に張り出した枝の、下。天地の上下などお構いなしと嘲るかのように、上下さかさまに腰かけて。

ようやく見つけ出した反逆の天邪鬼、鬼人正邪は小さな唇からちろりと舌を覗かせる。艶めかしくも赤い舌は、幼い容貌と相まって妖しげな妖艶さをたたえて

いた。

実力差が天と地ほど明らかな萃香を前にしても、正邪はまるで動じた様子がない。苦楽を逆さにするつむじ曲がりの天邪鬼は、窮地や危機などというものとは無縁なのだ。

「わざわざこんな地の底まで私を追いかけてきたとは、鬼の大将どのはご立派だね。まったく頭が下がるよ」

「ふん、嬉しそうな顔しやがって」

にやにやと笑みを深くする天邪鬼の、殊更に心にささくれを立てるような物言いに、萃香まで語気が荒くなる。それが彼女の手なのだと分かっている、応じずにはいられない。

「鬼の面汚し、か。滑稽だな。何を怒ることがあるんだ？ まさしくお望み通りじゃないか、大将。お陰さまで私はこうして、鬼である事を止めてやったんだ」

べろん、長い舌を艶めかしく覗かせ、くるりと萃香に背中を向けて正邪は囁く。

「……それが、お前の言う鬼の在り方ってやつか？」

「そうさ。なあ大将。鬼ってのはね、もう、強くてはいけないのさ。卑怯で、嘘つきで、惨めに逃げ出し、赦しを請うくらいじゃなくちゃ駄目なんだよ」

大江山の鬼達は、時代遅れだったのだと正邪は囁く。鬼が人と正々堂々相対し、互いに死力を尽くして勝負するには、彼女達は四〇〇年ばかり遅く生まれすぎたのだと。

「大將みたいなのには分らないだろうね。人は鬼なんて必要とせず、鬼はとつくの昔に衰えてたんだ。私のような弱く貧しい鬼が生まれていたのがその証だよ」

事実、源氏の武者たちは謀略を用いて鬼を塵埃にした。神話の英雄と相対し、組み打つ時代に遅れた鬼達はそうやって、物語の中で、卑怯で惨めな悪役として生きなければならぬのだと、孤独な天邪鬼は言う。

「だからお前はそんな名を名乗ったのか。ご丁寧に、二枚舌まで生やして」

「——ご名答」

べえと舌を覗かせ、正邪は笑う。彼女の髪の毛のひと房

を飾る赤い髪は、彼女のもつあまのじゃくの本質だ。本心を偽り、嘘を口にし、巧みに人を謀るための、二枚舌。

「我が名は正邪。鬼人の姓にて悪を騙るあまのじゃく。善悪を、喜悅を、真偽の全てをひっくり返して——そのためならば、己などいくらでも偽ってみせるさ」

ねじれ曲がった性根を前にした気分の悪さに、知らず瓢箪に口をつけようとして、ふと。まじまじと紫の伊吹瓢を見つめ、萃香は思い切り噴き出した。

「ああ……成程、そうか、そういうことか」

肩を震わせる鬼に、周囲の鬼火がぱあっと散ってゆく。

「妙につまらんことばかり気になって、酔えなくなっただと思つてたけど——そりゃそうだ。呑み干されてたのは、私の方か！」

ばしんと伊吹瓢を叩き、萃香はぎらりと正邪を睨む。

「こここのこの引きずり出された間抜けな鬼が私で、そいつがお前さんの——弱者の意趣返しってわけだ」

ここでも下剋上は成っていたのだ。伊吹萃香は常から酔気の中にふわふわと漂う鬼だ。なかば酒に寄って成り立っていると言っても構わない。だからこそ、萃香は自分が酔っている事に気付かずにいた。意志をもった伊吹瓢——その酒気に。

看破された正邪は、しかし悔しがるどころかますます笑み深くするばかり。

「あなや、参った！ けれどそれもこれまで。大将がここに来たということは、失敗してしまったわけだ。ああ、まったく嫌になるな。どうしてこうも、思うようにいかないのだろうかね！」

白い二本角を生やした髪を書きあげ、芝居がかった仕草で顔を覆い、正邪は嘆きを装って笑う。

自分の行動を。翻弄される人々の心を。何もかもをさかしまに、苦を楽に、悲哀を喜悅にひっくり返して、その中心に一人、愉しそうに——嗤うのだ。

げらげら。

げらげらげらげら。

「——ああ、本当にまったく嫌になる。お前みたいに、鬼らしい鬼は見たことがない」

萃香は静かに吐き捨てた。吉備津彦命に退治され、坂田金時に退治され、少彦名に退治された——鬼のよう。人がそうあって欲しいと望んだように、鬼であった。

妖怪は、呼ばれる事で名を与えられ、その性質を変えて生まれ変わる。正邪は弱き鬼から人を惑わす子鬼、天邪鬼へと生まれ変わったのだ。賢しらに主を焚きつける天探女、あるいは、本来の役目を忘れ国津の僭主となる天稚彦か。

萃香の隙を突くように、正邪はたんと地を蹴った。「天津宮を遙か背に、国津宮に神は無く、ただ、野辺を彷徨うあやかしが一匹！」

なれば問う。汝、その行く末とは何であるか？」瞬天。ぐるうりと視界が揺れる。天地が逆さまにな

り、上下が裏返り、左右がひっくり返り、善悪も正邪も入れ替わる。

気付けば、萃香は宙に放り出されていた。

——逆弓「天壤夢弓の詔勅」

廃屋、枯れ木、大岩、周囲のあらゆるものも含めて丸ごとが、頭上に向けて墜ちてゆく。地より墜ちる天羽々矢の鏃が、鬼の業を貫こうと、雨霰と叩きつける。

「ふん、——つまらん小細工だ」

しかし萃香は動じない。空気の疎密を操り、だんと飛び散る瓦礫をあつめて作った足場を、小さな大地として踏み締めて。上下さかさまのままでの正邪と対するように、しっかりと地を踏み締めたまま。己が地面と定めたそこから、動かない。

「難儀なもんだ。思っていることと正反対のことしか言えやしないってのは、結局馬鹿正直な心根の裏返しだよ。本物の嘔吐きなら、騙すべきときだけ嘔を吐くさ」

どこかの悪戯鬼をふと思ひ出し、苦笑とともにぼやいて萃香は大きく息を吸い——そのまま、伊吹瓢をひっくり返した。さばりと滝のように溢れだす酒精を、残らず腹の中に納めてゆく。空になった瓢箪をひよいと放り投げ、騒がしき百万鬼夜行はゆっくりと正邪を見上げる。

「まったく、すっかり酔いが醒めたよ。生まれてこのかた、素面になるなんて数えるくらいしかないってのに、これじゃ伊吹の鬼の名折れだねえ」

そうして、天邪鬼の顔をひたと見つめ、その名を呼んだ。

「なあ、そう思わないかい、正邪！」

萃まる夢、幻、そして百鬼夜行。その名の通り、大江山の頭領であつた鬼は、かつて齒牙にもかけなかった、一匹のあまのじゃくに真つ向向かい合う。

萃香が本気だと悟つたのだろう。正邪の表情に凄みが増した。

「まだまださ。大将。あんたには存分に弱者の気分を

味わってもらうよ。この、何もかもがひっくり返る地の底でね！」

「やってみな！」

——四天王奥義「三步壊屍」

「その下らん小細工ごと、全部ぶっ壊してやるさ！」

正邪の顔にありありと浮かぶ喜悦を見、萃香は満足げに拳を固め、地を蹴った。

まったく、鬼というのは難儀な生き物だ、と嘸み締めながら。

(了)

国津宮二神ハ無シ

初出：鬼夢想(2013/9/23)

正邪は鬼であった説に基づき、彼女の行く先はたぶん地底だよなどと考えて作ったお話。まさか弾幕アマノジャクで華麗な逃亡生活をしてのけるとは夢にも思わず。

タイトルでもある「国津宮に神は無し～」は、特に元ネタ等はないはずなんですが、何故か私はこれをけっこうな長い間、萃夢想のラスボス戦直前の萃香が喋ってるセリフだと思い込んでおりました。紆余曲折を経て、これが正邪のものになったことになんとも感慨を覚えます。

地底恋愛倶楽部

地底に続く深い深い洞穴。かつては地獄への入り口とも呼ばれたそこも、いまは地下に封じられていた妖怪たちの住処。

湿った風の吹き抜けるその大穴の底で、かなり浮かれ気味な声が響く。

「第56回、地底の燦る恋を応援する会、定例会議ーっ！ どんどんどんばふばふーっ」

暗い洞窟をものともせず、テンション高くおーっ、と拳を突き上げて宣言するのは土蜘蛛の黒谷ヤマメ。その隣で、釣瓶落としのキスメが桶から半分身体を出して、ぱちぱち、とまばらな拍手をする。

照れたようにそれにお辞儀をしてこたえ、ヤマメはどこからか取り出した指示棒で背後を示した。

「じゃあ、今日の検討課題ね！ あの子とお話できる

ようになるには、どうすればいいのか！ まずは出会い。インパクトのある衝撃的な出会いが大事だと思うのよ！」

「……うん」

洞窟の壁には黒板が取り付けられ、大きく『まずはお友達から！』『あの子とお友達になろう！』などとカラフルなチョークで書き連ねられている。

文字通りの、地底に住む妖怪たちの恋愛相談を受けたり、会員の恋を応援したりするのがこの会の趣旨だ。会長兼相談役のキスメと、書記兼会計と残りその他全部担当のヤマメ。現在会員総数は以上2名である。

……一応、会の立ち上げにあたっては顔見知りと言うことでパルスィや勇儀などの参加も検討されたが、前者は声をかけてはみたところ『……ねえあなた、誰にモノ言ってるのかわかってるの？』とガン睨みで返されたため、後者は『いや、ないだろ鬼とか。常識的に考えて』と至極まともな理由により勧誘が打ち切られたため、今のところ新メンバー加入の目処は立って

いない。

なお、定例会議の多くがは地底に続く風穴の中程で開かれ、吹き抜ける風に激しく揺れる糸や吊綱に捕まった状態、というのが地味に参加への難易度を上げていることにふたりともまだ気づいていない。

「それでですねキスメ会長？ この前見つけた文献によれば、出会いって、第一印象が相手のイメージの八割を決めるそうなんですよねえ、ここを成功させるのはとっても大事なのかと思われそうですよ」

白衣に眼鏡をかけたキャラ作りまでして、今日の研究発表をはじめのヤマメ。

ポインターを伸ばしてべし、と黒板の隅に強調されたメラビアンの方則を示し、ヤマメは指を立てる。

「それで考えてみたんだけど、たとえばこう、登校途中の出会いがしらにぶつかって、ハプニングから始まる恋☆大作戦！ みたいなのはどうかねえ？ とりあえずあの子の通りそうなところにこうやって、網をいっぱい仕掛けておいてね、捕まって動けなくなつたと

ころを地底に引きずり込んでさっ♪」

「たぶんそれ最悪の出会いだと思うなあ」

恋の輝きに目を星でいっぱいにして、相変わらずあさつての方向につっぱしるヤマメに、キスメはこっそりと溜息をついた。

なお、現在までに開かれた56回の定例会議は、その全てがヤマメの恋に関するものである。

事の起こりは数か月前。

『「―ねえキスメっ、一目惚れって信じるかいっ!?」
帰ってくるなりヤマメが発したその第一声がすべての始まりだった。』

これまでは隔絶されていた地底と地上の交流開始をきっかけに、地上への横道トンネルを増設していたヤマメは、その先で見かけたとある相手に一目惚れ。一撃必殺のふぉーりんらぶ。

たちまちヤマメは土蜘蛛から恋する妖怪にクラスチエンジし、寝ても覚めてもその事で頭が一杯。重い溜息についてはアンニユイな表情で一日を過ごし、病気の管理まで滞る始末。

旧都一帯に感染性強力な新型インフルエンザが蔓延しだしたあたりでこれはまずいと判断したキスメは、緊急避難としてヤマメの恋愛相談に乗ることになり、以後、ほぼ毎夜の定例会議に付き合わされる羽目になっ

ていたのだった。

「うーん。……やっぱりきつかけだよねえ。最初は普通に挨拶からはじめたりとか。お話するだけでもいいんだけどさ……だけどなあ……」

チョークで黒板の端をぐりぐりと擦りながら、眉を寄せるヤマメ。

誰からも好かれる人気者であるくせに、いざ自分のこととなるとか恥ずかしくて積極的になれない地底のアイドルを、キスメは生暖かい眼で見守る。ヤマメが大事な友達なのは確かなのだが、その恋愛に協力する、

というのそれはそれでいろいろ思うところがあるものだ。

「この前書いてたお手紙とかは？」

「うん、……書くは書いたんだけどさあ」

ヤマメはむし、と渋い顔をしたまま、ごそごそとハートマークのシールつきの封筒を取り出した。

「なんて書いたの？」

「まえからお話したいと思ってました。一緒に地底をお散歩しませんか、って」

「へえ、いいじゃない。どうして出さないの？」

広げられた便せんを、何気なくキスメは覗き込んでみる。そこには新聞を切り抜いたような文字が継ぎ接ぎで並んでいた。

『アイたいです。ずっとアナタを見たいまシタ。

一緒に地の底までいきマシヨウ

もう二度とハナさない』

「怖いよ!! 思いつきり脅迫状でしょこれ!? この怪文書っ!?!」

しかも便せんのおちこちにはなぜかどす黒い染みやなんなのか想像もしたくないような手形までくっついている。よく見ればインクとわかるが、それでも怖い。

「いや、私字書くの下手だしねえ……新聞の文字拾って使えばいいかなって思ったんだけど。これがなかなかいい文字がないんだよねえ、探してみると。あつはつは」

「下手でもいいから自分で書きなよ!?!」

概ね、ほぼ毎日開催される定例会議では、ヤマメのボケに（天然か意図的なものかは激しく不明だが）キスメが突っ込み、気付けば夜が明けかける、というような事態が頻発している。

かくも恋というの人は人を変えるのだなあ、とキスメは寝不足の目を擦りながら、知りたくもなかった友人の新たな一面を見ることを続けていた。

「と、とにかくこの手紙はダメ。絶対。……ほら、もつと他にはないの? ヤマメがしてもらって嬉しいこととか」

「うーん……未発見の新種の病原体とか」

「だからそーゆうのじゃなくて! もつと女の子らしく! ガールズビーアンビシヤス!!」

がこんがこんと桶を鳴らして詰め寄るキスメの気迫に押され、ヤマメはえーとえーと、と汗を浮かべて考え込む。

「あ、そうだ……甘いもの、とか?」

「そうだよそういうのだってば。……うん。でもいいかも。なんだつけ、地上だと好きな人への告白の代わりに、チョコレートをお祭りがあるんだよね?」

「うん。ばれんたいんでーだっけ?」

まだ時期的には早いらしいが、甘いものをプレゼントに贈るといのは確かにいいかもしれない。手作りであれば話のきっかけには十分だ。

「そっか……チョコレートか。じゃあここは奮発して脚の二、三本も引きちぎってっ♪」

「やめなねそれは」

「リボンとかでまとめたらちよつとお菓子っぽいと思うんだけどどうかな？」

「どうかなじゃないってば」

引くから。素で引くから。

確かに蜘蛛ってチョコレートの味がするとかって言いますけどねあれ都市伝説ですからね!! と心の中で蜘蛛がチョコレートの味って言い出した奴に文句を言いつつ、テンション上がりっぱなしのヤマメをなだめるキスメ。

が、恋は盲目という言葉が示すように、もはやヤマメの暴走は留まるところを知らない。

釣瓶落としだけに落ち込んでみたりもするが、キスメは今日も元氣です。

「あつはは大丈夫だよ8本もあるんだし。ちよつとくらいになっても平氣平氣!!」

「ちよつとじゃないから。3割以上なくなってるからね」

あーもうめんどくさいなあ、と思いつつも、こんな内容のないガールズトークにキスメが付き合うのは、

「……喜んでくれるかなあ、あの子」

なんととっても、そんなふうに本当に楽しそうな横顔を見せる友人のためなのだ。

「人の氣も知らないで、いい氣なもんだよね」

「ん? 何か言った、キスメ?」

「なんでもないよっ」

地底恋愛倶楽部

初出：折葉坂三番地 blog(2009/11/10)

後述の「蛍を呼ぶ甘露の罌」の前日譚として描いたお話。キスメのキャラが定まってない感がバリバリです。まあ人見知りする子なんだということでひとつ。

ヤマメもまだ可愛いお嬢ちゃんという感じで描写しておりますが、自分の中ですっかり年経た古老というイメージが出来ちゃったヤマメは、もうこういう風には描けないかなあと思ってしまったり。

蜚を呼ぶ甘露の罍

「『すとかー?』」

「あ、いや、そうって決まったわけじゃなくて、そうなのかなーって思っただけよ。あくまでね?」

話を切り出したとたん、その場に居た全員に声を揃えて聞き返され、リグルは困った顔で頬をかく。

ここは湖畔に程近い森の広場。紅魔館とは湖を挟んで対岸のこの地域は、吸血鬼の勢力圏からはやや遠く、かといって魔法の森の魔法使いが出没するキノコの群生地というわけでもない。結果、ここにはそれほど力の強くない妖怪や妖精たちが遊び場のように群れ集うようになっている。

しかし、いつもの面々の暢気な雰囲気とは対照的に、リグルはずいぶんと憔悴しているようだった。

「最近、家に見たことない包みが置いてあったりして

さ。気になってしょうがないの。誰からかもわからないし。一応聞くけど、みんなじゃないんでしょ?」

「だって。ルーミア知ってる?」

「全然?」

闇妖に倣うようにこくこく頷く一同。

「包みって、中身は?」

「見てない。なんか気持ち悪いもん。……それに、ずーっと誰かに見られてるみたいな感じもするんだよね」

「ええっ……怖いねっ」

本当にストーカーなのかな、と応じる大妖精を、チルノは笑い飛ばした。

「まっさかあ。大ちゃんそれはないない。リグルに限って」

「な、なによそれ! わつ、私だってねえ、ファンのひとりやふたりくらいっ」

「熱心なファンだねー」

こぶしを握って立ち上がり、触覚をぴこんと立てて頬を膨らませるリグルだったが、身構えたチルノと応

酬を始めるでもなく、すぐに空気の抜けた風船のようにすくと腰を下ろしてしまふ。そのまま抱えた膝の上に頸を乗せ、背中を丸めて深い溜息。

「……はあ。なんかもう疲れた。普通に考えて気にしすぎなんだろうけど、いちど気になったらどんどん思う思えてきちゃって……」

「お疲れだねー」

俯いたリグルの頭を、よしよしと撫でてやるルーミア。思ったより深刻そうなリグルの様子に、さすがにチルノもそれ以上の軽口は自重する。

「しようながないなりグルは。……なんか心当たりなの？ そいつに」

「あつたらこんなに困ってないってば。それに本当に居るのかどうかもわかんないんだから」

「……でもさー」

何事かを言いかけたチルノだが、そこであれ？ と声を上げた。きよろきよろと左右を見回して、
「ねえ、そういえばみすちーは？」

「あれ？」

ついさっきまで一緒にいたはずの彼女の姿は、いつの間にか話の輪から消えている。

「さっきまでいたよ。帰っちゃったのかなー？」

「でも、それなら一言くらいあつても……」

「ね、ねえ、あれ！」

皆が夜雀の姿を捜す中、リグルが森の一角を指さす。広場から少し離れた、樹齢にして数百年を数えると思われる苔むした老木。その節くれた枝の先に、白く禍々しい粘ついた糸が幾重にも絡み付いている。

ミスティアはまるで百舌の早贄のように、その枝先に上下逆さまに括りつけられていた。

「……みすちー？」

一本一本は髪よりも細い糸が何本も束ねられて、執拗なほど念入りに、哀れな夜雀の肢体を拘束している。不自然な角度で身体を固定された彼女の服の裾は無惨に引き裂かれ、むき出しの太腿や二の腕に深々と食い込む糸がひどく痛々しい。

四肢はおろか、翼の自由さえも奪われて宙吊りにされ、無惨な姿となった彼女は、うつすらと瞳を開け、ぼんやりとした瞳であらぬ方を見つめていた。

「んう……ッ」

糸の束に割り裂かれて塞がれた唇の隙間から、苦しげに息をこぼし——ミステリアはじつとりと汗の浮いたうなじを震わせ、わずかな身じろぎを繰り返す。

あまりにも無惨な姿の友人を前に、チルノたちはしばし言葉を失い——

「なんだ、みすちーこんなとこにいたじゃん」

「なーんだ」

「いや待ちなさいっ!？」

あまりといえはあまりな対応に、ミステリアは口を塞ぐ糸をぶちぶちと噛み千切って全力で突っ込んだ。宙吊り糞虫状態のまま、全身を揺すって抗議の声をあげる。

「こんな目に遭ってる友達に対して、もうちょつと言う事ないのっ!？」

「だってほら、いまさら誰に食べられたのって話だし」「定番ネタに頼りすぎるのはどうかと思うなー?」

「うん。新鮮味に欠けると思うよみすちー」

「うわぁーんっ!？」

チルノにまで言われてしまえば、もはや夜雀に立つ瀬なし。ミステリアは糞虫状態のままぶらぶら揺れながら滂沱の涙を流す。

「と、とにかくこれ外してっ! 早く下ろしてよおっ」

「もー、しょうがないなあ。ルーミア、そっち持って」

「了解なのかー」

絡み合った粘つく糸を引き剥がすのは意外に困難を極め、ミステリアの救出にはかなりの時間を要した。

「あう、べとべと……」

ようやく解放され、べたんと地面にお尻をついて、半泣きで顔に粘りつく糸をぬぐうミステリア。少し赤くなった鼻の先を擦ってすん、と吸り上げる。なんとも艶っぽいその仕草に、その場の皆がそれにしてもこの子食べられるのが似合うなあ、と思ったりした。

リグルが差し出したタオルでミスティアの顔をぬぐってやるその隣で、チルノはむう、と顔をしかめる。

「なにやってんのさみすちー。リグルがせつかくオンナになれるかの瀬戸際だってのに」

「いや私そんな話してないよ!?」

思わず抗議を入れるリグルだが、それは見事にスルーされる。

「わかんないわよ。さっきいきなり目の前が真っ白になって、口も塞がれて、身体が動かなくなっただけと思ったらそのまま引きずり込まれるみたいに——ってちょっと！ みんなで『またかよ』みたいな顔しないでくれる!?」

「でもみすちーだし、ほら」

「だから鳥頭とか三步忘却とかそういうんじゃないかってねっ！　っていうかチルノにそーゆう顔されるのなんか妙に腹が立つんだけど」

「ああほらみすちー、動くと上手く拭けないってば」リグルに言われ、しぶしぶ逆立てていた羽根を下ろ

すミスティア。

彼女を絡め採っていた粘つく糸を指先に摘み上げ、大妖精とルーミアも首をひねる。

「なんだろうね、これ。トリモチじゃないみたいだし……人間の罠？」

「あんまり美味しそうじゃないねー」

「ほんとにみすちーは情けないなあ。そんなんじやまた食べられちゃうよ？」

「食べられてないってばっ」

「……ちよつと見せて」

言い合いを始めたふたりをよそに、リグルは神妙な面持ちでその糸をじっと覗き込んだ。

「どしたの、リグル」

「これって……」

彼女が心当たりを口にしかけた、その時だった。

「あ、あのっ！」

背後からの声に、一同が揃って振り向けば、そこには黒と褐色の服を着て、金髪を頭の後ろで結わえた少

女の姿があった。その背後ではもう一人、桶から顔を覗かせるおさげ髪の少女が恐る恐る様子を窺っている。
「な、何よあんたたち」

「……ええとねえ、その、どこから話せばいいのかな……あのね？ 私たち、地底から来たんだけど——」

「地底!？」

地底の妖怪——それがどういったことを意味しているのかはチルノでも知っていることだった。妖怪と人間が共存するこの幻想郷で、様々な理由でそのコミュニティからも拒絶された妖怪たち。

その関係は、決して友好的と呼べるものではない。

「まさか、みすちーにこれやったの、あんた?!」

「え、えーつと……」

口籠る少女のその反応が、何よりも雄弁に答えを示していた。

たちまち高まる緊張のなか、チルノはいち早くスペルカードを構え、皆を庇うようにして前に立つ。

「よくもみすちーを！ 勝負なら相手になるわよっ！」

「ちょ!?! ち、違うよ、そうじゃなくてね!？」

「もんどうむようっ! みすちーの仇だあっ」

「チルノちゃん待つて! この子、ひよつとして——」

スペルカードを宣言しかけた氷精の袖を、大妖精がぎゅっと引つ張って押しとどめる。

「なにすんのさ大ちゃん、あたいは今……」

「ま、待つて! 間違えちゃったのは謝るからっ! 誤解なんだつてば!」

拳を握り締め、いまにも泣き出しきそうになるのを懸命に堪えながらの少女に、敵意らしいものは見られなかった。深く頭を下げて、彼女は縋るように声を絞り出す。

「だからお願い、話を聞いてっ」

「……話?」

「チルノちゃん、聞いてあげよ? みんなも」

「……………わかったよ」

大妖精に諭されて、チルノは不満げながらもスペルカードを引つ込める。

「本当にごめんなさいっ。ちよつとその、巢にかかった!」と思つたら急にテンション上がっちゃって……」

「巢?」

「あ。自己紹介もまだだったね。私は土蜘蛛の黒谷ヤマメ。こっちはキスメ」

彼女の背後で釣瓶落としがちよこんと頭を下げる。

そうしてヤマメと名乗った金髪の少女は、顔を上げ、じつ、とリグルを見つめた。

「それで、そ、その子に……大事なお話があるのっ」

「へ? 私?」

ここで自分のことが出てくるとは思っていなかったリグルは、急に話を振られてまばたきをひとつ。

「だ、大事な話なの……お願い」

「え、あ、まあ、いいけど……」

ヤマメは隣のキスメと視線を交わし、決意の表情でリグルの正面に進み出る。右足と右手が一緒に出るぎこちない歩き方で、いまにもぎぎぎ、と錆びついた音まで聞こえてきそうだった。

前髪に隠れていてもはつきりわかるほどに、その頬は紅く染まっている。

「えつと? なに?」

「そ、その、あのっ」

尋ねるリグルに対し、言葉がつつかえた様子であうと呻くヤマメ。そんな彼女に後ろから応援が飛ぶ。

「ヤマメ、頑張つてっ」

「……うんっ」

キスメに促され、力強く前を見た彼女は、そのまま背後に隠し持っていた包みをリグルにぐつと突き出して、

「ず、ずつと前から好きでしたっ。わたしとっ」

リボンをかけたプレゼントと一緒に、一言――

「わ、わたし、私に食べられてくださいっ!」

……とりあえず、最悪の告白でした。



一時は混乱を極めた場もとりあえず解散となり、広場に残されたのはリグルとヤマメのふたりきり。湖畔の朽ちた丸太の上に並んで腰かける二人の間を、なんとも言い難い沈黙が埋める。

ちらり、と横目で俯いたままのヤマメを窺っては、目が合いそうになつて慌てて顔をそらすことの繰り返しをしながら、リグルは自問する。

(えっと、なんでこんな——どうしてこうなった?)
降つて湧いた告白イベントに、すっかりオーバーフローしてしまった思考能力は先程から空転を続け、思うように相手の姿すら見ることもできない。

(好き? いやその、それつてつまりその、告白? ……
ルーミアじゃあるまいしまさか食べ物好き嫌いでことじゃないよね? よね? つてことはつまり、つまり、その……えええええ!?)

時間とともに落ち着くどころかますます混乱の度合

いを増してゆく頭の中。リグルは膨らみかけた様々な想像を追ひ払うようにぶんぶんとかぶりを振った。

(つて、いつまでもこんなじゃしょうがないわよつ) とうとう緊張に耐えられなくなったリグルは、半ば自棄になつて口を開く。

「あ、あのつ」

意図せず上げた声が見事に重なり、ぶつかった視線がリグルの顔の温度をかあーつ、と上げてゆく。同じように真っ赤になった顔を伏せるヤマメの仕草に、リグルはますます動揺してしまつた。

とにかく何か言わなければ。そう焦りながら無理矢理に言葉を継ぐ。

「え、ええとつ」

高鳴る鼓動を抑えながら、あさつてを向いて続けた声は面白いくらい裏返つていた。

「え、ええと、その、つまり——わ、私と、付き合つて、つて話だけど」

「う、うんっ」

「……ね、念のため聞かせて。あの、まさかとは思うけど、私のこと男だとか思ってるとか、そういう……？」

「そ、そうなのっ!？」

「違うよ!? 断じてオトコノコ違うからね!」

慌てて否定するリグルに、ヤマメはそっかあ、と残念そうな、安心したような不思議な表情でそっと胸を撫で下ろす。

「……あー、ビックリしたよお。そりゃね、私も女の子同士でヘンかなって……ちよつとは思ってたけど」

「そ、そうかな？」

「……でも、違う。うん。違うみたい。そういうのじゃないよ。きつとあなたはあなただから。私は、リグルがリグルだから、好きになったんだと思うし」

「そ、そう、なんだ」

堪え切れなくなった視線を膝の上のプレゼントの包みに落として、リグルは想いを巡らせる。

なんでも、これまでもヤマメは何度も告白のためリグルの家を訪れていたらしい。しかし、いざ会おうと

なるとどうしても気後れし、きつかけがつかめないまま、いつもその場にプレゼントだけを残して帰ってしまっていたのだという。

どうして話しかけてこなかったのかと言えば、ヤマメたち地底の妖怪は嫌われ者だからだという理由らしい。

けれど、こうして話していれば、ヤマメはごくごく普通の妖怪だった。確かに少しばかり特殊な能力を持っているが、そんなのはリグルも彼女の友人たちだっ

て似たようなものだ。

リグルは不思議に思い、それを口にする。

「あのさ、ヤマメ。……気分悪くしたらごめんね。正直、まだその、好きって言われてもどうしていいかわからないんだけど……」

「うん」

こくり、と固い息を飲み込み、リグルはヤマメを見る。

「なんで、私を？」

「……一目惚れ」

「へ？」

ぽかんと口を明けたリグルに、ヤマメは胸の前でもじもじと指を絡めあわせる。

「こないだから、地底と地上の交流が始まったじゃない。それで、地上との連絡孔の増掘と拡張が決まったのよ。私がその担当になってね。それで——」

地上と地下の偉い妖怪同士が、山の神様の仲介で巫女と一緒にそんな話し合いを持ったという噂は、リグルも耳にしたことがあった。

「何年ぶりになるかなあ、空を見たの。ずっと地底にいたからねえ。折角だから神社にでも挨拶に行こうって思ってた……それで、リグルが飛んでるのを見たんだよ。」

遠目だったし、その時はリグルは気付いてなかったみたいなんだけど」

「そう、なんだ」

「うん。リグルの羽根、……とっても綺麗だった」

青い大空——もう記憶にもぼんやりとしか残っていなかった地上の空に、まるで硝子細工のような美しく光る透明な羽を拡げて飛ぶ、少女の姿。

地底に隠れ潜んだ土蜘蛛が、ずっと昔に失い忘れていたもの。それをリグルが思い出させてくれたのだ、と。

そう、ヤマメは言う。

「う……あ、その、ありがと……」

こんなにもまっすぐな好意をぶつけられて、リグルはますます言葉に詰まってしまう。

自分にはないもの、足りないものを素直に素敵だ、と言える。それはきつとすごい事なんじゃないだろうかとリグルは思った。

まして、蜘蛛は蟲の天敵でもあり、螢よりもよっぽど強力な妖怪として有名だ。人を襲ったり、美しい女性の姿を取ったり、時には鬼と呼ばれて英雄と呼ばれるような人間と太刀回りを演じることだってある。

事実、リグルの目にもヤマメはとても、可愛らしく

素敵な女の子に見えた。

そんなヤマメが、自分のことをす、好き、だなんて

—
(あああ、落ち着けっ!?)

好き、という単語を思い浮かべた瞬間、ぼつと頭が沸騰を始めそうになる。ぎゅつと目を閉じ、リグルは強引に話題を変えた。

「えっと、そ、その服、可愛いね」

「あ、うん、ありがと。これ、お気に入りなんだ」

頑張って作ったから、とはにかむヤマメ。

「え？ それ、自分で作ってるのっ？」

リグルの服は使役する天蚕たちに時間を掛けて編ませたものだが（そのため下着まで100%ピュアシルク、天蚕糸の特製なのだ）、ヤマメの衣装は彼女自身が妖力を籠めて編んだものだという。

「うん、ほら」

ヤマメがちよいと持ち上げた袖を軽く引っ張ると、布地はざらりと極細の糸束に溶け崩れてゆく。むき出

しになった白い腕で、ヤマメは糸の端をはい、とリグルに手渡した。蜘蛛の糸は蚕のそれよりも強靱で、なおかつ肌触りでも負けてはいない。

「すごい……」

リグルが糸を返すと、ヤマメは再び目にもとまらぬ早業で、服の袖部分を編み直してゆく。ものの数秒で元に戻った服に、リグルは再度感嘆の吐息をこぼした。「お、大袈裟だねえ。別にこれくらい、どーってことないよ。それに、あんまり自慢できるような事でもないからさ」

「どうして？」

「や、ははは。だってほら、私の住んでるとこ地底じゃない？ みんなに嫌われて地底に逃げ込んだ妖怪がさ、あんまり浮かれ気分でお洒落とかお化粧とか、そういうのってどうかなーって思うわけさ」

「そんなことないよ。とっても似合うと思う」

「う、あ。……ありがと」

それは、リグルの心からの言葉で。

今度はヤマメが耳まで赤くなる番だった。



さて。そんな具合に初々しい二人を、近くの茂みの中から窺う怪しい影がいつつ。

「逢引なのかー」

「ねえ、このあとどうなるのかなっ」

「ああもうじれったいわねっ！ 何やってんのさリグル、早くいくとこまでいっちゃえばいいじゃない！」

「ねえチルノちゃん、意味分かって言ってる……？」

無論ながら、友達思いの彼女たちが大人しく場を譲るわけもなく。物陰から応援を送り続ける一同のテンションは激しく高い。

特にかしましい3人から少し離れて取り残された大妖精がちらりと脇を見ると、桶から半分顔を覗かせてはらはらと成り行きを見守っているキスメと視線が合った。

どことなくシンパシーを感じる（髪の色も含めて）二人は、そろって苦笑する。

ヤマメとリグル、湖の側に並ぶ二人の背中では、最初の頃に比べてだいぶ近くなっていた。が、寄り添うには至らず、わずかに離れたその小さな隙間がどうにももどかしい。遠目にもわかるほど落ち着かない様子のリグルは、すっかり会話の主導権も握られっぱなしのようだ。

「なんていうか、最初はそう見えなかったけどヤマメって結構お姉さんっぽい感じだね？ あの服可愛いなあ」

「見た目あんまり変わらないけど、不思議だねー」

「……うん、きつとあの子、リグルにはお似合いよ」

チルノが、そう言って小さく笑った、その時。

ふわり、どこからともなく花の香りがあたりに満ちる。

……それは本来、何をおいても警戒せねばならない危機の先触れのはずだった。

しかし。降って湧いた友達の恋バナに夢中になっていたチルノ達は、迂闊にも全員、それがなんの予兆なのかをすっかり忘れていた。

「――へえ、誰が誰とお似合いなのかしら」

靴音とともに、じつとリグルとヤマメの様子を窺うチルノの背中に、声がかかる。

「決まってるじゃない、さっきあの子がリグルに告白したの。そんでいま初デート中ってわけなのさ！ あいたちも応援してあげてるんだから邪魔しないでっ」

「……それで？」

ざわり、と森の木々が梢を震わせる。いつの間にか自分以外の返答がなくなっていることに、チルノはまだ気付かない。

「ああもうっ。だからリグルが心配でこうやって見てるんじゃない。馬鹿ねっ」

「……そう」

「ぐえっ?!」

いきなり背後から凄まじい力で頭を掴まれ、チルノ

は悲鳴を上げた。ゆらり、と動いた影は、そのまま容赦なく氷精を宙に持ち上げる。

「……げ!？」

反射的に振り向いて、そのまま驚愕に固まるチルノの最後の叫びは、あっさりと途切れた。



「――っ!？」

ぴいん、と触覚を跳ねさせ、突然『気を付け』をするように背筋を伸ばしたリグルを、ヤマメが心配げに見つめる。

「どうかしたの？」

「え、あ、……その、なんだか猛烈に嫌な予感が」

このところすっかり不幸センサーと化したリグルの触覚だが、往々にしてそれが不幸を察知した時には手遅れという、実に役に立たない代物だ。今回も同様、リグルが言葉を終える前に、周囲の森に唐突に変化が

訪れていた。

これまでは休むことなく聞こえていた小鳥の囀りや蟲の聲。そうしたものが一斉に消え失せ、痛いほどの静寂があたりに満ちる。

次の瞬間、まるで突風が吹きつけるように木々が唸りをあげた。

さん、と巨人が荒々しく森をかき分けるように——あるいは、幾百の樹齡を重ねる木々がおのずから支配者たる『彼女』に道を譲るように。重なる梢が、枝が、うねりざわめき、左右に押し開かれてゆく。

大気すら震わせる威圧感を伴って、彼女はそこに居た。

鮮やかな赤いチェックのスカートに、袖がまぶしい白いブラウス。その上には同じ格子模様のベスト。リグルと同じ緑の髪。

拡げた薄いピンクの傘の下、ずたぼろのチルノを引きずりながらの微笑がいつそ清々しいくらいの威圧感を伴っている。

（あああああ!? やっぱいいいい!?）

——四季のフラワーマスター、風見幽香。

通り名こそさりげなくミステリアに似てはいるものの、その危険度、能力、全てがけた外れの妖怪であった。

（な、なんでこんなところにつ!?）

嫌な予感がものの見事に的中したことに焦るリグルの背中を、冷や汗が滝のように流れ落ちてゆく。けして後ろめたいことなど何もないはずなのだが、ヤマメを背中にしているだけでリグルはなぜだか猛烈な後ろめたさを覚えてしまっていた。

ちらり、と視線を脇に向ければ、そこには残機を減らした友人たちが、死屍累々と無残な姿で転がっている。

（——ひいいいい……!?）

喉奥に湧き上がる必死に悲鳴を飲み込みながら、リグルは恐る恐る幽香に声をかけた。

「ゆ、幽香さんっ?」

「ずいぶん楽しそうね?」

動かないチルノを皆の上に放り捨てた幽香の視線は日傘の下に隠れてよく見えない。けれどその赤い唇が、にい、と三日月のように弧を描く。

表情こそ笑ってはいるが、笑みの要素なんて一ミクロンも含まない笑顔に、リグルの背中に怖気が走る。

(お、怒ってるっ。ものすつつつごい怒ってるよアレ!?)

「……ねえ? その子、新しいお友達? 私にも紹介してくれるかしら?」

「リグル、こいつ誰?」

しかし、こともあろうにそんな状態の幽香の前に、空気を讀んでか読まずでか、ヤマメははつきりと不快感をあらわにしていた。

「や、ヤマメっ!?」

「大した用事じゃないならあとにしてよ。ひとがお話ししてる時に、礼儀がなっていないんじゃないかねえ?」
「あら。変ね? その子があなたと楽しくお喋りして

たようには見えなかったけれど?」

「っ……」

幽香の言葉に齒を軋ませ、ヤマメは視線を陰しくする。

「『あんた』じゃない。黒谷ヤマメ。地底の妖怪よ」

「ああ、そうなの。あの鬱陶しい地底の、ね」

「……そうか、あんたが風見幽香ね? 聞いたことあるよ。有名ないじめっ子だってね。あのさ、今日はお呼びじゃないから、普段どおり花畑に籠もっててくれない?」

「ふうん……」

ヤマメと幽香。リグルを挟んで相對する二人の間で、火花を散らすような鋭い視線がぶつかり合う。

(な、なにこれ、なにこの異空間っ!? 私置いてきぼりじゃないっ。虫だけに蚊帳の外ってこと? ……あ、今私上手いこと言ったかも。ってそうじゃなくて!?)

リグルは先程までとはまた別の混乱の最中であつた。

いや、あくまでも彼女が事態の中心であるのは確かなのだが。

……というか。

(同じ1BOS Sなのになんでよりにもよって張り合おうとしているのかなこの子はっ!?)

異変の表舞台に立つことこそ少ないが、風見幽香の強さは誰もが認めるところだろう。『花を咲かせる程度の能力』という一見些細なものに聞こえるチカラで、疎密や境界というものを支配する大妖怪と十二分に渡り合うのだ。

しかもその能力すら、彼女生来のものではなく、ただの戯れで操っている、余興のようなものに過ぎないという。

そんな四季のフラワーマスターと真つ向睨み合っているヤマメに、リグルは気が気ではない。

「で、もっかい聞くんけど何か用なの? いま取り込み中なんだけど」

「ええ、あなたじゃなくてその子のほうにね。『いつも

みたい』に『ふたりだけ』でお話をしようかと思ったのよ」

殊更に。

一部を強調した言葉に、感情を逆撫でされたヤマメの表情が強張る。

「ああ。別に私は『夜でも』構わないわよ。『この前みたい』にね」

余裕をたつぷり覗かせる口調で、幽香は小さく、ぺろりと唇を舐め、

「ああ。それと——。『あの時』汚した服、ちゃんと取りに来てね?」

「……………!」

(うえああああ!?)

明らかに空気を変える一言に、リグルは震え上がる。

いや、弁解させてもらえば確かに服が汚れたのはそのとおりなのだが、あれは断じてそのような一般的に言われるところのやましいことがあったわけではなく、頼まれて運んでいった蜜の瓶が割れてしまつて、その、

それがあれでああして結果的にいろいろともう言葉を尽くせないようなひどい事になってしまったからで――

リグルが答えに窮しているうち、ずかずかと近寄ってきた幽香は、有無を言わずにリグルの身体を引き寄せ、後ろから抱きかかえる。

す、と傘の下に覆われて暗くなった小さな日陰から、赤い口元が細く開き、ぞろりと生え揃った牙が、ヤマメを威嚇した。

「解ったかしら。この子とは私が先約なのよ」

「ゆ、幽香さんっ!? ……むぐっ!?」

無理やり抱き寄せられたリグルの膝からプレゼントの包み滑り落ち、叫ぼうとした唇には甘やかに香る幽香の白い指が突っ込まれる。

花の蜜か、花粉か――頭をくらくらさせるほどの甘さに、リグルの意識がぐらりと揺れた。

「ちょ、ちょっと、あんたねえっ」

「病気だらけの蜘蛛なんか食べても美味しくないし。」

見逃してあげるわ」

そう言ってヤマメを無視し、幽香はリグルの胸元に指を伸ばして、ブラウスのボタンをびん、ぴんと爪で弾いてゆく。

「ふあっ……!?」

肌をあらわにされる羞恥に、たまらず身をよじるリグルだが、幽香は抵抗を許さない。さらに、力強い指が容赦なくリグルの柔肌をまさぐってゆく。

「や……だめっ……」

服の内側にひやりと外気を感じ、リグルは顔を赤くさせ、もがくが――幽香の腕を跳ねのけることは出来ない。暴れる彼女を抑えつけた幽香の靴が、ぐしゃ、とプレゼントの包みを踏みつけた。

「ゆ、幽香さんっ、やめてっ……」

「あら? 恥づかしいの? なあに、この前はあんなに可愛い声聞かせてくれたのに」

「ち、違!?」

まるで見せつけるように押し開かれたリグルのブラ

ウスの隙間から、ほんのりと色づいた胸の先端の突起が覗く。そこで幽香はちらり、とヤマメのほうを見やうった。

「ねえ、あなたも聞きたいかしら？」

嗜虐心を露わにした、風見幽香の笑み。

それに対しヤマメは、真剣な表情で――

「……………」

……………。

……………。

……そ、そんなことないわよっ！

「いや即答しようよそこはさ」

たっぷり30秒くらい迷ってからようやく返事するヤマメに、思わず自分の状況も忘れて突っ込むリグル。

「と、とにかく！ やめなさいっ、リグルが嫌がってるじゃないっ」

「違うわ。この子は、こういう風にされるのが好きなのよ。そうじゃなかったらこうされるのがわかってて、私のところに来るわけじゃないじゃない。ねえ？」

朝顔の弦のようにしなやかな手指はリグルの頬に触れ、ついと伸びた薬指が濡れた唇をなぞる。

花の蜜を湿らせた指先は、柔らかな唇を滑って、強引に押し開け、そのままその奥の白い歯をこつりと叩いた。

「んうっ……」

「ほら。ね？」

声も出せずもがくリグルの耳元で、艶っぽく囁く幽香。

「ど、どう見たっていじめてるじゃないっ」

「ふふ。そんなことないわ」

「ッ、やめろって、言ってるでしょお！」

とうとう辛抱の限界を迎え、ヤマメは本性を露にしてがあとと牙を剥いた。鋭い蜘蛛の爪を覗かせ、複眼を開いてぎん、とまっすぐ幽香を睨む。

「やっぱあんたのこと、すつつごく気に入らないわっ！ すぐにリグルから離れて！ はやくっ！」

「嫌よ。この子は私のだもの」

意地悪な表情で素っ気なく答える幽香に、ヤマメはさらに怒りを募らせた。

「……っ、さっきから、聞いててすっごい腹が立つんだけど！ たとえリグルの気持ちが本当にそうなんだとしても、リグルの名前もちゃんと呼んであげないような奴に、そんなこと言う資格ないわっ！」

「……へえ」

激昂のままにヤマメが叫んだその一言は、何やら特別の地雷だったらしい。

特段何か表情を変えた様子もない幽香は、無造作に傘をくるん、と回し、その先端をヤマメに向けた。

同時、傘の端を起点にして閃光のように無数の楔弾が弾け飛ぶ。それは爆音とともに円形に幾重にも重なり、まるで色鮮やかに花開く花卉のように辺りを満たした。

「うひゃあああ!?!」

スベルカード戦の合意すら無視した突如の弾幕が、自分の身体を抱えてへたり込んだ半裸のリグルの周囲

に降り注ぐ。風を切り地を穿つ弾幕は、その一発一発がリグルが渾身で撃ち込む弾の威力すら上回っていたが、

そんなリグルを、白い糸がふわりと絡め取る。折り重ねられた強靱な糸は、膜を編んで決り跳ねる土埃を遮断し、リグルを優しく包み込んだ。

その一方で大きく跳ねて距離をとったヤマメは、宙空にびたりと静止する。

「ようやく本性見せたわね性悪妖怪っ！」

よく見れば、あたりには既に無数の糸が張り巡らされ、森の中の狭い視界を切り取っていた。糸の上を跳ねるように移動し、ヤマメは両手の爪を覗かせて、幽香の弾幕をかわし、反撃の楔弾幕を撃ち放つ。

「人の恋路を邪魔する奴は——」

無造作に傘を広げ、それを撃ち落とす幽香にびしりと指を突きつけ、

「馬に蹴られて死んじまえ！」

ざわり、と舞い揺れる糸を揺らして、ヤマメは叫ん

だ。

「——いい覚悟ね」

がちん、と引鉄を叩き落す擬音と共に撒き散らされる牽制の楔弾、追撃の光弾、風を切る向日葵を模した特殊大型弾。四季のフラワーマスターの弾幕は、瞬時にヤマメの元へと押し寄せる。

「——っ」

辛うじてそれをかわし、ヤマメも負けじとスペルカードを構えるが——それよりも早く。幽香の手元で膨大に膨れ上がった魔力の奔流が、恐ろしいほどの滑らかさで解き放たれる。

閃光の射手。

いまや白黒の魔法使いの代名詞となったそのスペルの、原型となる純粹魔力の閃光。

視界を真二つに薙ぐ煌々とした輝きが、爆音を轟か

せ土蜘蛛を光の奥に飲み込んだ。

「ヤマメっ!?!」

リグルの悲鳴が、焼け焦げた森の一角に響く。
「ほ、本当に問答無用だねっ!?!」

視界を埋めた閃光が過ぎ去る土埃の中、煤けた頬を拭い、ヤマメは焦げた地面の下から飛び出した。

……グレイズ失敗、被弾1。直撃寸前で近くに掘り抜いていた地底との連絡孔に避難したのだが、幽香の一撃は地面ごとヤマメのいた場所をえぐり取っていた。残機を減らしたヤマメは、なおも繰り出される幽香の弾幕から安全地帯を求めて上空へと逃れる。

この短時間の攻防の間に、空中での姿勢制御と移動に使っていた蜘蛛の巣の大半は幽香に焼き払われていた。

羽根をもたないヤマメは、伸ばした糸を風に這わせて宙を浮遊。辛うじて空中での移動手段を確保する。

「まどろっこしいのは嫌いなよね」

今度はそれを追うように、大地がうねった。とん、

と幽香が閉じた傘先で地面を突くと、土塊を跳ね散らかして異常成長した草木の根が、大蛇のようにヤマメへ襲い掛かる。

「うわ!？」

「これもあげるわ」

脚を絡めとられてバランスを崩したヤマメめがけ、追い打ちとばかり、撫子にも似た十字の花弁を模した弾幕が放たれる。

「っ、罨符『キャプチャーウェブ』っ」

緊急回避のスペルカード宣言で放った蜘蛛の糸を繰り、展開する弾幕の外へと逃れるヤマメだが、それでお完全回避には至らない。

スペルカード同士ですら正面から威力で押し負かす、それが風見幽香の底知れぬ実力のほんの一端だ。

息もつかせぬ連続攻撃に重ねて、幽香はここで初めて手札を切る。

「……花符『幻想郷の開花』」

「しょっ、瘴符『フィールドミアズマ』っ!」

ヤマメは焦りとともに残り少ないスペルカードを對抗宣言した。瞬間、どうつと溢れた紅い瘴気があたりを満たす。

毒々しい紅の正体は、起死回生の一手を狙ってヤマメが展開した不定形の瘴気を伴う弾幕。

だがしかし、幽香は高出力の火力弾幕で、押し寄せる瘴気すら無造作に灼き切ってゆく。

風見幽香の真骨頂は、スペルカードに抛らない強力な高火力の通常弾幕だ。緻密に計算されたものとはまた違う、ただ相手の内懐に力強く一手を打ち込んでゆくだけの単純なもの。だが、その一撃一撃が必殺の威力を備えるため、回避は非常に困難だ。

撃ち込まれるたび轟音と閃光を撒き散らす重火力は、着実に相手の機動力と残機を奪い去ってゆく。

晴れた霧の中、幽香は悠然と変わらぬ姿で立ち、爆風に吹き飛ばされ、ポロボロになって膝をつく倒れ伏すヤマメを見下ろしていた。

四季のフラワーマスターは嗜虐心をたつぷりと乗せ

た笑みで、傘の先端をつい、とヤマメの頭に押し当て
る。

「それでおしまい？」

「……………」

俯いたヤマメは答えない。

最後の一手も不発となり、もはやなすすべなく敗れ
去るしかない土蜘蛛の無惨な姿は、運命や未来など読
めずとも容易に想像できた。

「幽香さんっ、もうやめて！ やめてあげてってばっ」

ヤマメの危機を感じ、裂かれた服を掻き寄せてリグ
ルは幽香にしがみつく。が、四季のフラワーマスター
はそれを意に介さず、ヤマメの襟に傘の先端を絡め、
軽々と宙に吊り上げた。

「あら？ まだまだこれくらいで音を上げてもらっ
ちや困るわ。ねえ？」

「う……………」

だらりと手足を垂らして苦しげに呻くヤマメを見下
ろし、幽香はくすりとサディスティックに微笑む。

容赦なし、手加減なし、温情なし。それが風見幽香
の弾幕ごっここのルール。

(駄目、っ)

無抵抗のヤマメに、さらに追撃の弾幕を浴びせよう
とする幽香のしぐさに、リグルはぎり、と歯を軋ませ
て叫ぶ。

「幽香さんっ！」

悲鳴を呑みこんで、リグルが激昂のままスペルカー
ドを宣言しようとした、その時。

「…………っ、ごほっ、」

ふいに、

幽香は唐突にむせ出し、口を押さえた。

咳に身体を震わせ、ふらりと傾いた体を支えようと
した足がたたらを踏む。

「っ、あ、ぐ、っは、ごほっ……っ?!」

咳を飲み混もうとしたところにもう一度咳がかさな
り、幽香は大きく背中を丸めて傘を取り落とした。

「今だっ」

幽香の手元が緩んだのを見逃さず、ヤマメはフラフラマスターの腕を払いのけた。先程までのぐったりした様子が嘘のように、土蜘蛛は素早く地面を跳ねて幽香から距離を取る。

「ヤマメ!? ゆ、幽香さん?!」

事態から置いてきぼりのリグルは、二人の間で戸惑うばかりだ。

幽香はなおも続く咳と鼻奥を焼く搔痒感に喘ぎながら、血走った目に涙を滲ませる。

「っ、ごほ、ごふ、げほっ……!」

霞む視線は、いくら擦ってもまったく収まらない。喉と鼻奥でちりちりと焼けるような鈍い痛みがフラフラマスターを襲っていた。

咳き込み、えづいて、身体を折るようにして何度も肺の中の息を吐き出し、とうとう涙までこぼして、幽香はようやく目の前の相手の能力に思い至った。

地上より排斥された、忌み嫌われた妖怪、土蜘蛛。

彼女が持つのは、『病を操る程度の能力』。

「貴方、まさか——」

ぎりつ、と奥歯を軋らせてヤマメを睨む幽香の手足に、繰り出された細い蜘蛛糸が絡み付いてゆく。幽香の力に比べれば脆弱な強度でしかないはずのヤマメの糸を、幽香の鈍った四肢は引き千切れない。

「……………っ」

「油断したわね。効きが悪かったから、ちょっと怖かったけど——」

慎重に距離を測り、ヤマメは幽香を拘束する糸を絞り上げた。1 B O S S の面前で膝をつくという己の失態に四肢をわななかせて抗おうとする幽香だが、こみあげる苦痛と身体を蝕む熱がそれを許さない。

幽香の強みは、強大な実力に裏打ちされた圧倒的な火力。視界を埋め尽くす絢爛劫花の弾幕で、相手の回避軌道を残らず焼き尽くす重火力の固定砲台だ。

反面、弾幕の分厚さ、密集度合いゆえに相殺合戦で撃ち負けることは殆どないと自負しているため、幽香自身は積極的に回避や移動をすることは少ない。それ

は、フラワーマスターが自分から戦場を移すことがないということの意味し、必然、ヤマメが仕組んだ罠の中に留まり続ける結果となった。

それでも、幽香には少々の障害なら踏み潰して蹂躪する自信があったが――

「毒には慣れてたみたいだけど、病気のほうは苦手だったみたいね。」

枯草熱（コウサネツ）って言うの。とっておきよ？ 貴方みたいな

花の妖怪には最適な、緩慢に死に至る病。言っておくけど、完治の方法はないわ。不治の病だから、これ」

ヤマメは、弾幕ごっこが始まった瞬間から、幽香の周囲に濃い病毒のフィールドを張り巡らせていた。と

どめの『フィールドミイズマ』はそのカモフラージュ。

土蜘蛛がありつたけの力を注ぎ込んで作り出した瘴気領域の最深部に長時間留まり続けた結果、さしもの

風見幽香もついに発症に至つたのだ。

「……っ」

油断無く糸を絞って、幽香の反撃――喚起しようと

した植物の異常成長を押さえ込み、ヤマメはさらに続ける。

「あなたがリグルをどう想うかなんて、私が口に出すことじゃないけど。でも、私の思いを邪魔する権利なんて、あなたにはない」

まっすぐに。

最強の妖怪から、目をそらすことなく、ヤマメは言う。

「風見幽香、今すぐここから立ち去りなさい」



花の香りだけを、後に残し。

その姿が小さくなって森の奥に消え、さらには気配さえも途絶えてなお数十秒。ようやく張り詰めていた気を緩め、ヤマメは大きく大きく息を吐いた。

「……し、死ぬかと思つた……っ」

その場に、どさりと尻餅をつく。鼓動が跳ね、冷や

汗が全身を浸し、冗談のように震え出す手足は、すっかり言うことをきかなくなっていた。

実際、去り際の幽香の殺気は凄まじく、真正面から見つめられるだけで肺が絞り上げられるようなプレッシャーだった。最後はもう震えそうになる脚を支え、絶対的な優位をとったのだと虚勢を張るのだけで精一杯。あのままさらに一手詰めることは絶対に不可能だった。

弾幕ごっこではない、妖怪としての能力で相手を追い詰めたのだ。あそこで幽香がはつきりと不利を悟ってくれるだけの冷静さを残していなければ、あのままヤマメは容易く引き裂かれていたに違いない。

「ヤマメ!？」

「だ、大丈夫。平気。ちょっと気が抜けただけ……」
駆け寄ってくるリグルに頷いてみせて、ヤマメはそつと目元をぬぐう。

枯草熱——などと大層な名前が付いてはいるが、アレは感染症でもなんでもない、花粉症の別名だ。

花の妖怪が花による病氣なんかに罹るわけがないが、風見幽香の持つ能力、花を咲かせる程度の力が生来のものではないことを逆利用した結果、ヤマメの策はうまく効果を表した。

しかし彼女の本質はそこにはないのだから、幽香が花を咲かせる気まぐれを止めればすぐに回復するだろう。

そのうえで、恥をかかされたと逆上するか、たとえ一時の虚勢でもそれに騙された自分を恥じて口をつぐむかは、最強を自負する彼女の器にかかっている。

できれば後者がいいなあ、とヤマメは胸中でこっそりとつぶやいた。傍らで涙を浮かべているリグルを見上げ、声をかける。

「大丈夫?」

「ヤマメ……どうして?　なんで、そこまでして……私のために?」

ああ。

さっきの答えはきつとこれだ、と思いながら、ヤマ

メは地面に落ちたプレゼントの汚れを払い、そっと抱え上げた。

無惨に踏みつけられた包装の下から、燐粉の輝きを彩った布地が覗いている。

中身は、何度も何度も失敗しながらエンゼルヘアーで縫った、黒蝶をモデルにしたナイトドレス。

それを手に、ヤマメはリグルに微笑む。

「えっと、その、……リグルが——」

いつの間にか、蜘蛛の巣に掛かっていた。

治りそうもない病に、罹っていた。

美しい羽根を夜空に拡げ、軽やかに飛ぶ少女の姿を思い描き、ヤマメはリグルの肩にドレスを掛ける。

「リグルのことが、好きだからじゃ、……理由にならない？」

「……！」

まるで、花がほころびるように、たおやかに。

答えてはにかむヤマメに、リグルは言葉を失っていた。

「恋の病は、治らないものだもの」

いつしか——あたりには虫や小鳥の囀りが戻り。

他に誰も居なくなつた森の中で、どちらからともなく——ふたりはそっと寄り添い、指を深く絡めあっていた。



まだ冷え込む春先の夜、里のはずれにぼつんと灯る水銀灯が、ここ最近の八つ目鰻屋の目印だ。

そのカウンターで、熱燗に自家製ロックアイスを浮かべた夜光杯の縁をくわえ、チルノがぼやく。

「あーあ……。最近リグルってば付き合ひ悪いよなー」

「しょうがないよチルノちゃん」

「わかってるけどさー」

酒精でいくらか頬を紅くしつつ、杯を空けて口を尖らせるチルノ。もちろん、チルノだってリグルのことを責めているわけではない。

ただまあ、なんというか毎日毎日あれだけ見せ付けられていれば愚痴のひとつも言いたくなるというもので、それはおおむね全員が同意見だった。最近の集まりがいつもの広場ではなく、もっぱらミステリアの屋台になってしまったのもそのあたりが理由である。

「ホント春よね。冬なのにねー。……はー、私にもなんかあーいう出会とかないかなあ」

こちらもしっかりお腹いっぱい、胃もたれの表情で、割烹着姿で調理台に突っ伏すミステリア。

そこへルーミアがやや焦げ気味の脂の乗った焼き串をはむはむごくんと飲み込んで、

「……あれ？　いつものお客さんは違うの？」

「ぶっ!?　な、何言い出すのよいきなり!?　あ、あんなの違うに決まってるじゃないっ。あ、あれはその……」

「あーあー。ごちそうさまなのかー」

「違っ!?」

「違うのかー？　じゃあ、……みすちーは食べてもいい

いの？」

宵闇の妖怪にはあと笑顔のまま、ミステリアをじつと見つめてじゅる、と涎を吸る。

「いやあーっ!?」

もはや定番のやり取り。抵抗空しくカウンターの上から飛び掛かれ、がぶ、と頭にかじりつかれるミステリアの悲鳴が夜闇に響く。

「あーあ。春真っ盛りだなー」

「そうだね……」

振り仰いだ遠くの夜空、瞬く淡い光の群れとともに、とっておきのナイトドレスに装って夜空の空中散歩をする恋人たちを見上げ。

おてんば恋娘はしょうがないなあ、とつぶやきつつも、満面の笑顔で、大妖精と掲げた杯を打ち鳴らした。

(了)

蛍を呼ぶ甘露の罨

初出:大⑨州東方祭(2009/11/15)

「地と星に逢う金蘭の契り」収録

改稿:月刊ナイトバグ 2010 年 2 月号

明瞭に「スペルカードバトル」を描写した最初の作品……
でしょうか。当初のコンセプトが、いわゆるバカルテットと
地霊殿、星蓮船の 1 ボスを絡ませる短編集ということで、幽
リグ&ヤマリグで展開。当時はヤマメをいきなり強キャラに
する気にもなれず (いまなら構わずやってる気がします)、幽
香にどうやって勝たせるか結構悩みました。槇原敬之の
「Hungry Spider」も盛り込もうとしてあえなく挫折した記憶
があります。

なお、これのさらに続編もあるんですが、リグル総受け R18
かつそこまでよ展開なので収録はしておりません。

大山鳴動する鼠一匹

薄蒼の高い空に、わずかなびく白い雲。

まだ芽も硬い枝だけの木々の間を吹き抜ける冷たい風にぶるつと背中を震わせ、リグルはマントの下に膝を抱え込んだ。揃えた手にほう、と息を吐きかける。

「はー。もう春だっていうけどまだ寒いなあ」

「この時期辛いよねえ」

あかぎれの入った指を痛そうに擦り、ミスティアもそれに応じる。気紛れで始めた八つ目鰻の屋台は、いまではすっかり夜道の風物詩となっている。最近では当初の目的だった焼き鳥撲滅運動などすっかり忘れて、割烹着の女将さん姿がえらく板についてきたのはいいいことなのか悪いことなのか。

湖畔の森の広場には、いつもの通り見慣れた顔ぶれ。人里とも他の妖怪の住まいからも程よく遠いこの近

辺には、待ち合わせなどなくとも、自然と妖怪や妖精たちが集まる。森の魔法使いに言わせればそれは偶然ではなく、ここが『そういう場所』だからなのだそう

だ。
「おはよ、ルーミア」

「あうー……」

ふたりの隣、うつぶせに寝そべってやる気のない声を返す宵闇の妖怪。おでこには軽い火傷の跡まである。

「どうしたのよ、そんな情けない声して」

「おなかすいたー……」

「ルーミアちゃん、昨日、食べようとしたお爺ちゃんに逆に被われちゃったんだって」

「……十日ぶりの獲物だったのに。……あぐ」

「あ痛あ!? ちょっとこら!! 放しなさいルーミア!?」

「やだー……」

「ひあん!? どこ噛んでっ……あーもう、い、今なにか残り物でも持って来たげるから噛み付くなあ!!」

身の危険を覚えて暴れるミステリアと、それを逃すまいとかじり続けるルーミア。かしましくも絡まりあうふたりを見てリグルは苦笑する。

「なにやってんだか……」

「……くしゅっ」

と。可愛らしいくしゃみに振り向けば、大妖精が目を開じ、口元を押さえていた。

「風邪？」

「あ、うん……。そうかも。このところチルノちゃんと大蝦蟇さんの沼に行ってたから……」

「大ちゃんだらしないなあ。あそこの沼なんてちよつと氷点下くらいじゃん。あたいなんかそんなんで風邪ひいたこと一度もないよっ」

薄い胸を反らして誇らしげなチルノに、うんそうだね、と皆はちよつぴりの哀れみを噛み締めつつ頷いた。「にしてもホント飽きないわねチルノ。なんどやったって食べられるだけじゃない」

「はむ。懲りないねー」

菌形を頭に付けたミステリアから押し付けられた蒲焼を、串ごと齧るルーミア。チルノと沼の大蝦蟇の確執はもはや天狗の新聞にも載らなくなったような茶飯事だ。

「そんなことないってば。まだ寒いし、蛙の動きも鈍いから、簡単に倒せちゃうんだって」

「そのせいで機嫌悪くて、容赦ないんだけどね……」汗を浮かべて、あはは、と頬をかく大妖精。その身体が定まらずにふらふらと揺れているのを見て、リグルはそれのおでこにそつと手を伸ばす。

「なんか本当に辛そうだよ？　ねえ、無理しないで今日は帰ったほうが——」

「……おや。今度こそと思ったが……残念。ここでも妖精が憑かれていたか」

不意に空をよぎる影に、一同が揃って空を仰ぐ。

声の主は晴れた空の蒼には似合わない、灰色の装いに大きな丸い耳をした妖怪だった。細長いL字型のロッドを両手に構え、眷族らしき小さな鼠を乗せたバス

ケットを器用に尻尾にぶら下げている。

「君たちは飛宝を持ち出した中には見なかった顔だね。どこで拾ったのかは……詮索しても無駄か」

独りごちる見慣れない妖怪を前に、警戒を強めながらチルノは誰何する。

「あんた、誰？」

「私はナズーリン。見ての通り鼠の妖怪さ。宝探しが趣味で副業で本業だ。今はこういった宝を集めていてね」

と、ナズーリンと名乗った妖怪鼠は、尻尾のバスケットに手を伸ばし、中の仔ネズミが取り出した赤色に輝く円盤状の物体を示してみせる。

両の手のひらに乗る程度の大きさのそれは、不可思議な重低音を唸らせながら彼女の手を離れ、支えもなしに浮かびあがった。

ゆるゆると回転しながらナズーリンの周りを漂い始めた円盤に、リグルは眉をひそめる。

「……なに、それ？」

「未定義幻想物体。いわゆるひとつのUFOだよ」

「空飛ぶ円盤？」

その単語に聞き覚えはあっても、それが何なのかを正確に知るものは、残念ながらこの場には居ない。

「こんなにちっちゃいんだっけ？ 中に人が乗れるとか聞いたことあるけど」

「んー、つまりこれは食べてもいいUFO？」

「おっと。食べられてもらっては困る」

じゆる、と涎を垂らしそうになっているルーミアに釘をさしながら、ナズーリンはロッドの先端で器用に円盤を引っかけ、バスケットの中に放り込んだ。

「……さて。こちらとしてはご主人に頼まれた件もあるし、飛宝のほうは適当に誤魔化してもいいんだが、あまり手を抜いてばかりでムラサ船長に愚痴を言われるのも御免だ。それに、妖怪平等を唱える聖のせいで妖精が狂いっぱなしというのも格好がつかないだろう？」

「……？ よくわかんないってば」

「その君の持っているその飛宝^{U.F.O}さ」

ナズーリンは不敵に笑い、ロッドの先で大妖精を示す。

「え……？」

「君の不調はそれが原因だよ。もつとも、自覚はないようだけれどね。飛宝に取り憑かれて調子が悪い程度で済んでいるのだから大したものだが、それはもともと聖のものでね。皆の大願成就のためにも返してもらわなければならない。」

——視符『ナズーリンペンデュラム』

前触れもなく、ナズーリンはいきなりスperlカードを宣言した。岩のように巨大なペンデュラムが突如出現し、ナズーリンを中心に轟音を上げて旋回し始める。

「きゃあ!？」

「ミステリア、ルーミア!？」

振り回されるペンデュラムは、針弾の弾幕を伴って見境なく全方位を薙ぎ払った。へし折られ倒れる木々と巻き上がる土煙に、ふたりの姿が飲み込まれてゆく。

「面倒だ、力ずくで引き剥がさせて貰うよ」

「ちよつと! いきなりなにすんのよあんなっ!?」

「なに、少し痛いだけだよ。怖がらずに目をつぶっていけば直ぐに済む」

会話を打ち切って、ペンデュラムを引き寄せたナズーリンは、チルノを牽制するようにロッドを振り上げた。まるで陣を敷いた軍隊のごとく、無数の楔弾が戦列を組んで出現。突撃を始める。立て続けに獲物に喰らい付くその様は、さながら餓え暴れる鼠の群れのよう。

「っこの、やる気なら相手になるわよっ!？」

密度の濃い弾幕の前に、リグルは果敢に反撃を試みる。が、次々に押し寄せる弾幕の戦列に行く手を阻まれ、回避専念を余儀なくされて思うように照準もままならない。

「……リグルちゃんっ、チルノちゃん!!」

「危ないっ来ちゃダメ!!」

駆け寄ろうと木陰を飛び出した大妖精を、瞬間に

十重二十重の弾幕が取り囲む。逃げ場を残さず高速で周囲を包囲してゆく楔弾幕に込められた殺意は、弾幕ごっこの範疇をはるかに超えていた。

「ちよつと……洒落にないわよ、それっ」

高難度を通り越し、狂^{ハチャカ}気すら垣間見せるナズーリンの弾幕に、リグルの背中を冷たいものが這い上がる。

「――、あ」

迫り来る凶暴なネズミ弾幕の群れからとっさに転移して逃れようとした大妖精だが、集中の途中で顔を歪め、そのままふらふらと倒れこんでしまう。

「大ちゃん!？」

「リグルはここにいてっ。援護お願い!!」

「チルノ!？」

動揺するリグルを置き去りに、真っ先に楔弾幕の中に飛び込んだのはチルノだった。顔を庇いながら、氷の盾を作り出しては最小限の動作で直撃を回避し、降り注ぐ高速の弾幕陣の間を掻い潜り、大妖精の元へと駆け寄ってゆく。

「……え?」

直進突撃單純気合い避けがモットーのいつものチルノにあるまじき回避センスと緊急回避のタイミングに、リグルは目を丸くする。

そうする間にも、密集する弾幕の中心点、大妖精の元に滑り込んだチルノは、指に挟んだスペルカードを宣言。

「凍符『パーフェクトフリーズ・改』!!」

チルノの代名詞とも呼べるカラフルな弾幕が展開した。

ナズーリンの楔弾幕とぶつかり合った『パーフェクトフリーズ』は、楔弾幕を巻き添えにして一斉に凍結した。

乱れ飛ぶ弾幕が静止したその一瞬の隙を突いて、大妖精を抱えあげたチルノは最短ルートで窮地を脱出する。

「……、うっそだあ……」

友人の想定外の大活躍が信じられず、リグルは呆然

と自分の頬をつねっていた。……無論、その痛みは夢ではない。

「……甘く見ていたか」

表情を変え、ナズーリンが新たにスペルカードを宣言しようとしたその直前。狙いすましたかのように周囲に漆黒の闇が沸き起こる。

「させるかつ、ルーミア、行くよ!!」

「あいあいさー」

木々の間から染み出すように這い昇り、膨れ上がった闇が、ダウザーの小さな大将を瞬く間に包み込んでいた。さらにそこへ夜雀の澄んだ歌声が重ねて響く。

「……む」

ナズーリンは眉をよじり、瞬きとともに目を擦る。

ただの闇程度なら鼠の夜目で見通すことも不可能ではないだろう。しかしこれはそれにさらに夜雀の能力を追加した、二重隠蔽型の合体スペルだった。

自分の姿すら捉えられない深い暗闇の内側に囚われたことを悟って、ナズーリンはやむなく攻撃を中断、

その場に静止を余儀なくされる。

「――なるほど」

だがしかし、ダウザーの小さな大将は慌てず騒がずに展開途中のペンデュラムを回収、次いで両のロッドを左右に交差させ、スペルカードを切り替えた。

「棒符『ビジーロッド』」

ナズーリンが構えたロッドの先端から鋭く細い光線が伸びてゆく。暗闇の中、ぐるんと彼女の周囲を一旋するロッドが、茫洋たる闇洋の中にはっきりと相手の居場所を挟み、指し示した。

「そこか」

即座にスペルの仕掛けを看破したナズーリンは、捉えた場所に弾幕を集中させた。

たちまち闇の奥から響く被弾1の撃墜音。雪のように降り積む粒状弾がミスティアの脇腹をかすめ、闇に変じたルーミアの脚に命中していた。

「えええ!?!」

「な、なんで見えるのかー!?!」

「ははっ。ダウザー相手に目くらましなんて間抜けもいいところだよ、君。地面の中に比べれば暗闇なんて見通すのはわけもない」

スperlブレイクと同時に晴れゆく闇を吹き散らして、再び旋回を始めるペンデュラム。ルーミアとミスティアは、鎖を伸び縮みさせながら迫る巨大なペンデュラムに追い詰められ、逃げ場をなくしていく。

自分を中心に周囲を無差別に攻撃する範囲型の弾幕に対しては、相手の視界を封じるといふ闇妖、夜雀の基本戦術は相性が悪すぎるのだ。

「くっ——」

奥歯を噛んでリグルが応戦のためスperlカードを抜いたその時、吹き付ける強烈な冷気がその動作を制止する。

見れば、いつの間にか大妖精を抱えたチルノの姿がすぐそばにあった。

「ダメ、このままじゃ勝てない。逃げるよりリグルっ。みすちーも、ルーミアもっ」

「え!? ちょ、なに言ってるんのチルノ!?」

「いいから、あたいの言う通りにしてっ」

リグルの反論を遮って、チルノは鋭くそう言い放つと、ぐったりした大妖精をリグルに抱えさせて弾幕の中へ飛び出した。

「あたいが囧になるから、あつちで合流、いいよねっ!」

「え、えええ!?」

「どこ見てんのさ、こっちだっ」

「ほう?」

地を這うような低空で針弾の間を抜け、ペンデュラムの動きを鈍らせる蛇行の回避軌道を取りながら、ナズーリンの注意を引いて距離をとってゆくチルノを――

「誰、あれ……?」

信じられない気分で、リグルは見送っていた。



「~~~~~♪」

ご機嫌で二股の尻尾を揺らし、風呂敷包みを下げて森を歩くのは、スキマ妖怪の式の式、化猫の燈。

真新しい帽子の下でぴこぴこ揺れていた彼女の耳が、ふいに真上に跳ね上がる。

「にゃ？」

「ちえええええーんっ!!」

近くの茂みを向いた燈の目の前、まるで主よろしくの絶叫と共に、ずざざあーっ、と地面を滑って登場したリグルの姿を見、燈はきょとんと猫目を瞬かせた。

「あれ、リグル。どうした……の？」

燈の言葉が尻すばみに消えてゆく。

大妖精を抱えて現れたリグルの格好といったら酷いもので、服は裂け派手に汚れ、あちこちに軽い被弾の跡すらあった。森の中木々にぶつかるのも構わずに全力で飛び回りながら弾幕でも展開しなければこうはならないだろう。呆氣にとられた燈の反応も至極当然のものといえた。

「ちよ、ちようどよかったっ!! 燈、あなた猫よね

!?! 化け猫よね?!」

「う、うん」

がばと起き上がったリグルにがつしと腕を掴まれて訊かれるが、事情のさっぱり分からない燈は困惑しながら耳を上下させるばかり。

「だったら、鼠退治なんか大得意よね? そうよね!?!」

「な、なんだか分かんないけど、それくらいなら——」

「じゃあ早くあいつ追い払って!! 早く!!」

びし、とリグルの指差した先。

燈の身の丈ほどもある巨大なペンデュラムを振り回しながら木々を薙ぎ倒し、迫る妖怪鼠ナズーリンの姿があった。

「えっ」

彼女の周囲を旋回するペンデュラムは、いつのまにか先程の倍近い5つに増えている。

それを見て、さあ、と燈の顔から血の気が引いてゆ

く。

「なにそれこわい……」

たちまち尖っていた耳はぺたんと伏せ、しつばくるんな負け犬状態。大事なお使いの荷物も放り出し、橙は脱兎のごとく四足になってナズーリンに背中を向け、全速力で駆け出してゆく。

「にゃー……っ!?」

「橙!? ちょ、どこ行くのっ!?」

「きよ、今日は式が憑いてないのーっ!!」

「この役立たずーっ!!」

慌てて追いかけるリグルたちに併走され、これまた力いっぱい叫び返す橙。式の憑いていない化け猫なんて、夜に出てこない唐傘お化けのようなものだ。

一方、追うナズーリンは余裕たっぷりな笑みを浮かべ、

「猫、ねえ。……十二支に入れなかったような間抜けな獣に、鼠が遅れをとるとでも?」

——視符『高感度ナズーリンペンデュラム』

旋回するペンデュラムが繰り出され、針弾を撒き散らしながら地面や木々を容赦なくえぐってゆく。耳元を巨大な質量が掠める轟音に、橙はパニックを起こして右に左に跳ねまわった。

「にゃーっ!?」

「ははっ。旧い鼠を舐めちゃいけない。窮さなくても、ぼんくらの猫くらい噛み殺すよ?」

鳴かぬ猫は鼠を捕る、鳴く猫は鼠を捕らぬ。

……さて、君は鳴く猫かな、鳴かない猫かな?」

5つのペンデュラムを旋回させ、木々を薙ぎ倒しながら迫るナズーリン。さながら、八万四千匹の鉄の牙持つネズミの大群を率いたという頼豪阿闍梨変じた鉄鼠のようだ。

すっかり怖気づいた橙は化け猫の矜持もどこへやら、ネズミに追われるまま大木の根元のうろへ飛び込んで丸まって震えだす始末だった。

「あー、もうっ!?」

当てにしていた橙も頼りにならないことを理解した

リグルは、そつと大妖精を木陰に下ろし、決死の覚悟でダウザーの小さな大将の前に躍り上がる。

「待ちなさいっ。もうこうなりゃこつちだつて意地よっ」

「今度は蚩か。自分も光るくせに火に飛び込むのを止められないのか、虫というやつは」

油断なくロッドを構えるナズーリンに、リグルはちら、と背後に寝かせた大妖精を庇える位置に移動しつゝ、周囲から蟲を呼び集めてゆく。

「チルノばつかにいい格好させられるもんですか。私だつてやるときゃやるわよっ!!」

「無茶はお勧めしないよ。これでも私は毘沙門天の使いでね。徹頭徹尾ただの通りすがりの妖怪の君とでは、目的も、意志も、個性も、設定の深さも、立ち絵の枚数も、――そして女の子としての魅力も違う」

「うっさい!!」

「そう。そうやってすぐに前しか見えなくなるのも良くないね」

挑発に乗せられるまま、頭に血を昇らせて突つ込むリグルを、待ち構えていたかのように布陣を組んだ弾幕を迎え撃った。

隊列を組み幾段にも陣を重ね、矢継ぎ早に突撃してくる弾幕から、リグルは必死に回避を試みる。

「このお……っ」

先程と同じように、仔ネズミを模した楔弾幕の戦列から逃れようとすればするほど、リグルはナズーリンから距離を取らざるを得なくなっていた。

「そ、そつちがスペカ宣言してるんだつたら、遠慮なんていらないうねっ」

負け惜しみと共に叫ぶリグルだが、ナズーリンはそれを軽く笑い飛ばした

「――ハハッ。そもそも遠慮なんてできる実力があるのか、君に？」

「っ、もう頭にきたーっ!!」

――蠢符『リトルバグストーム』。

群れなし光る蟲の一群が、渦を巻くようにナズーリ

ンへと殺到する。

が、小さな賢將は悠々と左右のロッドを振り、弾幕の戦列を操ってそれを迎え撃った。

同じく眷属を使役する主同士、その弾幕の激突となれば、勝負は指揮官の優劣が決める。一度は拮抗したかに見えた両社の趨勢は、すぐにナズーリンの側に傾いた。夜光の大量は、使い魔もろともに仔ネズミに食い荒らされ、残らず駆逐されてゆく。

必殺のスペルカードの一枚をあつさりと退けたナズーリンは、スペルブレイクの笑みと共にリグルを見た。

「……それで終わるかい？」

「このおっ!!」

挑発に応じるままに叫び、リグルは続いて灯符『フアイアフライフェノメノン』を宣言した。だが、それすらもナズーリンは対抗スペルを切ることなく、通常弾幕で押し切ってゆく。

目を見開くリグルの前で、2回目のクリアボーナスを手になズーリンは悠々と尻尾を振ってみせた。

「そんな……っ」

「筋はわるくない。けれど些細なことで頭に血を昇らせすぎるね、君は。蟲の王を名乗ろうと思うなら、もう少し冷静さと統率力を鍛えたほうがいい」

ナズーリンはリグルと同じように、自分以外の眷属を使役し、操る能力に長けている。

だが、リグルが動かせるのが鳥合の衆の蟲の群体なのに対して、ナズーリンは仔ネズミたちの軍隊を手足のように操っていた。整然と指揮に従う仔ネズミたちは、数こそ多いものの明確な意思を持たない蟲の群れとはまるで威力が違う。

同じように多くの眷属を率いる妖怪ながら、彼我の実力差はあまりにも明白だった。ルーミア達を退けたのは、相性だけの問題ではない。

「くっ——」

焦って手札に目を落とすリグルだが、そこに残るのはたった一枚、最後の切り札のみ。しかもこれは本来、弾幕ごっこの範疇からは逸脱したものだ。通常の勝負

においては使われることはない。そして——万一、この一枚まで切り抜かれてしまえば、本当に後がなかった。

躊躇するリグルを一瞥し、ナズーリンはひらりと身を翻し、動けない大妖精の元へと向かう。

「ま、待てっ!!」

「お断りだよ。これも仕事でね」

リグルのほうを振り返りもせず、牽制の弾幕を展開、彼女を足止めし、ナズーリンは動けない大妖精に近付いてゆく。

が。俯く大妖精のその顔を覗き込んだところで、ダウザーの小さな大將はびくんと眉を跳ね上げた。

「……おや?」

そこにあったのは、意識のない大妖精の身体ではなく、彼女の姿を映した、鏡のように滑らかな氷の膜だった。

「これは——」

「かかったなっ!!」

瞬間。森中に響き渡るかのように、大音声が上がる。地面に巨大な影が落ちた、と見えた刹那。

振り仰いだナズーリンの視界が捕らえたのは、ペンデュラムなどよりも遥かに巨大な氷塊を担ぎ上げ、急滑降してくる氷精の姿だった。

「チルノ?!」

「チルノちゃんっ」

「——っ!?!」

目を見開き、舌打ちしたナズーリンが、咄嗟の反応でペンデュラムを引き寄せて盾にするのと同じ、

「氷塊『グレートクラッシャー』っっ!!」

氷山の一角を切り取ったかのような圧倒的な質量をもって振り下ろされた氷塊が、ずがん、と大地を揺るがす轟音を響かせ、地面に大穴を穿つ。

盾にしたペンデュラムごとナズーリンを押し潰して森に突き立った巨大な氷塊は、一瞬の間において粉々

に砕け散る。

集めるだけ集めた冷気を氷に変え、そのままありつたけの力で叩きつけるだけのごくごく単純な、スぺルカードとも言いがたいスぺル。だが、長時間のチャージを完全に終えた時、その威力は凄まじいまでに高まるのだ。

ガラスの破砕音を思わせる涼やかな音が響く中、散ってゆく氷片を、翼のように纏いながら。

煙る霧氷の向こうで腰に手をあて胸を張り、氷精は高らかに勝利のVサインを示した。



「いい？ もっかい言うよ。あたいは今、すっごく悲しいんだ!!」

頭に小さなこぶを作り、ちょこん、と正座をしてかしこまるナズーリンと、その隣で同じように正座で整列させられた一同の前で、腰に手を当て仁王立ちのチ

ルノが、びし、と指を突き付ける。

「どういうことなの!? どうしてそんな簡単に、みんなそろって分かり合おうとするのを拒否するのさっ!?」

普段とはあまりにも違うキャラで、啞然とする皆の前を行き来しつつ拳を握り、涙まで流して暑く苦しき力説するチルノ。

「見境のない暴力はなんにも生まないんだよ!! 楽しくない弾幕ごっこなんて、そんなの全然つまんないじゃないっ」

「……あの、チルノ？ それはそれとして、なんで私たちまで怒られなきゃならないの？ 喧嘩ふっかけてきたのあっちのほうじゃないっ」

「しゃらー……っぷ!!」

「ひゃんっ!?」

いきなり鼻先にひやり、と冷たい指先を突き付けられ、飛びあがるミステア。

「な、なにすんのよチルノ！ あんた、こいつの味方

する気?！」

「みすちー。ナズりんになつて事情はあつたんだよ? それをちゃんと聞いてあげずに、無視したのはあたい達だつてわかつてる?」

「……そりや結果的にはそうかも知れど」

珍しくチルノに正論を言われ、鼻白むミスティア。

その様子にほう、と片眉を跳ね上げるナズーリンだが、チルノはそのままぐりと彼女のほうに向きなおり、

「ナズりんもそう! 力づくで病氣の大ちゃんを無理矢理とか、鬼畜にもほどがあるよっ!!」

「その語弊のある言い方はどうかと思うのだがね」

すっかり巻き込まれたナズーリンも、ややあきれた表情で続ける。

「私も行き過ぎたところもあったのは確かだ。非礼は詫びなければならぬが、こちらにも事情があつてね。さつきも言ったが、君たちの持つていたあの飛宝は妖精に取り憑いて狂わせてしまう性質をもつものだ。」

弟殿の法力は強大でね、それが込められた飛宝を妖精のような非力な存在が長時間所持し続けられれば、そのあり方すら歪めてしまいかねない。

私はその回収を命じられているというわけさ。方は乱暴かもしれないが、妖精は死ぬことはないし、飛宝を取り出すにはそれが一番手っ取り早いだろう?」

「あのさ」

ずい、と背伸びをしつつナズーリンのそばに詰め寄り、チルノは視線も険しく彼女の顔を見据えた。

「そういうのやめてよね。そりや確かにあたい達は大怪我しても『一回休み』ですぐに帰ってくるけどさ、それでなかったことになるわけじゃないよ。それまではやっぱり大ちゃんと会えないんだから」

「……………」

「元に戻るからって、何やつてもいいとか。そーゆう風に思われるの、なんかやだ」

「チルノ……?」

腰に手を当て、ぷい、とそっぽを向くチルノを、一

同は言葉も忘れて見つめていた。

が、それもつかの間。こほんと咳払いをしたチルノは、またさっきの暑苦しい調子で大きく手を広げる。

「さあ、みんな一緒に手を繋ごう！ それでおしまいにしようよ！ 握手で仲直り！」

有無を言わせずの迫力に、思わず手を出すナズーリン。チルノはその手をしっかりと握りしめ、ぶんぶんと上下に振りまわす。

「さ、みんなもっ」

「あ。う。うん」

同じく勢いに押されて、リグル達も円陣のように掌を重ねさせられてしまう。

「よし、これにて一件落着ねっ」

ぐっと拳をかため、あらぬ方を見つめて力強く宣言する氷精の様子に、さすがに不安になってきたリグルが声をひそめて皆に耳打ちした。

「……ねえ、やっぱなんかおかしくない？ 絶対変だって。今日のチルノ。変なものでも食べたのかな？」

「そんなこと言われたって知らないわよっ」

「あー。熱血だねえ」

「……つまり普段はこうじゃないのだね？」

問いかけるナズーリンに、揃って頷く皆。ダウザーの小さな大将はふむ、と顎に手をあて、おもむろに腰のロッドを抜いた。

皆の疑念もそちのけで熱弁を振るう氷精を視界に入れながら二度、三度と慎重にロッドの手応えを確かめる。

「成程。つまり……」

何事か納得すると、ナズーリンはそのままつかつかとチルノの傍に歩み寄った。おもむろに振りかざしたロッドを、氷精の頭めがけて勢いよく振り下ろす。

「痛!？」

景気のいい被弾音とともに、目を回したチルノから緑の円盤が飛び出した。逃げようとする飛宝をロッドで捕獲、回収して眉を寄せ、賢将は苦い顔。

「こういう訳か。そちらのお嬢さんではなく、こっち

が飛宝に憑かれていたと。……いやはや、我ながらなんという初歩的なミスをしたものだ」

「なーんだ」

「どうりで。ヘンだと思ったー」

「このままだったらどうしようかと思ったよ……」

つまり、マイナスにマイナスを掛け算してプラスになつていたということだった。氷精の変調の理由がやっと解明されたことでひと安心する一同の中、チルノが頭を押さえて起き上がる。

「……いったあ……」

「だいじょうぶチルノちゃん？ もう元に戻った？

3 たす6 は？ 4 たす5 はっ？」

「なに言ってるんの大ちゃん？ って大ちゃん？」

「よかったあ……」

ぱちくりと瞬きをするチルノが、ようやくいつもの調子に戻ったことで緊張の糸が切れたのか。大妖精はチルノに肩を寄せるようにしてへたり込んでしまう。

驚いてその肩を揺り動かすチルノだが、大妖精は穩

やかな表情で小さな寝息を立てるばかりだった。

「……寝ちゃってる。夜更かしとかしてたのかな？」

「ま、そんなとこよね。きつと」

ルーミア、ミスティアとこっそり顔を見合わせ、リグルは小さく笑う。

一方、チルノはナズーリンに向き直り、

「……えっと、そんでナズりん。何の話だっけ？」

「っ、ははっ」

そんな風にあっけらかんと言うチルノに、ナズーリンはどうとう堪え切れないというように吹き出した。

「なによ。あたいの顔見て笑うとか失礼じゃないっ」

「ああ、いや、違うんだ。そうではなくて——」

無然とするチルノに、ナズーリンは笑いをおさめ、腰のロッドを外して静かに腰を折った。

「……本当に、すまなかった。このとおりだ」

「……どういふこと？」

いきなり態度を変えたナズーリンに、少なからず驚きを見せるミスティアとリグル。

「まったく、完璧に私の負けだよ。知らぬこととは言え、君の友達に酷いことをしてしまった。君達を侮辱したことを含めて、謝らせて欲しい」

深く頭を下げるナズーリンに、けれどチルノは首をこくんと傾げ——さして悩むこともなく、大きく頷く。「なんかよくわかんないけど、わかればいいのよっ」その返事は、ああいつものチルノだ、とその場の全員が納得するものだった。

ようやく戻ってきた和やかな雰囲気の中、いつしか暖かな陽射しがあたりに満ちてゆく。

遠く、春の湊の青い空を、大きな箱舟の影が横切り、悠然と雲の彼方に消えていった。

(了)

僧、洞山に問う、「寒暑到来せば、如何にか廻避せん」。山云く、「何ぞ寒暑無き処に去かざる」。僧云く、「如何なるか是れ寒暑無き処」。山云く、「寒き時は閼黎を寒殺し、熱き時は閼黎を熱殺す」。

(碧巖録 第四十三則 洞山寒暑)

大山鳴動する鼠一匹

初出:大⑨州東方祭(2009/11/15)

「地と星に逢う金蘭の契り」収録

こちらは逆に弱キャラにする気が起きなかったナズーリンのお話。やっぱり当時、敗北時にやられずに逃げ出す彼女の狡猾さと、弾幕の巧みさが結構強く印象にあったのだと思います。

プロットを作っていた当時、星蓮船の体験版の段階で、EX中ボスに誰が出るのかという話があり、UFOに取り憑かれたチルノ説というのがわりと自分の周りで広まっていたのでそれを採用しました。

風吹けど道具屋の損

「ふーむ……」

はるか遠くなった聖輦船の影を雲間に見、ナズーリンは一人、途方にくれながら空を飛んでいた。眼下には魔法の森があり、時折鳥のさえずりも聞こえてくる。傲慢のロッドも今は腰に収められ、開いた左右の手を腕組みして、難しい顔。

「さて、どうしたものか……」

それというのも、今も彼女の頭を悩ませる事態が原因だった。なんとかして早急に手を打たねばならないが、その解決の糸口が見付からない。

思い悩むダウザーの小さな大将を、しかし呼び止める声がある。

「おーいっ、ナズりんーっ!!」

見れば、地上には見覚えのある姿が小さな手をぶん

ぶんと振っていた。

眼下に数日前に知り合いになった氷精たちの姿を認め、ナズーリンは返事と共に高度を落とし、ロッドを振るって応じる。

「やあ、今日も実に愉快そうだね、チルノと愉快的仲間たち」

「なにやってんのさ、ナズりん。難しい顔して」

聞かれ、ナズーリンはしわの寄った眉を伸ばし、顎に手を添えて考え込む。

「ふむ……君たちならお願いをしてもいいかもしれないな」

そう言っ、ダウザーの小さな大将は地面に降りる。出迎えるように寄ってくるのはリグルにミスティアといつもの顔ぶれ。少し遅れて大妖精もやってくる。

「こんにちわ」

「ああ、こんにちわ。リグル、皆も。……あとルーミア、悪いがそれは食べ物じゃないので返してくれ」

「んあ?」

いつの間にかの早業ですぐ隣に現れ、リスのように頬袋を膨らませていた闇妖に釘を刺し、その口の中から涎でべとべとになった子ネズミを回収するナズーリン。子ネズミはすっかりおびえた様子で泣きながらバスケットの中に潜り込む。

「いやはや、油断も隙もない」

「残念ー」

反省しているのかしていかないのかまったく解らない様子で答えるルーミアに小さく溜息をついて、ナズーリンは車座になった皆の中、チルノが開けた椅子代わりの丸太の上にちょこんと腰を下ろす。

「んで、ナズりん、どうしたの？」

「そうだな。どこから話したのか……先日から私が探し物をしているのは知っていると思うんだが」

それは、ナズーリンが皆と知り合う切欠になった事件だ。珍しくチルノも覚えていたか、ほんと手を叩いて声を上げる。

「ああ、あの秘宝ってやつ？」

「飛宝、だよ。まあそれもそうなんだが、実は私にはもうひとつ探しているものがあってね。こちらはあまり表沙汰にできないものなんだが。……できるだけ早くそれを持って帰らなければいけない。途中で魔法使いやら巫女やら巫女やらにいくわして時間をとられたから、なおさらだ」

「え、巫女?!」

妖怪たちにとつては不慮の災害に近い意味合いのその単語に反応して、リグルたちはとたんに周囲の警戒を始めだす。回数之差はあれ、そろって同じように退治された経験を持つだけにその単語への反応は過剰とも言えるほどだ。

事情を説明しつつ、ナズーリンは先を続ける。

「ああ、てきとうにやられた振りをして逃げてきたから平気だよ。今回は宝船にご執心らしいから、今頃はたぶん船の上だ。一輪嬢も気張っては居るだろうが、あれは多分敵しいだろうがね」

さらりと言ってはいるが、事も無げにそんなことを

口にできるのは、この場には彼女のほかに精々チルノぐらいのもののだろう。そもそも本気で逃げたところ
で逃げ切れないのが巫女と言う存在だ。

近い所では永遠亭の詐欺兎が同じようなことをしていたが、妖怪としての経験の差というものが理由だろう
うか、とリグルとミスティアは顔を見合わせたりする。

「そっか。じゃああたいたちも手伝うよ。ねえ大ちゃん？」

「あー。話は最後までさせてくれ。探し物自体はもう
見つかったのだよ」

「へ？」

じゃあ何を困るのさ、と目を瞬かせるリグルに、ナ
ズーリンは腕組みをして、

「見付かりはしたのだけど、これがあいにく古道具屋
の棚の上だね。値札まで付けられていて、返してくれ
と言っても聞く様子がないのさ。どこの誰が売り払っ
たのか知らないが厄介なことをしてくれたものだ。そ
れでほんと困っていたと、こういうわけさ」

「古道具屋って、あそこのことね？」

森外れにある古道具屋に、変人で評判の店主がいる
というのは、妖怪たちの間でも噂になっていた。店主
が半妖ということ、人里に比べれば妖怪が訪れやす
い場所ではあるのだが、取り扱うものの大半がその用
途もわからない外の世界からの漂着物であるというの
がなおさらに客足を遠のかせているらしい。

「前に屋台の仕入れで使ったことあるけど、欲しい
て言っても全然売ってくれないのよね、あそこ。気に
入ったから売らないなんて、商売する気全然ないみた
い」

「ふーん」

「成程、吹っ掛けられる程度で済んだのは幸運だっ
たのか」

ミスティアの説明に小さく口元を緩め、ナズーリン
は苦笑交じりにうなづく。

「大事なものの？ その、探し物っていうの」

「ああ。私がどうこうというよりは、私のご主人様が
ね。なにしろムラサ船長にも一輪嬢にも秘密しろとい

うくらいだ。さぞ焦っていることだろうさ」

「？」

痛快そうに歯を見せて笑うナズーリンだが、何のこともわからない一同は首を傾げるばかりだ。ナズーリンもすぐに笑いを引っ込める。

「……そのあたりはこっちの話だから気にしなくて良い。ということ、一刻も早くあれを取り戻したいのだが、こっちの勝手はまだ良くわからないし、一人ではどうしようもなく困っていたところなのさ。虫のいいお願いだが、君たちの知恵を借りたいんだ」

前回の一件以来やけにチルノを評価しているナズーリンはそう言うが、実情を知るリグルと大妖精は微妙な表情で顔を見合わせ、人選ミスじゃないかなあ、とつぶやいたりしてみる。

けれど、チルノときたらもうどこから来るのかわからないほどの自信でどん、と反らした胸をたたいてみせる。

「なんだ。水くさいなあナズりん。そんなのあたいに

任せてよ！」

「すまないね、恩にきる」

そうして、ナズーリンに素直にべこりと頭を下げられてしまえば、皆も無下に断るわけにはいなくなってしまうのだった。

……とは言え、古道具屋との交渉など、全員がほとんど未経験。引き受けたはいいものの、一同はそれぞれに首をかしげる。

「うーん……」

「ちなみに念のため確認したいが、君たち、手持ちはいくらあったりするかい？」

「お金？」

チルノ達はそろって顔を見合わせる。まずぷるぷると首を振ったのは大妖精にルーミア。続いてチルノがごそごそとポケットを漁り、

「これくらいならあるけど！」

「ああチルノ、君には元から期待していないから無理はしないでいい。どちらかというと一番頼りにしたの

はミスティア、君なんだが」

自慢げに差し出された蛙の氷漬けをそつと押しやり、ナズーリンはミスティアに視線を向ける。

「え、私？」

「そっか、お店やってるくらいなんだからあるよね、お金」

「だ、だめよ。あれはお店の仕入れ金で、好きに使っていいお金じゃないんだから！」

まるで自分が代金に突き出されでもしそうだと、警戒と共にぱつと自分の身体を抱きしめるミスティア。

「それは先刻承知だ。あとで必ず返す。誓って約束しよう」

「で、でも……手持ちなんて全然ないし、屋台はねぐらに置いたままだし。取りに戻ったら結局似たようなものじゃない？ それにいくらなんでもそんなに大した額、持っていないわよ」

「そっか……」

まるで自分のことのようにうなだれる大妖精。

「私もちよつとくらいなら持ち合わせあるけど。値段、どれくらいって言われたの？」

「ああ、確か——」

ナズーリンは宙空につつと指を伸ばし、いくつもゼロを並べてゆく。

「少なくともこれくらい、だそうだ。ふざけたものだね」

「そんなに!？」

「高いの？」

「高いも何も、そんなにあったら巫女が10年は暮らせるわよ!？」

「ごめんよくわかんないそのたとえ」

声を揃えて夜雀に突つ込むリグルと大妖精。

「一応、他に珍しい品を持つてくれば交換でもいいとは言われているけれどね。そうそう都合よくそんなものを持ち合わせているわけでもない。あれであの店主、なかなか目が肥えているようだから、適当ながらくたで誤魔化すわけにもいなくてね」

厄介な相手に捕まったものだ、と頭を振るナズーリン。心なしか腰に仕舞われたロッドも元気がないようにも見える。

「もう、そんな面倒くさいことしなくても、ちよつと忍び込んで持つてっちゃえばいいじゃないさ。もともとナズーリンのなんでしょ？ 文句言うなら弾幕勝負で決めたっていいし!!」

「正確には私のご主人の持ち物だがね。……まあ、普通ならそうするんだが、少々厄介なことにそうした御法度は避けたいという事情があつてね。できれば波風を立てず穏便に取り戻したいところなんだ」

さらに、あの店主はまず勝負に応じそうもないことも付け加え、ナズーリンは後ろ頭を掻く。

「つて言つても、お金も物もないんじゃないでしょうもないんじゃない？」

ミステリアの言葉に、一同は思わず黙つてしまう。

「いっそ身体で支払うかと思つて色仕掛けも試してみたが、あそこまで迫つてまったく無反応ときたからね

え。あの店主朴念仁にも程がある。といつて別段不能ではないようだし、半妖相手とは言え少し傷ついたよ」突然とんでもないことを言い出して、やけにオトナの艶っぽい瞳でほう、と溜息をつくナズーリンに、思わずその場の全員がごくり、と息を飲んだ。

「だ、駄目だよナズちゃん!! い、いい色仕掛けなんてそんな!? そんな展開だとこの規約とかで書けなくなっちゃうでしょ!? もつと自分を大切にしてくっ!!」

「ああ、だから何もしてないといったら。結果的にはあるけれど。落ち着いてくれ」

「ででで、でもっ」

ぐるぐると目を回している大妖精を座らせ、ナズーリンは再度の溜め息。

「やはり、最終的には無理矢理の手段しかないということか」

重い雰囲気と言葉に、皆も思わず口を噤む。

が、そんな中、ある意味まったく空気を読まずに声

を上げる氷精がひとり。

「ねえ、ナズりん」

「うん？」

チルノはごそごそとポケットを探り、手のひらに載るほどの塊を取り出した。

「これとか使えないの？ 交換ならさ。お宝なんですよ？」

それはいつだったかと同じように、氷漬けにされた丸い円盤状の物体。すでにナズーリンには見飽きるほどに見飽きた飛宝だが――

「ああ、そうか！」

ぼん、と手を叩き、ナズーリンはにっと笑顔を見せた。

「そうか、その手があった。やはり流石チルノ。実に天才と紙一重だ!!」

「？ よくわかんないけど褒められてる？ やった！」

「そうかなあ……」

思わず首を傾げるリグルをよそに、ナズーリンは名

案だとはかりにチルノの手を握り締めた。

「でも、あの店主って確か、道具の使い方とか見ただけで解っちゃうんでしょ？ それってそんなに珍しいもののなの？」

「ああいや、交換するわけではないよ。もっと良い使い方だ。とりあえずそれを借りていいかい？」

「あ、うん」

チルノから飛宝を受け取り、にやり、と意味ありげに笑うナズーリン。

「もともとこれが何かを考えればよかったわけだ。一部だけとはいえ聖の法力が込められているのだから、それを開放してやれば……」

ごそごそとチルノから受け取った円盤を抱え込み、同じような品を取り出して何やらいじっていたナズーリンだが、

「ここを、こうして……こんな感じか？」

「きゃっ!?」

「うわあ!?」

突如。

得体の知れない唸り声のような大きな音と共に、円盤は三色の輝きとともに大きく巨大化し、宙へと浮かび上がる。飛びのいた皆をよそに、それを見上げナズーリンは満足そうに頷きをひとつ。

「弟殿が托鉢に用いた鉢だ。ここはひとつ、聖復活のために、あの古道具屋にも寄進をいたたくとしようか」皆が呆気にとられたままぽかんと見上げている間に、円盤は森のはずれを直指して飛んでゆく。

「……さて皆、なにをしている。ついてくれば面白いものが見れるぞ？」

ナズーリンに促されるまま、皆は揃ってその後を追うのだった。

後日。

突如現れた未確認飛行物体に、あらかたの道具を吸

い上げられるという不可解な事件に遭遇した某所道具屋の店主へのインタビューが、謎の宇宙人による仕業か——と書き立てる推測と共に天狗の新聞の一面を賑わせることになったのだが、それは、また別の話である。

(了)

メレトリックス・ルソリア

史記の天官書にいはく、「海旁蟹気は楼台に象る」と云々。

蟹とは大蛤なり。海上に気をふきて、楼閣城市のかたちをなす。

これを蟹気楼と名づく。又海市とも云。

—今昔百鬼拾遺 雲・



緩む寒さと共に山頂を覆っていた根雪もすっかり消え、草木萌え動ずる雨水の末。

いまや季節は眠気を誘う穏やかな春の中。大結界の要たる博麗神社の境内から幻想郷を一望する枝の上で、小さな百鬼夜行、伊吹萃香は杯を呷る。

「んー。春だねえ」

自前の瓢箪は腰に下げ、代わりに手にした杯には澄んだ白酒しろきと桃の花の切片。そこに開いたばかりの桃の花を刻んで散らした酒は桃花酒とも呼ばれ、春の甘い香味を愉しむものだ。

元来、邪気を払うための靈酒ホウダであるが、古今稀に見る酒豪の鬼にあつては些細なことであるらしい。

杯の中に揺れる白い花に、ふと萃香は呟いた。

「……あいつも元気でやつてるのかな」

追憶の中、いまはここにはいない相手に向けて杯を掲げると、萃香はそれをくいと呷った。一息に呑み干した杯の底には小さな桃の花欠が一枚。

喉を滑り落ちる酒精に、萃香は満足げに眼を細めて、ほんのりと紅らんだ頬を緩める。

高い空をさえぎる鳥の声、ちらほらと緑萌える木々

に春の穏やかさを感じ、萃香はごろんと背中を枝に乗せた。心地よい酔いに任せ、うつらうつらと船を漕ぎ始める。

……しばし、そうして微睡^{まどろ}んでいただろうか。

「……ん？」

転寝の中にわずかな違和感を覚え、萃香は片目を開けた。

小鳥たちの囀りがびたりと途切れ、遠く幽かな地響きがざわりと枝を揺らす。

薄れはじめた春の気配の中、どこからともなく、小さな波の音が迫っていた。



「よし、邪魔するぜ」

春の陽気を受け蕾を開く桃の香の中、人里は稗田邸の門を叩く声がある。……否、来訪者がやってきたのは阿礼乙女、稗田阿求の書斎に面した邸内の中庭だ。

「阿求、いるかー？」

「騒がなくても聞こえますよ」

障子を引き開け阿求がやれやれと出迎えた先、桃の枝上から縁側に顔を出したのは魔法の森の白黒魔法使いだ。ぴよんと愛用の箒から飛び降りた霧雨魔理沙は首元のマフラーを外し、暑そうにばたばたと帽子で顔を仰ぐ。

「いやあ、朝は寒かったから厚着してきたんだが、今日はやたらに暖かいな」

「せめて玄関から訪ねてきて頂きたいのですが」

「今更知らん仲じゃあるまい？ 省ける手間は省くべきだぜ」

「親しき仲にも礼儀ありという言葉もありますけれど？」

「まあまあ、急用なんだから大目に見てくれ。ちょっと聞きたいことが……ってなんだ、ブン屋もいたのか」
言いかけた魔理沙は、部屋の中に先客の姿を見つける。

お茶を啜りながら完璧な営業スマイルを浮かべるのは、里に最も近い天狗、射命丸文。その名の通り、部屋の中ですっかりくつろいだ様子だった。

「ふむ。さすが魔理沙さん。いつもこうしてあちこちの乙女を訪ね歩いては誑かしているという訳ですね？」

「言ってる」

文の揶揄を受け流し、魔理沙はしかし、と呟いて、
「なら尚更都合が良かったな」

あがるぜ、と声をかけ、魔理沙は靴をはいはいと脱ぎ捨てて、座敷に踏み入れた。

脱いだ帽子をくるんと回し、縁側に立てかけた箒の上にひっかける。

「訊きたいってのは他でもない、例の長太^{ながた}の大蛤^{おおはまぐり}の話なんだがな」

魔理沙はスカートのポケットの中から、すこし色の褪せた新聞を取り出した。三つ折りの紙面は、他でもない文の手によるものだ。

「……ああ。先日の記事ですか？」

——『里の上空に虹色の空中都市現る！』
大仰な煽りの題字と、あまり中身のない文章、そして一面をでかでかと飾る虹色の楼閣の写真が紙面を所狭しと踊る。例に漏れず、天狗らしき満載の内容だった。

文々。新聞の号外には、天上に突如出現した楼閣と、崖崩れで露になった古い時代の地層から、貝の化石と一緒に大蛤が姿を見せたという事が記されている。

「蜃^{しん}能く気を吐いて楼台^{ろうだい}を成す、ですね」
記事を覗きこみ、阿求は頷く。

この時現れた楼閣というのは光の屈折によって生まれる上位蜃気楼であり、それを産み出したのは幻を吐く大蛤の妖怪、蜃であった。

この妖貝の吐き出した幻影の楼閣を、異変と勘違いして巫女が探し回るというひと騒動があったのだが――

「その蜃気楼^{しんきろう}の素つてのを話の種に見に行ってみようと思ったんだが、どこに行っても見当たらないとき

た」

「おや」

びくんと文が片眉を跳ねさせる。

「おかげであっちこっち飛び回る羽目になってな。途中でお前んとこの白狼天狗やらに追っ掛けられて、まあ鬱陶しいったらなかったぜ」

「おかしいですね。あれは記事の通り、かぶらさわ鐺沢の崖崩れの下で息を吐いていたはずですが」

無いもんは無いんだぜ、と魔理沙は肩をすくめる。

「それで、阿求なら何か知らないかって思ったんだ。

誰かが持つて行ったにしたって、あの馬鹿でかい図体じゃ難儀だろ？」

「……ふむ」

二人の話を聞いていた阿求は腕組みをして、傍らの書架から一冊の本を机上に広げる。

「こちらをご覧くださいますか？」

「なにに？」 『海旁蟹氣——……？』

びっしりと並ぶ漢文に魔理沙が眉をしかめる隣で、

阿求はこほんと咳払いをひとつ。

「『海旁の蟹氣は楼台を象り、広野の氣は宮殿を成す』。

『史記』天官書第五の一節です。

蟹の吐く氣が象る幻を蟹氣楼と呼ぶのは確かですが、光の屈折による幻影そのものは別に海だけで見られる現象ではありません。ここにもある通り、山で見られる蟹氣楼は広野の氣より生じるとされ、海で見られる蟹氣楼とは違うものとされているのですよ」

然るに、と阿求は紙面を指差す。

「まずはこのとき里の上空に現れた蟹氣楼が、間違はなく崖から発掘された大蛤の吐いた氣によるものであるのかという所から考えるべきかと思いますが」

「おや。それは心外ですね。私の取材に誤りがある？」

「ただの長生きの貝だった可能性もあると思いますよ？」

疑っても仕方ないですが、と阿求は苦笑しつつ、

「蛤というくらいですから、蟹は海の生き物ですからね。今回は、たまたま古い地層から生きたままの姿で

発掘されたわけですが——」

「長太の大蛤は、海のない幻想郷じゃ、長くは生きられないというわけですね」

いつの間にか、文も取材用の手帖を捲りながら参加している。

「つてことはなんだ。どっかで干からびてるのか？」

「曲がりなりにも年経た妖貝ですから、はつきりとは言えませんが——この記事が書かれてからもうだいぶ経ちますしね。生存は望み薄ではないでしょうか」

「水ならそこらにも沢山あるぜ？ 蛤つてのは湖じゃ生きられないのか？」

「それは愚問ですなえ魔理沙さん。人間に真水の代わりに塩水を飲んで生きていられますか、と聞くようなものですよ」

「貝の中には淡水生のものもありますけれど、蛤はそうではないようですしね」

阿求が補足する。

「なんだ。結局草臥れ儲けか……。」

つまらん、と頬を膨らませ、魔理沙は机の上へぺたりと突っ伏す。

「せめて一目見たかったぜ」

「いやいや。山への不法侵入を咎めないだけで有難いと思つて頂きたいのですが」

「どうせ、命令なんざ真面目に守る気もないんだろうに」

横目で見やる魔理沙に、文は答えずにこりと微笑むのみ。

「うーむ。……ところで喉が渴いたぜ。熱いお茶が一杯怖いな」

「まったく、大したものですね」

魔法使いの図々しさに呆れつつも、阿求は使用人を呼ぶために卓上の鈴を鳴らす。しかし、邸内にりと響いた鈴の音にも、一向に返事がない。

「……？ ちよつと失礼します」

首を傾げ、阿求は席を立った。

何をしているのかと眉を潜め、廊下へと出て見れば、

使用人達は庭のあたりに一所に固まってなにやら囁き交わしているとようだった。ひそひそ話に夢中な彼女達の元に近付き、阿求はこほんと咳払いをする。

「もしもし？ ヤエさん。お客様にお茶を——」

「し、失礼しましたっ、ただいま」

名を呼ばれた若い女中が、飛び上がって駆けてゆく。阿求は残る使用人達を捕まえ、理由を問いただそうと顔を見まわした。

「どうしました？ こんな所に集まって」

「いえ。その……」

使用人たちはお互いに顔を窺い、どうにも齒切れ悪く口籠るばかり。彼女達がちらちらと庭の外へ視線を送っているのに気付き、阿求は首を傾げながら草履を吐いて庭に下りる。

「ん？ どうした？」

騒ぎを聞き付けたのか、魔理沙が書斎から顔を出した。文もそれに続いて姿を見せる。

「そのう、あれを……」

使用人の指差した先。桃の枝とは反対側の空に視線を向け、阿求はしばし言葉を失った。

里から見てちょうど東の方角、春の青空を切り取るように、不可解なモノが現れていたのだ。

「……なんだありゃ」

「霊夢さんのところですね」

幻想郷の東端にある山々を覆うように、景色に歪みが生じ、ぼんやりと霧のような塊が浮かんでいる。形状はほぼ球状に近く、おおよそ東の空の四分の一ほどが切り取られている。ぼやけた霧の輪郭は山の一部を飲み込み、恐らく博麗神社もその中に取り込んでるように思われた。

「……ふむ」

阿求が興味深げにそれを見ている間に、文はひとつ頷いて背中黒翼を広げ、高下駄の歯で地面を蹴った。ひようと鋭い風の一閃を残し、天狗の姿はかき消える。

「あ！ おい待て！」

叫ぶ魔理沙だが、その頃には文の姿はすでになく、わずかなそよ風が庭木を揺らすのみだ。

「しまった、出遅れたぜ」

悔しげに呻いた魔理沙は、慌てて縁側に立てかけていた箒を掴むとその上に跨った。帽子をくるんと頭に乘せ、稗田邸の中庭を舞い上がる。

——と、そこへ。

「ああ、ちよつとお待ちください魔理沙さん」

「うお!？」

袖を掴まれ、がくんとバランスを崩した魔理沙のそばへ、阿求がにこにこ微笑みながら近付く。

「つかぬ事をお聞きますが、異変を前に助言役はご入り用ではありませんか？」

「……なんだって？」

「地底の悪霊騒動の時と同じように考えて頂ければ結構ですよ。ええ、幻想郷の全てを見聞きして溜めた稗田の歴史、決して損はさせませんよ?」

しっかりと魔理沙の袖を掴んだまま、阿求は胸を張

って、おせる。わくわくと目を輝かせる御阿礼の子からのアプローチに、魔理沙は困惑しつつも聞いてみた。

「本音は?」

「折角の異変、直にこの目にできる機会はそうありませんので」

「……成る程な」

阿礼乙女の押しの強さに、魔理沙は溜息をついて座る位置をずらし、箒の後部にもう一人分のスペースをつくる。

阿求はいそいそと壁に掛けていた外套を羽織り、手近な座布団を一枚、二つ折りにして箒に乗せると、その上にちよこんと横座りする。

「あ、あの、阿求様!? どちらへ!？」

「あお夕飯までには戻りますので」

心配して駆け寄ろうとする使用人を制して、阿求はすつと魔理沙の腰に腕を回した。

「では、参りましょうか。……落つことさないようにしてくださいね?」

「やれやれだぜ」

なんとも疲れたように呟いて。帽子を心持ち深めに降ろし、魔理沙は箒を宙へと踊らせた。



「——うーむ」

人里から幻想郷を東に縦断し、普通に飛べば一刻程もかかる距離を、わずか四半刻も経たないうちにかっ飛んで、魔理沙は阿求と共に博麗神社の上空へやってきた。

しかしこうして近付いてはみたものの、山の周囲を取り巻く付近の空間の状況は依然として判然としない。ぼやけた霧のような空間は。乳白色の巨大な球形を保ったまま澱み、博麗神社を中心として広がっているようだった

「妙なものですね。陽炎のようにも見えますが」

霧は辺りに広がるでもなく、丸く形を作るように一

か所に留まり、まるで水面のように波紋を広げ揺れている。

「……おや、随分とお早いお付きで」

「お前こそ、まだこんなところでぐずぐずしてたのか？」

ぱしやりとシャッターを切りつつ、カメラ片手にしれっとした態度で出迎える文に、魔理沙は胡乱げな視線を向ける。

「いえいえ。これでも魔理沙さんに一番槍をお譲りしたいという心からですよ。現場の確認は報道としての心構えですからね。どうぞどうぞお先に」

「……良く言うぜ」

茶化した雰囲気ではあるが、先行したはずの文がここで待っていたということは、彼女ほどの妖怪がこの異変を警戒していることも示していた。わざわざ人間の魔法使いを先に通らせようとしているのがその証拠だ。

そもそも、結界の要でもある博麗神社を襲う異変というのは、少なからず危険性を孕むと考えるべきだった。

た。

「……………」

魔理沙は阿求を載せたまま、ぐるりと霧の周囲を半周ほど巡ってみるが、特に目立ったものも見当たらず、分かりやすい入り口のようなものも見つからない。

乳白色の空間は直径にして数里ほどにも及び、神社や周辺の森ごと山を飲み込んでいる。

霧の境界から一定の距離を保ちつつ、魔理沙は背中越しに阿求に振り向いた。

「さて、早速アドバイスを貰いたいんだが？」

「そうですね」

阿求は静かに目を閉じ、わずかに黙考。

「前置きを抜きますと、私には死んだ亀でしよ
うか」

「……その心は？」

「手も足も出ません」

「漫談やってる場合じゃないんだがな」

きっぱりと言い切る阿求に、魔理沙はがくと肩を

落とした。ずれた帽子を直し、前を向く。

「どうもこりゃ、外からじゃ埒があかなそうだな」

「どうするんです？」

「一か八か突っ込むぜ」

自信たっぷりと言つてのける魔理沙に、阿求はそうでしょうねと苦笑。

「どうする？ なんならその辺に降ろしてもいいぜ」

「折角お出かけの準備もしたのに、こんな山の中に取
り残されて、なんの収穫もなしに一人さびしく人里ま
で歩いて帰れとおっしゃいますか？」

「まあ、そうだろうなあ」

大体の予想通りの応答に、よし、と魔理沙は軽く頬
を叩いて、ぐっと箒の柄を握った。

箒は一気に加速し、二人乗りの重さを感じさせぬ速
度で山肌を這うように風を切つて、まっすぐに霧の中
へと突入してゆく。

阿求は魔理沙の腰にまわした腕に力を込める。
文がフィルムを巻き、ファインダーを覗く中。

霧を白い飛沫と散らせながら、二人の姿は霧の奥へと消えていった。



突入の衝撃の直後、魔理沙は押し寄せてくる圧倒的な冷たさを感じた。全身を冷たい重量が包み込み、手足には突然錘が括り付けられたような重圧が押しかかる。

混乱の中、胸を締め上げられるように強く押され、げほっと息を吐き出して。魔理沙は自分が水の中にいることに気付いた。

「っ———!?!」

予想外の事態に動揺し、もがいた魔理沙の喉から、さらに大きな空気の泡が漏れてゆく。視界は黒々とわだかまる水の中に遮られ、上下の区別すらままたらない。

「うぐ……」

今にも途切れそうになる意識を奮い立たせ、魔理沙は視界の通らない周囲に視線を巡らせて、浮かぶ阿求の身体を見つけた。

「———ッ!」

水圧に押し潰されそうになる肺が軋み、息が遠くなる。

冷たい水を掻き分け、阿求の手と箒を掴んだ魔理沙は、そのまま頭上——光の差すほうへと水を蹴った。

「ぶあっ!?!」

息の途切れる寸前に、なんとか揺れる波間に辿り着き、魔理沙はと水面に顔を突き出した。

箒にしがみつくように浮かびながら大きく息を吐いて水を吹き出し、何度もえづいてぶるぶると頭を振る。

「し、死ぬかと思っただけ……」

水を吸って顔に張り付く金髪を掻き上げ、水面に浮かんだ箒の上へと、阿求の身体を引っ張り上げてやる。

「大丈夫か?」

「けほ……ええ」

こちらにも濡れ鼠の姿で、阿求が咳き込む。すっかり顔を蒼くしていたが、幸いなことに意識もあり、溺れた様子もなかった。突入の瞬間、無意識のうちに目をつぶり、息を止めていたのが偶然にも功を奏したのだ。

「掴まっとけ」

「はい……」

魔理沙は残る力を振り絞り、びしょ濡れの箒を海上に浮かべると、近くに見えた陸へよたよたと飛んでゆく。どうにか辿り着いたところで水に濡れた箒は浮力を失い、力尽きたように落下する。

「っはあ……ッ」

白い砂浜に投げ出され、倒れ込みながらも、魔理沙の喉はぜいぜいと息を荒げ、酸素をむさぼった。ぐったりとした様子の阿求も、口元を押さえて俯き、水を吐いては額に張り付いた前髪を払いのける。

繰り返す咳き込みながら息を整えること十数分。ようやく余裕を取り戻し、魔理沙は砂の上に上体を持ち上げる。

「……なんなんだ、こりゃ……」

「……どう見ても海ですね」

どこまでも続く水平線。白い砂浜の向こうには、穏やかに揺れる波間。寄せては返す綾目模様の波の隙間には、白い貝殻や打ち上げられた流木が転がり、その間を赤い甲羅の蟹が横走りに走り抜けてゆく。

「あややや。これは見事なもので」

ばさり、黒羽を散らしながら文が上空から降りてくる。

「どうやらここは大きな金魚蜂のような構造のようですね。上からはすんなり入れましたよ」

「……真下から馬鹿正直に登っていかなくて正解だったってことだな」

安全確認に使われたことに無然とする魔理沙だが、確かに不注意だったことは否めない。下手をしたら水圧で押し潰されていたかもしれないので、幸運と言えなさそうだったのだろう。

「折角ですから底まで沈んで、石臼を採って来ても良

かったものではありませんか？」

などと、人の悪い笑みを見せる文。

「海のいちばん深い場所までは一万二千メートル以上もあるらしいですから、どうでしょうかね」

「ペしゅんこにならなかつただけでも良しとしておくか」

ぶるぶると首を振って耳の水を抜いてから、魔理沙はドロワーズの裾、スカートの順で服を絞り、しわしわの帽子を再度頭に乘せた。

「しかしまあ、海ねえ」

普通の魔法使いはぼやきつつ、干上がった浜辺に転がる、赤い星形を拾い上げて首をひねる。

「これまで、空から落っこちてきた流れ星がどうなるのかついぞ分からなかつたが、こうなるのか？」

幻想郷は山の中にある。正確に言えば結果で隔離された地域なのだが、無辺広大な海に面していない事は確かだ。しかし干物や昆布など、海のものが手に入らないというわけでもない。

宴会に刺身が並ぶ事だつてあるし、一般人でも知識としては知っていることだ。

「なんとなく予想はしていましたが、どうも間違いなさそうですね」

「ん？」

一人で頷いている阿求に、魔理沙が疑問の視線を向ける。

「この海こそ、件の蟹の仕業ではないかと思ひまして」
「……おいおい。山からここまでじゃ随分あるぜ？
貝が一人で歩いて来たつてのか？」

「聞いた話ですが、蛤は一晚で三里を走るなどと言われ、海の中では比較的活発に動くそうですよ。幻想郷の結果がどのように組み立てられているのかまでは、流石に私の記憶にもありませんが——」

小さく間を挟んで、阿求は言う。

「博麗神社は外界と幻想郷を繋ぐ、境界碑のようなものでもあります。外界にあるものを呼び込むにはここが一番都合が良いのでしょう。これは推測ですが、外

の世界で幻想になりかけている海を、こうして呼び込んだのではないでしょうか」

妖怪の山がそうであったように、外の世界では海が埋め立てられるか干上がるかしているのかもしれない。そんな『幻』を蟹が招いたのではないかと阿求は説明する。

「ふむ。すると、こいつはつい最近まで外の世界の海だったってことか」

言って魔理沙は、ぺろりとわずかに砂の混じる指先を舐め、

「確かに、月の海とは味が違うな」

魔理沙も月の海は身をもって経験している。

住吉三神のロケットで訪れた（ついでに溺れた）穢れなき月の海はどこまでも澄み渡り、生命の棲むことの許されない場所だった。

しかしこの海には、生き物の住む生命の味があった。

潮の香り、揺れる波間、跳ねる魚や岩肌に生えた海藻。

それらが多くの生命の息づく海なのだという事を教え

ている。

「——しかし、この有様じゃ、神社もどうなってるかわかったもんじゃないな」

「まさか水没してるなんてことはないと思いますが」
そう言いつつも、文の口調がそれを期待している風なのは、わりといつもの事だ。

「……探すか」

足元の砂を掬い、ひとりごちる魔理沙に二人も頷く。
打ち寄せる波はわずかずつ水位を増しているようだった。



障子の隙間から差す穏やかな陽射しを感じ、眠気を誘う波の音にまどろみながら、薄掛けを肩まで引き寄せて寝返りを打つ。

楽園の素敵な巫女、博麗霊夢の朝は遅い。

もともと夜が早いほうでもなく、晩酌などで夜更か

しも多いためだ。熱心に境内を掃除することもないため、陽が出るまで横になっていることも良くあった。

(……何?)

しかし今日はやや事情が違う。

眠気を招く規則的な波音は、神社で——いや、幻想郷で聴こえるはずのないものだ。

霊夢は不機嫌に眉を歪め、薄い布団の上に身を起す。

「ふあ……」

大きく背を伸ばして欠伸をひとつ。はだけた胸元を整え、霊夢は鼻先をかすめる潮の香りに、訝りながら雨戸を開ける。

神社の裏手に当たるそこには、揺れる蒼海の水平線があった。

鎮守の森というほど大層なものでもないが、昨日までそこは確かにただの林だったはずだ。ちょうど結果の境目にあたる場所であり、水場と言えば蓮葉が浮かぶ小さな池がある程度の些細なものだ。

数度目を擦って、眼の前の水平線が夢ではないことを確認すると、霊夢は寝間着のまま頭を搔きながら外へ踏み出す。

縁側の下には白い砂が積もり、穏やかな波が縁の下を浚うように揺れている。

霊夢は伸ばした指先で砂浜に揺れる波に触れ、指先を舌先にちゃんと載せてみた。

「……ふむ」

口の中に感じる、わずかに苦みの混じる塩辛さに一人頷いて、霊夢は結論付けた。

「海ね」

空には雲がいくつも重なり、遠く吹き抜ける風は、青空と触れ合う水面の境界線へと続いている。

幻想郷の境界、結界の要たる博麗神社は、一夜にして出現した大海の波打ち際に揺れていた。

沖では揺れる青い波、砂浜に輝く強い日差し。雲の間には大きな鳥が翼を広げ、猫のような鳴き声を上げている。

等間隔で波音を響かせる海を前に、霊夢はしばし腕組みし、台所へと向かった。

組み置きの水で湯を沸かすと、お茶を入れて縁側に戻る。

寄せては返す波間の音。縁側に腰をおろして足を伸ばし、行き来する波に爪先をさらして、霊夢は湯呑みを傾ける。

「ふう……」

遙かに続く水平線の先へ視線を向け、しばし一息。砂浜を小さな蟹が横切り、流れ着いた流木を乗り越えてゆく。

沖合では銀色の魚が跳びはね、すつと舞い降りてきた白い鳥が器用にそれを啜えて飛び去っていった。

「寝なおそうかな」

ことんと飲みかけのお茶をちゃぶ台に載せ、霊夢は布団に戻った。薄掛けを首まで引き上げ、横になったところで、

「いや待て待て」

頭上からの聞き慣れた声に、霊夢は視線だけで空を見上げる。開け放った縁側へ、箒に跨った魔理沙がすうっと下降してくる。

潮風を揺らして、魔理沙は神社の縁側へと箒を着陸させた。

「どうも、霊夢さん」

「お邪魔します」

同じく背中に羽根を広げた文、魔理沙の箒の後ろに座る阿求と順番に顔を見回し、霊夢は気だるげに布団を這い出し、首筋を搔いた。

「なんなのあんた達は」

「そりゃこつちが聞きたいんだが……この有様で良く寝てられるな」

大物なんだか暢気なんだかわからんぜ、とぼやく魔理沙。

「……ちよつと、びしょ濡れじゃないのあんた」

「不幸なことにな。風呂とか使えるか？」

「海の真ん中で井戸が使えるならね」

「とりあえず着替えだな。阿求の分は借りるぜ」
上がり込んだ魔理沙は、勝手知ったる他人の家とばかりに筆箒を漁り始める。

「……私としてはどうして神社に魔理沙さんの着替えが一式揃っているかの方が気になりますかねえ」

至極まっとうな疑問ではあったが、フアインダー越しに霊夢にじろりと睨まれて、渋々両手をあげる文だった。



「蟹、ねえ……」

寝直すのを諦め、枕元の普段（巫女装束）着に袖を通した霊夢は、淹れ直したお茶に口をつけた。

早々とくつろいでいる文の隣へ、着替えを終えた魔理沙と阿求も髪を拭きながら腰を下ろす。

「思ったより動いてないんだな」

「境内の掃除が面倒だって思ってたから、神様がお願い

い事をかなえてくれたのになって思ってたんだけど」

「……いや、これはこれで大問題だろ」

「まあ、神社は潰れてないわけだし、いいんじゃない？」
あっけらかんと言う霊夢。

博麗神社は、海の真ん中にばかりと浮かんだ小さな小島の上にあった。鳥居も石畳も燈籠も根元を海面に飲み込まれ、縁側のすぐ下まで波が寄せては返してゆく。

これで賽銭を入れていく客がいたら大したものだろうと魔理沙は思ったが、霊夢が気にした様子もないのでそ大人しく口を噤んでおく。

「でも私の知ってることなんて殆どないわよ。目が覚めたらこうだったから」

「もうちょつと危機感あってもいいと思うぜ」

「そんなこと言われたってねえ」

「気付かなかったものは気付かなかったのよ、と霊夢。
「……そう言えば、昨夜紫が潮干狩りがなんとかって」

「——いきなりだよ」

どこからともなく声が響いたかと思うと、室内にぽんと小さく霧が弾け、小さな鬼の姿に収束する。

いつも通りに赤ら顔の萃香は大きな瓢箪をくいつと煽り、酒気を帯びた口調でひょいと畳の上に飛び降りた。

「神社の裏手から海が溢れて来てね、気付いたらこの有様さ」

「あんたそれ黙ってみてたわけ？」

「何かしなきゃならない理由もないしねえ」

言って再び瓢箪を傾け、けろろと言う萃香。

「あ、魚何匹か捕まえといたから、あとで肴にできるよ」

「……そう」

どうしてこうもどいつもこいつも自分勝手なのかしら、と霊夢は自分のことは棚に上げて愚痴を漏らした。

「で、そのお化け蛤ってのはどこにいるの？」

「それが分かったら苦勞は——」

「ああいえ、場所なら心当たりがあります」

ひょいと手を上げた阿求に、一同の視線が集まる。注目を集めたことに気を良くしたか、阿礼乙女は胸を張りつつ指を立て、

「蟹という妖怪は二種類いるのですよ」

「あん？」

「もともと、虫というのは大陸ではより広い生き物の呼び名でして。魚介や蟹、蛇、蛙なども、文字通り「虫」の中に含まれるものです。幻を吐く蟹というものはいくつか知られていまして、なかでも有名なもののひとつが文さんの記事にした、大蛤。そしてもうひとつが龍の幼生です。」

『和漢三才図会』巻之四十七、介貝部では「車蟹^{はまぐり}」の項で「蛤^{はまぐり}を総て蟹と曰ふ。専ら車蟹^{しやじやう}を指すにあらざるなり。また蛟蟹の蟹とは同名異物なり」とされています。

同じく巻之四十五、龍蛇部には「蟹は乃ち蛟の属にして、状はまた蛇に似て大なり。角有りて龍の状の如

し』とありまして。

この、蛟蟹のほうも同じく、燕を食べ蟹氣楼を吐きだすとされている生き物なのです。そしてこの蛟というのは、龍のうちでもまだ数百年しか生きていない幼いもので、池のような淡水に棲み主鯉などを食べ、鯉の多い池には自然と棲みついてしまうのです。天敵は鼈すげもんだそうで、蛟を避けるには鼈を池に放しておくとのいのだとか

「——ちよつと待て」

阿求が何を言わんとしているかを悟り、魔理沙は解説に割って入った。

「……大体、オチが読めてきた気がするんだが」

博麗神社の裏手には池があったはずだ。いまは蓮の花などが植えられているが、確か昔あそこには、年経た老亀が棲んでいたはず。いつからだったか、霊夢が自分で空を飛ぶようになってからはあまり見かけなくなっていたが——

「つまりあれか。崖から出てきた蟹つてのが、蛟でも

あるとしたら——」

「ええ。間違はなくそこに住みついたのでしょうね。

……歴史は、妖怪にとつて大きな力。長く生きた妖怪ほど複数の側面を持ち、力を蓄えることができます。何百年と地面の中で生きてきた大蛤であれば、同じ名前を持つ別の妖怪の性質も兼ね備えるでしょう。……八雲の式神などがいい例ですね」

「そういうことね」

霊夢はひとつ頷くと、懷から無造作に符を引っ張り出した。

「……つておい、霊夢？」

「いるのが分かつてるなら簡単よ」

一見やる気のない手つきで放たれた追尾呪符ホーミングアムULEットは、鋭い軌跡を描き、空を割いて波間へと直撃する。

破裂する符が水柱を轟かせて、砂混じりの飛沫を飛ばす。

その波間から顔を見せたのは、貝幅数十メートルには及ぼうかという巨大な二枚貝だった。



砂を蹴立て、地響きと共に姿を見せた大蛤を、魔理沙は恐々と見上げる。下手をすると神社よりも大きいのではないだろうか。幻を吐くという大蛤の殻には複雑な模様が浮かび、ゆらゆらと輝きを放ちながら揺れていた。

「……良く見つけるもんだぜ」

「なんとなくよ」

「……なんでもそれで済まされちゃたらんぜ」

ぼやく魔理沙の隣で、霊夢がたて続けに封魔針を撃ち放つ。並みの妖怪なら二、三匹まとめて刺し貫く貫通力を備えた針弾は、しかし大蛤の硬い殻を浅く削って火花を立てるだけだ。

「――意外に頑丈ね」

妖貝もただ撃たれるままではなかった。蜃は突如身震いしたかと思うと、砂を蹴立てるようになって動き出

す。

「おっと」

文が葉団扇を振るって巻き起こした風の渦が、大蛤へと直撃する。だが、分厚い殻を閉じて身を伏せた巨大貝は、風の渦をやり過ごし、後方に水を噴き出して突進してくる。

「ひゃああ!?」

「萃香っ!」

「あいよー」

阿求を連れて宙に逃れた魔理沙と入れ違いに、疎密を操り巨大化した萃香がその体当たりを押しとどめる。衝突の轟音が響き、大きく波立った海面に神社が小さく揺れた。

「……結構重いな、こいつ……っ」

鬼の臂力をして、大蛤の巨体を突き飛ばす事は難しいようで、二つの力は海上で拮抗する。足元が砂地な分だけ、萃香も踏ん張りが利かないらしい。

「クラムチャウダーの材料の分際で、やるもんだな!」

阿求を後ろに乗せた箒の上、魔理沙は八卦炉に調薬を放り込んで躍り出る。防水加工された炉の中に、膨大な魔力が練り込まれ、さらに力を増してゆく。

「喰らえ!!」

萃香の脇をすり抜け、突き出した八卦炉の先に、強大な魔力の燐光が灯る。

巨貝を浸かる海水ごと、塵まで焼き払わんとする魔理沙のスペルが完成する直前。蜃は突如、ばかりと殻を開いた。

【ミラージュ・コピー幻鏡模倣式・複写】強制力十三——修正、十五

「——げ!?!」

「スペルカード!?!」

声鳴き宣言を、その場にいた皆が聞いていた。

開いた大蛤の殻の内側がまるで鏡のように光り輝く。繊細な曲線を描いた鏡面は閃光の射手が放たんとする光芒を映し出し、その中心へと収束させる。

そして。

【ミラージュ・エッセンス幻鏡模倣式・木霊】——強制力十

開いていた貝殻を閉じ合わせ、蜃は身を震わせる。そこから膨らむのは、間違いなく普通の魔法使いのとなっておきのスペルの輝き。

「っ!?!」

霊夢は咄嗟に攻撃を切り替え、両手に掴めるだけの符を掴んで投げ放ち、二重の結界を張る。

同時に貝殻の内側で反射・増幅・拡散された^{マスタースペル}閃光が、轟音と共に視界を埋めた。

斜めに展開した結界にぶち当たり、射角をずらされた魔力の閃光は、神社の屋根を削り取って空へと吸い込まれてゆく。

「——おお、怖い怖い」

威力の余波が海水を巻き上げ、ざあ、と雨のように飛沫を散らす中、文は上空へと退避。霧になって身を

躲していた萃香も離れた場所で実体化する。

「ちよつと！ 神社までぶつ壊す気!？」

「今のは不可抗力だろ!？」

言い合いながら効果時間を過ぎて割れる結界から飛び出し、魔理沙と霊夢は海の中に蠢く蜃に向き直る。

二枚の貝殻の表面に揺れる、陽炎のような紋様は先程とは形を変えていた。より禍々しく、紅い色を浮かび上がらせるその気配は、明らかに感情と呼ぶものに近く、見るものの背中に少なからぬ怖気を感じさせる。

「……攻撃色?」

阿求のその表現は間違っていないかった。

蜃はさらに身を振ると、凝ったような虹色の気を吐きだす。炎のように揺らめく幻の塊が、ざわりと波打ち——宙空にいくつもの幻像を映し出す。

【攻撃構成式、斬撃】——強制力八——修正、十

攻撃対応・【攻撃支援式、増強】——強制力七——

修正、六

九

与打撃決定対応・【付加攻撃式、拡大】——強制力

現れたのは刀に剣に槍に斧。物騒なだんびらの群だった。七色の輝きと主に実体化し、際限なく分裂する刃の群れが、次々に浜辺を打ち貫いてゆく。

「っ、退避!!」

誰かが叫んだ。まるで戦場のように飛び来る武器の雨霞を避けながら、魔理沙は蜃から距離をとる。

「ちよつと待て、話が違うぜ!？」

「魔理沙さん、上ですっ!!」

「上?」

【攻撃構成式、崩落】——強制力十一

帽子を押さえて顔を上げた魔理沙の視界を一杯に埋めたのは、空から落下してくる巨大な岩塊——いや、山の切れ端だった。

「おおおおお!?」

全速力で方向転換する魔法使いの箒の先をかすめるように、莫大な質量の岩盤が海に叩きこまれ、水面を二つに裂いて揺らす。

津波のように弾けた海面を、文が轟風で押しとどめた。

その間にも巨大蛤は、砂を掻き分けて動きながら、何もない中空に幻の映像を吐き出してゆく。

【攻撃構成式、聖砲】——強制力九

攻撃対応・【付加攻撃式、獣牙】——強制力十

続いて出現した幻は、黒く凝った砂の嵐。禍々しい瘴気を漂わせた獄砂の塊が、意志を持つかのように雪崩を打って押し寄せた。

「うわ!?」

漆黒の砂はまるで意思があるかのごとく渦を巻き嵐のように吹き荒れ、あたりの景色を切り裂いてゆく。

黒い砂に埋もれた海岸は、たちまち瘴気に当てられてぷすぷすと焦げ始めた。

「よっ……と!!」

それを塞ぎ止めたのは萃香だ。疎密を大きく傾けた空間の一点に、吹き荒れる呪瘟の黒砂を吸い寄せ、触れぬように収束させる。

ばさりと翼を揺らし、文が感心したように言う。

「……吐き出すのは楼台だけではないということですね」

「こんなに物騒な代物なのか、こいつは!?」

箒をジグザグに揺らし、回避行動をとる魔理沙の背中、阿求も緊張に喉を鳴らす。

「……もともとこの海そのものが、蜃の吐き出した領域なわけですから、私達はその腹の中で暴れているようなものかもしれません。もっともあまりにも文献と違いますから、私の知っている以外にも別の幻が混ざっているのかもしれませんが」

「厄介ね……」

眩きながらも霊夢の判断は迅速だった。恐ろしい素早さで導引を結び、懐の符を抜いて大蛤の周囲に投じる。不安定な水と砂の上という立地を感じさせない鋭さで瞬く間に陣が引かれ、脈々と霊力を漲らせた。

——神技「八方龍殺陣」

天を衝くほどの巨大な結界が、蛤の巨体を内側に閉じ込める。

霊夢の切り札スペルのひとつである陣符は、相手を脱出不能の陣の中に閉じ込め、動きを封じて防御の上からでも無関係に体力を削りきる凶悪なものだ。

が、それでも大蛤は動きを止めなかった。着弾に弾ける結界の中、しっかりと殻を閉じ合わせ、砂のなかにじりじりと身をうずめるようにして、攻撃に耐えている。

「おいおい、あれでも駄目なのか!？」

「龍だって言うから少しは効くかと思ったけど……」

陣はなおも猛りを上げていたが、蜃は潰れることもなく、じつとその場に留まり続けていた。

「直接攻撃は効かない、レーザーは反射される、殴ろうにも硬すぎる。……面倒ね」

「あの殻をこじ開けないとどうしようもないですね、これは」

「しかし、どうします？ 力づくでは少々厳しいのでは？」

舞い降りた文も、心なしか硬い表情だ。そんな中、阿求はちよいちよいと魔理沙の袖を引いて、

「魔理沙さん、少々お耳を」

「どうした？」

「ひとつ思い付きました。あれが蛤でもあるならば、手があるかもしれません」

箒の後ろから、阿求は魔理沙に告げる。

「……………」と、いう具合なんですが、どうでしょう?」

「……まあ、できないことはないと思うが」

半信半疑の様子の白黒魔法使いに、阿求はでしたら

是非、と真剣な表情で頷いた。

「折角買って出た助言役がただの足手まといでは、御阿礼の子として格好がつきませんからね」

「……何か手があるの？」

「あー、正直あんまりやりたくないんだが……この際贅沢は言ってられんな。いくぜ！」

魔理沙は箒を操り、矢のように飛び出した。

ほぼ同時に陣の効果が切れ、大蛤の巨体を支えきれずに崩壊する。ずずんと地響きを轟かせ、動き出した蟹はさらに幾つもの攻撃的な幻を吐き出し、殻に浮かぶ紋様を激化させた。

降り注ぐ氷柱、波打ち暴れる肉食魚の群れを避けながら、その分厚い貝殻めがけ、魔理沙はポケットから小瓶を取り出し、中身を空にばらまいた。

「――折角のコレクション、ふいにしたお代はたっぷり取らせてもらうぜ！」

ぱあ、と空に光が満ちる。カラフルな色合いの星々が飛び回り、蟹の殻へと降り注ぐ。

――魔符「スターダストレヴァリエ・改」

それは、星に見立てた弾幕を撒き、相手の移動を封じて押し包む魔理沙の得意スベルのひとつだ。広範囲に拡散するスベルの回避は困難だが、反面火力にはやや欠ける。一見、蟹の巨軀には向かないかと思われた。

ただし、今回触媒にしたのは普段から彼女が常備している、苔や香草を煮詰めて作った砂糖菓子^{スターダスト}の星屑ではなく、さつき浜辺で拾ったばかりのヒトデだ。

二枚貝の天敵である星魚達は、その可愛らしい外見とは裏腹の獰猛さで、吐きだされる蟹気楼をもものともせずに巨貝に喰らいついてゆく。

輝き飛ぶ海星が分厚い貝殻を打ち抜くたび、蟹は悶えるように身を震わせる。

「効いてる!？」

「今だ！」

——鬼符「大江山悉皆殺し」

ひるんだ大蛤の隙を見逃す事もなく、萃香は両の腕でその巨大を抱え上げた。力任せに緩んだ貝の蝶番を掴み、二度三度と地面へ叩き付ける。砂浜が揺れ軋み、水平線の向こうまで衝撃と轟音を轟かせる。

疎密を操る鬼の力が爆音と共に焔火を撒き上げ、緩んだ貝殻が大きくこじ開けられる。

露になった大蛤の貝殻の内側、生々しい内臓の間に、虹色に輝き、陽炎のように揺らめく一点が覗く。

「あれです!」

阿求が指差した先——大蛤の腹の中に輝く中心核へ。魔理沙の閃光、文の竜巻、萃香の鎖が立て続けに飛び、着弾の爆音を撒き散らす。そして——

——宝具「陰陽鬼神玉」

霊夢の手のひらから放たれた陰陽玉が最後の一押し

となった。青白い輝きと共に巨大化した宝具は、圧倒的な質量と破壊を撒き散らしながら突き進み、巨貝を分厚い殻ごと押し潰す。

海を叩き割る爆音と共に、大蛤はゆっくりとその姿を乱し、ずずんと水柱を上げて倒れ込む。

そして——

ざわざわと引き始めた海の真ん中に、一抱えほどもある二枚貝がぶかりと浮かび上がる。

海を呼び寄せた妖貝、蜃は退治され、ようやく長太の大蛤が本性を現したのだ。

「……なあ霊夢、これどうするんだ?」

「そうね……」

魔理沙の問いに、霊夢は腕組みをし——やがて結論を述べた。



神社を取り囲んでいた幻が晴れ、海がすっかり消え

る頃には既に昼を回っていた。

いつもの光景を取り戻したちゃぶ台の上には湯気を立てる暖かな椀が並び、隣には採りたての海老や魚で作った散らし寿司も並んでいる。

腰を下ろした霊夢は、目を閉じて手を合わせた。

「……いただきます」

「いただきます」

「いや待て」

文、萃香、阿求と人妖の声が唱和する中、魔理沙は力の限り突っ込んでいた。しかし当の霊夢は怪訝な顔を見せる。

「？」

「だからなんでそこで不思議そうな顔してんだお前は!? 私、なんかおかしいこと言ってるか？」

お椀の中身を指さして叫ぶ魔理沙。砂出した蛤を昆布、酒と一緒に水から火にかけ、醤油で味を調えた吸いものだ。

良い香りを漂わせる椀の出汁の中には、小さく切り

分けた大蛤の身が浮かんでいる。

「妖怪喰うなよ!?」

「食べるわよ蛤なんだから」

さっきまで境内で暴れていた妖怪だというのに、霊夢はまるで躊躇がない。

「ちょうど上巳の節句でしょ。蛤はつきものじゃない」

「いや、だからな……?」

困ったように他の面々の顔を見回す魔理沙だったが、文や萃香は言うに及ばず、阿求までもきよんとした顔で魔理沙を見、食べないんですか? と聞いてくる始末。

雛祭りのご馳走に舌鼓を打つ一同の中、魔理沙は自分の常識に困惑を覚えつつも痛む頭を押さえる。

「いくら雛祭りだからって、ほかにあるだろ、せめて」

「食べないと無くなるわよ?」

ぱくぱくと蛤の身を口に乗ぶ霊夢を横目で見、魔理沙は諦めと共にお椀を傾ける。

「……やつばお前は本当に巫女なのか疑問だぜ」

……腹立たしいことに、幻を吐く蛤は、大層美味しかった。



所狭しと雑多な品の並ぶ店内にも、わずかに陽気が差し込むこの季節。店の裏手には蕾を膨らませた桜が日、一日と春を刻んでいる。

魔法の森の外れにある古道具屋、香霖堂はいつものように閑散としていた。

そんな店の惨状を気にするでもなく、店主の森近霖之助は店の奥に陣取り、いつものように手に入れた品の検分をしていた。

「……………」

眼鏡の奥で真剣に品を見定めていた霖之助が、ふと鼻を鳴らす。いつのまにか、店内を満たすマルベリーの香り。

妖艶な姿の少女が、畳んだ日傘を手に見現れていた。

「今日こんにちわ和」

「いらつしやい」

来客にも構わず、素っ気ない挨拶だけで顔も上げようともしない店主の側へ、境界の大妖、八雲紫は音もなく歩み寄る。

「あら。螺鈿の幻燈？ 珍しい物をお持ちですわね」
カウンターの上有にあるのは小型の洋灯ランプだった。簡素ながら工夫を凝らした細工で、薄緑の蠟を立てた燭台の周りを、虹色の反射板が何枚も覆っている。

「蜃脂しんあぶらの幻燈なんて、扱あつかう細工師も途絶えて久しいのですけれどね」

「知しっているのかい？」

くすくすすと微笑み、紫は幻燈を覗きこんだ。

「『其の脂ろう、蠟ろうに和あして燭しよくに作る。凡そ百歩ひゃくに香におふ。烟けむりの中にも亦また、樓閣ろうかくの形有り』。蜃の脂を練り込んだ蠟燭は、また同じように蜃氣楼を映すのですわ」

「……文字通りの幻燈という訳か」

霖之助は抽斗を開け、燐寸マッチを取り出すと蜃脂の蠟燭

に火を灯した。

たちまち周囲には馥郁^{ふくいく}とした香りが漂い、ぼんやりと虹色の楼閣が浮かび上がる。紫が手袋の指先で反射板を弄ると、その光景はたちまち波の揺れ動く海岸へと変化した。

「蟹の貝殻を使って光を曲げ、幻の姿を変える——人間というのは本当に面白いことを考えるのですね」

さながら幻鏡。そう呟いて、紫は楽しそうに次々と幻を操作してゆく。そのたびに浮かび上がる幻像が形を歪め、降りしきる雨や極彩色の大森林、異邦の宮殿へと姿を変えてゆく。

懸案の使い方が判ったところで、霖之助はようやく顔を上げた。椅子に背中を預け、紫に向き直る。

「……さて、折角の来店と解説に感謝をしたいところだけれど。冷やかしてないのならばね」

「あら。貴方に逢いに来たとは思ってくださらないの？」

「八雲の大妖と商売抜きで付き合う気にはなれないね」

「つれないお方ですのね。」

……では、本題と参りましょうかしら」

広げた扇で口元を隠し、紫はついと霖之介から離れる。

その手にはいつの間にか紙束が握られていた。紫の手にあるものが何なのかに気付き、霖之助は視線を陰しくする。

「興味深く拝見させていただきましたけれど、随分と個性的な見解ですわね？」

「……何時の間に読んだんだ」

霖之助はいつか自分の本を出そうと、暇を見てはあれこれと文をしたためている。しかし、まだ彼は誰にもその事を話したことはなかった。紫はその原稿を握っているのである。

「正月、蛇と雉^{から}と交みて卵を生じ、雷に遇ひて、即ち土に入ること數丈、蛇の形と爲り、二三百^{すなわ}年を経れば、乃ち能く昇騰^{すなわ}す。卵、土に入らざれば、但だ雉と爲るのみ」。

土の下で蛟は龍へと育ち、いずれ天へと昇るのです。化石とは名の無き神代の石である——というのは強^{あなが}ち的外れな推論でもありませんのよ。蛤も龍と同じように成長と共に名前を変えるものですし、貝のある場所^所は海である、という見立てまで含めてね」

「……君は、あの大蛤が幻想郷に現れる龍だったのだと言いたいのかい」

声音を硬くする霖之助に、紫はばちん、と扇を閉じた。

「ご明察。夢や想念は幻想の糧ですもの。貴方はそれを語り、文字にして形と残した。それが土の下の龍を生んだのです。もつとも、崖崩れは予想外でしたけれど」

ゆらりと幻燈が輝きを変え、果ての無い荒野を映し出した。

八雲紫の笑みに、霖之助は幾分表情を硬くする。紫の言っていることが正しいなら、彼女は龍になりそびれた失敗作を、少女達に始末させたということに他な

らない。

「……妖怪の賢者たる大妖と云えど、そんなことが許されるものなのか？ ……いや、それよりもっと大事なことがあるな。あの蜃を作ったのは僕だとしても？」
立ち上がる霖之介に、紫はさらに笑みを重ねる。逢瀬を愉しむ恋人のように。

「うふふ。そんなに怖い顔をなさらないでくださいな。ですから、私も見立てをし返したまでですわ。貴方のこの本と同じようにね」

形を持たぬ蜃気楼は、幻であるがゆえに定まった名を持たず、様々な呼ばれ方をする。長太の他にも蓬萊島や竜宮、狐橋。そして、ある地方ではこれを浜遊びとも呼ぶ。

また、古く三月三日は、乙女が浜辺に下りて潮干狩りを楽しむ日とされていた。上巳の節句——雛祭り^{ひなまつり}と蛤の関連性は、それに遡るのである。

「ね？ 蛤の化け物を退治するには丁度いいでしょう？」

「……………」

龍を蛤と偽り、さらにそれを潮干狩りに見立てることで、大元の存在と関係のないものとして穏便に処分する。

そんな芸当ができるのは、物事の境界を操る八雲紫ならではの芸当だろう。

「……龍の出現すら、君の自由裁量ということかい」

「そんな大それたことは申しませんわ。磯の鮑の片思い。逢う片貝を探して幾年——です」

蟹気楼が店内を揺れる中、立ち尽くす霖之介に紫はもう一度くすくすと微笑んで、卓上の幻燈を手を取った。

蠟燭の灯が消え、土道具屋は元のかたちを取り戻す。

「こちらは頂いて行きますわ。お代は今回の種明かし」
すう、と背後に開いた空隙の中に、するりと身を滑り込ませ。

「それでは御機嫌よう」

現れた時と同じ唐突さで、隙間妖怪は姿を消してし

まう。一人取り残された霖之介は、しばし佇んでから、ゆっくりと椅子に腰を下ろした。

「全ては蟹の見る夢、とでも？ 恐ろしい話だな」
はらりと——どこからか紛れ込んだ、桜の花片の一枚が、店主の手元に対価とばかりに舞い降りた。



注意一秒、怪我一生。……何事も不注意はとんでもない事故を引き起こすものだ。

その日の私もそうだった。期末も押し迫った3月、時間ぎりぎりまで推敲した課題をようやく提出し終えてすっかり燃え尽きた私は、身体が必要とする砂糖たっぷりのエスプレッソを口にしつつ、カフェで拳を握り力説する連子の言葉を聞くとともにしに聞き流していた。

「だからね!? 女の子のお祭りをただ漫然と過ごすなんて、乙女としてどうかと思うのよ!」

「……そうね」

「たとえ科学世紀を生きる少女としても、大事にしなくちゃいけないものってあると思わない？」

「……そうかもね」

「そうよね！ メリーもそう思うわね！　じゃあ今週末の活動は『よし乃』で天然素材の懷石フルコースで決まりね！」

「……………はい？」

後悔したところで遅い。かくして蓮子に引っ張られてやって来たのは、都心からも随分離れた高級料亭。どう見ても大学生二人が連れ立って入るには場違いな雰囲気のお座敷に通されて、私は適当に頷いていた一週間前の自分を思い切りしかり飛ばしてやりたい気分一杯だった。

「そうよね……こうなるのよね」

「ん？　どうしたのメリー。この世の終わりみたいな顔して」

蓮子は実にご機嫌な様子。今日のお料理をしたため

た一覽を眺めてきゃー、とテンションを上げている。一方で私はこの1時間のためにいったいどれだけの金額が泡と消えてしまおうかに思いを馳せていた。

「週末には春物の服、見に行こうと思ってたのに……」「いいじゃないの。宵越しの銭は持たないのが粹つてものよ」

そう言えば蓮子は東京の出身なのだった。……もともと、商売で上方の人間に及ばないことを悔しがった江戸の商人の負け惜しみだったという話らしいけど。試験で失敗したからと言って、やけ食いに私まで巻き込むのは自重してほしいと思う。

恨みがましい視線を向ける私の向こうで、蓮子は感謝しなさいよとばかりに控えめな胸を張って、「一週間前になってから急に予約入れてもらうの大変だったのよ？　いまだき天然もののごはん扱ってるお店なんて、ほとんど無いんだから」

自然食品よりも安価で高栄養、おまけに美味という合成品が溢れているなかで、あえて天然ものを口にす

るということにどれだけ意味があるのかは難しいところだ。

しかし世の殆どのものが合成品で占められるこの科学世紀の時代、天然ものというのはある種の希少価値、ステータスでもある。

ここ『よし乃』は京都でも珍しく、そうした要求に応えるための料亭なのである。

「蓮子はもつと合理的なほうが好きだと思ってたけど」「合理的よ。ちゃんと栄養になるもの」

でもお高いんでしょう？ と私が訳の分からない現実逃避に浸っている間にも、お膳が運ばれてくる。

雛祭りをモチーフにしたお昼の食事——ディナーでないのは予算の都合上だ——を前に、そつと手を合わせ、まずはお椀に手を付ける。蓋を開ければ溢れだすのは季節感あふれる出汁の香り。蛤のお吸い物だった。これ一杯でいくらするんだらうとみみっちいことを考えつつも、勿体ない気分ですつと口を付ける。

「……美味しい」

「ね？」

思わず素直にそう口にしていた。

口の中に広がる潮の香り。合成品とはわずかに違う風味は、どこか遠くの海の味だろうか。

落ち着いてもう一口、お椀に口を付ける。悔しいけれど、確かに蓮子のお勧めだけあって（そして高いだけあって）味わたたことのない不思議な風味があった。気付けば私は何度も、お吸い物を口に運んでいる。

「……ふふ。メリーが気に入ってくれて何よりよ。」

蛤って面白いのよね。もともと雛祭りに喜ばれたのは、二つの貝殻が、対になったもう片方以外と噛み合うことがないからって理由で、貞節、貞淑の象徴とされてたからなんだけど」

「ああ、女の子の貝合わせね」

何気なく口にした瞬間、蓮子が唐突に口の中のものぶーっと吐きだした。そのままテーブルに突っ伏し、げぼげぼとむせる。「……ちよつと、汚いわよ蓮子」

「……っ、な、な、ななな何言ってるのメリーっ、こ

んな昼間っからっ!! お酒も入ってないのにっ!!」
 眉を潜める私に、何故か真っ赤になつて詰めよつてくる蓮子。私は意味が分からずに瞬きをするばかり。
 「何って、そういう遊びでしょう? 絵を描いた貝殻をたくさん伏せて、順番にめくつて同じ絵柄の貝を揃えていくっていう……」

その細工などから海外でも評価が高いのだとか。……これまた昨今では、そうした美術品の材料も、多く合成のものであることが多いけれど。

「……ん、え、えっと、まあね、あはは。そうよ、そ、そうだけど……うん、貝覆いとも言わねっ」

咳き込んだせいか、赤くなつた頬を押さえつつ蓮子はなにかもごもごと口ごもる。

「どうしたの?」

「何でもないわよっ」

蓮子はおぼろげと咳払いをして、

「……で、そんな風に貞淑の象徴にされてる蛤^{メレトリックス・ルソリア}だけど、その一方で学名は遊女のゲーム^{メレトリックス・ルソリア}なんて言われてたりす

るの。まあ、この命名も偶然みたいなもので、元々は愛と美の女神^{グレイナ}にちなんだ由来なんだけど——」

なにかを誤魔化すようにあれこれと早口で解説を始めた蓮子は半分聞き流しつつ、私はしばし、春の香りを堪能した。

貝の身を箸に掴んだところで、ふと疑問が浮かぶ。

「そう言えば蓮子、これってどこから持ってきたものなの? 貝なんてもうほとんど絶滅してるじゃない」

「え? ああ。そうよね。正確にはこれは蛤じゃないらしいわ。近縁種の代理品」

メレトリックス・ルソリアはすでに前世紀の終わりには外来種によつて駆逐され、絶滅してしまつてゐるという。ちょうど、琵琶湖の干拓事業の中止を巡つて環境運動と霊的守護の調和があれこれぶつかり合つていた時代だ。

蓮子の語るところによれば、このお吸い物に使われている貝の正体はアークティカ・アイスランディアと呼ばれる種類であるらしい。

なんでも欧州ヨーロッパの北、北極に近いあたりでしか獲れない稀少品だそうで。深い海の底で泥の中に潜り、代謝を極限まで落とし、何百年も生きるといふ種類なのだから。

「これが凄いことに平均して300年から400年くらいは生きるそうよ」

「……そんなもの食べちゃって大丈夫なのかしら」

はたして蟹気楼の主だつて、そこまで生きるものなのかどうか。

個人的には少々どころではなく忌避感があるが、蓮子は気にした様子もなかった。

蛤は春から夏にかけての繁殖期を前に、冬に長い時間栄養を蓄えて美味しくなる。そのため春先に潮干狩りをするのはとても理にかなっているのだそうだ。

「何百年も冷たい海の中で冬を過ごしてるんだから、味もそれに見合ったものつてことよ」

四百年を経て食べる幻の味。そう思うと訳もなく緊張してくる。目を閉じてその年月に思いを馳せてから、

お箸を口に運んだ。じわりと溢れ出す味わいを堪能する。

……と。

「……あら？」

「どうしたの？」

「……ん、っ」

口の中に感じた小さな歯ごたえに、目を閉じて口を開ければ、舌の上からきらきらと輝く小さな丸い珠が転がり出てきた。

「……これ、真珠？」

「みたいね」

掌を覗きこんだ蓮子が目を丸くする。

白く丸い珠は、きらきらと輝く、まるで七色の炎が燃え盛るような虹の色合いを浮かべていた。

「……あ」

その、揺れる幻の炎の中に。

揺れる白波、潮の香り、穏やかな砂浜。

見たこともない遠い東の果ての、青い蒼い海が、眼

の前に広がったような気がした。

(了)

【参考】

苫小牧駒澤大学紀要 2009年3月31日発行第20号

<http://www.t.komazawa.ac.jp/university/bulletin/pdf/kiyou20.pdf>

心朽窩旧館 やぶちゃんの電子テキスト集

小説・戯曲・評論・随筆・短歌篇 水族の部(「和漢三才図會」)

<http://homepage2.nifty.com/onibi/textsyouseitu.htm>

アラビアン・ダーク・ファンタジーRPG

ゲヘナ・アナスタシス

風吹けど道具屋の損

初出: 折葉坂三番地 blog (2009/12/23)

続編というか後日談というか。ナズーリンには割と自由で、行動範囲の広いイメージがあり、比較的誰とも親しいという感じで考えておりました。結果、求聞口授の掘っ立て小屋の一人暮らし設定はそんなに違和感なく飲み込めた記憶があります。

チルノの「ナズりん」呼びは結構お気に入り。

メトロリックス・ルソリア

初出: 博麗神社例大祭 8 (2011/5/8)

忘れもしない、2011/3/13 の博麗神社例大祭 8……に出そうとしていた作品。本当に幻想入りにならなくてよかったと会場で思ったのが感慨深いです。最初、蜃こと長太の大蛤が三月精に登場してるのをすっかり忘れており、あとから慌ててストーリーを修正した覚えがあります。

作中の化け蛤が使っている妙なスペルカードは、ゲヘナ・アナスタシスというTRPGに登場する魔法の一つ。特殊な炎をくべたランタンから、実体のある蜃気楼を呼び出す幻鏡術というもので、妙に強いのはこのゲームのルールブックが絶版になってしまった悲しみをぶち込んだという側面もあります。

400年も生きたというアイスランドガイについては、当時良い文献が見つからず、半分都市伝説かなと思っていたんですが後になって詳細な論文を発見し驚きました。生命の神秘。

つづのなづい

ひゅうひゅうと、風に梢が揺れていた。

暗く立ち込めた雲は、先刻までの晴れ間を飲み込んで、深い灰色で空を塗りつぶしている。若々しい稲を覗かせる水の張られた田は、まるで大きな鏡のように天を睨みつけ、曇天を映し出していた。

濃くなる雨の気配の中、忍び寄る肌寒さに霊夢は背筋を震わせる。

田を四面に切り取る畦道は、人里へ続く細道に交わってさらにその向こうへと伸びている。その先は雨の中灰色の空に霞み、まるで幻想の外へと溶け込んでいくようにも思える。

そんな畦道の縁にしゃがみ込み、水面を覗き込むようにしてひとりたたずむ小さな姿があった。

「……なにやってんの、こんな所で」

「蛙は雨が好きなんだよ」

諏訪子は振り向きもせず、霊夢には背を向けたまま、灰色の水面を見つめている。

「蛙ねえ」

つぶやいた霊夢に答えるかのように、どこからともなく雨を乞う鳴き声が返る。

初めに響くは小さな独唱。続いて応じる二重唱。誘われるように三重唱。

あとは四重五重と、重なるように数を増し、大きく広がってゆく。

まるで、田圃の水面を揺らす波紋のように。蛙の輪唱は、いつしか崩れ落ちそうな曇天の下に、けたたましいほどに響き渡っていた。

「ほら、降ってきた」

わずかに上向いた諏訪子の帽子に、雨滴がぱらりと軽い音を立ててぶつかって跳ねる。

同時に、ぽつ、ぽつ、と散る波紋が美しい水鏡を揺らした。

ひとつひとつ聞き分けられていた雨音は、すぐに連なり、幾重にも重なり、ひとつになる。

「こんなところでぼうつとしてると風邪ひくよ」

「そうね」

降り頻る天霽に視界が煙り、雨霞の向こうへと溶けてゆく。

遠く伸びる畦道も、その向こうで交わる人里へ向かう細道も、曖昧にぼやけて、灰色の空に飲み込まれてゆくようだ。しつとりと湿った空気のなかで、いつしか周囲の風景から、穏やかに色彩が失われてゆく。

梅雨の雨は、色を洗い落とすのだろうか。霊夢はふとそんな事をふと思った。

「……………♪」

そんな雨の中、濡れるままに諏訪子は空を見上げている。

あどけない横顔は雨滴に濡れて、どこか近寄りがたいものを感じさせた。

「……蛙の面に水ね」

「こんなに気持ちいいのにねえ」

「こっちはたまったもんじゃないのよ」

ケロケロと笑い、諏訪子は帽子のひさしに手を添えて、すうと遠くに視線を送る。分厚い雲の重なる重苦しい空は、ひと時も留まらず低く唸る様に渦巻いている。

響く遠雷は、一足ごとに近づく気配を思わせた。

「送り梅雨になるかな」

ぽつり、と呟いた言葉は、すぐに雨霞に溶けて消えた。

「そうして欲しいわ。もう何日もお月様も見えないもの」

「秋になればいくらでも見えるさ」

「それじゃ遅いのよ。……ひよつとして、ここで鳴いてる蛙の親玉を退治すれば、すっきり晴れるのかしらね」

「それは勘弁願いたいなあ」

くす、と肩を震わせて、諏訪子はひょいと飛びのい

た。

とん、とん、と高々と宙を舞い、踊り、向こうの畔道まで跳ねて。どこからか取り出した大きな蓮の葉を傘のように広げて霊夢に向かう。

「昔は月にも蝦蟇が居たもんだけど、いまじゃすっかり兎の天下だ。そんなとこまで忘れられるのは寂しいね」

「イメージが悪いからじゃないの？」

「酷いなあ。飛び跳ねるのはどっちも一緒なのに」

言葉を示すように跳ねた諏訪子は、今度は近くの小さな道祖の上に飛び乗ってみせた。肩に担いだ蓮の葉をくるんと回し、

「ねえ、知ってるかい巫女？ 月の重力は地上の六分の一なんだ。だからいくら地上で跳ねても月までは届かないし、戻れない」

それを言っていたのは紫だっただろうか。霊夢がそれを思い出そうとしたとき、

「……んっ、」

「——ついでに、空を飛ぶ能力の有難みも六分の一つでことだ」

ふと、声がかんでもなく近くで聞こえた。

気付けば、息がかかるほどの眼前に、諏訪子の顔がある。

ぎよろりと見開いた黒い瞳は光を映さず、どんよりと澱んだ闇洋のよう。袖を掴む小さな手のひらは、骨のないぬるぬとした触手のよう。

「ねえ巫女。蛙にはね、」

言葉を失っている霊夢の鼻先で、諏訪子はそつと囁く。すうと開いた幼げな紅い口元は、細く糸を引き、濡れててらてらと光っていた。

「蛙にはね、柳に飛びつけないくらいが丁度いいのさ。枯れた月の海の広さを知るより、狭い重力井戸の底で、見上げた空の深さを知るほうが、ね」

「そんなものかしら」

「そんなもんさ」

ケロケロと笑う諏訪子からは、もう先程までの異様

は窺えない。

酷く五月蠅い蛙の輪唱が響く中、はあ、と吐息をひとつ挟み、霊夢は濡れた袖で口元をぬぐった。

「……そろそろ、本格的に降って来たみたいね。行くわ」

「ん、さよなら」

四方から背中に刺さる幾百幾千の視線を、振り返ることはせず。

霊夢は足早にそこを後にする。強まる風の中、頬にぶつかる温い雨が、やけに鬱陶しく感じられた。



日の入りを待たずして、雨は本降りになった。

辛うじてぼんやりと明かりの残る曇天の下、吹き付ける雨は荒れ狂う嵐のよう。梅雨の終わりを告げるように、降りしきる雨は、雷を伴って森羅を包む。

森の緑を、続く道の土を、健気に伸びる稲を、穏や

かに水を湛える田を、全て塗りつぶしてしまうかのような雨雫が降り注ぐ。

そんな中でも、大きな蓮の葉を傘に。

降りしきる雨を浴びて一人、神はじっと佇んでいた。

叩き付けられる雨音が幾重にも重なり、稲光の引き

裂く鈍色の空は世界の終焉のよう。まるで滝のように

ごうごうと注ぐ雨雫が地面で跳ね、無数の波紋を散ら

していた。もはや天の恵みというよりも、人々を押し

流す災厄であろうか。

そんな中でも、畦道に響く蛙の輪唱は途切れずにいた。

(了)

東方掌編集

【東方掌編】伊吹の酒香

騒がしい秋の宴会は、紅葉狩りなどという名目をすっかり忘れて乱痴気騒ぎ。あちこちで飲めや歌えや脱げ踊れやの大騒ぎ。河童に天狗に鬼に、酒豪でならした山の神まで集まるとなれば、いつもより数倍、酒宴の深みも増そうというものだ。

そんな中、傍らに酔いつぶれた土蜘蛛と橋姫を寝かせながら、抱え込んだ大樽3つのうち2つまでを空にして、星熊勇儀は一人手酌で杯を重ねていた。

そんな彼女に興味を覚えたのは、単に気まぐれのよいうなものだったけれど――宴会の中央で、巫女と一緒に騒いでいるもう一人の鬼の姿を見たからかもしれない。

お近づきのしるしにと振舞われた酒は、当然彼女の好みである鬼用のもので、あまりにも度が強く飲み干すだけでくらくらとしたけれど――やはり彼女は彼女で暇を持て余していたらしく、彼女は快く話に付き合ってくれた。

「んあ、私はこんな風に、酒飲んで気楽に酔っ払って
るが――」

地底の鬼は、一角の突き出した鮮やかな金の髪をがりがりと搔いて、酒精の香り漂う溜息をひとつ。

「あいつはちよいと違うのさ。大江山じゃやれ酒呑の鬼だやれ総大将だのって持て囃されてたが、じっさい素面の時のあいつときたらまあ難儀なもんでね。あの時に迷惑かけたあの、この前余計なこと言ったあの、どうでもいいことで謝って悩んで落ち込んでばかりさ。豪放気取っちゃいるが、鬼の中でも一番の寂しがりだよ。気が回って言やあそうなんだろうけどね。鬼としちゃえらく変わり種さ。」

……こっちに來てからも変わらなかつたねえ。人間

が相手してくれなくなったからって、それが怖くて逃げ出しちまうくらいだからさ」

そう言つて、勇儀は傍らの酒樽から盃にざばりと酒を汲み上げた。

唇の端からそれを溢れさせつつ、ぐいと杯を傾けて、「まあ、正直言えばあいつの首に鎖掛けてでも地底に連れてかなかつたのは、ちよいと後悔してるさ。……言つとくが本心だよ。鬼の言葉を疑うような真似、あんたはしないだろうけどね」

杯の底に残るわずかな事に、はらりと紅葉が落ちる。「だから殊更に、あいつは底抜けに楽しく酔う。嫌なことは全部忘れて、ただただ、童子のように陽気にあるうとする。海千山千の群れの中で、大将張つてる苦

労もあつたんだろうさ。いくら力があつても、心根がなきや付いてくる奴も来なくなるもんだ。見てて辛くはあつたが——といって、あたしにはあの連中を纏めておけるだけの度量はなかつたねえ」

鬼がそう言うのだから、それは真実なのだろう。少

なくとも彼女の中においては。

私のみる限り、目の前の星熊の鬼が伊吹の鬼に劣っているとは思えなかつたけれど、それを口に出すのは無粋というものだろう。

「外の山にいた頃は鬼退治が流行りでね、人間たちはどいつもこいつもこぞつて武勇を誇ろうとしたよ。あたしらは鬼だから、そんな事は先刻承知の上だが——その手段がだまし討ちたあ武門の誉れも堕ちたもんだよ。無敵の四天王も、戦いもせずに討ち取られて——後は散り散りばらばらに追い払われて、あつけなくおしまいだ。あいつは、どうもずっとそれを悔いてたみたいだね。それからさらに彼是とあつて、今に至るわけだけど。まあ、どこほつつき歩いてるのか気になつてはいたけど、相変わらずで少し安心したよ」

結局、あたしもあいつも、どこまでも鬼なんだつてことさ。

そんな、自嘲にも聞こえることを、けれど勇儀は嬉しそうに語つた。

「後にも先にも、あいつが攫おうとした人間は一人くらいしか知らないよ。酒に食い物に、箔付けのための宝に。散々かつぱらいはしたけどねえ。」

……ん？ 鬼がなんで人を攫うのかって？ そりゃあ、一緒に飯食って、一緒に遊んで、一緒に暮らすのに決まってるじゃないか。人がいなきや、鬼は生きていけないんだからねえ」

そう言つて。

勇儀は、博麗の巫女と引つ張り合いをしながらも楽しげに瓢箪を煽る、幼姿の鬼を眺め、そつと目を細めていた。

(了)

【東方掌編】 水底から見る山の頂

「おんや、天狗様？」

にとりが、とろんと酔いの回った顔でこちらに振り向く。そばかすの残る頬はほんのりと紅く染まり、帽子の下で結い上げた蒼碧の髪が、白いうなじに数本張り付いている。

普段はおどおどと人の顔色を窺っては水底に逃げ込もうとするばかりの陰気な娘だが、今日の宴会の席はだいぶん彼女を解放的にさせているらしい。先程までの魔法使いとの語らいが弾んでいたことと無関係ではあるまい。

案の定、私が一献を向けると、彼女は相好を崩して杯を開ける。思いの他良い感触を覚えた私は、そのまま彼女の隣に腰を落ちつけ、話を聞くことにした。

「鬼の話かい？ ……わたしはまだ若造もいいところ

だからね、その頃の御山の事は大して知らないけど」

そう前置きして、にとりは酒で唇を湿らせた。酒精に濡れた口元を手の甲で拭い、細い指で顎を拭う。

どうも、やけに色艶を感じさせる仕草が目につくが、よくよく考えてみれば河童も天狗に負けず劣らずの好色な妖怪だ。普段の色気のない姿のほうが可笑しいのかもしれない。

「そりや色々あるさ。人づてにさんざん聞かされたし、怖がらされたよ。あいつらがいかに傍若無人で、傍迷惑だったか」

よりによって『あいつら』呼ばわりと来た。高々と矜持を誇る事を旨とする天狗ですら、慎重に言葉を選ばざるを得ない妖怪の山の旧支配者を、にとりは酒臭い息を交えてそう評する。余程今ここで、同席している鬼達に喧伝してやるべきかと思ったものの、滅多にない機会と一時の爽快感を天秤にかけて、私は辛うじて自制する。

あとで聞かせてやることにしようと思心に決めつつ、

いつもの3割増しで滑らかな彼女の弁舌に耳を傾けた。「わたしらの集落はその頃、今よりもだいぶ河上にあってね。土蜘蛛の連中と揉めたりもしてたもんだけど……まあ、諍いが起これば大体、鬼がすつ飛んでくるわけさ。それで、どっちもまとめてふつ飛ばされちまう。性質の悪いったらなかつたらしいよ。……なにしろ、わたしたちにとつてはどっちが河の領分を治めるかという、切実で正当性のある争いが、鬼が出てきた途端に酒の喧嘩になっちまうんだからね。憤るなつて方が無理さ」

河の水質汚染を巡る土蜘蛛と河童の確執は聞いたことがあるが、そこに鬼が絡んでいたのは初耳だった。

「河童の中にはどうにかしてうまいこと鬼に取り入ろうなんて考えてたやつらもいたみたいだ。けど、当の鬼がそんなことに欠片も興味がないと来たもんだから始末に悪い。長老たちが雁首そろえて、里じゅうの酒やら肴やらをかき集めて献上しても、その場でぺろりと平らげてそのままおしまい、便宜を図ろうなんてこ

とは微塵も考えちゃくれなかつたらしいから、非道い話さ。

……まあ、だからって土蜘蛛のほうに利があつたつて訳でもなくてね。あいつらも度々、血筋じゃ自分達のほうが鬼に近しいつて、まあそんなことを言い張つてたらしいけど——鬼があいつらに肩入れしたことも一度もなかつたんだ」

ふう、と大きく息を吐いて、にとりは抱えた膝の上に顔を乗せた。

「だからね、わたしには正直、鬼の事はよく分からないう。怖いし、迷惑なのは確かだけどねえ。……でも、爺様や頭領の話を聞くにつけ、その頃の御山も決して悪くはなかつたつて思うのさ。無理矢理に従えられてたわけでなし、鼻肩されてた奴がいるわけでもない。ただ、山のとっぺんに鬼の親分が居たつてだけで、それ以外は皆、似たようなもんだつたんだ」

その言い方は、いまの御山が生き辛い場所であると暗に言っているようなものなのだが、にとりに気付い

た様子はない。

実際その通りであるので、あえて指摘はせずに置いた。

彼女の語る鬼の姿は、天狗の知るそれとはかなり異なる。天狗にとつて鬼は、絶対的な力の象徴であり、自由を奪う傲慢で狭量な支配者だった。駆け引きを好まず、曖昧を認めず、力による単純な解決を好む鬼の性質に、天魔様を含む大天狗達が煮え湯を飲まされたことは両手の指にも余るという。

「……え？ 鬼の事をどう思ってたかつて？ そりゃ、……まあ、正直、あんまり歓迎は出来ないかなあ。帰つてきて欲しいなんて言うつもりもないけど、窮屈になるのも御免だしね。

でも、上手くやっててくれればいいなとは思つたよ。……どんな相手だって、他人の不幸を喜ぶのはおかしいだろう？」

聞いてみれば、その答えはなんともまっすぐなものだ。河童の社会も天狗に負けず劣らずに歪んだもので

あるのは間違いないはずだが、この娘はその主流からは外れているらしい。これで次期頭領の候補であるというのだから、いづれ河童の里でもひと騒動起こることは想像に難くない。

——否、そうでなければそもそも外界と接点を持つこともないのだから、似た者同士なのも仕方のないことか。

「ところで天狗様、なんでまた急にそんな事を？」

さて、どう答えたものか——しばし思案し、答えるのが面倒臭くなつた私は、大声で彼女の居場所を鬼達に教えることにした。

(了)

【東方掌編】無意識／無為式

「……ああ、なにもかもだいなしだ。」



わたしが思うところ、つまりひとの意識というものは（これはひとではなくて妖怪であったり妖精であったりするけれど、総括して生きていて動くものをそう定義するならば）、誰かに観測されることではじめてなりたつものだ。

ずっとむかし、どこかの偉い妖怪の賢者さまは、お風呂だかの最中にふと思いついたという。

『我思う、ゆえに我在り。』

その賢者さまはとにかく疑りぶかいひとで、身の回

りにあることがなにひとつ信じることができないほどだった。だから何もかも疑って、疑って、疑り抜いて、結局たどりついた先が、こうしてものを疑っている自分自身だった。

『そうだ、こうして何もかもを疑う私だけは、疑えないのだ！』

世界のすべてを疑っている自分の実在を疑ってしまった、そこで疑っているはずの自分自身は、いったいどこの誰になるのか？ そうして行きついた矛盾の中に、彼女は真理を見出した。——われ思う、ゆえにわれあり。

まあ、それを思いついた時この賢者さまはもうとつくに死んでいただけだ。

だからこの思いつきは、妖怪たちの間ではまったくはやらなかった。

そのうち人間の中にも永い間を掛けてこんなことを思いついたひとができて、たぶんその時は、妖怪たちはみんなわらっていただろう。なんて愚かしいきも

のだ。いまさらこんな当たり前の事しか思いつけないのか、なんて。

でも、わたしには異論がある。異論——つまり、これは違う、っていいたいってこと。

昔からあったその気持ちは、胸にあった三つめの眼を閉じた時に、確信に変わった。

さとり妖怪がもつこの胸の眼は、ひとの心を読むための器官だけれど、それを閉ざしてみても、わたしは逆にひとの無意識を操る方法を身につけた。

そうやって、お姉ちゃんやお隣たちや、ほかの地底の妖怪たちの意識の外側に立ってみれば、わたしはどこにもいないのと同じだった。誰もわたしを見てくれなければ、そこにわたしはいないのとまるでおなじことだった。

『彼思う、ゆえに我在り。』

つまりは、そういうこと。

ものを思うわたしなんて、いようがいまいが、誰かから見つけてもらえなければいけないのと同じこと。こ

れはべつにわたしに限ったことじゃない。ほかの妖怪だって誰にも気づかれなければ同じだし、そもそも人嫌いぶっているお姉ちゃんも、心を読む相手がそばに誰もいなかったら、どうやって“我在っ”ていられるんだろう？

そもそもからして、ものを思う自分なんてあいまいなものの実在を信じてしまうなんて、あんなに疑り深かった賢者さまは、ようするに自分がいなくなるのが怖かっただけなんじゃないだろうか？ だったら——ああ、なんて晴れやかな気分。わたしはそんな悩みからも解放されたことになる。

そうだ。もうわたしは、ひとの心を読まなくなたっていいんだ！

かくしてさとり妖怪ではないんだかよくわからないものになったわたしは、ひよっとしたらもうどこにもいないのかもしれない。幽霊だって亡霊だってちゃんといるのに、わたしはそれすらもあいまいだ。わた

しの力はひとの無意識も操るし、自分の無意識も操っている。だから、だれもわたしには気付かずに、なにもかも無為式だ。

お姉ちゃんはその悲しんでいるみたいだけれど、困ったものだ。ほんとうは少し感謝してほしいくらい。

だって、考えてみて？

ひとの心を読んでしまうさとり妖怪が、あろうことがきょうだいで、ふたり並んで立っていたらどうなるか。

『××思う、ゆえに××あり。』

ねえ。これはだれ？ これは何？ 思うのは誰？

あるのは誰？ ひとの心を読むだけが存在意義の覚りがふたりで、きょうだいなんて。お互いにお互いの心を読んでしまつて、もうそこにいるのは、思うのは、わたしなのか、お姉ちゃんなのか、我なのか彼なのか、わからないじゃない？

——だから、ばいばい、だいきらいなお姉ちゃん。

ああ。

ほんとうに、なにもかもおしまいだ！

【東方掌編】涙のように洒う雨

第一回、博麗神社大七夕祭りなどと勢い込んだはいものの、陽が落ちるなり始まった突然の夕立ちは止むことなく続き、神社に集った人妖は仕方なしにそのまま屋内に場所を移しての宴会を始めていた。

「一時はどうなる事かと思ったが、なんてことはなかったぜ！」

というのが主催者の言。そもそもほとんどの連中が笹飾りを目当てにしていなかったというのが本当のところだろう。結局いつもの調子で宴会となったそこで、騒がしくも賑やかに声が響く。

中でも今日の目玉と言えは。

「ねえ魔理沙、もうこっち無くなっちゃったわよ。もつと頂戴」

「あ、こっちもお願いねー」

次々とかかるコールに、魔理沙はすっかり疲れた様子で、空になったポーチをひっくり返してみせた。

「お前らなあ……んな簡単に言うなよ。これひと瓶作るのにどんだけ手間かかってると思ってるんだ」

「それは、あれだけ私の本を好き勝手持ち出しておいで、未だに初歩の霊薬精製も理解できていないということでもいいのかしら」

「むぐっ……」

本から顔も上げずに言うパチュリーに、魔理沙は言葉を取り出した。しゅしゅスカートのポケットから予備の瓶を取り出した。赤青黄橙緑紫。一見、金平糖にも見えるそれは、その実どの角度から見ても綺麗な五芒星を描いている粒ぞろいの結晶だ。

敏を抱えたまま名残惜しそうな顔をしている魔理沙に、レミリアが意地の悪い笑いを浮かべる。

「わざわざ大見栄切ってこれだけ集めたんだ。雨天時の余興ぐらい悠々と買っただけ集めたんだ。雨天時者というものじゃないかしら」

「あー、もうわかったっての！！　　ったく、どいつもこいつも……」

魔理沙は諦めて、蠟で蓋をした瓶を開けた。

同時、溢れるようにこぼれだした光が広間を満たした。天井にふわりと浮かびあがり、ゆるゆると流れ出した色とりどりの星が、明かりを落とした室内を埋め尽くしてゆく。

「……あむ。……ねえ、もう少し薄荷の効いたのはないの？」

「そうね、天の河（ミルキーウェイ）なのだから、生乳の配合を多めにするといいわね」

「だからな、人のスペルを菓子扱いするなつてのに」
 各々が好き勝手なことを言いながら、近くに舞う星々をつまんで口には運んでゆく。まさしく銀河を着て酒を呑むという、妙なことになっていた。

一年に一度の逢瀬をふいにした二人の悲嘆をよそに、なんとも賑々しいものだ。

「と言うよりか、どうして食べられるのかしらね、こ

れ」

「そりゃあ決まってるだろ。女の子は砂糖菓子と香辛料と、素敵なものいっぱいできてるんだぜ」

つぶやいたアリスに、魔理沙は振り向いてそう答えるのだった。

【東方掌編】双七の空に舞う

夕刻。わずかに藍の混じりだした梅雨晴れの空に、白い蒸気の雲を引いて。

雨露に濡れる梢を、減速の余波ではらはらと揺らし、大荷物を抱えた魔理沙は裏庭に着陸する。

「よう、相変わらず不景気な顔だな霊夢」

「うるさいのが日参してなきやもう少し好意的になれるとおもうけどね」

「まったくだぜ。紫のやつも少しは自重すりゃいいのにな」

悪びれる様子もなく、魔理沙は箒をひよいと物干しに立てかける。

「……で、今日はどこでなにを搔っ剥いできたのかしら」

「んにゃ、こいつだ」

魔理沙は背中に担いだ竹を示し、

「ほれ、もうすぐ七夕だろう？ 今年はずっと盛大にやろうと思ってるな。そしたら具合悪く兎と出くわして、まとめて吹っ飛ばしたらまあ大騒ぎだったぜ。筍じゃないんだからあんなに目くらま立てんでもなあ。霊夢もそう思うだろ？」

「そういう経緯の上で開催場所がウチってことに、少しは疑問とか断りはないわけ？」

「連の朝露でも集めて売りゃあ金になるかもだぜ？」

「そうね、立ってるなら境内のあのへんがいいかしら。台木とか持つてきてるの？」

「……霊夢のそういう実に現金なところはなんというかいろいろ評価に値するぜ。見習いたくはこれっぽっちもないけどな」

境内の端、軽く開けた区画に、借り組みした台木に大きな竹を立てかける。さん、と揺れる青々しい彩りは、傾きかけた陽の照る夏の空によく映えた。

「ちよっとそっち押さえててくれる？」

「応」

「……よつと。こんなもんね」

「うし。上出来だな。あとは適当に人集めてくりやい
いだろ」

汗をぬぐい、爽やかな笑顔で得意げに胸を張る魔理
沙。

「ところで魔理沙」

「なんだ？」

「……気づいてるかどうか知らないけど、短冊飾るの
は竹じゃなくて笹のほうよ」

「……………もちろんだぜ？」

振り仰いだ先で、さわりと竹の葉が音を立てていた。

(了)

【東方掌編】雨宿り

水位を増した河は、ざあ、と白い飛沫に濁った水面を覗かせ、普段とは違う顔を覗かせていた。

苔の積もった大樹の根元、ぽかりと空いた洞の前で、じわりと風景から溶け出す人影ひとつ。ねぐらの入り口に現れた河城にとりは、大きく溜息を付いて肩を落とす。

「はあーあ、失敗は成功の母って言うけど、これじゃあ大岡裁きも真つ青だねえ。いつそ傘でも差そうかね」
目下の課題であるところの、光学迷彩の改良は果々しくない。ばん、と濡れた雨合羽状の光学迷彩スーツを広げ、ぼやきと共に頭を掻くにとり。

「……河童が傘差すとはこれいかに、だ。……おや？」

「お邪魔しますよ」

「こりゃ珍しい。どうしたんだい天狗様？」

先客の気配を感じてにとりが顔を上げれば、そこには、窓辺に腰掛けてひらひらと手を振る文の姿。哨戒天狗とは三日と開けずに顔を合わせているが、彼女がやってくるのはそう多くあることではない。

「急な雨に振られましたもので、ちよつと雨宿りを。あ、珈琲頂いてます」

「……そのままずっと飛んでったほうが濡れなかったんじゃないかね？」

ちやつかりと客用のカップまで確保している、幻想郷最速のブン屋に少々呆れつつも、そのことは口に出さずにおく。

「大雨じゃありませんが、振られ続けは気持ちのいいものじゃないですよ。羽根も湿るし飛び辛いし。まあ、たまには息抜きも必要ですね。……にとりさんはまた新しい発明ですか？」

「ああ、ちよつと改良をね。でもまあこれが上手く行きやなくてね」

水陸空対応の河童自慢の一品、光学迷彩ではあるが、

雨の中ではその隠密性は著しく落ちてしまう。いくら背景を透過させても、降り注ぐ小雨の雫一滴一滴が弾けるのを再現するのは非常に困難なのだ。

「いやはや、雨ばかりで気が滅入るね、静かなのはありがたいけどさ」

文化帖のページを捲り、滲むインクに眉をしかめていた文は、その一言に顔を上げる。

「ほほう、雨はお嫌いなんですか、にとりさん？」

「勘違いしないでくれ天狗様。そもそも河童は水辺にいるもんであってだね。大体が水の中なら雨に濡れりやしないさ。曇っててくれる分には、それなりに快適で有難いけど」

「……成る程」

ぼん、と手を叩いて、なにやら納得する文だった。

(了)

【東方掌編】紫陽花の君を想う

「……ちよっと、諏訪子」

「どーせ今日は誰も来ないよ。早苗も麓にお呼ばれだし」

「馴染んだようで何よりだね。時間を考えな」

「ころんと神奈子の膝上に頭を乗せ、諏訪子は口を尖らせる。

「——いいじゃない。たまにはふたりっきりで水入らずもさ」

「雨なら嫌になるくらい降ってるじゃないか」

「だから、だろう？」

諏訪子は神奈子の髪を押さえるように両の手を伸ばす。

息がかかるほど近くまで引き寄せた神奈子の顎先に、ちよん、と額を触れさせて。

「綱手が居ないうちが逢引のチャンスじゃないのかい？」

「あのねえ……」

額を覆って呻く神奈子に、諏訪子はくすくすと笑った。

「……ん。諏訪子、それ」

「ああ、綺麗だったから、ちよっとね」

胸元に飾られた紫陽花の枝をつつき、諏訪子はくるん、と身体を回した。いつの間にか、小さな躰はぴたりと寄り添った格好になって、視線も神奈子の目の前に。

「怖いもんだ。私を殺す気かい」

「神様がこれくらいで死んじゃ困るよ」

「青い紫陽花は毒さ。桜と一緒にでね、根元にゃ死体が埋まってることもある」

「だからこんなにも素敵に咲くんだよ、神奈子？」

耳元にこぼれる小さな囁きに、もう一度神奈子は苦笑した。

「初耳だね、いまだに恨んでるなんて」

「そりゃそうさ、簡単に弱みなんか見せるもんか」

「……違うないね」

二柱の神様は、そう言つて笑い、そつと手を握り合
わせた。

紫陽花の 八重咲く如く 弥つ代にを
いませ 吾が背子 見つつ 偲はむ (橘諸兄)

(了)

【東方掌編】蛙の輪唱

縁側の先で篠付く雨音はさあさと響き、雨霞は遠い景色を茫洋と灰靄の奥へと飲み込んでいるようだった。

「……よく降るわね」

「そりゃあ梅雨だからな。降らないほうが困る」

頼杖の先、ちゃぶ台に突っ伏し湿気た煎餅を齧る魔理沙。

「こう雨ばかりだとやる事がないわ」

「なんだ、晴れてりやすることあるみたいな言い草だな？」

「そりゃね。縁側でお茶飲んだり境内の掃除、いろいろあるわ」

「聞いていると実に暇そうなんだが」

「気分の問題よ」

湿気た煎餅をぱり、と齧り、お茶を啜る。

魔理沙が神社に入り浸りだしてもう一週間近くにもなるだろうか。長雨を理由にして一向に帰る様子のない彼女を、そろそろ迫い立てる気力もなくなってきた。

「長雨は魔女を育てるってな。別段悪い事ばかりじゃないぜ」

「そうなの？」

「今考えたんだけどな」

空の湯飲みに口をつけたまま、ごろんと畳に仰向けになって魔理沙は言う。

「……ま、確かに暇だ。退屈で餓が生えそうだぜ」

「生えるならせめて茸にして欲しいもんね」吐息とともに、障子の向こうに目をやる。

開け放った雨戸の先は、わずかな風もなく細雨に湿った空気。穏やかに色彩の失われた裏庭で、重なり響く蛙の声。

どこかで鳴いている蛙の親玉を退治すれば、すつき

り晴れるのだろうか、そんなことを思った。
「……よく降るな」

「梅雨だもの。降らないほうが困るのよ」
雨音は鳴りやまず、送り梅雨は、まだ遠い。

(了)

いどのかいぶつ

初出:折葉坂三番地 blog(2009/6/30)

最初、守矢神社の短編集に入れる予定だったお話。ちょうど神奈子、早苗とあわせて三柱を順にピックアップする予定でしたが、視点が霊夢なうえになんかギャグメインの他の話にあまりにカラーにそぐわないので見送ったもの。諏訪子さまはやっぱり旧く大きなものの印象が強くあります。

東方掌編集

初出:折葉坂三番地 blog

折に触れて書いていた掌編のまとめ。当時はブログに結構作品を出していて、いろいろ試行錯誤してたんだなあと思うことしきり。キャラの立ち位置を模索したり、口調なんかに有名作品の影響を受けていたりするのがわかります。

博麗神社日々随録

▲ 博麗神社 二月二十三日 ▼

春の苑 紅匂ふ 桃の花

下照る道に 出で立つ少女

(大伴家持)

暖かな風、揺れる梢、小鳥の囀り、香る花の芳。

遠く春の歎びに空を舞う、春告精の姿。

「よう、相変わらず暇そうだな。邪魔するぜ」

「――むにゃ」

蝶の羽ばたきに誘われたまどろみから引き戻されて、開いたまぶたの向こうには見慣れた白黒の服。

魔理沙は呆れ顔で私を見下ろしていた。

「お天道様が高いうちから高いびきとは、いいご身分だな？」

「ちょうどさつきひと仕事終わったところよ。今は休憩中」

「嘘つけ。裏庭、草伸び放題だったぜ？」

「あっちは萃香の担当なのよ」

身体を起こすと、ちゃぶ台に張り付いたほっぺたがぺりぺりと音を立てた。

「ん……っ、よく寝た」

「やっぱ寝てたんじゃないか」

縁側に腰掛けた魔理沙が小さく歯を見せて、ちよんちよんと頬を示す。

「ほれ、そこんとこ涎の跡ついてるぜ」

「うるさいわね」

思わず手をやった頬に、わずかに残る板の目の痕。

魔理沙はやれやれと首をすくめ、身を乗り出して食べかけだった最後のお饅頭をひよいと口に放り込む。

「むぐ。なんだな、もう春だつてのに、年頃の娘がロクに色気もないのはどうなんだ？」

「年中辛気臭い格好のあんたに言われたくないわね」

「年中祝いの事やつに言われてもな」

「おめでたい事は多いほうがいいのよ。……それより、何か用事？」

「いんにゃ。ちつと帰り道に寄つただけだ。こっちもひと仕事して、喉渴いたんでな」

どうやらその帰りというこたらしい。大きな鞆に詰め込まれた本の山は、本日の紅魔大図書館の損害を如実に物語っていた。

「つてわけで、今度は熱い茶が一杯怖いな」

「……自分で淹れなさいそれくらい。台所くらい貸してあげるから。あ、私の分もお願ひね。ひと仕事して喉が渴いてるから」

「寝言は起きて言うもんじゃないぜ？」

言いながらも部屋に上がった魔理沙は、ためらいもなくばたばたと台所に駆けてゆく。

「さて、茶菓子とは。……なんだ、相変わらずロクなものがないな」

「そこで至極当たり前のように納戸まで漁られてることに疑問を抱くべきかしら」

「気にしたら負けだぜ」

ひとしきり探し回って、結局めぼしい収穫はなかったのか、魔理沙は茶葉と湯飲みだけを手に戻ってきた。畳の上に胡坐をかいとお茶を淹れはじめる。

「ま、昼間からスキマ妖怪みたいに贅沢言つてもしょうがないか」

「そうね」

そこで魔理沙は、ん？ と眉を潜めた。くんと鼻を鳴らし、瞬きをしながらこちらの手にしていた湯飲みの中を覗き込んでくる。

「……って、霊夢、なんだこれ？ 酒じゃないか」

「何って、雛祭りでしょ。今日」

「桃の節句なら甘酒だろ？」

「甘酒と白酒は違うのよ」

たまに誤解があるが、酒糟から作る甘酒とは違って、白酒ははつきり酒精の入った酒だ。ちゃんと酔えるし、度を過ぎれば宿酔いにもなる。それでも萃香あたりに言わせると、成分の半分が味醂と大差ないので酒と認めたりしないそうなのだが。

「——いや、つていうかそもそも白くもないだろこれ。普通の酒じゃないか」

こちらから湯飲みをひったくり、胡乱気な表情を浮かべる魔理沙。

「何言ってるの。白酒はもともとお神酒かみきのひとつよ」

白酒は「しろき」と読み、本来神社の運営経費にあてる神田かみだの米を使って作った酒のことを言う。

「だからこれも立派な白酒」

「神田つて、そんなもんあったのか？ この神社。初耳だぜ」

「あのね、私が普段どうやって食べてると思ってるの？」

実に心外な話だ。というかそこに食いつくのか。

「いや、そりゃあ……まあなんというか、普段の行状見てるとな。……というか待て。神様に捧げるもんだろ。勝手に吞んじまって構わないのか」

「うちのこの神様はわかりやすい格好してないからね。神様に捧げる分も巫女の私が代わりに吞んで、お相手するの」

「単にお前が一人で倍吞んでるだけだろう、それは」

「違うわ、神様が吞んでるのよ」

魔理沙の手の中から湯飲みを回収し、縁にそっと口をつける。喉を滑り落ちる甘露が、ほわりと心を暖める。

「ふう……」

「なんか昼間つから妙に幸せそうな顔してるなと思えばコレか？ 確かお前、まえにブン屋の取材だからんだかで神社じゃ酒造りはしてないって答えてなかったっけか」

「あら。これは神様がつくったのよ、勝手に。……なんだか文句が多いみたいだけど、要らないなら無理に

勧めないわよ？」

「ああいやいや、そうだな確かに神様のお恵みだな。感謝してご相伴に預かるとするぜ」

一息にお茶を飲み干して、空になった湯飲みを差し出してくる魔理沙。

まあ、実に調子のいいことで。

「はい」

「お、さんきゅな」

自分の湯飲みも白酒で満たし、軽く乾杯。

くい、と煽った酒精が喉を落ちてゆく。ひんやりとした感触が胃にひろがって、すぐにかあつと熱くなつた。

「ん……美味し」

「だな」

做うように湯飲みを傾けた魔理沙が、目をきゆうつと閉じてつぶやく。

見上げれば穏やかに広がる春の空。

ほんのりと春の香りを乗せた風が、さあ、と吹き抜

けてゆく。

「これで、ひし餅かひなあられでもありやちょうどいいんだがな」

「少しは遠慮しなさい」

「してなきゃ勝手に食ってるぜ？」

勝手知ったる他人の家とばかりくつろいでいて、その台詞もどうかと思うけれど。

「本当、色気より食い気ね」

「失礼なやつだな。お前と一緒にするな」

「そう？」

「当たり前だぜ」

ふう、と膨れる魔理沙。自称、恋の魔法使いとしてはそれなりに矜持でもあるのだろうか。

拗ねた表情がなんとなくおかしくて、軽く吐息。

「まあ、確かに折角の日に何もそれらしいことしないつてのも勿体無いわね」

「？ どこ行くんだ霊夢？」

「風流を嗜むのよ」

縁側に下り、庭に植わった桃の枝に手を添える。

桜折る馬鹿、梅折らぬ馬鹿と言うが、桃は桜と同じだという。薄紅に咲いた花を軽く摘み、ちよん、と湯飲みの中に散らした。

「はい、あんたの分」

「……なんだこれ？」

「これが本物の桃の節句のお酒よ」

刻んだ桃の花の甘い香りが、ふわ、と広がってゆく。

桃花酒とうかしゅといい、仙人せんじんなんかが好んで飲んだそうだ。

桃はすなわち百ももに通じ、邪気を払い長命を願うものであるという。

「天界の桃だから、効き目も折り紙付きじゃないかしら」

「成る程な、確かに風流だぜ。余計な効果もありそうだけだな」

無邪気に笑う魔理沙を見て、

私も苦笑と共に、湯飲みに口をつけた。

▲博麗神社 二月二十三日 ▼

「……ん？」

と、顔を上げたのは魔理沙のほうだった。燦々と注ぐ春の日差しに手をかざし、目を細めて空を見上げる。

「霊夢、客人だぜ」

「そうね」

ふわり、と風がそよぐ。ちいさな春の匂いをほのかに香らせ、緑と白に彩られた少女は、風を纏いながら優雅に舞い降りる。

袖に縫い取られた鈴がしゃんと鳴り、涼やかな音色が周囲の気配を清浄なものへと変えてゆく。

「——思うんだが、あれが世にあるべき巫女の姿じゃないか？ 少なくとも昼間っから呑んで寝転がってるのは違うと思うぜ」

「人のこと言える格好じゃないじゃない、あんたも」

ぺしん、と軽くおでこをはたいて、余計な一言を挟んできた魔理沙を黙らせた。

「お邪魔します」

律儀にぺこりと頭を下げるのは、山の上の神社の巫女、東風谷早苗の挨拶。

こちらに來た頃は逢うたびにいつも緊張にばきばきと全身を強張らせていたものだったが、最近は色々とこちらにも馴染んできたようで何よりだ。

……少々馴染みすぎている風もあるのがやや気にはなるけれど。

「よう、早苗」

「なにか用事？」

「ええ、大したことではないんですけど……お邪魔でしたか？」

困ったように聞いてくるのは、多分魔理沙が私の膝枕の上にいるからだろう。ちゃぶ台の上に飲み散らかしていた湯飲みと酒精を見つけて、その様子はさらに深まる。

「いんや。退屈してたから呑んでただけだぜ」

「魔理沙の嫁入りの話よ」

「誰がだ」

起き上がった魔理沙を見ても、早苗は困惑の表情を崩さなかった。眉を下げて申し訳なさそうに聞いてくる。

「――あの、ひよつとして本当にお邪魔でしたか？」

「そんなことないぜ。なあ霊夢」

「……そうね」

「そういや霊夢、嫁入りって言えばフランの奴紹介して随分経つのに、どうしてまだ結婚してないんだ？」

「意味が解らないわ」

吐息と共に、湯飲みに残っていた桃花酒を飲み干す。

「雛祭りだから、白酒をちよつとね。……それよりなに、お遣いかなにか？」

「え、ああ、はい。これ、ちらし寿司です。ちよつと作りすぎちゃって、お裾分けに」

「山の上からわざわざ？」

「いろいろお世話になってますから」

はにかむような笑顔を見せる早苗に、魔理沙は驚愕の表情でしばし硬直。その後、ぎぎぎ、と首を軋ませこちらを振り向いて、

「……見る霊夢、これがまさに世にあるべき巫女の姿だぜ？」

「だからうるさいってのに。その顔腹立つからやめなさい」

魔理沙を押しわけ、早苗の差し出す包みを受け取った。

山葵の風呂敷に包まれたずつしりと重いお重の蓋を開けてみれば、中には干し椎茸、干瓢、蓮根、筍。彩りには人參に錦糸玉子、胡瓜の薄切り。添えられた薄紅は、桜の花の甘酢漬けだろう。その香りがさらに食欲をそそった。

「おお、豪勢だなこりゃあ」

「ハレの日ですから、ちよつと張り切りすぎちゃいました」

はにかむ仕草もどこか愉しげだった。魔理沙はちょっと桜の甘酢漬けをつまみ、口へと運ぶ。

「うむ、美味しいな。もうそつちじゃ桜まで咲いてるのか？」

「はい、庭に一本だけですけど。これも加奈子様の信仰のお力です」

「大したもんだぜ。どこぞのぐーたら巫女とはえらい違いだ。じゃあ、そのうち花見もできるかもな」

「ええ、ぜひお越しください」

にこにここと——もしあれが営業用スマイルであるなら大したものだ——頷く早苗。

「なんにせよありがたいぜ。食うもんが欲しかったとこなんだ。折角だからご相伴に預かるとするか。おい霊夢、皿とか箸どこだ？」

「いつものとこよ」

「応」

鼻歌と共に出て行つた魔理沙を見送りつつ、溜息。

「あんたも上がっていきなさい」

「え、結構ですよ、折角おふたりでいるのに、お邪魔しちゃ」

「何にもせずに追い返したんじゃそれこそウチの沽券に関わるのよ。只でさえ初詣でいろいろ思い知らされたんだから」

「あ、あはは……」

苦笑いの早苗をひっぱり上げると、すぐに魔理沙が食器をもつて戻ってくる。そのまま三人、ちゃぶ台を囲んで少し早めの昼食となった。

「本当に美味しいな。これ早苗が作ったのか？」

「はい、習いたてですけど」

「お世辞抜きでよくできてるぜ。これならいい嫁になれるな」

「そ、そんなつ」

かあ、と頬を赤くする早苗。

つくづく免疫のない娘だなあと考えた。外の世界というのは、そんなに色恋と縁の遠い場所なのだろうか。

「……早苗、気をつけなさいね。油断しているとあんた

もいろいろ大変なものまで盗まれて、あとで泣きを見るわよ」

「あのなあ。心外だぜ。いつそんなことしたんだ私が？」
むぐむぐとちらし寿司をかき込みながら、器用に頬を膨らませる魔理沙。

「ええと……そう言えば、その、さつき、お嫁さんがどうって……」

「ちよつとね。雛人形の話よ。こいつが厄払いでもしたらどうかってしつこいから。神社に厄払いを勧めるってどういうことかしらね」

「そんで流し雛から雛人形の話になってな。どうせだから雛壇でも飾って人呼んだらどうだって話してたんだが」

「それでお嫁入りのお話に？」

ぽん、と手を叩いて応じる早苗。

「あんなのただの迷信よ。片付けなくてもカビるだけだもの。非科学的よ」

「いや霊夢、いっぺん自分の仕事見てから喋ったほう

がいいぜ？」

「ええと……その、そう言えば前から気になっていたんですけど」

なんとなく居心地悪そうにしながら、早苗は畳をむしりつつ、上目遣いにこちらを窺ってくる。

「お二人とも、その……こ、恋人とかいらっしゃるんですか？」

「……………」

「……………」

そんなことを聞いてきた早苗に、思わず魔理沙とふたり、顔を見合せ。

「別に？」

揃って同じ答えを返す。

「まったくそんな予定はないぜ？」

「あのさ、私はともかくもあんたはそれでいいの？
恋の魔法使いでしょ、確か」

「私は普通だぜ。あと、恋と愛は別物だからな」
意外に世知辛い回答を、なぜか胸を張って答える魔

理沙。

「で、なんで急にそんなこと聞こうと思ったわけ？」

「あ、いえ、そのつ、全然たいしたことではないんですよ？ その、ちよつと興味があつたつていうだけで、本当に深い意味はぜんぜんないです、ええつ、忘れてくださいっ！」

すごく解りやすかった。

「ん、誰か好きな奴でもできたのか？」

「い、いえっ！ 違います違いますっ。他意はないんです、決して！ 断じてそんなことはっ」

ぶんぶんと首を振り、必死で否定を繰り返す風祝。

なんとただでブン屋の気分はわかつた気がした。とはいえ、それで聞くなというほうもどうかと思うので、さらに問い詰める手は緩めない。

やがて早苗も観念したか、ぽつりぽつりと話し出した。

「うー……その、本当に大したことじゃないんですけど、幻想郷って、外の世界といろいろ違うところも多

くてですね。これまでの常識じゃ考えられないことに直面して困ったりもするんですよ。あの、それで……ここだと、お二人くらいの歳でもええと……その、け、結婚とかを考えるのかなあ……と」

「結婚ねえ。私は見ての通りだから違うけど、里のほうじゃたしか結構そんなものね。外って違うの？」

「えつと……とりあえず、私くらいの年齢なら少なくともあと10年くらいは先のことかと」

「へー、じゃあ外の世界じゃ行き遅れはないのか」
「やつぱりそうなのね」

感心したように声を上げる魔理沙。

よほど特殊な事情でもなければ（吸血鬼のメイドを務めるとか）、たいていはどこかに嫁ぐのが一般的だ。「いえ、それでもいろいろ苦労はあるみたいなんですけど……」

視線を泳がせ、言葉を濁す早苗。外の世界もいろいろあるということか。

「で、結婚がどうしたんだ？ 誰かと見合いでもする

のか、早苗？」

「ちちち違いますっ。その、結婚なんてまだ早いですっ。ええとですね、その、それで、うちの神様のことなんですけれど——加奈子様と諏訪子様は、もともとは確かに争っていたお二人ですけれど、時々、そのう……と、とっても親密になさっている時がありまして。たまにその、そういう場面に出くわしてしまつと、巫女としてとても気まずいと言いますか……」

「ああ。いわゆるひとつの夜の諏訪大戦ね」

「乙だぜ」

さりげなく先日新聞の一面を取り出しつつ、慰めてみる。

「親指とか立てなくていいですかっ！……つてその新聞取ってあったんですかっ？　か、返してくださいはいやくつ、今すぐにつ！」

数ヶ月前にスクープされた一件であつたり。

べたり、とちやぶ台につつぶして、早苗は滂沱の涙を流す。

「ううう……幻想郷はやっぱ怖いところですよ……」

「なまじカタチのある神様つても大変ね。愉快な神様でよかったじゃない。毎晩賑やかで。主に性的な意味で」

「よ、良くないですよっ！」

「ところで話は変わるけど蛇と蛙だとやっぱり蛇のほうが一方的に食べるほうなの？」

「いえあの、どちらかと言うと夜は諏訪子様のほうが。なにぶんミシヤグジ様ですし……じゃなくてっ！」

ばんつ、とちやぶ台を叩いて誤魔化す早苗。

「まあつまり、それが気になるってことか。なあ、表じゃそういうの普通なのか？」

「その、なにぶん神様なので、一般的なのかどうかは……。ええと、こっちに来る前は、そういうのつてかなり特殊なんだと思つてたんですが、その……幻想郷だと意外に、そうでもないのかな、と……」

ちらちらと魔理沙の方などを窺いつつ言ってくる。

「ん、なんのことだ？」

「ああ、期待しても無駄よ。こいつそーゆうの徹底的に鈍いから」

「おいおい霊夢、なんか知らんが私の悪口は無しだぜ」
口を尖らせる魔理沙に、軽く肩をすくめてみせる。

「ね？」

「はあ……」

微妙な表情で曖昧に答えを濁す早苗を見て、魔理沙はまだ不満そうだった。

▲博麗神社 二月二十八日 ▼

今日も一日が始まる。

幻想郷の楽園の巫女とて、なにも異変解決妖怪退治だけしていれば生きていけるわけでもない。仙人でもあるまいし霞を食べておなか膨れるわけでもなく、日々の糧を稼ぐためにはやはりどうしても世間さまのあれこれ、浮世の沙汰と無縁であるわけにはいかないのである。残念なことに。

「さて……」

日課であるところの境内の掃除に蔵の整理、神田の手入れに宴会の後片付け。暇だ暇だぐーたら巫女だと言われながらも、自由な時間など存外に無いものだ。

しかしこれも巫女のつとめ。薄暗い障子の中、眠気を追い払って寝間着から着替え、ひとつ軽く頬を叩いて気合いを入れる。

ここしばらく、本調子でもなかったことだし。

「今日も頑張るとしましょうか——」

んんっ、と伸びをして丸まった背中を伸ばし、深呼吸。

ふう、と目元の涙をぬぐい、ちらりと外を見やれば、さらさらと降り続く雨。春の雨は境内の向こうの景色をぼうと霞ませて、静かに静かに降り注いでいた。

「……………」

そう言えば、昨夜あたりから屋根裏で雨音が聞こえていたことを今更のように思い出す。再建されたばかりの神社だが、居住部分は前のままのため雨漏りは直っていないのだ。

「……………雨、か」

境内を囲む緑の梢は、静謐な気配に満ちていた。結界の此方と彼方を繋ぐ境界の社、そこを包む霞のような春雫を眺め、私は吐息と共に縁側に降りる。

しっとり髪を潤わせる春の雨は、ほんのすこしひんやりと、肌を濡らし、指先へと滑り落ちる。

それをしつかと見届け、
がらがら、と雨戸を戸袋から引き出して閉め、額の
汗をぬぐった。

「ふう。良く働いたわ」

「早ッ」

わざわざ台所から顔を覗かせて、割烹着姿の魔理沙
が声を荒げる。

「いや霊夢、いくらなんでも諦めるの早すぎだろ。常
識的に考えて」

「だって雨よ？　せつかくやる気出したのに嫌になる
わ。明日から本気出すから」

「ああおいコラ寝るな。横になるなッ」

「むにゃ」

「寝るなーっ！」

駆け寄ってきた魔理沙を見上げ、重たい左右の目蓋
を擦る。

「……なによ、私だって精一杯やったわよ。ここ一年
で一番くらい一生懸命頑張ったわよ。気持ちだけは」

「本当に気持ちだけな。せめて家から一歩くらい出て
から言ってくれ」

「……えー」

「えーじゃないっ。どこぞの死神でももう少しやる気
くらいは見せろと思うぜ？」

「む」

あのサボタージュの泰斗と一緒にされるとは心外だ。
「別に誰に迷惑かかるでもないからいいじゃないの。

こういう天気の良い日なんてどうせ無理して外に出て
もなにひとついいことないんだから。掃除とかいつで
もできるんだから、お茶でも飲んでゆっくりしてるの
がいいのよ」

「だから霊夢、お前、神徳とかなんというか、もう少
し巫女の自覚を持ったほうがいいぜ？」

「あーあー聞こえないー」

うるさい魔理沙を押しわけ、一旦台所に寄って自分
の湯飲みを用意。急須を回収しお茶の間に戻って座布
団の上に。

「ふう……」

……お茶がおいしい。

「いい汗かいたわ。ねえ魔理沙、お茶菓子なかったかしら」

「あー、霊夢？ そこは明らかに一仕事やり遂げた充実感みたいな雰囲気出す部分じゃないと思うんだが。誤魔化すんならもう少し徹底しろと言うかな。……」

「つてかさつきから言おうと思つてたが、いかにも早起きしましたみたいな空気出してたけど今さつき寝間着のまんま昼飯食つて二度寝してたばかりだろお前」

「洗い物に濡れた手のまま、まだ片付いてもないいやぶ台の上を示す魔理沙。」

「うるさいわね……」

「いや、そこで私が文句言われるような筋合いは断じてないぜ」

「いいじゃない、たまの雨の日ぐらいゆっくりさせてよ。ここんとこあんまり食べてないし」

「夕飯あんだだけ大喰らいしてたの誰だ。なんだかんだ

でここ一週間くらいちよくちよく来てるが、いまんとこお前が真面目に巫女の仕事してるの見たことないんだが」

「今日は色々とおんたの番でしょ。あんなに派手に負けといて」

「そんな事実はなかったと記憶してるぜ？」

「もう、文句ばかりなんだから。しょうがないわね」

「そこまで言われたら流石に重い腰を上げざるを得ない。席を立ち、納戸から脚立を引きずつて、柱にかか

るカレンダーの前に。

「……これでよし。今日も良く働いたわ」

「いやだから全然よくないぜ？ こら、爽やかな顔で納得するな爽やかな顔で。額の汗を拭うな。といううかそれごとくで疲れるなっ」

「今日もよく働いたわ……」

とても大事なことなので二回言いました。

「それで心底問題ないと思えるお前がたまに怖くなる

ぜ……」

恐々と汗を拭う魔理沙。

「どう、思い知った？」

「だから胸を張るな胸を。ロクに無いくせに」
半眼の視線がものすごく冷たい。

しばし、沈黙。

「……………」

「……………」

さらにしばし。

間が持たなかったので湯飲みを差し出してみる。

「……お茶、飲む？」

「せめて片付けくらいは手伝え」

ぺしん、と顔に台布巾が投げつけられる。

ともあれ。雨は止みそうにない。

▲博麗神社 三月一日 ▼

(寒……)

ぼんやりとした頭で寝返りを打つ。汗で湿った布団が冷えて気色悪い。昨日よりいくらかましかと思つたが、次の瞬間咳がこみ上げてきて、しばしの後に思い直す。

(おなかすいた……)

ぜい、と息を吐くたびに不快な音が喉を鳴らす。

こんな時でも飢えを訴える正直な身体に半分呆れるが、起き上がるうにも手足に力が入らない。布団から入り込む隙間風に指先が凍えている有様では、台所までたどり着く前に倒れそうだった。

「お、起きたか？」

ふいに自分以外の声が聞こえ、私はふと目を開けた。熱でぼんやりした視界の向こうに、いつもの白黒の

シルエット。

「誰よ……？ 勝手に上がりこんで」

「ご挨拶だな」

幾分怒ったような顔で、魔理沙は布団の側からこちらの顔を覗きこんでくる。

「桃の節句だつてのに不景気じゃないか。昨日も一昨日もいくら呼んでも返事もないからどつか出掛けてると思つてたんだが、まさかずっと寝てたのか？」

「あー……」

おぼろげな記憶の糸を辿ってみるに、確かに寝込んでからそれくらい経っている気がした。

「具合悪いんなら無理強いはいしないが、せめて養生ぐらいした方がいいぜ」

「寝てれば直ると思つたのよ」

喋るたびに喉に痛みがあった。思わず顔をしかめてごぼごぼと咳き込んだ私の背中に、ぼんぼんと手が添えられる。

「無理するな、折角来てやつてるんだから」

布団に戻され、掛け布団が乗せられる。されるがままに魔理沙に従う。

ひんやりとした指が額に触れた。火照った顔には、外を飛んできて冷えている魔理沙の手のひらが心地よかった。

「寒気はあるか？ 汗は？ あー、こりやかなり重症だな。医者はどうした、医者は」

「――だから、寝てれば直ると思ったのよ」

「やっぱ飢えてたか。食うもの食わずに病気は治らないぜ」

見透かしたように言う魔理沙。タイミングの悪いことに、正直なおなかがかくうと音を立てた。

「もうすぐ祭りなんだから、それまでにちゃんと治せ。その分の世話くらいは焼いてやるぜ。台所借りるぞ？」

「……好きにして」

魔理沙は割烹着を着て台所に向かう。すぐに包丁の音と、かまどに火が入る気配。

てきばきと準備を進める魔理沙の背中を、ぼうつと

ながめる。

「しかし、お前が風邪なんて珍しいな。どんだけ貧窮しても健康が巫女のとりえだろうに」

「私だって調子悪い時くらいあるわよ」

「呆れたもんだ。巫女の霍乱ってやつか」

「へんな言葉作らないでくれる？」

そつと寝返りを打とうとすると、身体の節々が嫌な痛みを上げて、思わず顔をしかめてしまう。

「で、鬼って言えばその萃香はどこだ？」

「あー、確か、一昨日の朝っぱらに大騒ぎして、葉探してくるって出てったきり。大方永遠亭の前に竹林で迷ってるんじゃない？」

「成る程、鬼じゃ幸せ兎もサービス外だな」

締め切った部屋の隅では、魔理沙の八卦炉が小さく音を立てている。

いつのまにか、随分と寒さは和らいでいた。

「起きれそうなら起きとけ。その方が食えるようになるだろ」

「……そうね」

答えながらも、だるい身体に力が入らない。

せめて顔くらい洗おうかと思いつつも、億劫で動けないでいるうちに、魔理沙は小さな椀をこちらに運んできた。

「しかし、ホントに何にもないなこの台所」

「うるさいわね」

「怒ると熱上がるぜ、食えるか？」

「ちゃんと食べられるものが入ってるならね」

「美味いぜ？ 特製の茸雑炊だ。効能も万全、滋養強壮・元氣回復・体質改善・出前迅速・落書無用だぜ」

わずかに出汁の風味の香るそれは、ただのお粥よりもだいぶ食欲を刺激した。蓋を開けた椀を手に、魔理沙が側に寄ってくる。

「ほれ、起きれるか？」

「ん、平気……」

まだ少々頭がふらつくが、あまり世話を焼かれてばかりでは格好が付かないので、多少強がりも入れて身

体を起こした。半纏に袖を通して咳を堪えていると、魔理沙は椀と匙を手に笑顔。

「ほれ、あーん」

「……いいわよ、一人で食べられるから」

「無理するなよ」

「平気だって言ってるでしょ」

意地を張っているのが自分でもわかるほどの声の有様にやにやと笑っている魔理沙から椀を奪い取って、口に運ぶ。

舌の上に広がる卵の風味と、薄味の出汁。小さく刻んで柔らかく煮られた茸も、意図せずに喉に落ちてゆく。

「……美味しい」

「そうか。飯が美味けりゃそんなに心配することはないな。がつつかずに落ち着いて食え？」

「ひとを意地汚いみたいに言わないでよね。……これ、茸のほか他に何か入れたでしょ」

「隠し味を少々な。葱白と紫蘇子、生姜なんぞだ。ま、

漢方なんて大したもんじやないが媚薬じやないから安心していいぜ」

「馬鹿言うな」

そんなやりとりの間にもあつという間に椀が空になつて、ちらりと見れば、魔理沙は齒を見せてこちらを見ていた。

「お代わり」

「応」

もともと予想済みか、台所に戻った魔理沙はすぐにもうひと椀を持つてくる。

「なんだ、すごい食いっぷりだな。ひよつとして本当に全然食べてないのか？」

「……食欲なくてね」

「よく言うぜ。ま、お前はいつも飢えてるんだろが」

「うるさいわね」

違う、と否定できないところはやや悲しい。

「まあ、流石に全部は食いすぎだろうから適当なところでやめとけ。寝て起きたらまた食えばいいだろ」

言われながらも、二杯目を空にしたところで。

「さて、お次だぜ」

満面の笑顔と共にやってきた魔理沙は、桶に満たしたお湯と手ぬぐいを抱えていた。

「……ひとが弱つてゐるのにつけ込んで何するつもりよ」
「おいおい人聞きの悪いこと言うなつて。一人でできないだろうから世話焼いてやつてゐるつてのに。脱げるか？」

「ちよつと、そこまでしなくつたつていいつてば」

「いいからいいから」

「良くないっ」

とは言え、弱つたまま魔理沙を跳ね除けられるわけもなく。

なすすべなく脱がされた私の背中に、暖かい濡れ手拭いの感触が触れてゆく。少々丁寧さには欠けていたが、悪い気分ではない。強張った背中と肩の筋がほぐれ、気持ち悪さが消えていく。

「たまに思うが、寒いんならあの服やめたらいいと思

うぜ。つかなんであれ袖しかないんだ？ 昔は普通の

巫女服着てただろ、確か」

「……深い訳があるのよ」

忘れもしない紅霧異変の時だ。新しく服を新調する段になって、直面した問題。つまり、神社の慢性的な信仰（賽銭）不足と言う困窮した経済事情だ。

「布地が少なければ、その分だけ安くなるのよ……っ！」

「すまん帰っていいか？」

「な、なによ、あの時は切実だったのよ」

「いやそこで切られても困るんだぜ」

今にしてもあれは避けようのない決断だったと思う。後の春雪異変の時に死ぬほど後悔することになったけれど。

一回着てみればもうそれが当たり前のように接されて、博麗の巫女のトレードマークとなった今、いまさら元に戻せるわけもないのだった。

「あれでも一応冬服なんだけどね」

「どこがだ」

「生地が厚手なのよ」

「あのなら……」

苦笑しつつ魔理沙は、手際よく私の身体を拭ってゆく。

鎖骨から首筋に押し当てられる濡れ手拭いが、気持ちの悪い汗を拭い落とし、熱を穏やかに和らげる。背中から回り込んだ手ぬぐいは鎖骨を滑り、さらに下に降りて――

「……にしても霊夢、貧相なのは神社だけにしといたほうがいいぜ。これじゃどっちが前か後ろかわかりやしない」

「やかましい。人のこと言える立場じゃないでしょ。前くらい自分でやるわよ」

ぺしり、と余計なことを口にした魔理沙のおでこを叩き、手拭いを剥ぎ取った。

▲ 博麗神社 三月二日 ▼

静閑とともに満ちる夜闇。灯りのない夜の向こうで、
雨戸かカタカタと風に揺れる。

三日ぶりにお腹も満たされ、身体も温まり、寝間着
も着替え布団のシーツも変えて、あとはゆっくり休む
だけ……なのだが。

「……………」

昼間、春眠を貪りすぎたせいとか、いくら経っても眠
気はまったくやって来ない。そろそろ日付も変わろう
頃だというのに、まどろむこともできないまま、ただ
目を閉じているだけだった。

隣では魔理沙が、仕舞い込んでいたコタツ布団を引
つ張り出して包まっている。強引に泊まって行くと言
い出した彼女を、結局私は断りきれずにいた。

「……飛べない巫女はただの巫女ね」

「眠れないのか？」

「なんだ、起きてたの？」

「まあな」

顔を傾ければ、コタツ布団から顔を出した魔理沙と
目が合う。

こんなふうにまじまじと見詰め合うのなんか、何年
ぶりだろう。

「おかしいことという奴だな。飛べても飛べなくても巫
女は巫女だろう」

「そうじゃないのよ」

わかっていない様子の魔理沙に、はあ、と溜息。

「飛べない魔法使いは普通の魔法使い？」

「……違うな」

「でしょ」

「ああ」

そういうことよ、とつぶやいて、肩に布団をかき寄
せる。博麗の巫女がこの有様じゃ、実に格好が付かな
い。まあ、つまりはそういうことなのだ。

「……………」

「……………」

そのまま言葉が途切れる。窓の外では雨戸が軋み、静閑な闇を揺らす。

しばらく目を閉じることなく、ぼんやりと天井を見ていると、不意に魔理沙はがばりと身を起こした。

「あー、やつぱだめだぜ、寒い」

「だから言ったでしょ。ちゃんと客用の布団あるんだから、そっち出しなさいよ」

「いや、今さら面倒だぜ」

薄闇の中、ごそごそとコタツ布団の塊がこちらに這い寄ってくる。

「ちよつと、入ってこないでつてば。伝染つても知らないわよ」

「どうせ風邪引くならあったかいほうがいいからな」隣にもぐりこんできた魔理沙の、やけに熱い指先が、そつと手の甲に触れた。

「……なんだよ、こつちも冷たいじゃないか」

「しょうがないじゃない、風邪ひいてるんだもの」

「普通風邪ひいてりゃ熱あるもんだろう。行火あんかでも持つて来るか？」

「いいわよ別に」

答えて、ころんと寝返りを打つ。

とん、と背中に触れる魔理沙の気配。すぐそばに感じる彼女の呼吸が、やけに耳について離れなかった。

「魔理沙」

「ん？」

「私、お風呂入ってないから。髪とか汗臭くない？」

「……いや」

「別に、どうともないな」

「そう」

いい匂いだ、とか言われたらぶん殴つてやろうと思つていたが。

ひゆう、と雨戸の向こうでいちだんと強い風が吹く。いまさら春一番でもないだろうが、空気がわずかに重くなっているような気がした。

「風、出てきたな……また雨でも降るかね」

「かもね」

「無理して泊まってくこともなかったんじゃないかしら」

「病人ほっとくのも寝覚め悪いだろ。……ま、それに今、家もちつと戻れる状況じゃないんでな」

「妙な実験に失敗して爆発でもしたのね」

「ま、そんなとこだ。そういうことにしとけ」

ああ。

下手な嘘だな、と思った。

「泊まってくだけなら他にもあるでしょう。人形遣いに図書館に、色々。たぶんどこも歓迎してくれるわよ、きつと」

「勘弁してくれ霊夢。どっちもえらく高くつくぜ」

苦笑する魔理沙。

「それにどうせパチュリーの所はメイドに追い出されるし、アリスにはそれこそ何されるか解ったもんじやないからな。お前のところが一番楽だ」

「そう」

「なにしろ今弱ってるからな。恩を売るのは絶好のチャンスだぜ」

「うるさい、ひつつくな」

「あー、あと、それにな」

ついでのように付け足して。

「なに？」

「ふたりとも、この前の桃花酒の件を話したら、いきなり叩き出されてな」

「……そう」

「ま、なんだ。慣れないことするもんじやないと思うぜ？ そんなだから風邪ひくんのだ」

「……そうかもね」

すん、と布団に鼻先を擦り付けて、喉奥に引っかかった言葉を飲み込む。声が少し尖ってしまったのは、仕方ないことだろう。

「思ってたよりずっと性格悪いわ、あんた。今気付いたけど」

「お前に嫌がらせできる機会なんか滅多にないからな。仕返しだぜ」

はあ、と吐息。言いたい言葉を飲み込んだ喉がわずかに、乾いて痛んだ。

「みんな苦労するわけね」

「酷い言われようだぜ。人の嫌がることを進んでしましよう、つてのが我が家の家訓なんだがな」

「最低な家ね」

「ああ。最低な家だ」

魔理沙はくす、と小さく笑みを浮かべ、

「それでも地元じゃ近所さんでも評判の娘だったんだぞ？ 箱入りに蝶と花よと育てられて、毎年雛壇片付けるのも十日過ぎてからでな」

「良かったじゃない、立派にいき遅れてるわよ？」

「おまけに親不孝だ」

「この先何があってもあんたの実家近くに引越すことはないようにするわ」

「そりゃ賢明だぜ」

重なった手のひらに、そっと力が籠められる。すぐ隣の魔理沙の気配が、布団の下のわずかな隙間を埋めてくる。

けれど、振り払う気にはなぜかなれず、そのまま私は目を閉じた。

「まあでも、悪くないから、しばらくこのままでお願いいね」

「……ああ」

ぱた、ぱた、と表で雨音が響き始める。

ひとりの夜は、心細くなってしまうからと、そんな言い訳もできないことは無いけれど。

まあ、たぶん病の夜の気の迷いだ。そういうことにしておこうと思う。

髪の上に顔を寄せた魔理沙が、すん、と鼻を鳴らす。

「なあ、明日は風呂入れよ、霊夢」

「……今さら言うな馬鹿」

気が抜けていたので、軽く額を小突く程度でやめておいた。

▲博麗神社 三月六日 ▼

「最後の一枚、もらうぜ」

「ちよっと、取らないでよ」

「全部私を買ってきたんだぜ？」

「じゃあ半分こ」

「……お前なあ」

ほわほわと湯気をたてるお茶を脇に、ちゃぶ台に向かいぱらぱらと図書館からの収獲物らしき本の頁を捲りながらお煎餅を齧っていた魔理沙が、眉をしかめて顔を上げる。

「この前寝込んでからぐーたらに拍車かかってないか？ もちっとしゃっきりしろ。祭り終わったらだらけやがって。寝ながら食うと牛になるぜ霊夢」

「そんなの迷信よ」

「だからお前は一度自分の職業を確認してから喋れ」

かなわんぜ、とぼやきつつも差し出された半月型のお煎餅を、ぱりんと口に咥え、折り畳んだ座布団を枕に、手足を伸ばして茶の間に転がる。

焼けた古いイグサの匂いに身体から力が抜けてゆく。春のお日様に照らされた暈は、これ以上ない睡魔の誘惑だ。

「暇ね……」

「ああ。徹底して暇だな。おつそろしいくらい。本っ当に冗談抜きで誰も来なかったなこの一週間。宴会無いとこんなに誰もいないのかここ。良くこれで潰れないな、この神社……」

「……というかあんたいつまで居るつもり？」

「お前なあ、一週間ほとんどまるまる掃除に洗濯に飯まで作ってやった相手にその態度はないと思うぜ」

ぱたむと本を閉じ、魔理沙はちゃぶ台にひじを突く。

「そうね、今日は筍でも食べたいわね」

「言っとくが虎の脂は品切れだぜ？」

「手に入ったらぜひ持って来てちょうだいね？」

「やめとくぜ。巫女のせいだ幻想郷から竹林が消滅、とか一面に載るのは忍びないからな」

「私をなんだと思ってるのよ」

「貧乏巫女。……いや、赤貧巫女か？」

「く……」

言い返そうとして、あまりにも不毛な言い合いであることに気付いた。

ごろん、と仰向け。畳にひっくり返ると、天井の染みがひとつふたつ。

「んー。まあ、慣れちゃったからいままであんまり気にしたことなかったけど、確かにだーれも来ないわね……」

「……いつも、こう、なのか……？ 本気で……？」

不安げな魔理沙。ええいうるさい憐れむような目で見えるな。

「癪だけどあんたの言う通りね、このままじゃ。……決めたわ」

「何をだ？」

よ、と身体を起こし、こきこきと肩を鳴らす。

「つまりよ。この神社がどうしてこう、その、世間様一般の基準と比較して、いくらか参拝客と称される層の立ち入りが極めて稀な状況にあるのかを検討してただけど、その結論がでたの」

「お、なんだ、博麗神社もいよいよ店じまいか？ まあ、あの客の入りじゃ時間の問題だろうと思ってたし、避けられないことなら思い切りは必要だよな。タイミングとしては悪くないんじゃないか。ははは——おうあ熱ちゃあつ!？」

いかにも爽やかに笑われてムカついたので、魔理沙の頭の上で湯飲みをひっくり返してみたら、一端えらく喧しくなっただけで少し静かになった。

「そうよ。この危急の事態を変えるには意識的な改革だけじゃだめ。もつと抜本的な制度改革が必要なの。これからは、神社もただ漫然と参拝客さんを待ってるだけじゃ駄目なのよ」

部屋の中をぐるぐると歩き回りながら、思案をめぐ

らせる。

「もつと積極的に、こっちから参拝客の首に縄かけて搔つ攫うくらいの勢いで前向きに信仰を集めるべきなのね。悔しいけれど早苗のところのやり方も一理あると思うわ。人の神社を乗っ取ろうってくらいのあの強引さを見習うべきね。……ホント。考えてみればそれで解決じゃない。なんで今まで思いつかなかったんだろ？」

「……それやられかけてあの時にさんざんむかつ腹立ててたのはどこのどいつだ」

そんな事実もあつたかもしれない。

「いいじゃない。どうせいかにも永遠の二番手っぽい色合いしてるんだから。フルーツフルーツ言つて不意打ちボム一発でやられるだけに妙に人気あるし」

「あー、悪いこと言わんからそのへんで自重しとけ霊夢？　なんかあつたのか知らんが」

何を気にしたかごぼごぼと咳払いをする魔理沙。

「あとな、乗っ取るとか攫うとか、そういうのを世間

様では悪徳というんだぜ」

「そんなことないわよ。あんただって本やら道具やら心やら処女やいろいろ泥棒してるじゃない」

「最後のほうは断じて違うぜ!？」

「主に妹とか人形遣いとか図書館とか。最近は何童も餌食かしら。尻子玉抜こうとしたら逆に抜かれたなんて笑い話よねー」

「いやだからちよい待て霊夢っ!いくらなんでも自重しとけ?　お前さつきからそれっぽいこと適当に言つてれば大丈夫だろう的に話してるだろ!？」

「そんな事ないわよ?」

「まっつつつたたく説得力ないぜ!!」

暑苦しく詰め寄ってくる魔理沙。

「いいから。そんなことよりも、今はもつと大切なことがあるの。お賽銭とか」

びし、と空に輝く信仰の星をなんとなく気分的に指差して、胸に込み上げてくる熱い感動に浸る。

「私の名譽はそんなこと呼ばわりか。なあ、燃えてる

ところ非常に申し訳ないんだが、いい加減寒くなってきたんだが」

「なに？ あら魔理沙、どうしたのびしょ濡れじゃない。大変、風邪引いちゃうよそんな格好してたら。あったかいお茶とかいるかしら。厄除けのお札とかも必要よね。あ、ついでに無病息災ロゴ入りのTシャツとかも一緒にどうかしら？ いまなら友人特価で出血大サービスの三割増よ？」

「……あー。明らかに自分でやったって分かってるくせに金が取れると本気で思ってるところがなんというか、霊夢のすごいところなんだなとしみじみ噛み締めるところだ。あとその笑顔やめろ。取って喰われそうな気分になるぜ」

「そんな♪ 褒めたって安くないわよ♪ 言っただしょ、四割増し♪」

「さりげなく増えてるのがさらに凄いな」
差し出した手のひらをぺちんと叩き、魔理沙は風呂

沸かしてくるぜ、と去っていった。

▲ 博麗神社 三月九日 ▼

喧騒の宴から一夜、明けて。

「はー……」

境内と階段を掃き終えた頃には、お日様はそろそろ天頂近く。今日のお昼はなんにしようかと思いつつお茶を抱え縁側に腰掛けてみると、ふと青空に翳りを覚える。はてと見上げてみれば、空には一条の白雲が引かれていた。

箒に雲を棚引かせ、白黒の魔女は裏庭の真ん中にすっと着地する。

「相変わらずだらけてるな、霊夢？」

「……来るなりご挨拶ね」

うんざりと顔を上げ、周囲を見回し。

「これがそう見えるなら眼鏡でも掛けた方がいいわね。いい医者紹介するわよ？」

「不老不死はごめんだぜ。むしろそれで仕事してるように見えると言ひ張るのが凄いな」

「手伝いたいならいくらでも残ってるわよ、奥に」

肩越しに振り向いた奥の間には、山と詰まれた酒瓶に皿。食べ遣しこそないが、惨憺たる有様の宴の後。

境内の掃除が現実逃避だというのは、いちおう自覚している。

「遠慮するぜ。ああいうのは庭師かメイドの仕事だ」

「妖夢は幽々子の世話で手一杯だし、咲夜は自分とこの分しかやらないのよ。正直猫の手も借りたいくらいなの」

「猫と同扱いは失礼だぜ」

「手伝わないいでしょ？」

「まあな」

胸を張って言われた。なぜか爽やかなまでに。

「この前のあれは特別サービスだからな。そんなに猫の手が欲しけりゃ式でも持てばいいじゃないか」
からからと笑い、魔理沙も隣に腰を下ろす。

貰うぜ、と許可も得ずに湯飲みに手を伸ばし、一息。

「そういや、猫の手で思い出したが萃香の奴はどうしたんだ？ それこそあいつに手伝わせりゃいいだろうに。半分はあいつが呑んだんだから」

「覚えてないの？ あのあと地底まで付いてってたじゃない。そのまま飲み比べしたみたいでね。朝帰りしたまま奥でぶっ倒れてるわ」

それに答えるわけでもないだろうが、ううう、と唸るような声が寝所から響いてくる。どちらかと言えばあまり人様に聞かせられない類の呻き声だ。

「鬼でも悪酔いするんだな……で、どっちが勝ったんだ？」

「一晩中呑み続けて、用意してた十斗樽ぜんぶ呑みきって結局勝負つかずみたいよ」

「あー、あとで水でも持ってってやるか」

「うええー……」

また答えるように響くうめき声に、魔理沙も苦笑。

「ともかく、少しは恩に着て欲しいわ」

「よし、じゃあそんなお前に魔理沙さんがいいものやろう」

「なに、食べられるもの？」

「第一声がそれか。食えんことはないが止めといったほうが無難だぜ」

そういつて魔理沙が差し出したのは、小さな金魚蜂。八分ほど水の入った丸いガラスのなかで、赤と白の更紗模様の金魚が水草を食み、くると弧を描く。

「ほれ、昨日の祭りで金魚すくいやってたろ。それでなよく考えたらうちで飼えんし、ここで飼っていいか？」

「間に合ってるわ。酔いどれ鬼一匹で手一杯」

「むうー、そんなと一緒にするなー」

どしん、という音と共に奥の襖ごしに抗議の声。一応聞こえてはいたらしい。

「……大体、なんでいきなり私が出てきて飼ってやらなきゃいけないわけ？」

「きちんと世話してやれば恩返しに来るかもしれない

ぜ？」

「機でも織ってもらえばいいのかしら」

「そうだな。飯炊き掃除洗濯、雑用くらいはしてくれ
るんじゃないか？」

「あのねえ」

これが鯉なら後に竜になって、死んだ時にでも生き
返らせてくれそうなものだが。金魚となるとどうした
ものか。

「うー、暗に鬼は役に立たないって言われた気がする
ぞー。あれかー、鬼の居ぬ間に洗濯かー！」

「はいはい、酔っ払いは黙ってなさい」

「横暴だー」

ごろごろ。どしん。

いつもの倍は酔ってる雰囲気で寝所が揺れる。あの
分だとまた襖に穴でも開いただろうか。後で修理させ
ておこう。

「まあまあ。金魚は縁起がいいんだぜ？ 海の向こう
じゃ金余って字で当ててな、千客万来と商売繁盛のお

守りだぜ？ まあ、招き猫みたいなもんだ」

「……悪意はないと思っておくわ。餌代くらい持ちな
さいよ？」

「それくらいはな。……って何だその手」

「今月分」

「早ッ！」

「うるさいわね無いと飢えるのよ。貰えるものはいく
らでも貰うわ。お守りのご利益とかそんなものよりも
先に現実的なお金が欲しいの」

「もう少し言葉を選べ。せめて」

なお、萃香が余計に酔ってるのも、食べるものがな
いので空きつ腹を誤魔化しているためであつたりする
が。

「糸ミミズ食ったりするなよ？」

「食べないわよ、鳥じゃあるまいし」

渋々差し出した小銭を魔理沙から受け取り、大事に
サラシの中に仕舞う。

「じゃあ、それはとりあえずそっちの縁側にでも置い

ておいて。まさか床の間に飾る訳にもいかないでしょ」

「応」

「で、臨時収入もあったことだしお昼にしましょ。萃香、あんたも食べるんなら手伝いなさい」

「あーい……」

「ごそごそと布団を這い出してくる萃香と共に、台所に向かう。」

「あんたも。自分の分くらい手伝っても罰は当たらないわよ」

「へいへい、分かったぜ」

「答える魔理沙に合わせるように、鮮やかな赤白の長い尻尾を躍らせて、金魚は狭い金魚鉢の水面を揺らし、ちやぷんと跳ねた。」

(了)

日本の 室原の毛桃 本繁く
言ひてしものを 成らずは止まじ

(読人不知)

桃花染めの 浅らの衣 浅らかに
思ひて妹に 逢はむものかも

(読人不知)

▼ロメット[comet]

金魚の一種。アメリカで交配された琉金の突然変異個体とフナの交配種。白地に朱の更紗模様を持ち、生命力が強く動きが活発。吹き流しのような特徴的な長い尾を引いて泳ぐ姿から「彗星」を意味する名前を付けられた。

▼もも 【桃】 (モモ) 学名 *Amygdalus persica*

バラ科モモ属の落葉小高木。中国原産。春に五弁あるいは多重弁の花を咲かせ、夏には甘味の強く汁気の多い柔らかな実をつける。食用、観賞用。女性の象徴であり、邪気をはらい長命をもたらすとされる。花言葉は「天下無敵」「チャーミング」「私はあなたのとりこです」。

博麗神社日々随録

初出：第6回博麗神社例大祭(2009/3/9)

記念すべきサークル第一作。博麗神社のなんてことない毎日と、濃厚なレイマリ。やっぱりこの二人あってこその方なのではないかと思う部分も多数。金魚のやりとりは「一生面倒見ろよ」と求婚みたいなものなんですが、はたしてどれくらいの人に伝わっていたのかいまだに気になります。

ゆく年くる年幻想郷

年の瀬押し迫る大月籠り。

いつも通り、飲めや唄えや脱げや騒げやの大騒ぎとなった今年を締めくくると大宴会も、無事お開きとなっていた。

「結局お泊りになっちゃったわね」

「現金なもんねえ。さっきまで宿酔いで呻いてたくせに」

玄関で靴を履きつつ意味深めいた表情で微笑むレミリアを、巫女装束の上からどてらに袖を突っ込んだ霊夢は呆れ顔で見送る。

宴会があったのは昨日のこと、すでに参加者の大半は昨夜のうちに、残るいくらかも今朝までには神社を辞している。紅魔館一行がこんな昼下がりで残っていたのは、昼に歩けない吸血鬼ゆえの体質と、

お嬢様の体調不良が原因であった。

「おまたせ、咲夜」

「よろしいですか、お嬢様」

「ええ」

靴を履きおえたレミリアは、先に待つ忠実な従者の下へ。さっきまで後片付けに精を出していた咲夜が、主のそばで一礼を添える。

「年越し、来年はうちでやるといいわよ、霊夢。新年会も一緒にね」

「そうね、考えとくわ」

このやり取りもはや毎年のことだと、レミリアは覚えていたろうか。

と。そんなやり取りを聞いてか、マフラを巻いた門番の背中で、コートに包まれて眠っていたフランドールがもぞもぞと顔を上げる。

「うー……」

「フラン、起きちゃったの？」

「……まりさは？」

「後で取りに越させるから大丈夫よ」

眠気に目を擦る妹を、レミリアは微妙に物騒な物言いでなだめる。

「じゃあ、お暇するわ霊夢。ハッピーニューイヤーね」

「お世話になりました」

「はいはい」

律儀に頭を下げる美鈴に、けだるげに手を振る霊夢。

それにわけもなく偉そうに頷いて、レミリアたちは神社を去ってゆく。なお、喘息もちの魔女は昨夜のうちに、使い魔に付き添われて一足先に館まで戻っている。

玄関を閉め、寒さに背中を丸めた霊夢は、どてら姿のまま廊下を早足に突っ切って居間へと向かう。

「お、帰ったのか?」

「ええ」

そこには、残る最後の一人。片付いた部屋の炬燵に足をつっ込んでくつろぎ、蜜柑を剥いている魔理沙の姿があった。

「一気にがらんとしたな」

「あんたはいいの、帰らなくて」

「霧雨魔法店は年末年始休業だぜ」

宴会の幹事だと言い張って、誰よりも先に神社に寝泊りをはじめて——今日まで。結局最後まで残っていたのも、魔理沙だった。

やれやれ、と呟いて魔理沙の横に腰を下ろし、霊夢も炬燵に入る。伸ばした手に蜜柑をひとつ掴み、皮を剥いてひと房を口に運ぶ。

「……………」

「……私ももいっこもらうぜ」

「後で返しなさいよ?」

酒にご馳走に、ややもたれ気味のおなかには、冷えて酸味を含んだ甘い味がじんわりと心地いい。

「あむ。……いったいいつまでいるつもりよ」

「何言ってるんだ。お前が寂しいと思って残ってやってるのに」

挙句、そんなことまで言ってくる魔理沙に、霊夢は

溜息をついて、残る蜜柑をもうひとつくち、口に放り込む。

「んむ。……そろそろ夕ご飯つくらなきゃいけないんだだけど」

「お、雑炊か？」

「今朝食べつくしてたでしよ、萃香と一緒に。言っとくけどそんな立派なものないからね」

「そうか。私はなんでも構わんぜ？　ちゃんと食えりや万々歳だ。毎日宴会じゃ胃がもたんしな」

そう言つて笑う魔理沙。神社の窮状もお見通しとでも言いたいらしい。

「というか黙って見てりやお前も今日一日だからだとしてたが、新年だつてのに、巫女が怠けてていいのか？」

「大掃除ならもう終わってるわ」

「そうだな、メイドと庭師が頑張ってたな」

「こっちは会場提供してるんだもの、それくらい見返りあつてもいいわよ」

「……それは結構だが、普通ほれ、あるだろ。甘酒な

りなんなり、参拝客への用意とかだな」

「今年から無駄なことはしないことにしたわ。寒い思いして待つてても誰も来やしないし」

実際、幻想郷の端にある博麗神社にまで、妖怪がうるつく夜の夜中に酔狂にも二年詣でに来る参拝客はほとんどいないのが現状だ。一方で山の上の守矢神社はなぜだか盛況らしいのだが、あえて霊夢は詳しいことは気にしないようにしていた。

「それに今年から、鐘撞くのは専門家がいるからね」

「ああ。まあな」

春に幻想郷に騒動を引き起こした宝船——聖白蓮率いる命蓮寺の面々も、この一年ですっかり幻想郷に溶け込んでいる。人里に程近い場所に設けられた人妖平等を唱える聖寺は、いまや人気の名所のひとつだ。

最後の蜜柑を食べおえて、炬燵の天井に突っ伏したまま。

魔理沙は視線だけを動かして、霊夢を見る。

「霊夢」

「なに？」

「今年もなんか知らんが、色々あったな」

「そうね」

「来年もまあ多分、色々あるんだろうな」

「……多分ね」

ややこしい騒動はできれば御免だけど、と付け足す
霊夢を、魔理沙はじっと黙ったまま見、やおらがぼつ
と身を起こした。

「よし霊夢。決めたぜ。温泉行こう」

「……は？」

あまりに唐突かつ前触れのない言葉に、霊夢は一瞬
己の耳と隣の白黒魔法使いの正気を疑うが、当の魔理
沙はいたって真面目な顔だった。

「お風呂ならまだ片付いてないから、ついでに掃除も

——」

「そうじゃないっての。そうと決まったら善は急げだ、
出かけるぜ霊夢、早く用意してくれ」

「ちょっ、魔理沙っ!？」

言うが早いか、魔理沙は炬燵を飛び出し、鴨居に引
つ掛けてあったハンガーからコートにマフラー、帽子
をとって着込みだす。いつだってこういうとき、彼女
はストリートだ。

「何やってんだ。ぐずぐずしてると年が明けるぜ？」

「ちょ」

っと、と言いかけた口元に、マフラーの端が押し付
けられ。

近くにあった忘れ物の外套を羽織らされた霊夢の背
中をぐいぐいと押して、魔理沙は雨戸と障子を開け放
つ。いつの間にかすっきり暗く落ちた陽の向こうには、
ぼんやりと山の輪郭が浮かび、今年最後の夕闇が深く
辺りを塗り潰している。

「うお、寒いなっ」

言いながらも、魔理沙は縁側に立てかけてあった逆
さまの放棄を手元呼び寄せてまたがると、霊夢の手
をしっかりと握り締めたまま飛び上がる。

「っ、魔理沙!? 待ちなさいってのにっ」

「あー？ どうした聞こえんぜ。急ぐぞ霊夢っ」

声だけを後に残して――

あとには、開け放たれた無人の神社だけが、そこに残されていた。



幻想郷をまっすぐに貫き、音もすつ飛ばすように辿り着いたのは、妖怪の山の麓。山の大瀑布から繋がる溪流が音を響かせる河岸だった。

そこにぼんやりと灯りをともし、質素なつくりの小屋のすぐ傍で、携帯コンロにポットを載せて腰かけていた河童が瞬きと共にあれ、と声を上げる。

「どうしたの、魔理沙？ 霊夢も」

「よう、今夜も寒いな。温泉入りに来たぜ。開いてるか？」

端的に言う魔理沙の言葉で、河城にとりは大体の状況を察したらしかった。ああ、とわずかに苦笑して霊

夢を見、それからにこりと笑顔を見せる。

「ああ、大丈夫だよ。ちょっと待っとくれ」

奥に引っ込んだにとりは、けれどすぐに小屋の戸を引き開ける。

「はいよ。盟友からお代は取れんからね、年の瀬だし歳末助け合いで入湯料はサービスだ」

「悪いな」

まるきり悪びれた様子もなく、魔理沙は小屋の中へと入ってゆく。かと思うと、小屋の中から顔を覗かせて、呆気に取られるのと訳もわからず連れて来られたことへの不機嫌と、半々の表情で立ち尽くす霊夢を呼ぶ。

「……何やってんだ霊夢、風邪引くぞ？」

「ホント勝手ねえ、あんたは。戸締りもしないで出て来ちゃったんだけど」

「どうせ取られるものなんか何もないだろ？」

結界もあるので、その通りと言えばそのとおりのだが――

「ほれ、折角連れて来てやったんだ、入ってこうぜ」
「……ったくもう」

温泉なんて言っても、用意もなんにもしてないわよ、と呟きつつあとに続く霊夢だが、その心配は的を外れていた。

小屋の中にはすぐに広がる湯気があり、小さめの籠と、浅く掘った細長い湯船の傍に、木作りの長椅子が並べられている。

「地底の件もあったし、試によってことで山の神様と一緒に、温泉掘ってみたはいんだけど。冬場の露天は人気が出なくてねえ。それで足湯に改装したんだよ」以来、山の上や天狗たちとのやり取りの間で、この足湯は重宝されているのだという。

すでにコートと靴を脱いで、まくったスカートの下から覗く素足を、お湯に浸し、魔理沙はすっかり満足顔。

「熱ちち……は……生き返るぜ。炬燵もいいけど、やっぱ一番はこれだなあ」

「少し埋めるかい？」

「いんや、これくらいでちょうどいいぜ。慣れりや大丈夫だ」

長い吐息を挟み、冷え強張った指先を曲げ伸ばす魔理沙。

次第にほんのりと紅くなつてゆくふくらはぎに、思わず見とれていた霊夢に、魔理沙は声をかける。

「な？ これなら気にせず浸かれるだろ」

「……そうね」

小さな溜息と共に、霊夢もそれに倣う。

足袋だけを脱いで袴をまくり、そつと湯に脚を浸す。思っていたよりもかなり熱いお湯の温度は、おそらくは脚にたまつた疲れと冷えのせいだ。

透明なお湯の熱さが、爪先から沁みるように脚を包み込んでゆく。思わず自然、口元がほころぶのを霊夢は感じていた。

「あ……」

足元からじわじわと染み込んでくる心地よさに、冷

え切っていた足指と爪がほぐれてゆく。それと一緒に、いつのまにか寒さに固まっていた心も、やわらかく解けほぐれてゆくようだった。

反面を吹き抜けにした小屋の向こうでは、いくつかがかがり火に照らされて、溪流の水面がきらきらと輝いている。流れ行く水音は胸に染み入るようで、静寂な気配とはまた違った趣を感じさせた。



「さて、じゃあ霊夢。一杯どうだ？」

どこから取り出したか、一升瓶と杯を二つ、取り出して差し出した魔理沙に、霊夢は再度目を丸くする。

「……いつの間に持ってきたの、それ」

「ゆうべのうちにちよつとな。うわばみ連中に吞ますのは勿体なさそうな奴を貰つていたんだ」

「もともとはうちのお酒でしように」

「それは幹事の特権ってやつだぜ」

齒を覗かせる魔理沙から、一献を受け取り、同じように霊夢も魔理沙の掌の中の杯に酒精を注ぐ。軽く触れ合わせた杯を、同時に傾け。

「んっ……………」

「…………ふう」

胃の腑に染み渡る、やや強い酒精の強い味に、少女達はわずかに頬を紅くする。

「結局、今年最後も、あんたと一緒か」

「そう言うなって、こういうのも悪くないぜ？ 私はな」

「そうね」

領いて、霊夢は再度、互いの杯に酒を注いだ。

すると、奥からひよいととりが顔をのぞかせる。

「お、なんだい。風情のあることしてるねえ、魔理沙、霊夢」

「ん。なんならお前も吞むか？」

「そだねえ。ちよつと待ってて。つまみでも持つてくるよ」

小屋の外でござそと物音を響かせると、にとりは小さな皿をひとつ、手に戻ってくる。皮を剥いた胡瓜を、出汁と昆布で漬け込んだもの。食べやすいように串に刺したそれを嬉しそうにひと齧り。

「……なんだい二人とも、妙な顔して」

「ああ、いや、あまりに予想通りだったんでな」

「やっぱり河童なんだなあって思ってたのよ」

「な、なんだいなんだい二人してっ。食べないならいいよもう、全部私一人で食べるからっ!!」

「いや待て待て。誰も食わんとは言っていないだろ」

現金にも手を伸ばす魔理沙に、霊夢も同じようにひと串を手取る。

ぽり、と齧れば思っていたよりも深みのある味わい。酒精同様、足湯の上では冷たいその味はかえって新鮮で、喉を潤すのにも似た瑞々しい味わいだった。

そして――

やがて、すっかり暗くなった夜の穏やかな闇を、染み渡るように。

遠く山肌に反響する、除夜の鐘が響く。
新しい年の始まりを告げる、合図の鐘。

「……今年もよろしくな、霊夢」

「ええ、魔理沙」

……だいたい毎年、こんな風に。幻想郷の一年はふたりの言葉で幕を上げるのだ。

(了)

ゆく年くる年幻想郷

初出:折葉坂三番地 blog(2009/12/31)

年末に書き下ろしたお話。博麗の巫女の友人として一番な魔理沙を書きたくて精魂込めました。楽しかった日々が終わりそうになって少し凹んでる霊夢のそばで、いつまでも帰らない魔理沙が、引き延ばしを飛び越して「新しい始まり」に彼女を連れ出すという構図がすごく気に入っています。

長々と続いてきた総集編の下巻として、こちらのお話を置いて締めとさせていただきます。

【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。折葉坂三番地の銅折葉と申します。

このたびは当サークルの総集編をお手に取っていただきありがとうございます。

本作はこれまで、折葉坂三番地名義で発表してきた折本などから30作ばかりを収録した総集編となります。内容は基本的に「折葉坂三番地情報blog」で公開している各作品のPDFと同じものです。

サークルの方針として、イベント参加時には短くてもいいから必ずひとつお話を作るということを繰り返していた結果ですが、自分でも結構書いていたんだなあと驚きました。

当時のノリや時事ネタなども多く、いま読み返すと生暖かい気分になってしまう点も多々ありましたが、

よっぽどマズくなってるもの以外は活動記録も兼ねてそのままにしてあります。ご了承ください。

作風もギャグもシリアスも日常系も安定せず、あれもこれもと片付いてないおもちゃ箱みたいな収録ラインナップとなっておりますが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。

表紙についてはYT様をお願いいたしました。上下巻分冊に際して快くご了承いただきましたまして、賑やかで楽しいキャラクターたちの集うイラストを描いていただきました。本当にありがとうございます。

また、折葉坂三番地情報blogの管理を引き受けてくださっているRiza氏にも心よりの感謝を。

……それでは、また。

次の機会にお会いできることを願って。

【奥付】

「折葉坂三番地総集編
折葉坂の幻燈館・下」

初版 平成27年8月14日 C88

オルハザカサンバンテ
発行 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

あかがねおりは
著者: 銅 折葉

表紙: YT様 (@YT_)

[pixiv_id=2746649](#)

印刷所: (株)ポプルス様

※本作は「上海アリス幻楽団」様の
「東方 project」の二次創作です。





著：銅折葉／折葉坂三番地
<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>

表紙：YT様 (@YT__)
<http://www.pixiv.net/member.php?id=2746649>